
TOLOVE りんぐ

ぽっさき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TO LOVEりんぐ

【Nコード】

N3531P

【作者名】

ぼつさき

【あらすじ】

リトさんがハーレム作るならオリ主だって作る。
オリ主頑張れ小説。

読み方はとらべりんぐ（無理がある）

この小説は、ララ・西連寺意外の少女達と主人公がいちゃいちゃするお話です。

原作の展開のまま進んでいるのでオリジナルの展開は少ないかもし

れません。ですが視点は主人公ですので、原作の裏側などにもスポットを当てられたらなと思っています。

舞い降りた少女

「ようやく見つけましたよ」

「まさかこんな”辺境”までお逃げになられるとはねエ……」

深夜、その権力を象徴するように聳え立つビルの山。

その中のひとつ、強風吹き荒れる屋上にスーツを着込みサングラスをかけた妖しげな男が2人

「しかし…鬼ごっこもここまでです」

「さア！我々と一緒に来ていただきましょうか」

「………」

男2人に追い込まれるようにビルの端には少女が1人口をきつく縛り俯いている。

ゴオオオオオ・・・と音を立てて再度風が吹く。

それに撫でられ、少女の桃色の髪が闇に映えるように揺れていた。

・・・。

・・・。

昼休み。

それは学校生活における折り返し地点、そして大事なお昼ご飯の間である。

母上が作ってくれたお弁当を友達と談笑しながら食べたり、人ごみの中を掻き分けてお目当てのパンを買って食べたり、オレは1人でも生きていけるぜ！と屋上で黄昏てみたり。

十人十色の過ごし方があるも、オレは友人と購買でパンを買った後、とことこ教室へ向かって歩いていた。

「お前ホント焼きそばパン好きだよな」

「炭水化物&炭水化物なんて素敵じゃんか」

「そんなカロリーの塊みたいなのよく2個も3個も行けるなあ」

「その分運動してるからいいんだよっ」

歩きながら猿山が話しかけてくる。

彼は猿山ケンイチ。入学してすぐに何となく仲良くなって2年に進級してもクラスが変わらなかったので何となくいつも一緒に居る。名は体を表すとはよく言ったもので顔も行動も猿じみている。万年彼女募集中である。

しばし談笑しつつ歩いていると廊下の曲がり角で覗きをしている不審者が目に入った。

「よオリト！今日も昼真っからストーカーかあ！？」

猿山に放しかけられたリトはビクツと肩を弾ませる。

「誰がストーカーだクルアー！！」

「お、違うっての？」

この顔を赤くして声を荒げているのが結城梨斗^{リト}。

猿山と同じく同じクラスになったときから一緒に居る。よく家に遊びに行ったり泊まったりと一応オレは親友だと思っている。

勉強はちよっとお粗末ながらも運動はかなりすごい。中学の頃はサッカー部だったらしい。

そんな好青年なりトにも弱点があった。

「いつもどおりあこがれの春菜ちゃんを見てたんだろ？」

「……………」

猿山に凶星を指され動きを止めるリト。

そうこのリト、ドが付くほどの奥手なのだ。

エロ本なんてとてもじゃないけど見れないし、ドラマのラブシーンで赤面しちゃうようなヤツである

「う・・・うつせーな、今日はただ見てたわけじゃねーよ。タイミングを伺ってたんだ」

「タイミング？」

「ああ、決心したんだオレ。今日春菜ちゃんに告白する！！」

そう言い放ったリトの面持ちは極めて真剣なものだったが、グラビア本の水着で気絶しちゃうような純情君であるリトに告白なんてできるはずがない。

それを誰より知っているオレと猿山は肩をすくめて苦笑するしかなかった。

・・・。

「肉まん買うためにコンビニはしごとか我ながら枯れてるなあ…」

時刻は夜。ほとんどの家庭が夕食を終えて一服しているそんな時に、オレは何故か無性に食べたくなったので肉まんを買いに行っていた。もちろん夕食はちゃんと食べてある。が、しかしジャンクフードが突然食べたくなるあの衝動に打ち勝つほどオレの意思は強く無かった。

コンビニからの帰り道を歩きながら肉まんの包装紙を取っていると、

ゴズンツ！！

と、えらく大きな音が静観な住宅街に響きわたった。

おっ！何か事件か！？こりゃ見に行くしかねーぜ、肉まんくってる場合じゃねえ！

と普段ならやじうま根性丸出しで観衆の1人として参加するが、今回は嫌な予感がそれに勝っていた。

「なんだこの見に行くと確実に損をしてしまう感覚は・・・虫の報せ？」

落ち着くために外気に晒され冷め始めていた肉まんを一口頬張る。

柔らかな生地と肉のなんとも言えない安っぽい味が口の中に広がった。

「うめー。やっぱコンビニにつつたらこれだよなあ…」

その安っぽい味は口の中にしぶとく残り二口目、三口目を誘っている。それに抗うすべてを人類はまだ持たない。

さっきの変な感覚などコロッと忘れて満面の笑みで肉まんにパクつきながらオレは家路を急いだ。

巨大な扇風機のような風の音と、機械が爆発するような音がどこか遠くで鳴っていたような気がするが、オレにとっては2個目の肉まんの包装紙を綺麗に取ることのほうがよっぽど重要だった。

・
・
・
・
・

・
・
・

「ういーっす」

「おお猿山、おはよ」

そして次の日。

通学路を1人たらたら歩いていると猿山に声をかけられた。

基本的にはいつも1人登校だが、時々猿山やリトと一緒にいることがある。今日はその時々だったらしい。

「そう言えばリトの告白ってどうなったか知ってる？」

「おっ、何だリトの野朗有里には連絡してなかったのか」

「何だ何だ、オレだけハブですか。いじめですか」

「何言ってるんだお前は人間だろ」

「そのハブじゃねえよバカ猿…」

「まっ案の定というかなんと言うか純情ボーイなりト様は言わずも
がなって感じだったらしいぜ」

「解かりきってたこととはいえ悲しくなるな」

「あいつに彼女なんてオレが認めないけどな、って話をすれば何と
やら、あれリトじゃねーか？おーいリッ」

「ちょっと待てモンキーエテ山！」

「いきなりなんだよミスターリリイ」

「お前次その名前で呼んだら動物園に搬送してやるからな」

「先にモンキーつつたのはそっちだろ！」

「確かにごめんなさい。それより見ろよ、リトの前にいるのってサ
イレんじゃねえ？」

「西連寺な。それだとすごいやかましい人みたいになるだろ」

「こまけえこたあいなんだよ！それより何か告白しそうな雰囲気
見えないか？」

オレと猿山の前方10mあたりではリトと西連寺が向かい合っている。

リトは真っ赤な顔をしてオ・・・オレ・・・オレ・・・と緊張がもろに声に出ていた。

そんな様子をオレ達は遠巻きに眺めていると、空から降りてくる人影が目に入った。

それと同時に、

「オレ：初めて見た時からキミの事が：好きでした！！！」

言ったー！！

「告ったー！！」

オレと猿山大興奮。

「だからその：付き合ってください！！！」

行っったー！

「……」

純情ボーイ一世一代の大告白。ヘタレで奥手な少年が少ない勇気をかき集め、心を込めて言い放ったその言葉は、

「へえーそっちもそーゆーつもりだったんだ。ちょーどよかったっ」

中学の頃からの思い人ではなく、突如空から舞い降りた桃色の髪を持ち、へんてこりんな格好をした少女へと向けられていた。

「じゃ結婚しよ！リトッ！！」

「はぁ！！！？？な…なんでお前が……って」

「結婚ん！！！？？」

「結婚ん！！！？？」

リトと猿山が同時に声を荒げた。展開に取り残され気味のオレと西連寺はポカーンとした顔をしている。

「っていうかあいつ…」

リトにばかり気を取られていたがよくよく見てみればあの女……。
というかあの派手な髪の毛を見た時点で気付くべきだったろ……。
と自分の観察力の無さに辟易しながらも、
これからの学校生活が楽しくなるかもしれないなあ、と癖になりつつある苦笑をせざるをえなかった。

愛の大脱出

授業中。

この道40年のベテラン教師がつむぎだす教科書にそったうらかな子守唄は、容易くオレの脳をノンレム睡眠へといざなっていく。ついていた頬杖は頭の重みでぐらぐらと揺れている。

ああダメだ…腕を枕にして寝ないとあぶない…。

と半分眠りかけたオレに、

「ちがあああう！！！」

親友の叫び声が襲い掛かった。

意識が一瞬で覚醒したと同時にバランスを失ったオレの頬杖スタイルはもろくも崩れ去り、オレはガツンツと音を立て頭をしこたま机にぶつけたのだった。

・・・。

・・・。

「いつから授業中に奇声あげるキャラになったんだよ、リトさんよ
う」

「有里が机に頭ぶつける音も中々うるさかったけどな」

「……………」

「オレはあれだよ…机に頭をぶつけるのが趣味なんだよ」

「授業中にうたた寝するのが趣味でいいじゃねえか。なんでわざわざ誤魔化そうとするんだよ。しかもそれただのバカだろ」

「……………」

休み時間。オレと猿山は授業中に奇声を上げる友人の精神状態が心配だったので、その前後の椅子を貸してもらって談笑している。が当のリトさんがこちらの話を無視しながら何やら小声でぶつぶつと何かしゃべっている。もうこれホントに駄目なんじゃないかしら。

「春菜ー更衣室行こ！」

教室のどこかで女子のそんな声があがる。

ガタッ！

それに呼応するようにリトが椅子から立ち上がった。

「……………な…何考えてんだオレはアア！！！」

「有里さんや、この女子の更衣室行こうの言葉に反応し立ち上がったもだえている人をどう思いますかい」

「純情とむつつりスケベは紙一重なんだなと思います」

「「ホントに駄目かもしれないな…」」

もしこの親友が暴走してしまった時は、オレ達で引導を渡してあげよう。

それが友人としてできる友情の示し方だと思う。

.....。

.....。

昼休み

猿山とのパシリジャンケンに勝ったオレは椅子にあぐらをかきながら暇を持て余していた。

「...あれ？」

そこヘリトの困ったような声が聞こえてくる。

「つかしーな...弁当がねえ。春菜ちゃんが戻ってくる前に腹ごしらえしと思うたのに」

「どうかしたの？」

「いや...弁当がねえんだ。確かに朝バックに入れたはずなんだけど...」

「お前美柑が毎朝早起きして作ってくれてる弁当だろ、もっと大事にしろよ」

「してるよ！ちゃんと大事に入れておいたんだけどな...あっ！」

「朝の騒動の時か...」

「そーだ...それ以外考えられねー、あの後あいつをふりほどいて逃

げる時にバッグから…」

「そんなこともあるかとオレが拾っておいてやったぜ」

「ホントか！さすが有里だよなっ。やる時はやつ男っていうか。」

「…………ごめんなさい嘘です。」

「ぶっとばすぞこんにゃろう！」

「ホントすみませんちよっとしたジョークだったんですがごめんなさい」

「ああ…有里のせいで余計にお腹が減ってきた……」

リトがズルズルと教室の床に四つんばいになってうなだれる。

ちよっとした遊び心がこんなにも人を傷つけてしまうなんて…

反省。

「リトッ！！どーゆう事だよおい！スッゲー可愛いー女のコがおめーのこと探してんぞ！」

そこへ、ガラッと勢いよく扉をあけて猿山が入ってきた。
何やら興奮している様子。猿っぱい。

「オレを探してる女の子…？もしかして西連Z」

「それはねーよ。」

「わかってるよ……」

「可愛い女の子ってのが気になるな。よしリト、行こうぜ！」

「そうだな、行こう」

「ああ後そうだ…。オラァ!!」

「痛え！何すんだ有里っ！」

「うるせえクソ猿。お前焼そばパン買って来いっつったろーが！」

「てめーのパンより可愛いコちゃんのほうが大事だってーの！」

「いいから行くぞ2人とも。猿山が案内してくれないとわからないだろ」

リトに諭されたオレ達はしぶしぶ納得しつつ教室を後にした。

「ララ！」

一緒に階段を下りていたリトがそう叫びながら駆け下りていく。

その前には軽薄そうな男2人に話しかけられている昨日の少女の姿があった、

「お前何でこんなところに！もうイタズラはやめて帰れって言っただろ」

「あ、リト！見つけたっ」

ララと呼ばれた少女もリトの姿を呼びかける。

間違いない、こいつララだ。

「はいコレ！持ってきてあげたよー」

そういつて差し出したララの手にはよく見慣れた美柑お手製の弁当があった。

「お・・・おいリト、誰だよあのコ！どーゆー関係だ！？」

いつの間にやらできていた群集（ほとんど男）を代表して猿山がリトに聞く。

聞かれたリトは多分ララの正体をどう説明していいか解からないのかしどろもどろになっている。

「私？私はリトのお嫁さんでーすっ」

そんなリトの腕にララが抱きつきながら爆弾発言を放り込む。

「「「なにーっ！！？？」」「」」」

「な、なんだってー！？」

これにはさすがのオレもびっくり。リトさん手が早すぎるんじゃないですか・・・。

そしてその人の結婚するってとんでもないことだぞ・・・。

「だーっ何言ってるんだお前っ！」

「リト・・・お前・・・春菜ちゃんというものがありながら・・・」

案の定お猿さんがすごいダメージを受けています。童貞同盟の危機！

そしてショックのあまり男の秘密も何気なくしゃべりやがった・・・が、群集たちもショックが大きかったのだろう気付いていない。

「違う！違うって！お前ふざけるのもいい加減にしろよ！」

そしてリトも気付いていない。

「リト…私の事好きだって言ったクセに、あれはウソだったの？」

『そいつを捕まえろ————っ！！！！』

「リト！てめー許せねー！よくもオレより先にそんなカワイイ娘と！！！」

さっきの一言が寂しい男たちのプライドを刺激した。

群集は暴徒と化し、一様に2人を追いかける。リトとララもすかさず手を繋ぎながら駆け出した。

「付き合ってらんないよ……」

校内にも関わらず大声をあげて走り回る彼らを後ろから眺めながら、オレは購買へ向かう。

購買についてやっとオレは猿山に財布を預けていたことを思い出し、空腹が限界を迎えそうになりもういつそ早退しちゃおうかな・・・なんて考えていると、

「これ、貰ってください」

と見知らぬ（多分同学年）の大きい丸眼鏡をかけた娘が菓子パンを2つくれた。

人同士の触れ合い氷河期と呼ばれているこんな時代にも、優しさと

義理任侠はあったのか……としみじみ思いながら苦手なクリームパンをありがたく頬張ったのだった。

銀河からの使者

昼休みが終わって帰ってきたリトの頬には真っ赤な紅葉が咲いていました。

声をかけようとしたけどうなだれる背中が痛々しかったのでそっとしておいた。

原因を探ろうと教室を見渡してみると不機嫌そうな、それでいて複雑そうな西連寺が目に入る。

トラブル体質のリトがまたなんかやらかしたのか……。

2人の間に気まずい空気が流れているのを気まずく観察することには、今のオレにはやれることがなかった。

・・・。

・・・。

その日の夜。

そろそろ落ち着いてる頃だろうし、ララとの関係も知りたかったのでオレは結城家を訪れていた。

ピンポンと聞きなれたチャイムの音が鳴る。この家のチャイムはオレの指紋だらけだろう。

「はいはい、ってなんだ有里さんじゃん」

「こんばんは美柑、リトいる？」

「さっきまでずっと落ち込んでたけどララさん？連れて外出て行きたよ。何かあったの？」

この子は結城美柑、リトの妹で小学6年生。とてもしっかりしていて家事全般をこなしている。リトはオレンジがかった髪の色をしているのに比べ、美柑は真っ黒色の髪の色だ。顔は母親にだけど髪の毛は父親に似たらしい。

苦労も多いせいか大人びた性格をしている、が年相応な部分も多々見られる。

「まあ色々なね。ここにも女の子が来たら」

「来たよ、自己紹介もされたけど、あれ誰？」

「それはリトと本人から聞いたほうが早いよ。多分そこらへんにいるだろうからちょっと探して来るよ」

美柑に見送られて結城宅を後にする。

どこから探そうか……。よし、人の少ない川原から行ってみよう。込み入った話をするなら川原が鉄板だもんな。

.....

.....

ぶらぶら歩いているとすぐに川原についた。そこからまた歩いていると話し声が聞こえてくる。

「よ、リト」

「ん・・・？有里か、なんだってこんな所に」

「この人だーれ？」

話し声の主が探し人だったので、2人の会話がひと段落するのを待って話しかけた。

「オレは有里って言うんだ。リトの友達で同じクラスだよ」

「へーそうなんだっ、私はララだよ。よろしくね！」

「ララ様っ！！」

場がほんのりほのぼのムードに包まれ始めていると後ろから叫ぶようにララを呼ぶ声上がる。

「ザステイン！！」

「うわ！また変なのが来た！」

後ろにいたのは一昔前のファンタジーゲームに出てくる鎧（かっこ悪い）を纏っている男。

確かに変だけど本人に聞こえるように言うのはどうだろう……。まあザステインは分類的に”変な人”で間違いないんだけど。

「フフ：全く苦勞しましたよ、警官に捕まるわ犬に追いかけられるわ道に迷うわ：これだから発展途上惑星は：しかし！！それもここまで！さあ私と共にデビルーク星へ帰りましょうララ様！」

その追いかけられた犬はザステインの足に噛み付いている。痛がる

素振りを見せないのは鍛えられているからか何か着込んでいるか……。

「べ——っだ！ 私帰らないもんね、帰れない理由ができたんだから！！」

「……………帰れない理由とは？」

「私ここにいるリトの事好きになったの！！」

（嘘つけー！！）

「だからリトと結婚して地球で暮らす！！」

多分ただの家出だろ。それも口からでまかせで結婚って……王族の結婚はそんな簡単な問題じゃない。デビルークの姫と言ったら尚更だ。銀河を巻き込む問題に発展するに決まってる。そんな大事を装った嘘に騙される奴なんか、

「なるほど、そういう事ですか……」

（バカだ——っ！！）

「部下からの報告で気になってはいたのです。ララ様を助けようとした地球人がいる……と」

「わかったら帰ってパパに伝えて！ 私はもう帰らないしお見合いもする気もないって！」

お見合いが嫌で家出したってことらしい。それでわざわざ地球まで

…お転婆だなあ。せめて惑星内で家出してればいいのに。

「いいえ、そうはいきません。このザスティン、デビルーク王の命によりララ様を連れ戻しに來た身……得体の知れぬ地球人とララ様の結婚を簡単に認めて帰っては王にあわせる顔がない」

「じゃあどーすればいいの？」

「おさがりください、ララ様」

そういいゆつくりと剣を引き抜く。その剣はガラスのように透き通っており、一見軟弱そうにも見えながらも恐ろしく鋭利だった。さすがデビルークの護衛、いいもの持つてる。

「私が見極めましょう、その者がララ様にふさわしいか否か。」

「どーしてそーなるんだよっ!!??」

思わず突っ込んでしまった。出来れば関わりたくなかったが、リトが巻き込まれているので仕方が無い。

「む…そいつは…?」

「この人は有里!リトの友達だよ!」

「有里……まさか風撫でのユリ!!??」

「風撫で?」

「ご存じないのですか!?ララ様の父上であるデビルーク王と一対

一で戦ってこの宇宙で唯一生き残った人物、それこそが風撫でのユリなのです！」

「聞いたことある、遠い星にぶっ殺したいやつが居るってっ！」

「何言ってるんですか……僕がそんな人な訳ないじゃないですか……僕は彩南高校に通う雪ヶ丘百合というしがない高校生です。」

「しらじらしい態度！間違ひなく風撫です！貴様もここで討たせてもらおう、いざ勝負ッ！！！」

「ちょ、待て待て待て、何でそーなるんだよ！！」

「ふっざけんなバカ野郎！」

ザステインが剣を振るいながらリトの方へと駆け出す。

リトは川原に置いてあった車に隠れようとするが、

スパンツ！

と鋭い音と共に車は一瞬のうちに切り刻まれてしまった。それだけでザステインが剣の達人であると解る。しかし素早さがそうでもないから手加減しているか、防御タイプの剣士なのか？

ザステインがリトへと走り出すのを見て、すぐさまオレも駆け出した。

車が切られた時は肝を冷やしたがリトも何とか避けられたらしい。

その隙について近づくオレを振り返りざまに剣を横薙ぎにして迎撃しようとする。

が、剣は紙一重でかわされ、懐への侵入を許してしまう。

オレはザステインの腕を持つと一本背負いでその体を投げ飛ばした。まず距離を取らせてリトのザステインの間に入らなくては。

「むう!？」

しかしそこは親衛隊長、空中で体勢を立て直し後ずさりしながらも足から着地した。

「リト! 逃げるぞ!」

「逃げるってどこへ!？」

「あいつのいない所へだよ!」

ザステインとの距離を離れたオレ達は2人して住宅地へと走り出した。

オレもリトもそれなりの速さで走れる、がザステインも少々本気で来たのか逃げ切らせない程度の速さでこちらを追いかけてくる。

「ぬっ!!」

途中で出会いがしらの車に轢かれそうになったザステインが空中へと高くジャンプした。

何か卑怯だとかそんなことを空中で喚いているが生憎聞こえてこない。

「おい! そっちは危ねーっ!」

高く飛び上がったザステインの着地地点を察知してリトが大声を上

げた。

彼は丁度線路の真上あたりにいる。

「危ないだど？フツ調子に乗るなよ。二度も同じ手段が、」

ドゴッ！！

（電車キター！！）

（轢かれたー！！）

ギャグ漫画のような絶妙なタイミングで電車に跳ね飛ばされるザステイン。

弾かれる様に体が転がっていき民家の塀に当たって地面へと落ちた。

「だ…大丈夫か？」

自分を切ろうとしていた人物でも、目の前で電車に轢かれれば心配にもなる。普通ならそこかしこから血を噴出すであろうザステインの体はこれといって目立つ怪我はない。さすがの防御力といったところか。

リトが倒れているザステインへ声をかける。

「ぐおおおおお！」

「うわっ！」

リトが肩に手を置こうとした時、倒れていたザステインが剣を振り上げながら弾かれるように飛び上がった。

その反動でリトが近くのゴミ箱へと吹き飛ばされる。

「リト！おい大丈夫か！？」

すぐにリトへと駆け寄る。

「痛てて…」

倒れているリトの体を支えながら起こすと、吹き飛ばされた時に擦り剥いたのか膝から血が流れていた。

鮮やかな赤色が視界に広がり、頭の中が真っ白になる。

一瞬で血が沸騰した感覚。それと同時に氷水のように冷たい水が体を駆け巡った。

何だこれは、なんでリトがこんな目に合っている。あのバカ野郎の娘の自分勝手のせい？

ふっざけんな、あの野郎だから躰は小さい時からやっておけって行っておいたんだ。生ませるだけ生ませておいてポイとかしやがって。育児する気がねえなら子どもなんて作るなってんだ。

くっそ、イライラしてきた。なんでザスティンもこっちの話を聞かないんだ。そりゃ親衛隊長からすりゃオレなんていないほうがいい存在だろうが、それならオレのところに向って来いってんだ。それをわざわざ心配してあげたリトを転ばせるようなことして……。

あつたまきた。

何かが、小さく音を立てて、切れた

有里の瞳が輝きを失い、暗く……ただ暗く染まっていった。

ゴミ捨て場に落ちていた鉄パイプを右手でゆっくりと拾う。カラカ

ラと乾いた音を立て鉄パイプを引きずりながらゆっくりとザステインへと足を進める。

「っ!？」

体を起したザステインは恐怖した。電車に轢かれたからではない。鍛え上げた肉体と最新科学の粹を埋め込まれた鎧があればそのぐらいの衝撃はなんとも無い。

ではこの恐怖の出所は？

それはすぐに理解できた。こちらへ向って歩いてくる少年、そう少年だ。鉄製の棒を引きずりながら歩いてくる少年の放つ、絶望すら感じさせるほどの”殺意”それがこの恐怖の正体だ。

ザステインはすぐに立ち上がり剣を両手で構える。数々の敵を打ち負かしてきたこの剣が今では心許なく思える。『斬れぬもの無き剣』と称されたこの剣よりも、少年の持つ鉄の棒のほうがよほど恐ろしく見えたからだ。

「お前：オレの親友に手を出したな…」

重く、冷たい言葉が小さく響いた。

ゆっくり、ゆっくりと一歩ずつ足を進める有里。そして彼が一歩進むごとにザステインは二歩後ずさる。

しかし彼は理解していた。こんな距離などあってないようなものだ。少年が飛び掛ってきたら自分はやられてしまうだろう。

その場を恐怖と殺意が支配した時、

「リト！有里！ザステイン！」

空からララが降りてきた。

「おい！有里！有里！どうしたんだよ！？」

「……え？」

ララとリトの声を聞いてオレは正気に戻る。

2、3度辺りを見回した後、頭を強く振りまだ倒れているリトへと駆け寄った。

「リト、大丈夫か。」

「怪我はべつに何とも無いけど……むしろ有里のほうが大丈夫か？」

「ああ……えっと……かつこ悪いところ見せちゃったな、大丈夫だよ。」

落ち着いてみてみればリトの怪我也膝を少し擦り剥いただけだった。確かに血は出ているがたいしたことは無い絆創膏を貼っておけば1週間ほどで傷も無くなる程度だろう。

オレはリトの手を引いて立たせてあげる。

後ろではララとザスティンが言い合いをしていた。

「確かに怪我をさせたのは私が悪いと思いますが星々の頂点に立つにはあのぐらいの苦難！」

「だからって私の結婚相手を勝手に決めないでよ！」

「ララ様の事を考えてのことなのですよ！？」

「パパは私より後継者のほうが大切なんだよ！！」

「いー加減にしろっ！！！！」

2人の言い争いを断ち切るようにリトが叫ぶ

「デビルーク星の後継者とか…お見合いとか…どーでもいいんだよ、んな事…」

「リト？」

「普通の生活させろよ！もうこれ以上好きでもねーヤツと結婚とか…だから…もう帰ってくれ！自由にさせろよ！！」

この数日間で溜まりに溜まっていたであろう鬱憤を晴らすかのよう
に思っていることをぶちまけるリト。

「……リト」

そんなリトを潤んだ瞳で見つめるララ。

リトは自分の事を言ってるんだろうしオレもそう思うが、表情を見る限りララとザステインは違う風に捉えているっぽい。

そう、聞き方によってはララのことを思いやっているように聞こえるからだ。

「うれしい…私の事好きじゃないって言いながら…ホントはそこま
で私の気持ち理解してくれてたんだ…」

ほらやっぱり。

「リトの言う通り私は…自分の好きなように自由に生きたい。ま
だまだやりたい事たくさんあるし…結婚相手だって自分で決めたい
…そう思ってた」

「い…いや別に……」

そこであたふたしちやダメだ。男らしく「じゃあ帰れ！」と言い切
ってやるんだリト。

「私ホントはリトと結婚するつもりっていうのは連れ戻されな
いための口実のつもりだったの」

（やっぱり…）

（みんなわかってるよ…）

（口実だったとは…）

「でも…やっとわかった。私、リトとなら本当に結婚してもいい
と思う。ううん、結婚したい！」

「ちょ…違う！違うって！！なああんたも何とか言ってくれよ！」

まさかこんなことになるなんて思っても見なかったのだろうリトは
パニック状態。

「…負けたよ、地球人」

この親衛隊長おつむがあれすぎる。その分剣の腕が達者なんだろう
けど、隊長を名乗るのならもうちょっと賢くなきゃじゃないのだろ
うか。

何かよく解からないことをあれこれと喋っているララとザステイン。
リトがもうお前しか居ない！助けて！といった縋るような目でこち
らを見てくるが正直もうどうしようもない。

ララに抱きつかれて顔を真っ赤にしているリトを見ていたら何やら
馬鹿馬鹿しくなってきたので、オレは2人をほっというて結城宅へと
戻ることにした。

銀河からの使者”後日談”

ララとザステインが用事ある、といってどこかへ飛んでいってしまったので、リトと2人で結城宅へと歩く。
歩きなれた住宅地に重々しい空気が漂う。

「なあ…」

「ん？」

その重たい空気のせいか、神妙な面持ちでリトが声をかけてきた。
ん？だなんてちよつとクールに返事してみたけど内心は、キタ——
ッ！——と焦りまくりだ。

「さっきの話だけど…有里って、その…宇宙人なのか？」

あ、そっち？とオレはホッと胸を撫で下ろす。

よかった…あのキレちゃった時の事を聞かれると思ってた…。

「もし有里が宇宙人だったとしても…オレ、それでも親友だと思ってるからさ…だから、隠し事とかはしないで…欲しい」

すごい俯きながらボソボソと喋っている。

あの方は何となく誤魔化しただけで別にそんな重要なことじゃなかったんだけど…。

「そうだよ…でも隠してたわけじゃない」

「え…？」

「たとえばリトが誰かに自己紹介するときに、僕は地球人ですって言わないだろ。んでオレからすればリトだって宇宙人な訳だ。宇宙人同士なんだから別に言わないのはおかしくないだろ！」

「ん…ああ、うん。え…？そっかなるほど。」

釈然としない感じですね。まんまと言葉のマジックにはまってしまってますね。リトが深く考えない子で良かった。

「それよりすっかり遅くなっちゃったからな、コンビニかどっかで美柑に甘いものでも買ってってやろうぜ」

さりげなく話題を変える。別に嫌な話な訳じゃないけどこのまま話していると自分でも気付かないうちに墓穴を掘りそうで怖い。

「有里って美柑に甘いよな」

「んなこた無いよ。むしろいつも世話してもらってるリトが言い出すべきことだろ？」

「う…確かに…」

と言ってはみたが、思い返してみるとリトの家に遊びに行くときは出来るだけ美柑のためにお菓子や飲み物を買っていつている気がする。

別に気に入られようとかそんなつもりは無かったが、無意識でやっていたことを意識させられると何やら不思議な気持ちになる。

「ただいまー」

「オレもただいまー」

「おかえり、ご飯できてるよ。有里さんも食べてく？」

「食べる食べる。むしろ今日泊まっちゃう」

リトの家から我が家まではそれほど遠くは無い。でも今日は色々あったので買えるのが面倒になってしまった。

そして何より、最近リトの家に遊びに来ていなかったのだ。

ひどい時には週4ぐらいのペースで遊びに来ていたが、今は週1、2に落ち着いている。あまり入り浸っていると同居人が臍を曲げてしまうのだ。

「おっ今日泊まってくのか、久しぶりだな」

「そういうと思って布団もリトの部屋に準備しておいたよ」

既に泊まった回数は20以上になるので、結城家の対応もずいぶん手馴れている。

リトのタンスの隅っこにはオレの着替えの服なんかも常備されていて突発的に泊まることになっても快適愉快になっているのだ。

「お姉さまに連絡しとかなきゃ：テルテル：あいもしもしー、今日リトんち泊まるからー。ちげっ！そうだよ朝帰りだよ：変な意味じゃねーよ！！切るぞー」

「いい加減その同居人のお姉さんのこと教えろよなー。」

「親戚のお姉さんだっけ？」

ここから少し遠くにある我が家ではお姉さん・お姉さまと呼ばないと変な液体の入った注射をしようとしてくる同居人がいる。

同居人というかオレが居候として住ませてもらっているんだけど・・。一応家賃やその他諸々を納めているので同居人ということでは合っている・・と思う。

そしてこのお姉さま、遊びに行く時や泊まる時などに連絡をいれないとえらく怒るのだ。詳しいお話はまた後日。

「んーその内ね。それより飯にしようぜ！飯！」

「ちょっと待ってて、すぐ支度するから」

「それじゃオレら荷物置いて手洗ってこようぜえ」

「オレは心も体も綺麗だから必要ないんだぜ」

「いいから行くぞ、有里」

「へい合点親分」

リトは私服だったがオレは制服のままうろついていたので楽な服装に着替えるためタンスを開く。

そこから適当に長袖と短パンを引っ張りだし脱いだ服を雑に畳みつつもそれに着替える。

「お前そのズボン、オレのじゃねえか…」

「何だよーケケケチすんなよーいっぱいあるんだからいいだろー」

自分の服を持ってきてはいるが、その日の気分によってリトの服を着たりしている。

身長も体格も大体一緒なので着回してもぴったし合うのだ。そんなオレの勝手をはじめは文句を言っていたリトも今では呆れて放置気味だった。

洗面所からリビングへ行くと既に食卓には夕食が並べられていた。

「うひーうまそーっ」

「あ、有里オレの箸も取って」

「自分で取れよー」

「いいから早く座りなよ」

今日はからあげや、コロッケなど何とも家庭的な献立になっている。鶏肉を切って片栗粉をつけて揚げただけのものがこんなに美味しいなんて、シンプルなものほど美味しいということなのだろうか。

「「「いただきますーす」」」

皆で声を合わせていただきます。

オレもリトも先ほど走り回りかなりお腹が減っていたので、恐ろしいスピードで食べ進む。

積みまれていたからあげやコロッケ達が見る間に消えていった。

無くなりかけると美柑が追加してくれた。あらかじめ用意しておくにしたって準備がよすぎると思う。本当にできた子だ。

結局2杯もご飯をおかわりしてしまった。

食後のお茶を3人で飲みながら一服。

「ふう、それじゃ風呂入ろうかな」

「お、一緒に入る？」

「有里と入ると長くなるからやだね、先入ってくる」

「はや風呂が許されるのはカラスだけなんだぞっ。いってらっしやーい」

まずかけ湯をしてから体を洗う。そしてまず入浴。充分温まった所で一旦出て頭を洗う。そしてまた入浴。充分温まった所で一旦出て顔を洗う。そしてまた入浴。充分温まった所でまだまだ粘る。そして脱水症状起こすかも、という辺りでやっと出るのだ。

時々立ち上がった瞬間にすごい立ちくらみを起こす。しかしその後に飲む冷たい飲み物が格別にうまいのだ。この一杯のために生きるね。

「私、部屋に行ってるから」

オレとリトがやり取りをしている間に洗い物をすませていた美柑が手を拭きながら言う。

その声に若干力が無かったのと、いつもはスタスタ階段を登っていく足取りが嫌に重たい気がして、椅子にポケーツと座ってお茶を啜っていたオレには何故か、気になったのだった。

.....

【美柑】

自分の部屋に戻りベッドに顔から倒れこんだ。やわらかい枕の感触が優しく包み込んでくれる。

それを手元へ持ってきてきて両腕で抱きしめた。それに顔をうずめながら考える。

リトに話された、ララさんという綺麗な人がこれからこの家で一緒に住むらしい。その場は思わず「いいんじゃない？」なんて強がってはみたが、本当は複雑な気持ちだった。

父も母もめったに家に帰ってこない、リトと2人ボツチの家。頼りないリトに変わって私がしっかりしなきゃと頑張ってきた。

それがいきなり他の人が来て、その上結婚だなんて言い出して。妹の私に一言あってもいいはずなのに…。

こうやって悩み事や落ち込んだときはいつも布団で横になって枕を抱きしめる。

友達と喧嘩したときや、勉強がうまくいかないとき、家事に疲れてしまったとき、私はいつもこうしていた。そして決まって、

「みかーん、ココア入れすぎちゃったんだけど飲まない？」

この人がやってくるんだ。

何をどうしたらココアを入れすぎて2杯もいれてしまうんだろう、素直に持ってくればいいのに。

「飲む」

なんてぶっちらばうに答えてしまった、素直じゃないのはどっちだろう。

「そかそか、そりゃよかった」

ってニコニコしながらカップを渡してくる。

受け取ると暖かくて甘い匂いががホワツと香った。それを両手で持ってチビチビと飲む。

横目でチラ見してみると、有里さんは椅子に座ってボーっとしながら自分の分のココアを飲んでいた。

いつもそうだ、お菓子を持ってきたり、飲み物だったり、本だったり、ぬいぐるみだったり。

でも決まってこの人は何も話さない。慰めたり、励ましたりそういうことは絶対しない。ただ私が落ち着くまで目の届く範囲でボーツとしていく。

私の知っている中で一番変な人。そして一番頼りになれる人。

「じゃ、風呂はいつて寝るわー。おやすみー」

私が飲んでたココアが無くなると同時に、有里さんがそう言っただけのカップも持って部屋から出て行った。

本当に何をしに来たんだろうこの人は……。帰り際扉の隙間から手を振る有里さんに苦笑いしながら手を振る。

1階に降りていく足音を聞きながらまた布団に倒れる。気付いたらもう悩みなんて無くなっていた。

「なあリト！風呂入ろうぜ！」

「もう入ったよ！知ってるだろ！」

「バカだなあ・・・んなことあ知ってるよ、お前が風呂に入ったこととオレと今から風呂に入ることと、何の関係があるんだ!!」

「うるせえ！1人で入れバカッ!!」

「もういいよ！美柑と入るから！」

「ふざけたこと言ってんな！いいから入れ！」

1階からそんなやり取りが聞こえてくる。名前が出てきたときはちよつとビクツてなった。一緒にお風呂か・・ちよつとやだな、うん、やだ。

あの人が来るといつも騒がしくなる。でも何を考えてるかわかんないし、すごく変な人。

変な人。

・・・・・。

・・・。

翌朝、リトの部屋で一緒に寝た後（変な意味では無い）7時ちよつとすぎに美柑に起こされた。

何やらララが全裸でリトの布団に忍び込んでたらしいが、オレは寝起きが悪いのであまり関与しなかった。

美柑に一声かけてから結城家を後にした。

・・・・・。

そこは閑静な住宅街、に似つかわしくないまるでお化け屋敷のような家。というよりかは城に近いかもしれない。

朝だというのにその家だけは薄暗く感じた。敷地にはとても地球のものとは思えないような植物が跋扈している。屋根の上にはカラスが止まりおどろおどろしさを高めている。

しかしそれも見慣れた光景なので特に気にすることは無く門を開け

玄関へと歩いていく。

西洋風の大きな扉の鍵をあけそれを開けると、

「随分遅いんじゃないかしら？」

黒いそしてエロイ下着に白衣を着た黒髪の女性が立っていた。というか待ち伏せしていた。

「朝帰るって言ったじゃん。」

「どうせまた結城君といちゃいちゃしてきたんでしょう？」

「何をどうしたらリトといちゃいちゃするんだよ…」

「まさか結城君の妹…と？」

「小学生といちゃいちゃなんかできるか！このエロ医者！」

彼女はオレが居候させて貰っている家の家主である御門涼子。彩南高校の校医をしていると共に宇宙人専門の医者でもあり、色々あって居候させてもらっていた。というかさせられた。

「取りあえず着替えるから、話はそれからね…」

御門に絡まれるのは慣れっこなので適当に流しながら歩き出す。すると足元でプシュツという音がした。

それと同時に急激な睡魔に襲われる。

「あ、校長先生ですか？私今日は少し用事がありますので学校は休みますね、代理のものを手配いたしますので、それでは」

という御門の声が聞こえてきた。

薄れる意識、霞む視界。重たくなる瞼を必死にこじあけてオレが最後に見たものは満面の笑みの御門だった。

接近

もう何度目か解からない御門の睡眠薬攻撃から目を覚ましてみると、そこは自室のベッドの上だった。

むく、と体を起こし自分の状態を確認する。Tシャツに短パンと多分御門が着せたのだろうものに着替えさせられている。

体は特に異常はなかった…と思う。さすがにあれをそれされたくらいくら薬を使われていたとはいったって起きるだろう。うん、きつと大丈夫。

「いるし…」

布団の上に脱ぎ捨てられていた白衣を見た時点で、というか起きた時点で気付いていたが横には、幸せそうに眠る御門がいた。

この漫画のような、ゲームのようなシチュエーションも慣れっこなので、特に動揺することも無く布団からでる。

手早く制服に着替えて部屋から出た。

台所へ行ってパンを2枚と目玉焼き、適当に野菜を使ってサラダをこしらえた辺りで御門が下着姿のまま降りてきた。

御門が洗面台へ行っている間に自分の分を平らげ”先に行く”と書置きを置いて家を出る。実は起きた時間が遅かったので遅刻ギリギリなのだ。

閉めた玄関の向こうから名前を呼ぶ声が聞こえてるが、男は振り返らない！と知らない振りをした。

.....

.....

チャイムが鳴り終わるか終わらないかのギリギリに教室へ入り込んだ。

「リトおはよ」

「んー：おはよう」

朝の挨拶を交わしたリトは頬を染めてニヤニヤしていた。

夢心地のような様子だったが一応挨拶は返してくれたのでいぶかしみながらも席に座る。

すぐに担任が教室に入ってきた。

「えー突然ですが、転校生を紹介します」

初老の担任がしがれた、それでいて奥行きのある声でそう告げる。こんな季節はずれに転校生なんて珍しいと教室がざわざわしだす。しかしオレは嫌な予感がいっぱいだ。

「入りなさい君」

「ハ―イ!!」

教師がそう呼ぶと少女の花のような可愛らしい声が聞こえてくる。教室の血気盛んな男性諸君はお祭り騒ぎのように湧き上がっているがオレは既に確信しているし、横を見るとリトもあれ？といった顔をしている。

ガラガラと教室の扉を開けそこから入ってきたのは

「やつほーリトー！私もガッコ来ちゃったよーっ！」

「ラ…ララ！？」

リトがその少女に気付いて大声を上げた。

ざわついていた男性諸君の目が半分ララ、半分リトに注がれる。前者はララの容姿に見惚れているもの、後者はそのララが何故リトの名前を呼んだかを怪しんでいるもの。

どちらであれ青春においていかれまいと余裕をなくしている男子に変わりは無かった。

・・・。

・・・。

昼休み

「何のつもりだよララ！いきなり転校してくるなんて！」

ここ最近すっかり大声キャラが定着しつつあるリトが、いきなり転校してきた宇宙人に質問というには大きすぎる声をあげる。

しかし当の本人がキョトンとした顔をしており、まるで何故そんなに怒っているのか解からない、といった感じだ。

オレは特にやることもなかったのでリトに付いてきて後ろでそれを見守っている。

「おかげでオレたちウワサの的じゃねーか！おまけにオレン家にいる事バラしちまって！」

ただでさえ転校生という生き物は質問攻めに合うものなのに、それが美少女ならば倍増した。

主に女子生徒が休み時間の度にララの席の周りに人の壁を作り質問攻めをし、男子がそれを遠巻きに「え？オレ興味ねーから」と無関心を装いながら耳をダンボにしてそれを一字一句もらさず聞く。ララも人当たりが良いほうなので楽しそうに質問に答えていた、が楽しすぎていらぬことも喋ってしまったのだ。

そしてそれを聞いていた男たちがリトを質問攻めにする。時折「たすけて・・・」と言いたいような視線を向けられるが、オレは気付かない振りを通し続けた。その視線を相殺するかのような猿山の視線も向けられていたからだった。

「えーだって…」

リトに言い寄られたララが答える

「いつもリトのそばにいたかったんだもん」

と頬を染めそれに手を当てながらララが言う。

「い…一応遠い親戚だって言いワケはしといたけどよ…」

その可愛らしいララの姿にリトはすっかり溜飲をさげられている。確かに可愛かったが、そこで折れてどうするリト…。

しかし戸籍もない宇宙人がどうやって転入できたんだろうと思ったらうちのエロ校長が二つ返事で許可したらしい。あのエロ親父め…。

「でも心配しないで！宇宙人って事はヒミツにしてあるから」

「そんなん当たり前だ！ただでさえお前注目されてんのに宇宙人なんて知れたら大騒ぎに…」

『そんな単純な問題ではない！ララ様はデビルーク星のプリンセス！それが公になれば命を狙われる可能性もあるのです！』

耐え切れなかったのかララの髪留めのペケが横槍をいれる。

このペケというのは普段は髪留めだが自律して動くことも出来るしララの服を作ったりもしている。付き人のような性格をしている子だ。あとさっきからこっちを睨んでいる。

『リト殿が本当に頼りになる男なら心配する必要はないのですが、この学校には風撫でのユリも通っていることですから危険はないでしょう。むしろその男自体が危険な気がしますけどね』

「何かトゲのある言い方だな」

「風撫でって言うな、オレから名乗った名前じゃないんだよ。あとオレが嫌いなのは父親であって娘にゃなんもしないよ」

髪留めと口論する男子2人。実に情けない。

「大丈夫だよペケ！リトはいざって時頼りになるし、ユリは優しいから！」

「いや…そんなアテにされても…」

「いや…そんな優しいなんて言われても…照れるわ。」

そのいざって時がきつとすぐ来るんだろうなあ…。

……。

・・・。

放課後

「あ、そだ西連寺くん。キミ学級委員だね？ララくんに学校の部活の案内を頼みたいんだが…いい？」

担任教師が席を立とうとしていた西連寺を呼びとめララの学校案内を命じていた。

オレはそれを見ながらリトと一緒に帰ろうと誘おうとするが、すでにリトは教室にいない。

「おい猿、リトは？」

「西連寺をストーカーしにいったよ。」

「またか、あのバカは…んじゃま1人で帰るとするかね。またなー」

「おうよ、またなっ。」

お猿さんと挨拶を交わし教室を後にした。

・・・。

・・・。

その日の食卓

御門と今日のメニューであるとかつ定食を2人で食べている。食事の時はテレビをつけないので、部屋には食器の音と御門が流している何やらよくわからないやたらムーディーな曲だけだった。そんな静寂を破るように御門が口を開く。

「うちの探索機が反応したのだけど、この町に宇宙人が来ているわ」

「ララのことか？その付き人の人たちも来てるよ」

「私も校医なのよ？そんなこと解かってるわ。それとは別に2人乗りの宇宙船が昨日来た形跡がある。」

この家には古臭い洋風の外観に似合わず高度なセキュリティシステムや探査機などがある。

オレも御門も宇宙ではそれなりに（不本意ながら）有名なので、安全面には気を使っているのだ。

「それはつまり…」

「ええ、あの王女様を狙ってきた輩といった所でしようね」

ララの親父であるデビルークは銀河の頂点に立つ男だ。当然ララを嫁にすればその地位につくことができる。

野望を持つもの、ララを気に入ったもの、デビルークが気に入らないもの、様々なものがララを狙っている。もしララの身に何かあった場合、あのバカ野郎ならこの星を潰すくらいの事やってしまいそうだ。

現に以前あいつと口論になった時、うっかり星ひとつを潰してしまっ
うほどのケンカになってしまった。

リトが気に入らればいいが…。

「それでオレにどうしろって・・・」

「この星が気に入っているのなら、やることは1つでしょう？」

「はいはい、注意しますよ」

この宇宙船に乗っていたやつがウラを狙う者ならば気をつけなくてはならない。

いくらザステイン達がいようと宇宙人には擬態型や寄生型、人型など一目見ただけでは地球人と区別が出来ないやつらも多い。

そこまで知っていて、注意しなくてはということも解かっているとうしてああなってしまったのか。認識力も注意力も足りないオレには解からなかった…。

真の姿

そして翌日

「おい有里てめーもっと動けよー」

「お前が動けよ」

インドア系男子のテンションを根こそぎ奪っていく授業、体育である。

その中でも「お前らなんでそんなに頑張っちゃうの？」と一部の人間に言いたくなるような授業内容、サッカーである。

ゴール近くでダラダラしていたオレに猿山が声をかける。うちのチームはリトが頑張っているのでDF達は暇なのだ。

だったら上がれよ！といった気もするがそんな根性があるなら始めからリトの横で走っているだろう。

なぜそこまで頑なにこの場所にしようとする理由とは、

「いやしかし我が学校の女子達の発育はたまりませんな有里さん」

「全くですな猿さん」

このバカ2人は女子の100m走の見学をしていたのだ。

揺れる胸、健康的な瑞々しい太もも、滴る汗、乱れる吐息、まあつまり不健全に健全ということです。

「ちっ、それにしてもむかつくよなー」

「ん？何が？」

「あの体育教師だよー、くっそチャホヤされやがって…」

猿山が悪態をついている男、佐清体育教師である。

体育教師でありテニスの顧問。甘いマスクと性格で夢見がちな少女たちの人気をごっそり持っていく男子生徒たちの目の上のたんこぶ的存在だ。

体育館の男子トイレの壁には

「佐清○ね」

「佐清あやまれ」

「佐清になら抱かれてもいい」

などの落書きが成されているのは男子の間では有名である。

「確かにお前は色々負けてるもんな」

「んだよ自分はちよっというツラしてるからって余裕かよ」

猿山だって普通にいい容姿をしている。が、言動や行動が少し欲望に忠実すぎるので女っ気を遠ざけてしまっている。

「はいはい悪うございましたね、ほれ授業終わるぞ」

このままこの話を続けていると猿山の愚痴に延々付き合うことになるので適当にあしらいつつ集合場所へと急いだ。

.....

.....

そして昼休み

「リト、飯食おう。」

今日は朝コンビニによってお昼ご飯を買ってあったのでお猿さんをパシらせる必要は無い。

美柑特製弁当からおかずを少々頂きつつ平和な昼食を楽しもうと思ったが教室内にリトの姿は見当たらない。

どこか行ったのかな？と猿山に聞こうと思ったが

「あんな冷たいヤツ放つというオレ達と弁当食おうよ、ね！」

モテない仲間の連中とララを囲んで話しかけていた。ララは普段リトにひつついてベタベタしているので男子連中は話しかけるタイミングが無かったんだろう。ここぞとばかりにアプローチを仕掛けている。ララはその勢いに押され気味だった。

多分西連寺もいないからリトは西連寺のところへ行ったのかな。オレとしてはララを見ておけば良いので自分の椅子に座って、男達の情けない様を眺めていた。

.....

「むーリトどこに行ったのかなーユリ知らない？」

「昼休み始まってすぐどこか行ったらしいけどねー」

リトを探しに行く！と言い出したララに屋上を案内していた。
屋上についてすぐララはひよいひよいと貯水タンクへ登り辺りを見
回している。

オレは風に煽られてめくれるスカートの中身を見ながらカレーパン
を食べる。別におかずとかそういう意味じゃなくて。この子隠そう
としないから。見えちゃってるの。オレは悪くない！

「とにかくリトを探さなきゃ」

ペケと何やら話していたララがそう言って携帯のようなものを取り
出しペポペポと操作しだした。

そしてブンツというSFチックな音と共に可愛いようなそうでない
ような犬の機械がその携帯から出てきた。

何でもくんくんトレース君、というララの発明品らしい。さっき道
すがら聞いた話だが、ララは発明が好きらしく何でもかんでも自分
で作ってしまうらしい。ペケが小さい声で失敗が多いと付け足して
ただど・・・。

「ねえユリ、何かリトの匂いがするもの持ってない？」

「この中シャツリトのやつだけどそれでいい？」

オレは上着を脱いでネクタイを取りシャツのボタンを外す。シャツ
の中には黒地に英語の書かれたTシャツがあった。
これはリトのダンスから以前勝手に拝借したものである。

「いいよ！はい、このにおいの人を探すんだよ」

ララが犬を両手で持ってシャツを嗅がせる。犬がクンクンと鼻を鳴らして、

『こっちダスー!』

と声をあげて走り出した。

「喋れるのかよ!!」

「当たり前でしょ! ほら行くよ! ユリ! ペケ!」

パンも食べ終りゴミくずをポケットにねじ込む。やることも無くなったので、楽しそうに走り出すララの後ろを付いていくことにした。しばらくして犬の動きが活発になり曲がり角を曲がる。そしてある部屋の前で止まった。

「ここにリトがいるのね!! リトーーッ!」

その扉をララが勢いよく開けたが、

「キャー! 何こいつっ!?!」

とリトのものとは思えない女子生徒の悲鳴が聞こえてきた。そう、更衣室だったのだ。

この機械犬はオスだったらしく、探索そっちのけで女子に飛びつきたかっただけらしい。というかなんだこのお約束の展開は・・・。

探索は難航し始めた時、廊下の向こうから見覚えのある白衣の女性がちちらに歩いてくる。

「ララさん、結城君なら使われなくなった部室に向かうのを見たわ。場所は体育館の裏よ。」

「体育館？ありがとう！行ってくるねっ」

白衣の女性、御門にそう言われたララはエロ犬を抱きかかえてすごい速さで走り去っていく。

あっという間にその場にはオレと御門だけが残された。

「宇宙人か？」

「ええ、擬態タイプね。佐清先生に化けていたらしいわ」

「じゃあそんな強いわけじゃないんだな」

「そうね、結城君とプリンセスなら大丈夫でしょう」

擬態タイプの宇宙人は例外もいるが大抵は非力なことが多い。擬態能力は、強そうな生き物を模して威嚇したり天敵に成りすましてやり過ごすためのものだからだ。

なので運動が得意なリトならそうそうケガをしたりはしないだろう…。

ここで考える。何故ララ本人ではなく西連寺を狙ったのか。これはリトをララの婚約者から外すための脅し材料だろう。

ならば何故リトにとって西連寺が弱点となることを知っていたのか…。

「御門」

「何かしら？」

「早退届けとリト達を頼む」

嫌な予感が頭をよぎる。そうだ、今日は美柑の学校は創立記念日で休みだ。

御門の返事を聞く間もなくオレは学校を飛び出した。

・・・。

・・・。

【宇宙人】

私は透明系宇宙人。主に潜伏と諜報を得意とし今まさに地球人を調査中だ。

いや本当はもう仕事は終わっている。現に今仲間が地球人をさらって作戦を遂行しているはずだ。

つまり今オレが地球人の家を覗いているもとい調査しているのは訓練だ、そう訓練なのだ。

ふふふ、おっ！この子タンスを漁っているぞ。もしかしたら着替えるのか？これは好都合、この宇宙製のバレにくいカメラを使って証拠として残さなくては！

へっへっへ・・・またコレクションが増え

「くたばれエロ野郎がああああああっ！！」

「あばばおう！」

・・・。

学校から猛ダッシュしてリトの家に向かっていた。

数分でリトのが見えてくる。その上空にはステルス状態の宇宙船が浮かんでいた。

オレは塀を伝って民家の屋根に登る。そこから屋根伝いに走る。

2階の窓に張り付いている薄透明の不審者に向けてその勢いのまま跳び蹴りをかました。

「くたばれエロ野郎がああああああっ!!」

「あばばおう!」

薄透明の宇宙人が叫び声を上げて吹き飛ぶ。

きりもみ回転をしながら地面に落ちて、2〜3回痙攣をした後動かなくなった。

それを確認もせずにオレは蹴り破るように結城家玄関へ飛び込む。ドタバタと音を立てて美柑の部屋へ行くがそこに美柑の姿は無い。冷たい汗が背筋を流れるのを感じるが、隣のリトの部屋へ急ぐ。

ガチャとドアを開けるとそこにはリトのタンスに入っているオレを服を持ちながら固まっている美柑がいた。

「無事か! 怪我とかないか!? なんかされてないか!？」

「へ...? 有里さ...なんで...?」

すぐさま近寄って確認しても特に異常は見当たらなかった。美柑は

さっきの姿勢のまま呆然としている。

「いや、ちょっとあってな。洗濯中だったのか？さすがしつかりしてるな！じゃオレ学校帰らなきゃだから！じゃ！」

徐々に顔を赤くし始めた美柑の無事も確認できたし害敵も排除できたので学校へ戻らなくては。

結城から出た後起きようとしていた宇宙人のみぞおちに拳を振り下ろした意識を刈り取る。そして首根っこを持ち少し上空で浮遊している宇宙船のぽっかり開いている搭乗口へぶん投げた。ガツンゴツンという骨が何かにぶつかる音が鳴っていたが変態野郎には軽いお仕置きにすぎないだろう。

リト達の様子も気になるので、来た時よりはゆっくりなペースで走って帰ることにした。

.....

.....

学校へ戻り御門に聞いたところ、リトが男らしい所を見せて無事納まったらしい。攫われた西連寺も気を失っていただけで特にケガも無かった。で今は御門のテリトリである保健室で眠っている。一応これで地球の危機は回避されたということになった。リトもララと結婚するということがどれだけ大変で面倒かわかったはずだ。とはいえ優しいリトはララを追いつくなんて真似はできないだろう。なし崩し的にこの騒がしい日常は続いていくことになりそうだ。

オレの目の前で真っ赤な顔をしながら呆けているこの純情ボーイはそんなことわかつちやいないんだろうなあ…。

ちなみに宇宙人達はララに頼んでどこかへ送ってもらった。盗撮・
誘拐・ダメ・絶対。

買い物パニック

一騒動が終わったその週の日曜日。

窓から差し込む日光がとても暖かく、いくらでも寝ていられそうなそんな快適な環境。

自然の流れに任せるままに昼まで寝ていようとしていたオレを、携帯が奏でる初期設定の何とも無機質な音がそれを阻害する。

潜り込んでいた布団から手だけをだし引っ手繰る様に携帯を引き寄せる。

おぼろげな手つきで通話ボタンを押すとそこからは聞きなれた親友の声が聞こえてきた。

内容をかいつまんで言えば昼過ぎに駅前集合らしい。

適当に相槌をうちながら聞いていたが辛うじて記憶できていた。

「あいよおーう…」

「二度寝するなよ！昼に駅前だからな！」

気の抜けた返事を返すオレにリトが語気を強くして確認する。言い終わるや否や電話は切られてしまった。

携帯を枕元に放り投げて、鉛を全身に付けられているのではと思うくらい重たい体を起き上げる。

短パンが半分ずり落ちてパンツが丸見えになってしまっているが、幸い今日は襲ってくる危ない医者が他の星へ薬草を探しに行っている。なのでその心配はない。

洗面台で顔を洗い、いくらかしゃっきりした所で時計を確認してみ

ると既に11時を回ってしまっている。

一人分のご飯を作るのは少々めんどくさかったが、朝・昼はなるべくたくさん食べておきたい性分。

パンを2枚オーブンに放り込んでフライパンに油をはる。卵を二つ落としてその横でベーコンも焼く。

ばらっと塩コショウをかけて雑に味付け。できたらそれを皿にあげてパンも違う皿へ。そしてご飯をよそう。

よくリトや美柑に気持ち悪いといわれるが、オレは主食を2つや3つ取る。ご飯とパン、麺とご飯など色んな組み合わせで。時には3つ全部とか。

米もパンも麺もどれも好きなオレが編み出した食事法なのだ。ただカロリーがえげつないことになるのでオススメできない。

朝兼昼ごはんであるそれを軽々平らげ、適当な服を着込み携帯と財布をポケットにねじ込む。

再度時計を見ると12時20分。ちょっと昼食に時間を使いすぎたかも・・・。

少し焦りながら玄関を出る。重々しい音を立てて玄関の扉が勝手にしまった。

この扉は鍵穴がない。何でも高度なセキュリティによって設定された人でないと開けられないらしい。詳しい説明を御門がしていたがこれっぽっちも覚えていなかった。

駅前行きのバスに乗って30分。携帯の時計は1時を過ぎたことを表していた。

大丈夫、リトは電話で昼過ぎって言ってたから大丈夫。

むしろ駅前といったって目立つ目印のようなものはない。そしてさすが日曜日、老若男女あらゆる人であふれ返っていた。

ここから探すのは大変だな…と電話をかけようとした時人々の視線が同じ方向に向かっていたことに気づく。

それを辿るように歩いていくと案の定3人の姿があった。

「よっ！ごめんちょっと遅れた」

「私達もついさっき着いたとこだよ」

「よっ有里！悪いねいきなり呼んじゃって…」

小走りで近寄っていくとリトと美柑もこちらに気付き近づいてくる。ララはさっきから手をバタバタさせながらキョキョロとあちらこちらを眺めてははしゃいでいた。

ただでさえ目立つ行動なのにその格好がなんとデビルークのドレスのままで。

「あいつすげー目立ってるぞ」

ララを指差しながら言う。

そこで2人もやっと現状に気付いたらしい。

「ララ！ちょっと来いっ！」

リトがつかつかとララに近づいていってその腕を持って引っ張っていく。

オレと美柑が一度顔を見合わせてからその後を着いて行った。

・・・。

・・・。

「ウロウロする前にそのカッコ何とかなんねーのか？ やっぱり目立ちすぎだ」

「えーードレスモードだめ？」

場所は変わってここは路地裏。すぐ目の前を大勢の人が通り過ぎていくがこちらへは誰も見向きもしない。

「まあ今日はララさんの地球見物が目的なワケだし：何事もなく街を見て回りたいならもっとフツの服のほうがいいかもね」

「え？ 今日ってララの地球見学が目的だったの？」

「有里さん知らなかったの？ ララさんに街を案内するんだよ」

知らなかった・・・そういえば今日の目的を聞いてなかったからね。美柑と話しているうちにリトとララがファッションショーを開催していた。スーツやバニーちゃんや着ぐるみなど道行く人の服をスキヤンしていた。何でもペケには人の服をスキヤンすることでその服装を再現できる機能があるらしい。便利。

いくつかの小ボケを挟んでやっとまともな女の子の格好になる。

「あ、それカワイイ」

「ん、ホントだ可愛い可愛い」

「そ…っ、それならOKかな…。」

オレと美柑が素直に、リトが照れくさそうに言う。確かに普通の女の子の格好をしたララは可愛かった。どこぞの雑誌のモデルと言われてもたやすく信じられるだろう。むしろそんなモデルの子より可愛いかもしれない。見たことないけど。

大手を振って歩けるようになったララは、さっきの仕返しと言わんばかりにリトの腕を取り引きずるように駆け出した。

・・・・・・。

それから、服を見に行ったり小物を見たりアクセサリを眺めたり一緒にタイ焼きを食べたり。

ララの行きたい所へ行き、オレ達のオススメのお店を紹介したりした。

ララからすれば全て初めて見るものなので、あれは何？これは何？と一つ一つ指差してオレ達に聞く。

説明するとララとペケで「ほー、へー。」と声を揃えていた。

一通り見たいものを見たので4人でぶらぶらと目的もなく歩く。

「わっ！ここすごく賑やか！いいこっ！」

しばし歩いたところでララがゲームセンターを見つけ入っていった。

「このメカはなあに？」

「お金をいれてクレーンでぬいぐるみを取るんだよ」

「へー。」

クレーンゲームに興味をもったらしく、ディスプレイに張り付いて中のぬいぐるみを眺めている。

「わー、あれかわいい！」

「うーん、でも結構大きいから取るの難しそうだね」

美柑の後ろから覗き込んでみるとうさぎのぬいぐるみのクレーンゲームらしい。確かに理不尽なまでに力のないアームに対して少々大きすぎる気がする。

その時、後ろから声がした。

「・・・ったく、しょうがねーなあ」

リトが前に進み出ながら財布から1枚の硬貨を出す。500円玉ではない。100円玉だ。

そう！それは！1発で取れるという自信の表れだ。

コインを入れボタンを押す。その動作は流れるように一点の淀みもない。たったそれだけで熟達したものを感じた。

予定調和のようにうさぎのぬいぐるみの真上まで来たアームはすんなりとその首へと噛み付く。

のっそりと空中へ連れ去られたうさぎは成すすべもなく射出口へ落ちていった。

つまりリトは簡単にぬいぐるみを取って見せた。それだけのことだった。

「おー！リトすごい！！」

「そういう細かいことムダに得意だよねえ…」

美柑の言葉が聞こえていないのか胸をそって自慢げなリト。嫌味だ
ってことに気づいていない。

「ありがとーリト！これ私の宝物にするねっ！」

そしてララの素直なお礼に満更でもなさそうでもあった。

・・・。

・・・。

ゲームセンターでひとしきり遊び、また3人でふらふらと歩く。

「美柑なんだそれ？」

「ん、さっき服買ったもらったんだ」

「その服を買わされたのはオレだけだな。2人でレジに言ったら2
枚貰ったんだ。」

「最近この辺にできた水族館の割引券だって」

「スイゾクカン？」

「魚とか海の生物がたくさんいるところだよ」

「へーっ楽しそーー!」

「ララさん後で行ってみようか」

そんな話をしていたとき、リトが異変に気付く。

「おい!ララ!」

「服が消えてく!?!?」

「どーゆー事!」

ララの着ていた服が溶ける^{ペケ}ようにして消えかけてしまっていた。

『も…申し訳ありませんララ様。』

「ペケ!」

『どうやらエネルギー切れのようです…先程の連続フォームチェンジが思ったより負担になったようで…』

「な、何だって!」

「エネルギーが切れるとどうなるの?」

『コスチューム形態が維持できなくなります…おそらくあと3分程で…』

「「あと3分で全裸!?!」」

「あはは、困ったねー…」

と大して困った様子もなく頭をかくララ。パサツと音を立てて何か
が落ちる。

「あ、パンうぐっ!!…」

地面に落ちた衣類を見て思わず口にしそうになったのを、美柑のす
ね蹴りが阻止した。

「やってる場合じゃねーだろ! とりあえずどこかへ隠れないと!!」

昼のときのようにまたリトがララの手を引いて走り出す。

その間にも服はどんどん消えていき、もはや下着の上にぼろきれを
羽織っているだけになっている。

止めるわけにも行かないのでオレは自分のジャケットを広げララの
体を隠す。

「もうひとまずその辺の店に入るしかないよ」

「おっ、リト! その店だ、急げ!」

転がり込むように店内へと入る。

「つてここ、ランジェリーショップじゃねーか!!」

「いいから入れリト! 美柑は下着! ララは試着室!」

「試着室ってなに?」

もうほとんど服がなくなっているララの背中を押して試着室へ押し入れる。

「ララさんこれ！」

そこへ美柑が下着をたくさん持ってきて試着室へ放り込む。

「これで下着は何かあったね…」

「次は服か・・・美柑行くぞ！」

「うん、リトはここで待っててね」

「えっ…つちよ・・・あの…」

ランジェリーショップに入ってからうろたえてるリトをその場に放置して、オレと美柑は先程服を買ったお店へと走っていった。

・・・。

・・・。

「早く買って帰らないと・・・リトが恥ずかしすぎて死んじゃうよ」

「これを機に免疫を着ければいいんだよリトは。私は上の服みてるから、有里さん下ね」

「おう！まかせろ！」

5分ほど走って先程の店に着いた。すぐに二手に別れ服を探す。自分で急がなきゃなんて言いながらあれにしようかこれにしようかと悩む。

ララは可愛いから何着ても似合うだろうけど…いつもスカートばかりだからなあ…。色はどうしよう、大人しい色も似合いそうだけどなあ…。

なんて独り言を女性向けの洋服屋で言っているの、女性店員が怪しんでいるが割りと言真剣に悩んでいるので気付けない。

「いつまで選んでるの、もう私決まっちゃったんだけど」

いつの間にか横にいた美柑に小突かれた。その手に黒っぽい服を持っている。

「いやちよっと悩んじゃって…黒い服か…やっぱりこのパンツかな」

「えーララさんにはスカートの方が似合うよ。」

「いやいやあの腰の高さを活かすならパンツだろう。」

「それは解るけどこの色は無いよ。有里さんって微妙にセンス悪いよね」

「何だとー。んじゃこの色はどうだ!」

「んー…まあそれならアリかも…」

「だろー、ところでこの代金ってオレ持ち?」

「なに、有里さんは女の子にお金を出させるの？」

「そんなつもりは無いけどさあ…出費がかさむ」

女の子の服の高価さにうんざりしながら美柑から服を受け取ってレジへ持っていく。

来たのは2回目だと言うのにもう1枚水族館のチケットを貰ってしまった。断ろうとはしたが、折角なので受け取っておいた。

・・・。

・・・。

少々時間がかかってしまったがまたランジェリーショップへと戻ってくる。

驚いたことにそこには西連寺もいたらしく、リトが真っ赤な顔で思考停止していた。

「ララさんこれに着替えて」

美柑が試着室のカーテンを少しだけ開けて服を入れた。とりあえずララのことは美柑に任せてオレ達3人は店の外へ出る。

「…」

「…（挙動不審）」

外に出てみたものの空気が重たい。どちらとも言っていないのか解らないといった様子だ。

そりゃそうだ。リトからすれば女の子と下着売り場に入ったことを

好きな子に見られてしまったんだ。気まずいことこの上ないだろう。

「西連寺…でいいよね？」

「あ、うん。私も雪ヶ丘君でいいかな」

リト経由で西連寺のことは知っていたがお互い話すのはこれが初めてである。

「西連寺はこれから暇？」

使い物にならないリトに変わってこの場をとりもつ。

「うん…予定は無いけど」

「じゃあさ、さっき水族館の券を貰って人数分あるんだけど、よかったら一緒に行かない？」

「水族館って…最近新しくできた…」

「着替えたよーっ！」

「はい、有里さんこれ財布」

そこへオレと美柑が選んだ服を上手に着こなしたララがくるくる回りながら登場した。

っていうか、

「なんで美柑がオレの財布持ってるんだよ！」

「だってララさんの下着代を払わなきゃでしょ？」

そう言って渡された財布の中を確認すると諭吉様がいなくなっている。

女の子の下着ってこんなに高いのか・・・男なんて3枚980円とかで十分なのに。

「有里ありがとねー。必ず後で返すからっ！」

「いやいいよ、地球へ来たお祝いだと思って受け取っというて。そうそう、今から水族館行くよ」

2人にこれからの目的地を伝える。ちなみに電池切れのペケは眠ることで回復するらしい。

美柑にぬいぐるみのように抱かれてすやすやと眠っていた。

「スイゾクカン！行きたい行きたい！」

「もうあの券使っちゃうんだね」

思ったとおり行きたがっていたララは嬉しそうだ。美柑も無表情に見えるがあれは結構楽しみにしている顔だ。

「まあまあ話は歩きながらということ。行くぞリト」

思考停止したまま固まって完全に空気と化していたリトに声をかける。

こうして一行は次の目的地、水族館へと移動を開始した。

・・・。

-
-
-
-

買い物パニック（後書き）

1軍で5年間頑張ってくれていたパソコンがご臨終なさった……。書き溜めたデータも全て消え、古いノートパソコンで書き直し。一度書いたものを覚えておくほどの記憶力があつたならこんなに更新は開いたりはいらないはず。

これで1巻の内容が終わりました。

この作品は原作でリトさんが攻略していないキャラを主人公が攻略していく感じになっております。

早くお嬢と眼鏡とポニテを出したい……。

水族館パニック

「へー、結構でっかいんだな」

20分程歩いたところで一行は彩南水族館へ到着する。

まだできたばかりなのでお客さんの数はかなり目に付く。

それも7割方がカップルらしく後は家族連れや、オレは純粋に魚が好きなんだ！とカメラを持った一人ぼっちの男性客なんかもいる。

道中女の子3人が仲良くおしゃべりするのをオレとリトは後ろから眺めていた。

せっかく会えたんだから話しかけろよ。とリトに声をかけても聞こえていないのかぶつぶつ言いながら何か考えている。

終始そんな様子だったリトを放っておいて受付のお姉さんに券を3枚見せ入場した。

「わあ——きれ——い！」

「すっげー！魚がいっぱいいるぞ！すっげー！」

「当たり前だろ、水族館なんだから」

「おい！リト！魚がいっぱいいるぞ！？」

「聞こえてたから。2回言わなくていいから」

「あっ！あっちに緑色の魚がいる！」

「なんだと！？立ち止まってる場合じゃねーぜ！」

さっきまで涼しい顔をして冷静な振りをしていたが、実はオレも水族館が初めてだったのですごく楽しみにしてました。

普段食用の魚しか見たことが無いのでこんなに沢山の生きている魚に囲まれたら興奮してしまう。

後ろで美柑達に笑われていた気もするが楽しくてそれどころじゃない。

ララと一緒に水槽に張り付いて魚を眺める。青や緑など多種多様な魚やえび・かに、それらが綺麗に演出された水の中を自由に泳ぎまわっている。

まるで自分が海の中に来てしまったかのような錯覚に陥ってしまう。ただでさえ少ない語彙が「おー！すっげー！！」とさらに減ってしまっている。感動のあまりそれくらいの言葉しか出てこないのだ。

「たいへん！しじみがないよー！」

「おい！白熊がいないとはどういうことだ！」

「んなもん水族館にいるかっ！動物園に行け！」

宇宙人2人がはしゃいでしまっているせいですっかりリトも調子を取り戻している。

「むー、ん？あっちも面白そー！」

「ペンギンだど！？魚類にうつつを抜かしてる場合じゃねえ！！」

ララが指差した方向を見るとなんとペンギンコーナーがあるではないか。

鳥なのに海を泳ぐ。しかも空を飛べない。なのに可愛い。摩訶不思議生命体ペンギン。そそる。

他のお客さんがいるというのに宇宙人2人は走るようにしてペンギンコーナーへと突入していった。

ララとまた2人してペンギンに感動しているとき、ふと我に戻る。

はしゃぎすぎて3人を置いてきてしまった…。

振り返ってみると呆れ顔の美柑がペケを抱きながら立っている。

「あれ？あとの2人は？」

「向こうで別行動してるよ」

「そうか、気づかなかった…。美柑も気を利かせたんだな」

「…有里さんも結構にぶいよね」

「なんだと！？自分では鋭いつもりでいたよ…」

「そーいうところが鈍いってことだよ」

美柑にため息をつかれてしまった。人の感情の機微にはそれなりに敏感なつもりでいたのに・恥ずかしい。

「ほらララさん1人になると迷子になっちゃうよ。行こ」

自分が鈍感かもしれないという現実徐々にショックが大きくなっていく。

へこみかけているオレの手を取って若干嬉しそうな美柑がララの元

へと引っ張っていった。

・・・。

「ねーねー有里、なんかペンギンちゃん達元気ないのかなあ？」

「そうだなあ・・・日本の気候は合わないのかな」

それからまた3人でペンギンを眺めていたところ、ララがそんなことを言い出す。

確かにペンギン達はぐでーっとしてだるそうだ。

「よし、じゃあこれあげてみよう！バーサーカーDX！」

閃いたララが携帯から錠剤のようなものをいくつか取り出す。

「バーサーカー？よし、それで元気になるなら上げましょう」

「いや、やめたほうがいいんじゃない？」

美柑が静止の声をかけるが水族館に来てテンションが振り切っているオレ達の耳には届かない。

「元気にナーレー」

「豊かになーれー」

2人がかりでペンギン達に怪しい薬を上げる。

ペンギン達も好奇心からか近づいてきてひとつ、またひとつと口に運んでいった。

・・・。

・・・。

「ペンギンが逃げたぞー！」

「おい！そっちにいったぞ！捕まえろ！！」

「わー！みんな元気になったねっ！」

「あっはっはっは！ひー——苦しいっ！」

「有里さん笑ってる場合じゃないよ！大変なことになってるよ！」

「いやあ冷静になってみるとえらいことしちゃったね。こりゃ笑うしかないわ」

さっきまでぐったりしていたペンギン達が嘘のように高ぶってしまっている。

柵なんて楽々越えて水族館中を我が物顔で闊歩している。それだけに飽き足らず他のお客さんに体当たりをかましていた。さすがバーサーカー。

「いいから全部集めて来てよね。さっきから館長っぽい人が睨んでるよ」

「あの血管浮き出てる人やっぱり館長か…」

なぜバレたのかは解らないが先程から水槽の陰に隠れて額に青筋を浮かべたおじさんがこちらを睨んでいる。

齒軋りがこちらまで聞こえてくるかのような形相だ。

「おいっ！これお前らの仕業か！？」

ペンギン集めに行こうとしたときこれまた怒りの形相のリトと困り顔の西連寺がこちらに向かってくる。

「そうです・・ごめんなさい。今からペンギン集めるから！」

「美柑がついていながらなんでこんなことになってんだよ！」

「こんなでっかい子供を小学生に押し付けられてもどうしようもないよ」

美柑にでっかい子供なんて言われてしまう。なんだか今日の美柑は手厳しい気がするよ。

それから皆で手分けしてペンギンを集めた。

無事全部集め柵の中へ入れることができた。が、いつの間にか後ろにきていた館長さんがポンとオレの肩に手を置く。

それで全てを察したオレは皆にここで解散の旨を告げた後、ただ押し黙って館長室へと連行されていった。

・・・・・

・・・。

ちなみに館長からは怒られるどころか感謝されてしまった。

何でもペンギンが暴れたことはひとつのイベントとして説明したら
しい。それが功を奏したのかお客さんが倍増したらしい。
災い転じて福と成すというか結果オーライというか……。そんな
こんなでララの地球見物は無事終わったのだった。

わくわく臨界点

季節は初夏。

夜は涼しく、日中は暖かくて大変過ごし易い。

また夏は人々の気分を解放的にしてくれる。イベントだって沢山ある。

川、山、海水浴、花火、お祭り、上げ始めればキリが無い。

そしてイベントは学校でも行われたりもする。

そう、臨海学校だ。

海に行くだけでも楽しみなのに、学年全員で遊びに行くだなんて…前日からワクワクが止まらない。

1週間前から準備を開始して、これで7回目の確認作業を行っている。初めての旅行だけに忘れ物が合ってはならない。その点に関してはぬかりのないようにする。

「着替え良し、筆記用具良し、洗面具良し、遊び道具良し、その他もろもろ良し」

着替えとタオルは多めに持ち、万が一に備える。携帯の充電器などは忘れてしまうと以外と困るから注意が必要だ。

デジカメも充電満タンだ。写真は思い出の付箋。例えしおりに娯楽品禁止と書かれていようが関係無い。というかそんなの律儀に守るやつなんかほとんどいないからね。

「準備するのそれで何回目？」

「初めての旅行なんだから忘れ物とかしないようにしないとだろ。」

もたれかかな」

ベツトの上に荷物を広げていたオレの後ろから御門がもたれかかってずっと髪の毛をいじってくる。
暇になったのか話しかけてきた。

「でも臨海学校無くなるかもしれないわよ」

「は？」

意地悪そうな表情をしてあっさり爆弾発言を放つ。

「だって台風来てるじゃない」

「たい：ふう？言われてみれば外がうるさい気が：」

「気付かないなんてどれだけ楽しみにしてたのよ、庭の木がへし折れるくらいしなってるのよ？」

意識してみれば、窓ガラスは弾丸のような雨粒が当たってバシバシ音を立てている。

豪風が壁にあたってゴウゴウと鳴き、確かに窓から覗いて見える庭の木が引っこ抜けんばかりに風に流されていた。

「気付かなかった：そうか、台風かあ：くそう、いきてえなあ：」

気候が相手ならば諦めるしかない。台風を消す方法はないが、地球では自然の力には逆らわず生きていく。

宇宙人として、来た星のやり方にならうのはマナーみたいなものでいわゆる郷に入っては郷に従えということだ。

「なんでうれしそうなんだよ？」

オレがすっかり肩を落として落ち込んでいると背中に乗っていた御門がニヤニヤしながら頬をつついてくる。

「だって私は臨海学校に着いて行けないもの、学校に残る学年もいるんだから。有里はここにいればいいのよ。」

自分は海に行けないので僻んでいたらしい。

そして何かスイッチが入ったのか、もたれかかっていた御門がずると膝のほうへやってきてオレの腰に横抱きになった。

普段治療や診断をしているときは凜々しいのに、夜部屋に來るとやたらといちいちやしたがるのだ。

抱き付かれるのは恥ずかしいのだが、大人でいつもはしっかりしている御門に甘えられるとなんだか満更でも無くなってしまう。

これがギャップ萌えてやつか。

「一緒に何か映画でも見ましょう。ちょうど昨日借りてきたの」

「お前が見るのスプラッタばっかじゃねえか、アクション物がいいよ」

「パニック物もあるけど」

「結局バタバタ人が死ぬ話じゃねえか！」

異性と一緒に映画を見るなんてそれだけで小一時間小躍りするようなイベント。

しかしその映画の中で人が画面を真っ赤に染めながら絶命するたびに横でクスッと笑われたら100年の恋だって冷める。というか夢に出る。

「オレは今日早めに寝なきゃいけないの。そして台風は明日の朝にはいなくなるの。呑気に映画なんか見てられるか」

手早く広げた荷物を旅行カバンに綺麗に詰めていく。崩れないように、取りやすいように。

ジーとチャックをしめ、準備は完璧！と後ろの音に振り返ってみるとテレビ画面に映画のロゴが流れていた。

いつの間に持ってきたのか赤ワインを枕元に置いてしたり顔で御門がこちらを見ている。

「有里が文句ばかり言うからラブロマンス物にしたわよ」

「スプラッタだから嫌だって言ってんじゃねえよ、今から寝るから言っただよってかラブロマンス映画の冒頭が悲鳴で始まるわけねえだろこのバカ！！」

テレビ画面は真っ黒になったり真っ赤になったり直視できない。時折聞こえてくる悲鳴を助けを呼ぶ声が嫌でもオレの想像力を書き立ててしまう。

「映画は静かに見るものよ。そんなに言うなら先に寝ればいいじゃない」

「スプラッタ映画を子守唄に就寝とか正気の沙汰じゃねえよ！いいから出てけよ！」

そんなオレの言い分もすでに見入ってしまったている御門には聞こえるわけも無くここで騒ぎすぎると変な色の液体を注射されることになる。それにオレは居候の身、部屋と寝具があるだけマシじゃないか・・・。

自分の中で無理やり折り合いをつけて、枕と掛け布団を奪われたベツトに横になる。テレビに背を向けて手で耳を押さえる。

「フツ人の首がそんな簡単にちぎれるはずないじゃない…ねえ有里？」

と定期的に話しかけてくる御門を全力で無視しながら夜は更けていった。

・・・。

・・・。

ピピピピピピ

ジリリリリリ

時刻は午前6時。枕元に置かれた携帯と目覚まし時計が鳴り響き時間が来たことを伝える。

「うげえ…3時間しか寝れなかった…」

結局あれから映画を2本見ていたので眠ることができなかった。

2時30分頃に眠たくなったのか御門が映画を消してオレに抱きついて寝息を立て始める。しかしオレは頭の中に見ていた映画の悲鳴やBGMがリピートされて寝付けない。

30分ほどしてやっと眠りにつくも見たのは悪夢。当然疲れなんか

取れない。

横には少しワインの匂いが香る御門の姿。自分は保健室で暇なときに仮眠が取れるからって人を夜更かしに付き合わせやがって…

いつものように気だるい体に入れたらだらと起き上がりベツトから出る。

布団が乱れて御門の下着が見えてしまった。だがこれも毎日のことなので

「うっひょー！いろっぺーぱんちゅだぜー！舐めてやりゃー！」

とか言ったりしない。見えてしまったパンツはただの布なのだ。

ズボンの裾を引きずるように歩いて行ってカーテンを開ける。

「すげえ…本当晴れたよ。目が潰れる…」

寝不足で開ききっていない目で外を見ると昨日の豪雨・豪風が嘘のように晴れ渡っていた、雲ひとつない晴天だ。

朝の清々しい朝日が目に痛い。眼球の裏側がじくじくする。

痛む目を擦りながら洗面台へ行きやっと思が覚めた。

御門の分の朝食を作りラップをかけておく。

荷物を取りに部屋に戻るとまだ御門は寝息を立てている。起こさないように静かに荷物を背負いゆっくり扉を閉めた。

今日はリト・ララと待ち合わせて一緒に学校まで行くことになっている。少し早い待ちきれないので家を出た。

さあ待ちに待った臨海学校の始まりだ。

臨海学校

午前7時20分

普段なら朝練のある生徒くらいしか歩いていないはずの校庭は、やたら賑わいをみせている。

友達と楽しそうに話しているもの。自分の持ってきたものを自慢するもの。到着してからの予定を立てるもの。その様子は様々だが、一貫しているのは皆その目に期待と高揚を秘めているということだ。

そんな楽しげな集団の中でただ1人、死にそうな男がいる。

「お前、大丈夫か？」

「なんか有里、目の下黒くなってるね」

リト・ララに心配されながら、立っていることもままならずこの場で唯一、カバンを枕にして寝転んでいる男、何を隠そう雪ヶ丘有里その人だった。

目が覚めて、臨海学校への楽しみさから振り絞った元気も、リト達と合流し重たい荷物を背負いながら学校にたどり着いたところで底を着いた。

「やばい、寝そう。もうね、地獄」

すでに言語バランスが崩壊している。じきに思考回路もショートするだろう。

先程点呼を取ったときが限界だった。それからすぐにバスに乗り込めば多少眠気も覚めただろうが、今は学校行事でよくある「これ今

何の時間？」現象である。

ギリギリの状況で保っていた糸が容易くぶちぎれた。どう起きているか、がどう寝るかという思考に変わったときがその時だ。

簡潔に言えば「脱落」というその言葉につきる。

「バス乗るぞ有里。：おいっ起きろっておいっ！」

「このバカフラワーマジ寝する気だ：」

「有里も昨日楽しみで寝られなかったのかなー？」

友人達の聞きなれた声がもはや子守唄にしか聞こえず、抗うこともしないまま意識を沈めていった：

・
・
・
・
・

・
・
・

「・・・・はっ！！どこだここっ！？」

背中痛さに飛び起きてみるとそこは見知らぬ場所、もとい見知らぬ車内。

なにこれ誘拐？と見渡して見れば窓から覗く青い海。反対側の窓からは何とも堂々とした旅館の姿があった。

足元に置いてあった自分の荷物を担ぎ上げバスから飛び降りる。

「すっげえ！着いた！！海だ——旅館だ——！！！」

「やっと起きたのか」

「おいリト！海だぞ！旅館だぞ！臨海だぞ！」

「寝起きのくせにうるさいんだよっ！そういうの皆さっきやったし、今女将さんの説明の時間だから！」

跳ね上がったテンションのまま喋ってしまったが確かに今は女将さんの説明時間らしい。

100名弱の生徒達がずらっと並んで艶やかに着物を着こなす妙齡の女性の話を聞いている。

そんな中大声をだしたオレがなぜ教師達にお叱りをうけないのか。理由は至極簡単、他の生徒達も自由におしゃべりしていたからだ。

前列の生徒達は（主に男子）女将さんの話をキチンと聞いている、というよりはただ見とれていただけのような気もするが何であれ静かだ。ただ後方の生徒達は女将の姿が見えないこともあって注意力三万、もとい散漫だ。

教師達は全員男性なので女将に夢中になっている。知り合いらしい校長が踏まれているのを羨ましそうに見ているのが印象的だった。

そうこうしている内に女将による説明が終わったらしく生徒達は担任の教師に連れられてぞろぞろと部屋へ向かう。

オレ達の部屋は臥待ちの部屋、という名前らしい。臥待ちとは月の形の名前で、まあ三日月とか満月の仲間だと思ってほしい。

「うほー、いい部屋だな」

「ほんとだな。海が見えるのか」

部屋は4人部屋で、この部屋はオレ・リト・猿山・生徒A・の4人だ。

荷物を置いて部屋に備え付けてある浴衣に着替える。ああ旅館に来たんだなあ実感が強まってくる。

「よし、早速風呂いくか」

まったりとした空気が流れたところを猿山が提案する。

旅館に到着したのがすでもう夕方。今日は夕食と夜に肝試し大会がある以外は部屋でゆっくり自由時間ということになっている。

入浴時間はある程度決められているが2時間の間に入ればいいと幾分自由。

「おう！行く行く！脱水症状起こしてやる意気込みよ！」

海も去ることながらこの温泉というものも楽しみの一つ。泳げるほど広い風呂に入れるなんて貴族気分だ。

一瞬で入浴の準備を済ませスリッパを履く。準備万端にして振り返ってみるとリトや猿山達が何かこそこそと話しているのが見えた。

「おい何してんだよ。風呂行くんだろー早く行こうぜー」

オレとしては一刻も早く一刻も長く浸かっていたいので3人を急かす。

「おうよ！今行くぜ、ほらリト覚悟を決めろ」

「いやオレはそんな…おい！引っ張るなって」

嫌がるリトを猿山たちがぐいぐいと引きずるようにして連れてくる。リトが嫌がっているのが気にかかったが今は風呂に入ることより大事なことなんて無い。

オレは3人を引き連れるようにしてお風呂場へと急いだ。

.....

素晴らしい。

微かに鼻をつく硫黄の香りが湯気を伴って水面から揚がる。少し熱めのお湯がじんわりと肌を通して骨身にまで伝わっていく感覚。ふうーと何度目か解らない息を吐く。体が温泉に溶けてしまっているのではないかと思う。実際そうだったってかまわないとさえ考えってしまう。よし、ここに住もう。

「死んだっていいよ…幸せ死するよ」

我ながら気持ち悪い声を出したと思う。しかし地球の奇跡、温泉に骨抜きにされてしまった者ならばそれも仕方ない。

現にオレの周りの生徒達も「うひー」「ふひゃー」「くはー」と熱いため息を零していた。

「なあなあ有里、一緒に女湯覗きに行かねえか？」

そんな素晴らしい極楽を、猿山の下卑た提案が横槍をいれる。

すでに興奮しているのかこの猿、顔を赤くして鼻息が荒い。その後ろには同じく興奮状態のオスが何人か。

さらにその後ろで意外にもリトが気まずそうにしている。

純情BOYも好きな娘の生まれたままの姿の誘惑に負けたというところか。情けない。というカリトが覗きなんてしたら鼻血で出血死するんじゃないだろうか。

「この温泉よりも優先されるものなんてないわ、お前らで行ってきなさい」

旅館お決まりの行為をしようとしている奴らを適当にあしらう。

猿山はオレが乗ると思っていたのか意外そうにしていた。

「それじゃあいくか！」

と猿山の号令でぞろぞろとオス達が歩いてく。その後姿をできるだけ視界に入れないようにしながら、オレはまたため息をひとつついた。

・・・。

結局入浴時間ギリギリまで入ってしまった。時間にして1時間50分ほどらしい。

あらかじめ給水ような水をペットボトルで用意してあったので脱水症状は起こさなかった。

「あ——う——あ——」

「入りすぎなんだよ。大丈夫か？」

起こさなかった、とは言え2時間も入っていればのぼせるに決まっ

てる。

風呂を出た後がつつり立ちくらみを起こすも壁に手を付いて耐えた。そのままずるずると着衣所へ行き次のクラスの男子達に着替えを手伝ってもらい、浴場から部屋までをこれまた壁に手を付いてずるずると歩きたどり着いたところで倒れたのだった。

今は布団の上に横になって浴衣を腰までだけさせリトにうちわで扇いでもらっている。

猿山はその光景を「売れる！売れる！」と騒ぎながら写真を撮っている。あとでぶん殴ってやろう。

ちなみに覗きの件は先に校長が覗いていたらしく、その校長がボコボコにされるのを聞いて諦めたらしい。

確かに浸かっている時にそんな声が聞こえたような気もする。もううちの校長やめさせちゃえよ。

結局夕食の時間まで布団の上でくたばっていることになった。後悔は無いが反省はする。リトには迷惑をかけてしまった。

「いーよ別に。」なんてオレのお札を聞きながらあっけらかんとしている。こういうさりげない優しさがリトのいい所だ。

そして豪華な懷石料理をたらふく頂いたオレ達は、毎年恒例らしい肝試しへと挑むことになる。

もう1回風呂入っちゃダメかなあ：

肝試し。試されるのは男気か臆物か（前書き）

今年中にあと1回は更新しようと思い3時間で書き上げてしまった。
普段もそうですが文が荒々しいかもです。

肝試し。試されるのは男気か臆物か

「さて！！では今から肝試しのペアをくじ引きで決めまーす！」

日もすっかり沈みきった夜。

森に囲まれた旅館はより一層暗闇に沈んでいた。その旅館前に集めた生徒達の前であざだらけの校長が声を張り上げる。

この臨海学校中になんらかの出会いを！と躍起になっている連中は総じて目がぎらついている。猿山なんかその最たるものだ。

そしてリトも、西連寺との肝試しを期待してかそわそわしている。かくいうオレはお化けなんて信じていないし、ましてや旅館の人が怖がらせるんだろうと解り切っているのでそうそう楽しもうという気分になり替えられない。というか風呂入りたい。

めんどくさそうにしていると、ぎらつく男子達に押されるようにしてくじ引きの列に並ばされた。

幾らかして自分の番になり、仕方なく用意された箱からくじを引く。

「7番か…」

「あ、雪ヶ丘君7番なんだ。よろしくね」

どうやらオレのペアに選ばれたのは同じクラスの女生徒Tらしい。

「よろしく」

紙を見せ合い挨拶を交わす。

リトのペアはやっぱりと言うか何と言うかララになり、猿山のペア

が西連寺だったらいい。リトは西連寺となれなくて、猿山は西連寺はリトの思い人ということで眼中にないのでこれまた残念そう。紙を取り替えればいいのに、律儀な奴等だ。

・・・。

オレと女生徒Tの順番は随分後ろの方だったので、リト達や猿山達が先に行った後やっと出発となった。

ルールとして2人でひとつの提灯を持ち、その明かりを頼りに500m先の神社へたどり着けばいいらしい。しかしオレは1人で歩いていた。

「ごめんね雪ヶ丘君、私彼氏と約束してるからここでバイバイね」

「そっか、いつてらっしゃい」

始まってすぐ女生徒Tが提灯を持ってどこかへ行ってしまったのだ。今頃どこかで彼氏といちゃこらしているんだろう。

出所の解らない喪失感と、圧倒的な敗北感に打ちのめされながら、せっかくだしゴール付近だけ眺めてから帰ろうと1人とぼとぼ歩くことになった。

「迷った…」

そして迷う。なぜ一本道で迷うのかと罵詈雑言を投げかける人がいるなら「じゃあ明かり無しで森の中歩いてみるよ」と言ってみよう。だがここで女生徒Tに文句を言うのはお門違い。明かりが一つしかないなら女の子に渡すのが男ってもんだろう。

そこに関しては納得しているが、いとも容易く迷子に陥る自分のかつさに、そして現状の情けなさに自己嫌悪が絶えなかった。

遠くでは男女の悲鳴が響いている。向こうでは盛り上がっているんだろうな…。

「はぁ、帰ろう」

この落ち込みを癒せるのは風呂しかない。もう帰って風呂入って寝よう、それが一番だ。

踵を返し、見覚えのある道を勘を頼りに歩き始めたとき、ガサガサッと左の方で音がした。

幽霊！？なんて思わない、きっと猫か狸か熊か何かだ。

野生生物を見てみたい！と突発的衝動に駆られたので音の方へと近寄る。きつと荒んだ心が癒しを求めたのかもしれない。5分程歩いたところにそれはいた。

「ひっ！だ…だれ！？」

「やっやだよお里紗ぁ！」

「……なんだ粂岡と沢田か。」

居たのは猫でも狸でも熊でもなくまして幽霊であるはずもなく、抱き合って震えているクラスメイトの粂岡里紗と沢田未央の姿だった。

「その声・・・雪ヶ岡…？」

粂岡が持っていた提灯を震えた手でこちらにかざす。久しぶりに提

灯の淡い光がオレの顔を照らした。

「オレが言うのもなんだけど、なんで2人してこんなところにいるんだ？」

2人のすぐ前にしゃがみ話しかける。

「2人で待ち合わせしてて…違う道から行こうって、そしたら迷っちゃって…」

靄岡が自分を落ち着けるように小さな声でそう説明してくれる。ちよっとした冒険心のつもりだったんだろうが、迷ってしまい焦ってさらに森の奥へ奥へ進んでしまったのだろう。

「そりゃ怖かったろうに…立てるか？」

先程までうるさいほど聞こえていた悲鳴もすっかり聞こえなくなっている。もう肝試しも終わりにかけているんだろう。

早く戻らないといらぬ心配と嫌疑をかけられてしまう。

靄岡も早く帰りたいらしくまだ肩に怯えが見えるもののスツと立ち上がった。

「んっ…あれ…？里紗あ立てないよお」

「未央っ？大丈夫！？」

ここで問題が発生してしまう。沢田がどうやら腰が抜けてしまっ立てないらしい。

緊張が解けたのと、肉体的に疲れていたのもあるのだろう。必死で足に力を入れようとしているが靄岡の手を借りても立てそうに無い。

「よし、嫌かもしれないけど仕方ない、おんぶしてくか。乗れ沢田」
年頃の女の子からすれば汗臭い男と密着するなんて避けたい行為だろうが、初夏とは言え夜の空気は体に障る。ここは我慢してもらわなくては。

「えっと…ん…わかった。」

と思ったが意外と抵抗を見せずしゃがみこんで背を向けたオレに沢田が乗っかってきた。

少々びっくりしたがここでオレが恥ずかしがったら沢田にも恥をかかせることになってしまう。

「よし、糸岡は歩けるか？行くぞ」

そう言ってオレは沢田を背負いながら右手を糸岡に差し出す。

無いとは思うがこの暗い森の中ではぐれてしまつてはさらに事が大きくなってしまう。

そのため手をつないでおこうと思い差し出した手を、糸岡は取ろうとせずただじっと見つめている。

そりゃそうか、人当たりの良い糸岡とはいえ年頃の女の子。最近リトが西連寺と仲良くなつてそのツテでちよくちよく話すようになったとは言えオレと糸岡は知り合い程度の関係だ。嫌がるのも無理は無い。

差し出した手をさびしく思いながら引つ込めようとする、小指をつかまれた。

糸岡がオレと目を合わせないようにしてオレの小指だけをつかんで

いたのだ。

普段さばさばしたり大人ぶろうとしている粂岡の、ふと見せた少女の姿がオレの心を揺さぶった。

頼られている。

それを背中と小指が実感させてくれる。ここでカッコよく行かないや男じゃない。

「じゃじゃっじゃ…いききっ…イクぞ」

その思いとは裏腹に、声は裏返り噛み噛みになってしまった。ただでさえ恥ずかしかったのに、さっきまで怯えていた2人にクスツと笑われてしまい余計に恥ずかしくなってしまった。

穴があつたら入りたい。風呂があつたら入りたいよ。

結局旅館へは、研ぎ澄まされたオレの感覚もとい勘でなんとかたり着くことができた。その頃には沢田も立てるようになり無事部屋へと戻っていった。

「ありがと、それじゃまた明日っユリっち」

「今日はありがとね、また明日海でね、ユリっち」

そんなお札を言いながら手を振り去っていく沢田と粂岡を見送りながら、いつの間にかつけられた自分のあだ名に苦笑していた。

ユリっちはどうだろう…。

渚の愛のものがたり

今日は待ちに待った臨海学校のメインイベント海水浴！

プールなどで泳いだことはあるが、海は見るのも初めてだ。磯の香りと寄せては返す小波の音に終始興奮しっぱなし。

教師の有り難い海での注意事項が終わるや否やオレはいの一番に海へと飛び込んだ。

あまりにも豪快に飛び込んだので口に鼻に海水が流れ込んできて盛大にむせてしまう。

止まらない咳と涙に苦しむオレを、靱岡と沢田が指を刺して笑っていた。

「人が苦しむ様を笑うとはなにごとか——！！」

「「キャ——！！！！」」

そんな2人を海から這い出て追い掛け回す。思い返せば中々こっぴどかしい行為だがそれが許されてしまうのが臨海マジック。

砂浜を走るというのは結構疲れるもので、なんちゃって海岸の逃避行も5分で幕を閉じた。

「もう…ダメ…走れないよう」

「はあ…はあ…やば、限界…」

「いやあ…あっはっは、途中で楽しくなっちゃって。ごめん」

ただでさえ暑いのに走り回って汗だくになった沢田と靱岡がもつれ

るようにして砂浜に倒れこむ。

それを見てオレはひとつ走りして海岸の隅に置いておいた自分のカバンを取ってくる。そこから運動部御用達の清涼飲料水を2本取り出し2人に渡した。

疲れていた二人はそれをぐびぐびっと飲み干す。とても良い飲みっぷりだった。よほどのどが渴いていたのだろう。

「もう、まだ日焼け止めも塗ってないのに汗かいちゃったじゃない」
元気になった靦岡がこちらをジトーツと睨みながらそう言う。

「だからごめんって、お詫びに何でもするからさ」

と言ったとたんに靦岡がニヤニヤといじわるな笑顔になる。
それをみて、常識の範疇で。と付け加えなかったことを後悔した。
臓器売って来いとか言われたらどうしよう。

「それじゃあ：日焼け止めを塗って貰おうかな？」

どこからか日焼け止めクリームを取り出してオレに差し出してくる。
てつきりスパゲッティを鼻で食べる！とか言われると思っていたの
で拍子抜け。というかむしろこれはご褒美なんじゃないだろうか。

「よしよし、オレが全身に塗りたいくってやろう」

「へ？…あ、ちよっ！？」

ちよっとからかうつもりで言ったのだろう、まさかオレが乗って来

るとは思わなかったらしく固まっている靱岡の手から日焼け止めクリームを奪い呆気にとられている隙に背中へ馬乗りになる。

「へっへっへ…これで逃げられないぞ！大人しく日焼け止められろ！」

「いやあのっちよっ…冗談っ…うひゃ！やめっ」

ただでさえ疲れて動けないのに馬乗りにされてしまっただけは抵抗の仕様が無い。

自分にこんなにもSッ気があったのかと内心驚く。くずぐずしたいのか、笑い声をあげて体をよじる靱岡を見ているとだんだん楽しくなってきたしまった。

「ここかぁ…ここがええのんかぁ!!」

「ちよっ…ほんと…息できなっ！」

調子に乗りすぎたのか日焼け止めクリームでべとべとになった靱岡がぐったりと砂浜に倒れる。

しかし海のもたらすハイテンションが留まる所を知らない。

「次は沢田だぁぁぁぁぁ!!」

「きゃぁぁぁぁぁぁ!!」

ハイハイで逃げようとする沢田も同じように馬乗りで拘束し、同じように日焼け止めを塗りたくる。

やっぱりくずぐずしたいらしく、沢田も靱岡のように若干扇情的にも聞こえるような叫び声をあげている。

こうして降ってわいたご褒美プレイは、リトのとび蹴りでオレが吹き飛ばされるまで続けられていた。

・・・。

「水着泥棒？」

「なんか他のクラスのやつも被害に合ってるらしいぜ」

時刻はすぎて昼休み。

オレは休憩所で罰として四つん這いになっていた。背中には執行者である靱岡と沢田が座っている。時折思い出したかのようにわき腹をつねられるので常に反省を促されている。

そしてなにやら、水着泥棒が出たらしい。そこら中でキャーキャー騒がしかったし、オレは2人がかりで砂浜に埋められていたので気付かなかった・・・スイカ割りとは遊びにあらず。それは砂浜の処刑の一つなり。眼前を通る木の棒の脅威たるや凄まじいものが合った。

「なるほど：おい、猿山。盗んだ水着を出すんだ、今なら許されるぞ」

「オレじゃねーよ！男子の水着も盗まれてんだぞ！？」

「え：お前そんな趣味が：ごめん、近寄らないでくれる？。」

「つちげーよ！！野郎の水着を盗むくらいなら命を絶つわ！」

なんとなく疑ってしまったが、確かに猿山という男は性欲の権化だが犯罪行為はしない・・・はず、多分。

「女の子の水着を無理やり奪うなんてサイテーね！」

「きっとモテない男の犯行だよ！」

「あの…叩かないでくれませんかね…？」

同じ女子として腹が立ったのか、オレの背中に乗っている靉岡と沢田も八つ当たりとばかりにバシバシ頭やら背中を叩いてくる。

女子高生に叩かれると言えはある一定の人種にはご馳走なのかもしれないが、生憎自分のＳツ氣に氣付いてしまったオレには屈辱ではない。というか人がこんなにいる中で１人だけ四つん這いとか恥ずかしすぎる。

話に参加して注目を浴びるのも嫌なので、存在感を消し椅子に成りきった。

ララが率先した形で午後は犯人探しをすることに決まった。いい加減許してくれないものか。

・・・。

「オレ泳ぎたいのに…」

「いいからほらっ！不審者がいないか探す！」

「じゃないとゆりっちが犯人ってことにしちゃうぞ！」

犯人を探すふりをしながら遠泳かまそうと思っていたところをやはり舐岡・沢田が現れて犯人探しに連れ出された。

しかし無理やり協力させたくせにこの2人はまともに探そうとしない。さっきから海をバックにオレに写真を撮らせたり3人で撮ったりどう考えても遊んでいるだけだ。

「よし、写真も沢山撮ったし一旦みんなのそこ戻ろっか！」

「うん、もどろーもどろー」

写真が目的って言っちゃったし。しかし負い目があるので逆らえない。下手したら水着泥棒のホモ野郎にされかねない。

先程の休憩所の前まで戻るとすでに他の女子達も集まっていた。

様子から察するにまだ犯人は見つかっていないのだろう。イライラが遠くから見ても伝わってきた。

次はあっちを探そう、こっち行って見ようと話し合う女子達の輪に入れず少し離れて海岸をぐるりと眺める。

すると少し遠くの岩場でふらふら歩く小太りの男性の姿が、というか校長を発見した。

「なあなあ、あそこに不審者がいるぞ」

「え？あれ…校長？」

「そっか！こんなことするの校長しかいないよね！」

女子達に校長の存在を教えてあげるとみんなして走り出してしまった。

口ぶりがもう校長が犯人だと決め付けてしまっている。そりゃ校内一の変質者だけど頭から決め付けるのはどうかと・・・。

そう思いながらも気になったので走る女子達のあとを付いていった。

・・・。

「最低っ!! このエロ教師!」

「女の敵! 社会不適合者!!」

「ちよっ…誤解!…おぶっ!」

たどり着いた場所は次の処刑地でした。ぐるりと檻のように囲んだ少女達の足の間から蹴られながらも嬉しそうな校長の顔をチラリと見えた。

徐々にエスカレートしていく女子生徒たちの罵詈雑言と暴力。そして微かに聞こえてくる校長の笑い声にえもいえぬ恐怖を覚え、オレは静かにこの場を立ち去るのだった・・・。

・・・。

・・・。

「あゝあ。明日で臨海学校も終わるかアゝなんか思い返すと校長にふりまわされてばっかだったなゝ」

「ほんと、ほんと」

日はすっかり落ち夕食も済ませ、部屋にて猿山達と談笑中。

臨海学校も最終日ということで、疲れたからだをねぎらいながら思
い出話に花をさかせようと・・・

「まだやれる事はあるぜ！！今から女子の部屋へ遊びにいくのだ！
！」

そんな殊勝なすごし方は猿山のプランには無かつたらしく、教師陣
から何度も念を押された異性の部屋への侵入を試みようというのだ。

「…は？」

「1人で行って来いよ、エロ猿」

「うるせー！善は急げだ！行くぞリト！バカ有里！」

「あ、おい待てよ！本気かー！？」

「首引っ張るな、このホモ猿！ちよっ…行きたくねー！」

布団の上でゴロゴロしていたオレとリトを有無を言わず引っ張り、
ララや粂岡達の部屋を目指すのだった。

・・・。

「ここだ、ララちゃん起きてるかな…」

いつの間にか連れてこられたのはさくらの間。いつ調べ上げたのか
ララ・西連寺・粂岡・沢田の部屋だ。

はじめは難色を示していたリトだったが猿山の口車にまんまと乗せられてここまで来てしまっている。オレはと言うと猿山と生徒Aの2人がかりで連行されて来た。

隙をみて帰るか何気なく廊下の先に意識を向けると、重みのある足音に気付いた。

「おい！誰か来るぞ！…多分指導部の鳴岩だ！」

「げっ！やばいじゃねーか！」

「……よしっ！ここはオレに任せろ！」

一計を思いついたオレは猿山と生徒Aの背中を押して逃げるよう促す。

慌てて逃げ出した2人に突き飛ばされてリトが部屋の方へよろけるがフォローしている暇もない。

オレはすぐさま廊下の角へ小走りで近づき若干浴衣を乱す。

「あっ…先生。」

「ん？お前雪ヶ岡か…ここは女子部屋だぞ？いったいなにを」

「あの…オレ、お風呂入りそびれちゃって…先生達の入る時間に一緒に入らせてもらえないかなって…探してて…その。」

大変不本意ながら、大変不名誉ながら、オレの顔はあっち系の男性の好物なタイプらしい。

そして大変不幸なことにこの指導部の鳴岩という教師は、

「おう：そうか、ちょうど俺達の入浴時間だったんだ。背中でも流してもらおうかな、はっはっは！」

どうもあっちの気があるらしい。

廊下の端でこちらを窺っていた猿山達にガッツポーズを送り、腰の寒さを感じながらオレはお風呂場へと鳴岩と共に歩き出すのだった。

こうしてオレの機転により猿山、生徒Aは無事逃げ延びることができたのだった。

西連寺の部屋に入ってしまったリトだが、何があったかを聞くと顔を真っ赤にして「何にも・・・無かった。」と言い張るのでそれ以上の追求はしなかった。

ちなみに風呂へと連れられていったオレはと言うと……。

「おっと先生グラスが乾いてますよー？」

「あっはっはすまんな雪ヶ岡！」

「いえいえそんなそんな、差清先生もどうですか一杯？」

「おい！こっちのお酌もしてくれよ！」

「はいはいちょっと待っててくださいいねー！」

気付いたら露天風呂で開催された男性教師の飲み会に参加してしまっていた。

もちろん自分は1滴も飲んでいない。宇宙人的には飲んでも構わないが、地球では高校生ということになっている。郷に入っては郷に

従わなくては。

そももちろんあっち系の人にあれをそれされたりなんてことも無かった。というかささなかった。悪酔いダメ、ゼツタイ。

何にせよ最後にまたお風呂に入れて大満足だった。

嵐を呼ぶ転校生

光陰矢の如し。楽しかった日々は目まぐるしい速さで過ぎていってしまう。

それは夏休みであつても例外ではなく、40日という破格の期間を得てしても一瞬の夢幻のように青春の1ページとして終わってしまった。

始業式の終わった後の教室では、夏休みの出来事を歓談し合う生徒達で賑わっていた。

「学校へ来ると夏休みも終わったんだな〜って実感するよな。」

「すぐ終わっちゃったねっ、夏休み」

「毎日見てた制服もこうして夏休み挟んでみると新鮮な気がするよな」

オレ達も例に漏れず、久しぶりに来た学校を味わっていた。

歓談するとはいつても夏休み中は毎日のように一緒に遊んでいたの
で今さらするような思い出話も無い。

「……………」

「どーかした？リト」

「えっ！？いや、あの…」

ボーっとしていたリトにウラが気付いて声を掛けると、途端にリト

が焦りだす。

臨海学校以来時々こんな風にララの方を見ながらボーっとすることが多い。旅館で何かあったらしいが……。

「はいみんな席についてえ」

担任の教師が来るとざわついていた生徒達が蜘蛛の子を散らしたように席に着いた。

「えー2学期になっていきなりですがあ、転校生を紹介しまふ」

いきなりのイベントに教室がにわかにざわつく。

「レン・エルシ・ジュエリア君です。みんな仲良くするよーに」

「キャ〜〜美形〜〜！」

「カッコいい〜〜！！」

転校生の姿を見た女子達が黄色い声を上げた。その影では男子たちの舌打ちのオンパレードがあったり。

しかし美形の転校生はそんなことなど見向きもせず一直線に教壇からララの所まで歩いてきて、

「やっと見つけたよララちゃん…ボクの花嫁…」

とララの手を握りながら齒の浮くような爆弾発言をさらっと投げかける。

「ああ…一目でわかったよ。やはり人ごみにまぎれてもキミの輝き

は隠し切れない。幼少のころ王宮の庭で遊ぶキミは本当に美しかった。キミの笑顔はボクの心を太陽のように照らしたもののさ・・・そして今！月日を重ねたキミはいっそう美しくなってまばゆいばかりの輝きを放っている。

まさに女神！！！」

先程のざわつきとはまた違った感じで教室が騒がしくなる。

色んな話が飛び交っているが、クラスメイト全員が（この転校生ちよっと変わってるかも・・・）と思い始めていた。

「そしてこの感動の再会！こんな辺境まで出向いたかがあったよ、さあララちゃん！ともに喜びを分かち合おう！！」

「えーと・・・あなた誰？」

興奮気味の転校生が再会の喜びを情熱的にララに伝えるが、くしくもばつさり斬られてしまう。

「ま・・・まあいいさ、こんな事じゃボクはへこたれないよ。なぜなら・・・男だからねっ！！！！」

（この転校生変だ・・・）

クラスメイト全員の、転校生への印象が合致した瞬間だった。

「それよりララちゃん聞いたよ、なんでも悪い男に騙されてるらしいじゃないか。そう！キミの事だよ！結城リト！！」

「指差すな、オレじゃねーよ」

その変わった転校生にいきなり指を刺され思わずむっとしてしまっている。ながら答える。

まだ会ったばかりだが、この男からは不幸臭とリトとはまた違ったヘタレ臭がプンプンしてくる。関わりと碌な事にならなそうだ。

「失敬、じゃあキミだ！」

とオレの言葉を聞いていたのかいないのか次はリトを指差し声を張り上げている。

「あの転校生どう思う？」

「ちょっと変わってるけど顔は中々イケてるかも」

「カッコいいねー、またクラスにイケメンが増えたねっ」

転校生が写真を取り出してララとの自慢話のようなものをし始めたので、オレは近くにいた粂岡と沢田に話しかけた。

2人はこの変な転校生に結構好印象を持っているらしい。顔がよければ何でもいいのかっ。

「ゆりっちも十分イケメンだよ。」

「そーそー、負けてないよ！」

「あからさまな慰めはむしろ傷つくからやめて……」

「キミの結婚相手として真にふさわしいのが誰なのかという事をね……」

そうこうしている内に転校生の熱演が終わったらしい。それを見計らって担任教師が授業を開始させた。

突風のように現れた転校生レンの登場によって、新学期の学校生活はまた騒がしくなっていくのだろう。

とはいえ被害をこうむるのはリトのような気がするので、オレとしてはホッと一安心だった。

・・・。

・・・。

「ではこの問題がわかる人」

「ハイッ！！結城くんより先に答えます！答えは $X \parallel \sqrt{2+3}!!$ 」

「せ…正解です。」

「おお…」

「……………」

「なんだこれ」

・・・。

・・・。

パンツ！

「うおおおおおおお！」

「結城リトより早く100m完走——っ!!」

「……………」

「大事なのはタイムじゃないのか？」

……………。

……………。

「助けてくれよう…」

授業中だけでなく昼食の時間までも一方的に勝負を挑まれて心身ともにごんざり気味のリトが猫なで声を出してオレの机にもたれかかった。

「オレに言うなよな。よくは知らないけどララと結婚するために競ってるんだろ。ちようど良かったじゃねえか、レンは昔馴染みらしいしお前も居候がいなくなってまた平穏な生活が戻ってくるぞ」

「そりゃ…そうだけどさあ」

「今ならまだ来てそう日も長くないし、ちょっと説得すればララも納得してくれるだろ？それでララと別れられるんだぞ」

「ララと…別れる…」

「……………」

何となくここ最近リトの様子がおかしかった理由がわかってきた。同居人の宇宙人というだけだったウラを、女の子として見る様になってきたんだろう。

破天荒な所が目立っているがウラだってちゃんと女の子らしいところもあるしなんと云ったって美人だ。

そして中学の頃からずっと好きだった西連寺。その思いに若干の迷いが出てきたという所かな？

俯いて何か考え始めてしまったリトを見て、少々突付きすぎた感が否めないがこれも親友を理解するためだ。そして理解したからには協力してあげなくては。

と言っでは見たものの、具体的に何をしたらよいかわからない時間は刻々と進み気付けば放課後を過ぎてしまっていた。

……。

……。

夜。すでに夕食時をすぎ、各々の家庭では食後のまったりとした時間を楽しんでいる頃。

オレはカラスの鳴き声がこだまする城のような家ではなく結城家の居間で寝転がっていた。

「リトー、雑誌借りるぞー」

「……………」

ちゃっかり夕食を頂き我が物顔でカーペットの上に寝そべって置いてあった雑誌を読んでいる。

夕食を食べている時から何度話しかけても無反応か生返事かしな
いリトは、今もソファに座りボーっとテレビを眺めている。ララと
美柑はさっき2人でお風呂に入りに行った。キヤイキヤイと楽しそ
うな声が聞こえてくる。

「なあこの服なんかリトに似合いそうじゃないか？」

「んー：そうだな」

「チュニツクが似合うわけないだろ」

読んでは雑誌はその辺に置いてあった美柑のファッション雑誌な
ので勿論男の服なんか載ってはいない。

余りにも暇だし相手にもされないのもういつそ1人でゲームでも
しようかと考えていると

「あーさっぱりしたっ！」

風呂から出てきたララがタオルを巻いただけの姿で居間に入ってきた。
た。

地球に來た当初から風呂上りはいつもタオル一枚で家の中をうろ
ろしようとする。デビルーク星にいた頃は風呂から出た後、体を拭
くのも服を着せるのも全て従者がやっていたらしい。そのせいか羞
恥心というものが少々足りていない。

「んー？リトなにしてんの？」

「テレビ見てんだよ。……バ！？バスタオルのままうろつくなんていつも言ってるだろ——！！！」

「えーっいいじゃない暑いんだしー」

「そ、そーゆー問題じゃ…」

いつものようにバスタオル1枚で居間に入ってきたララにリトがひとつ間をおいて驚く。オレの時には碌な返事もしなかったくせにえらい反応の違いだ。

とはいえ目の前にタオルに包まれたたわわな禁断の果実があれば驚くのが当たり前だろう。純情BOYのリトなら尚更だ。

「どうかしたの？」

「な…何でもねー！ちょっと散歩してくる！」

狼狽したリトが慌てて玄関から飛び出していく。少ししたら帰ってくるだろう。歩きながら1人で考えるのもいいもんだ。

「思春期だねえ、リト……」

「美柑も風呂から出たんだ。…なんでオレの上に乗る？」

うつぶせになっていたオレの上に風呂上りのアイスを美味しそうに舐めている美柑が馬乗りのように乗っかってきた。

「それ私の雑誌じゃん、なんで読んでの？」

「だってリトは無反応だしテレビは面白くないし暇だし…って痛い

痛い。なぜお腹をつねる」

「ララさんの裸に見とれてたでしょ」

「雑誌読んでたって言ってるだろ！それにオレは下着に興味はあってもタオルには無い」

「…有里さんってケツコ最低だよ」

「否定はしない。っていうか首に水があたるんだけど美柑髪乾かしてないだろ」

「話変えたね。アイス食べてから乾かそうかなって」

「髪の毛痛むぞー、どれオレが乾かしてやろう」

「…やりたければやれば？」

美柑は”してほしいけど自分からやってというのは恥ずかしい”ことには「やれば？」とか「どうぞ自由に」なんて言う傾向があると勝手に思っている。

この何の根拠もない推察も、風呂上りの蒸気した頬をさらに少し赤く染めながらそっぽを向きアイスを加える美柑を見て、あながち間違ってもいないと思うんだ。

実際オレのあぐらの上にちょこんと座ってドライヤーを当てられながら髪を梳かれている美柑は大層心地が良さそうだった。

そして終わったあとの「他の女の子にはこういうことしないほうがいいよ、気持ち悪がられるから」

という捨て台詞がなんとも可愛らしかった。

変な先輩、天条院参上

それから転校生レンとリトの間で軽いいざこざがあった。

何でもあの後公園で西連寺とレンが一緒にいるところを見てしまったらしい。

その公園というのが問題でこの辺りでは有名なデートスポットなのだ。夜中なんか男1人で行こうものなら肩身が狭すぎて近寄れない。そんな場所に2人でいたのだからリトの怒りたるや凄まじいものだろう。

実際次の日に靱岡と沢田の提案で何か対決をしたらしい。詳しい内容はリトに聞いても教えてくれなかったが沢田が言うには引き分けだったらしい。そして靱岡が言うにはヘタレらしい。っていうかそんな面白いことするならオレにも教えてくれたらよかったのに。

・・・。

・・・。

「机ってここでいいんだっけ？」

「そうそう、タテ3つで椅子6つね」

「ノリ無くなっちゃったー誰か貸して！」

「くははは！愚かな！我のものを貸してやろう！」

「ああ：あなた様のノリを頂けるなんて：光栄です」

「ノリは無いけどノリはいいってか。遊んでないで働けよ」

普段なら教師の放つ美しく洗練された数式に睡魔を刺激されている頃の教室は活気に賑わっていた。

そう、学校生活の主要イベントの一つである学園祭である。

ひよんなことから実行委員にされてしまったオレは、あれやレそれドコこれナーニ状態だった。オレを委員に連れ込んだ張本人である猿山は、陣頭指揮なんて言いながら机に立って色々叫んでいる。

「ゆりっちこの衣装どうすんの？」

「たたんであっちのダンボールに入れといて」

「りょうかい」

教室にはネコやウサギなど様々な動物を模した服があちらこちらに置かれている。

なぜこのような学校に似つかわしくない物があるのか、それは少し時間をさかのぼったあるHRの時間のこと。

・・・。

・・・。

夏休み明けの気だるい空気もそこに薄れてきて、また学校生活に慣れてきた頃。

「以前みんなに提出してもらった案、見せてもらったがお化け屋敷やわた飴屋などなんともありきたりでつまらないものだった！」

猿山が教卓を叩きながら大声を張り上げていた。なぜ猿山が仕切っているかと言えば、それは彼が文化祭実行委員に自ら立候補したからだ。そして今、彼主導で我がクラスが文化祭で何をするかの話し合いをしているというわけである。

「そこで考えた結果！！我がクラスは”アニマル喫茶”で行こうと思っ！！」

「アニマル喫茶あー？何それコスプレ喫茶みたいなもん？」

「えーやだー」

「はやんねーよそんなもん！」

自分で1人1つ案を出せと言っておいてそれ全部を無視し自分の案で押し通そうとする猿山に教室中から不平不満が飛び交った。

「いや！絶対に流行る！時代はアニマル！弱肉強食だ！とにかく物は試しだ女子は全員別室に用意した服に着替えてくれ！！」

そんなクラスメート達のブーイングを吹き飛ばす勢いで猿山がわめき散らす。それに押されるようにして女子達が渋々教室を出て行った。

残された男子たちは偉そうかつ満足げに教卓に座る猿山を睨んでいる。とてもじゃないが”動物の服をきた女子が見たい”と案を出したなんてこと言わない方がよさそうだ。ましてその服を猿山に頼まれて用意したなんて女子達にも言えやしないよ。

・・・。

『おおおおおおお！』

数十分ほどして女子達が戻ってきた。

「スゲーー！！いいじゃねえか猿山っ！」

「だろ！なんせ敏腕プロデューサーがいたからな！これこそオレの求めたパラダイス！」

「サイコーーっ！」「びゅりほー！」「わんだほーっ！」

難癖をつけていた男子たちも普段制服姿か体操服姿しか見たことの無いクラスメートのコスプレに拍手喝さいだ。

みんなして褒めるので女子達も満更でもなさそうだ。

「こ、これは……」

「どうよりト。女が苦手なお前から見てさ」

「確かにこれなら流行りそうだけど……ってなんで有里が自慢げなんだ？お前もしかして……」

「おっ西連寺だぜ！黒猫姿とは中々よい選択ですな。ほれリト見なくていいのか？」

「うっ…見た、見たいけど…恥ずかしいじゃねえか。」

西連寺は用意した中でも割と大胆な部類の黒猫服を着ながら恥ずかしそうに自分の体を抱きしめて立っていた。

他の子たちも可愛らしかったがその中でも目立って見える。恥ずかしくて見えないと言うリトの気持ちは少し解るかも知れない。

「よ——し！我が1—Aの出し物はアニマル喫茶に決定——！！」

こうしてうちのクラスの出し物はアニマル喫茶に決まり、猿山の勝手な提案で実行委員にもされてしまったのだった。

・・・。

・・・。

「ねえねえゆりっち。私なにをすればいいかな？」

実行委員ということで何かと頼ってくるクラスメート達をさばきながら自分の仕事であるメニュー表作りをしていると暇そうにしていたララが話しかけていた。

どうしようか・・・ララのことだからリトと一緒に作業したいと思うだろうけど親友としてリトには西連寺と一緒にいさせてあげたいし・・・。

そういえばララは機械を作るのが得意とか言ってたな、ってことは手先が器用なんだろうし・・・。

「じゃあララはあそこで四苦八苦してるレンを手伝ってやってくれる？」

「オッケー！何ソレー？紙のワッカ作ってるの？」

てっきり「やだーリトと一緒にいいー」なんてだだをこねられると思ったがすんなりで行ってくれた。きっと文化祭ってのが初めてだから楽しくてそれどころじゃないんだろうな。

「リト！ふらふらしてんならこれやれ。」

「ん？なんだこれ？」

「机にしくやつだよ。それを決められた大きさに切って欲しいんだけど…西連寺、リトだけじゃ心配だし手伝ってあげてくれるかな？」

「私？うん、いいよ」

（っ！？有里ナイス！）

（おうよ！なんなら保健室を取っておくぜ？がんばれよ！）

すかさず机に座って修正ペンをひたすらシャカシャカ振っていたリトを呼びつけて西連寺との作業につかせる。

オレにしか解らないようにアイコンタクトを送ってくるが、こういうお膳立てをしても結果を残せないのがリトなので大して期待はしていない。

・・・。

「いけない、ビニールテープが切れちゃった」

「オレ買ってくるよ！」

「リトは自分の仕事があるだろ。オレ行ってくるよ」

買出しに出ようと立とうとするリトの肩を押さえて座らせる。こういう気配りはできる良い奴なんだけど、お膳立てした側としては西連寺と作業していて欲しい。鞆から財布を取り出しポケットにねじ込む。オレの仕事は猿山に押し付けておいたので遅れが出ることは

ないだろう。

「じゃ、ちょっと行ってくるよ」

誰にでもなくそう言ってから教室を出る。すると、

「ちょっとそのアナタ！2年B組天条院沙姫！この私があなたと付き合ってあげてもよろしくてよ！」

変な人とエンカウントしてしまった。新手の勧誘だろうか。無宗教気取ってるこちらとしては勘弁してほしい。

夏休みが終わっても休み気分でいるところなっちゃんだろうか、何であれ関わり合いにならない方がよさそうだ。

金髪ロールの見るからにお嬢様な不審者さんと出来るだけ目を合わせない様にしながら、最寄のコンビニへ急ぐのだった。

・・・。

・・・。

「なんだったんだあの変な人は…涼しくなってきたからなあ…そういう人が増えてくる時期なんだろうな。」

最寄のコンビニでビニールテープやマジックペンなど他にも必要になりそうなものを買いかむ。

領収書を切っておけば学校のほうで落としてくれるので値段を気にせず適当に放り込んだ。今日の夜食なんて買ってもばれないかな？なんて思ってしまうけどそのせいでこれ全部自腹になってしまうと目も当てられないのでやめておく。

買い物を終えコンビニから出てみると、

「いやーん、スカートが袖にからまってとれなーいん」

先ほどの金髪ロールの不審者がコンビニの前でパンツを丸出しにしてくねくねしていた。

袖がどうこう言っていたが完璧に自分の手で持ってスカートをめくっている。その下にある高価そうな白いパンツが丸見えになっているが、見えてしまったパンツに興味は無い。それにここで凝視してしまうのは変態と思われるでしょう。

「自分、急いめますんで！」

またしても目を合わせない様にしてその場から離れたのだった。

・・・。

・・・。

「おかえり。遅かったな」

「いや・・・ちょっと変な人に会っちゃってね」

買ってきた物を教卓の上に置いて近くの椅子を引っ張ってきて座る。オレの仕事を代わりにやっているはずの猿山は、白い紙にへのへのもへじを大量に書いて遊んでいた。こいつは実行委員を立候補したんじゃないんだろうか。

サボってる人もちらほら見受けるが教室の飾りつけは順調に進み内装はほど完成となっていた。

担当していたメニュー作りも無事に終わり後は外装とチラシ作りのみとなっている。山場を越えたので自動販売機で買ってきたコーヒ―を啜りながら一息ついていると、

「た…助けて…」

勢いよくガラッと開けられた扉から女子生徒がヨロヨロと入ってきて、やがて地面に座り込んだ。

外に飾る看板やチラシを作っている人たちは気付かないが、比較的暇を持て余して人はいきなりの来訪者に目を向けている。

そんな中でオレだけはその来訪者に見覚えがあった。っていうかさつき会った変な人だ。

何とかして気付かなかった振りを通そうとするオレの目の前まで来て金髪ロールを揺らしながら「何だか、熱っぽくて・・苦しいの。」とか何とか言っている。

誰が見てもオレに対して言っているように見えるし、リトや猿山の視線がそろそろ痛くなってきた。

「えーっと…大丈夫ですか？」

暗闇の中で電灯のリモコンを手探りで探すように、恐る恐る近づいて話しかけてみる。

後ろで猿山の「おっ、2年の天条院センパイじゃねーか？」という声が聞こえてくるし制服を着ているから一応学校の生徒らしい。

「あなたの…あなたのせいなのよ…」

その先輩が訳のわからないことを言いながら擦り寄ってくる。どうしていいか解らずに助けを求めてリトのほうを見てみるとリト

もこちらを見ていたらしく目が合う。

（変な人に絡まれた！ヘルプ！）

（ごめん、ちょっとオレにはどうしようもない！）

渾身のSOSも首を振られて断られてしまい万事休す。そうこうしている内に天条院先輩に手を掴まれグイグイと引っ張られオレの手が先輩の胸元へ・・・

「沙姫様！お待ちください！」

「彼は結城リトではありません！」

またもガラツと開けられた扉から2人の女生徒が現れてオレの手を胸元へと誘おうとしていた天条院先輩を止める。

「え？でもあの写真に写っていたのはこの男よ？」

「すみません、綾が写真を間違えてしまって…」

「申し訳ありません沙姫様……」

すっかりこちらを置き去りにして3人で話し始めてしまった。時々リトの名前が出てくるからどうやらリトに用があったが間違えてオレのほうへ来てしまったらしい。

リトには悪いがこれで変な人に絡まれなくてすむとホッと一安心。しているところから視線を感じた。

そちらの方を見てみると先ほど綾と呼ばれていた女生徒がチラチラとこちらを見ていることに気付く。あの丸眼鏡と長い髪の毛……。

「あの…もしかしてこの前パンくれた人？」

「え…あ、覚えてたんですか・・・？」

「そりゃあもう！いつか恩返ししなきゃって思ってたから。あの時はありがと、あのクリームパンが無かったら飢え死にしてたよ」

「その…お役に立てたなら……」

思い出すのに少し時間がかかってしまったがあの時クリームパンをくれた娘だった。

丸眼鏡の置くの優しそうな瞳が印象的などても可愛らしい娘だった。がこうしてちゃんと向かい合って話してみると尚のこと可愛らしく見える。

「え？でもお前菓子パンって苦手じゃな」

「成敗！！」

後ろで話を聞いていた猿山がいらんことを言いそうになったので鳩尾に拳を入れて黙らせる。

幸い丸眼鏡の娘には聞かれていなかったようでキョトンした顔でこちらを見ている。目が合うと顔を赤くして逸らそうとするそんな仕草がまた堪らない。

「綾！今日のところは退きますわよ！綾？」

「あ、はい解りました。失礼します」

いつの間にか来ていたララと口論していた天条院先輩が教室を出て行くと丸眼鏡の娘もペコツとひとつ頭を下げてその後についてい

た。

去り際、ポニーテールのキリッとした娘が値踏みするようにジーツとこちらを見てきたのが若干気になった。

そんなこんなでゴタゴタした文化祭の準備だったが、無事我がアニマル喫茶も完成し、いよいよ明日が本番だ。何も起きなければいいが…。

彩南祭は大災難

「いらっしゃいませー！ようこそアニマル喫茶へ！」

クラスの女子達の可愛らしい飛び込みに導かれニヤニヤ顔のオス達
がこぞってやってきて、うちの出し物は大盛況となっていた。

教室中が男子で溢れていてとてもじゃないが女の子のお客さんが入
れそうな雰囲気ではない。元から男子向けの出し物だったがこんな
に流行るとはオレも猿山も思っておらずお釣りが足らなくなったり
急遽廊下まで大蛇の列になった亡者達に椅子を用意したりとてんて
こ舞いだった。

「もっとお湯沸かして！おい猿山、コップさっさと洗ってこいよ。
西連寺とララはこれ持ってって」

オレは猿山が無能だと察したクラスメート達にリーダー的な立場に
付かされてしまい、教室の隅に設けられた簡易厨房であれやこれや
と指示を出している。

「ねーねーゆりっちこれ可愛い？」

「はいはい、可愛いからこれ持ってってね」

時折思い出したかのように糸岡と沢田がポーズを取って衣装を見せ
に来てくれる。ずっと同じ衣装ではお客も女子も飽きてしまうので
何着も代えの衣装を用意しておいて自由に着替えられるようにした
のだ。

これが女子達に好評だったらしくご褒美と称して新しく着替えると
皆逐一見せに来てくれるのだ。そんなことより店に行って欲しいの

に。なんてちよつとうまいこと言ってみたり。

纫岡なんてこれで4度目のお色直しで今回の衣装は犬らしく茶色のたれ耳をつけて手をグーにして腰を可愛くふりふりしている。

こちらとしては次のコーヒーやアイスを持って行って欲しいのだがこれをあんまり言うて理不尽に怒られるので黙っておく。

「この衣装まだ完成じゃないの、この首輪をつけてやっと完成するんだけど…ねえゆりっち？つ・け・て？」

「やってる場合か。衣装換えしてる間お前の仕事全部沢田がやってたんだぞ。これ持って手伝って来なさい」

「ゆりっちってこういうの乗らないよねー。しゃーない愛しいミオのため行ってきますか」

そういつてコーヒーとアイスのセットが乗ったトレイを受け取っていく纫岡。

今がお昼時なのでこのピークを過ぎたら一息つけるだろう。

「ゆりー、コーヒー3つにアイス2ケーキ1だってー」

ララがまた新たなオーダーを持ってくるのを見てため息をつく。コーヒーだけ飲んでさっさと帰れよと思うが、コーヒーは安さが売りの1杯30円だし、ケーキやアイスなどのサイドメニューで利益を出さなくてはならない。それも無駄に拘ってしまつて既製品にクリームや果物などを加えたものになっていて非常にめんどくさい。が、それが人気の要因の一つでもあるし「買ってきたもの出すのもつまらないしちよつとアレンジしたいよね。」と言い出した張本人なので放り出すわけにもいかない。

「雪ヶ岡君、コーヒーを3つとケーキを3つ注文入ったから、お願いします」

西連寺が持ってきた追加のオーダーを見て、うんざりしながらも黙々と手を動かすのだった。

・・・。

・・・。

「ん？さっきからオーダーが来ないぞ？」

無くなりかけてきたお湯を給湯室から借りてきたポットも活用しジャンジャカ沸かしていた所、さっきまで休み無くオーダーを持ってきた女子達が来ないことに気付いた。そこでやっと教室を見渡してみると人だかりが出来ている。お客達もみんなそっちに集まってしまつて注文もないのでそちらを見に行ってみると人だかりの真ん中には昨日の変質者、天条院がいた。

「何やってんだ？」

「なんか先輩が急にやってきてララと対決することになったんだ」

そばにいたリトに現状を聞いてみる。昨日はリトが狙いで今日はララが目的らしい。

なんでも学校一の美女を決めたいらしく転校してきて話題も人気もあるララを負かし自分が一番だ！ということを証明したいらしい。オレは知らなかったが天条院は変わり者で有名でいわゆる「残念な美少女」というらしい。

「あのバカ！なんて格好してるんだよ！！」

「なんだいきなり大声出して・・・ってなんだあれ！？服っていうかプレイだな・・・リトちょっと止めて来いよ」

当然大声を出すリトに驚き人だかりを見てみると何を血迷ったのか
ララが自分の局部をクリームのようなもので隠した状態で立っていた。

首にペケが付いているからペケコスチュームなんだろうけど、あんな凄まじいものでインストールしてきたのか・・・。

促したリトが自分が壁となってララの痴態を隠すも見せろ見せろと
狂気の徒となった男子たちが騒ぎ立てる。

教室中の男子がそちらへと流れていくのを見て、

「ちょ：ちょっとそんな、お待ちになって——！！——！！？」

焦った天条院が飾りに服を引っ掛けてしまい上半身の服がはだけて
しまった。

普通の女性なら思わずうずくまるか叫び声をあげるだろうがそこは
やはり変わり者、

「いやゝん脱げちゃったゝゝどゝしましよゝ。」

腕で胸を隠しただけの姿でくねくねしながら猫なで声を出している。
しかしインパクトで圧倒的にララが勝っているので誰も見向きして
くれない。

初めは呆れてみていたが居ても立ってもいられなくなって、

「女の子が簡単に肌を見せんじゃないの。しかもこんな男のいると

ここで……これ貸すからさっさと帰れ」

自分が着ていたブレザーを天条院の肩にかけ、背中を押して教室から追いやる。

「ちょ！あなた……なんなんですよ！？」

「はいはい、あつ綾さんこの人連れてっちゃってね。よろしく」

「え、あの……はい。」

廊下まで押していくと昨日名前を知った丸眼鏡の恩人綾がいたので天条院を押し付ける。

その時もう1人のポニーテールの人に物凄く睨まれたが気付かない振りで通した。

結果としてそれが「すっごくエロイ喫茶店がある」と男子達の間で噂になってしまい昼を過ぎても客足が途絶えることは無かった。

途中様子を見に来た御門に「コーヒー臭い」と言われてしまい結構へこんだ。自分だっていつも薬品臭いくせに……。

そんなこんなで我がクラスのアニマル喫茶は大好評のうちに幕を閉じた。

後日、最優秀賞をもらい学校生徒全員が集まる前で猿山が表彰状をもらいえらい喜んでいたが、クラスメート達から「お前なんもやってねーじゃねーか」と総すかんをくらっていた。

誕生日パーティ

文化祭も終わりとくにイベントもないまま気ままな日々を過ごしていた。

「はあゝ…今日も沢山治療したわ」

「ご苦労様」

ベットのの上に胡坐をかいて座ってだらだらとテレビを見ていた所へYシャツ姿の御門が来て、さも当たり前のように膝の上に頭を乗っけてくる。

いつもの事なので放っておいてテレビをボーッと見ていると、無視された御門がぐしぐしと顔を膝に擦り付けてくる。

これは構って欲しいもしくは甘えたい時にする御門がする行動で、これをおざなりになると変な注射や変な薬や変な煙が飛んできたりする。

ちよっとおっかなびっくり気味に御門の頭に手を置いてやさしく撫でる。どうやら正解だったらしくタオルケットを引っ張ってそれに包まってやがて小さな寝息を立て始めた。

つい先ほどまで急患の患者が来て対応していたので疲れていたんだろう。御門は学校で校医をする傍ら本業は宇宙人専門の医者なのだ。実はこの地球には沢山の宇宙人が住んでいる。擬態していたり寄生していたりとその方法は様々で一目見ただけでは宇宙人とは解らない。しかし、病院などでSTスキャンや血液検査などされてしまえば一発でばれてしまう。なので怪我や病気になった宇宙人たちはこそって御門のところへやってくるのだ。

御門の髪をくるくると指に絡ませ遊びながら面白いのかくだらない

のか解らないバラエティを見ていると、マナーモードの携帯がブルブルと震えだした。

御門を起こさないように手を伸ばし携帯を開くと、液晶画面には「ララ」と表示されていた。

「もしもし?」

「もしもしー! さっき美柑から聞いたんだけど、明日リトの誕生日なの?」

「そーだよ。ザステインとかリトの親父とかにも声掛けてパーティーすることになってんだ」

「そーだったんだあ。じゃあ何かプレゼントしないとだね、何をあげたらいいんだろ?」

「自分が貰ってもうれしくてかつリトが喜びそうなものがないんじゃないかな」

「リトが喜びそうなもの・・・わかった! ありがとゆりっち! それじゃあねー」

プツンという音がして電話が切られる。そう、明日はリトの誕生日なのだ。当然プレゼントを一週間前に用意してあり明日は学校を休んで結城家で誕生日パーティの準備だ。なんとも都合がいいことに美柑も創立記念日とかで休みなので2人で準備することになっている。

うるさかったのか、んーんーむずがる御門の頭をまた撫でながら明日の誕生日パーティを思い描いてむふふと気持ちの悪い声をもらすのであった。

.....

.....

「有里さん学校は？」

「今回はインフルエンザってことにした。やっぱ季節感大事にしないかね」

「もう危篤になる親戚もないもんね」

日にちは変わって現在10時をちよつと過ぎた頃、左頬に綺麗なもみじを咲かせたオレは、美柑と向かい合いながら紅茶をすすっていた。

なぜ少々季節外れのもみじを咲かせているかかという、それは1時間前：

.....

「ただいまー、勝手にお邪魔しますよっ」と

勝手知ったる人の家とはまさにこのことで9時ちよつと前に結城家に着いたオレは以前作った合鍵で玄関を開けて入る。

いつもはリトやララの声で騒がしい家の中も今はシンと静まり返っている。どうやらまだ美柑はまだ起きてきていないらしい。

1人でボーっとしていても楽しくないので美柑を起こすため2階へと向かう。

可愛らしく『美柑』と書かれたプレートがぶら下がっている扉を何

度かノックしてみるが何の反応も返ってこない。

何気なくドアノブを回してみると鍵を掛け忘れていたのか開いてしまった。開いてしまったのなら当然入らなくてはいけないので仕方なく、嫌々ながら美柑の部屋へと侵入する。

そろそろと音を立てないようにベットへ近づいてみるとやっぱりまだ寝ていたらしく布団にくるまって小さな寝息を立てていた。

寝起き姿を見て怒られたことはあったが寝ている姿は始めて見る。のでせつかなので、鼻と鼻が当たるかもしれないくらい近くからじーっと眺めることにした。

いつもはこちらをジト目で見たり子悪魔的な笑顔をうかべる美柑の顔も今は穏やかな寝顔で年相応の可愛らしさがある。

どんな子も寝顔は天使なんて誰かが言っていたがなるほどその通りだろう。その可愛らしさに思わずその丸みを帯びた頬を指でつついてしまう。

「んん……ん……?」

浅い眠りだったのかすぐにまぶたがピクピクと動き出しやがてうっすらと開き目の前にいるオレと目が合った。

「あれ?有里さんがいる……まだ夢?」

まだ夢心地なのか寝ぼけ眼で布団から出した手でオレの指を掴む美柑。

「休みだからって寝すぎだぞー。いつもは7時に起きてリト達のご飯作ってるんだろー?早く起きないと襲っちゃうぞ。」

「ご飯………ゆ……ゆゆ有里さん!!?? なんでここ……って夢じゃない!??」

やっと目が覚めたのかこちらが申し訳ないほどに狼狽し、起き上がったときに跳ね除けた布団を再度かき集め亀のように潜り込んでしまった。

「なんでいるの!??」

「いやだって今日リトの誕生日の準備するって言ってあったじゃん」

「来るのは昼からって言ってたじゃん!」

「昼も朝も変わらないじゃん」

「変わるし全然違うし……女の子の寝顔見るなんて最低だよ……っ!」

いつものジト目になってこちらを射抜くように睨んでいた美柑が、ハッと何かに気付き再び布団を跳ね除けベットの横に置いてある机に向かい写真立てをボタンッと倒す。

「……………」

「……………」

変な沈黙が5秒ほど流れた。

別に写真に誰が写っているかは興味は無かったがこうも露骨に目の前で隠されてしまうと好奇心が刺激されてしまう。

「ん？何で隠すのかな？お兄さんそういうことされると見たくなくてきちゃたぞ？どれどれ…」

「ちょ……やめ…本当にこれはダメ…！」

体を張って写真立てを見せまいとする美柑に、潜在されていたじわる精神が引き出されてしまい何とか隙について写真立てを奪おうとした結果。

「ほんと！これだけは…ダメ！…バカッ！！！」

朝っぱらから調子に乗りすぎたオレへ、スパンツ！！という小気味良い音とともにやたらスナップのきいた張り手が襲い掛かり、怒り心頭な美柑の「着替えるから出てってよね」という有無を言わさぬ命令に反省しつつも静かに1回へ引き下がるのだった。

・・・。

・・・。

美柑の怒りも収まりやっとな落ち着いたオレ達はあらかじめ用意しておいたパーティ用の飾り付けに取り掛かった。

結城家の居間を借り切って行われるそれは1週間前から準備を始めていた。『結城リト誕生日おめでとう』とデカデカと書かれた看板や紙で作られた飾りや花などを美柑やリトの親父などと内密に用意していたのだ。

「ふう、こんなもんかな」

「思ったより早く終わっちゃったね」

すでに仕上げてあるものを飾るだけだったので1時間もかからずにパーティの準備が終わってしまった。

再び美柑と向かい合い緑茶をすすっている。太陽はすっかり昇りきり真上から地上を照らし当てる時刻となっていた。

「飯食うか」

「それじゃあ私が作るよ」

美柑が立ち上がり台所へ向かって物の数分でパパッと作り上げてしまった。

カップラーメンを。

「パーティにお金使いすぎちゃって他に無いの」

「時々食べなくなるからこれはこれでいいんだけどね」

カップラーメンは色んな種類や味があるしそれなりに美味しいが、それが並ぶ食卓は随分寂しいものがある。

お湯入れて3分。食べ終わるのに5分の簡素な昼食が済み、また間延びした時間が過ぎていく。

・・・。

・・・。

時刻は3時、暇を持て余した2人はトランプをしたりゲームをしたりと案外充実した時間を過ごしていた。

「そろそろケーキ取りに行くかあ。何の気なしに遊んじやったけど早くしないとリトが帰ってきちゃうし」

「そうだね、いこっか」

オレは自分達で作ろうぜと言ったが、結城家にはケーキが作れそうなオーブンもないし美柑がオススメのケーキ屋さんがあるというのでそこで予約することにした。

思い立ったら即行動、さっさと靴を履いて外へ出る。

当たる風に少し肌寒さを感じながら2人並んで商店街を目指すのだった。

・・・。

「ほほお…ここが最近巷で有名なケーキ屋さんねえ」

「そ、ストレイキャッツ。うちの学校の子もみんな美味しいって言うてるんだよ」

商店街の片隅にある洋菓子店ストレイキャッツ。小さな店舗ながら看板や店内の洋装に可愛らしさが見て取れ、置いてあるケーキの種類も多種多様。その上リーズナブル。人気が出る理由もうなずける。

美柑がオレと同一年くらいの元気そうな女の子に予約票を渡し、ホールの大きなケーキの入った箱をオレが受け取る。

代金を払い外へ出てみると

「あら、有里ではありませんか。学校をサボってケーキだなんてい

いご身分ね」

店の前に制服姿の天条院沙姫とそのお供である凜と綾の姿があった。

「あ、こんにちは」

「……………」

沙姫の後ろから少々怯えながら綾が顔をだし挨拶してくれるが凜の方は終始こちらを睨んでいる。

「誰？この人達」

遅れて店から出てきた美柑が沙姫達を見てそう聞いてくる。

「この金髪ロールが天条院で後ろの眼鏡の子が綾、んであのちよつと怖いのが凜。全員オレより1個上の先輩だよ」

「へえ……………」

3人のことを紹介すると何故か美柑がケーキを持ってないほうのオレの腕にしがみついてきた。

「むっ、ちよつと有里さん？その」

「雪ヶ岡さん！その子は誰なんですか？」

「ちよ…ちよつと綾？」

沙姫が何か言おうとしたのを遮る様にして綾が大きな声で話しかけてくる。普段はいつも沙姫や凜の後ろでもじもじしていることが多いので自分から前に出るのは大変珍しい。ましてや今、オレの腕に

しがみついている美柑と睨みあっているなんて言うことは付き合いの長い沙姫や凜も見ることがないだろう。

「この子は結城美柑。リトの妹で小学生なんだ。今日はリトの誕生日だからケーキ買いに来たってわけ」

「美柑です」

「そうですか…ところでその美柑ちゃんは今雪ヶ岡君と一体どういうかんけ」

「ほら有里さんケーキが溶けちゃうよ。早く帰ろ」

「ん？お…おおう。それじゃあ3人ともまた学校でな」

綾がまだ何か喋っているのに、美柑が腕を引っ張って話の途中で歩き始めてしまう。

いきなり引っ張られつんのめりながら若干むすっとしている綾と置いてけぼりの沙姫・凜に手を振りながら、誕生日パーティのため帰路につくのだった。

・・・。

・・・。

そのあとすぐにうきうき顔のリトが帰ってきた。聞いても無いのに教えてくれたが、西連寺から誕生日プレゼントをもらったらしい。プレゼントは可愛いジョウロで普段庭の手入れもやつたりするリトにはぴったりだろう。

居間に入ってきたリトをクラッカーで迎えつつ誕生日パーティをはじめた。仕事を必死で終わらせてきたリトの親父とアシスタントを

やらされているザスティンも少し遅れて参加した。

ちなみにオレのプレゼントは動きやすいちよっと高価な靴で、美柑はリトによく似合うスポーティな帽子だった。どちらも喜んでもらえたのであげた本人としても大満足だ。

こうしてリトの誕生日は無事大成功で終わったのだった。

ちなみにララのプレゼントはどっかの星からもってきた動く植物だった。3階建ての家ほどもあるその巨大植物は、ララの作った認識妨害装置と共に庭に君臨することになり、くしくも西連寺のジョウロが早速活躍することとなった。

天条院パーティ

季節はすっかり流れ、鉛色の空と肌を突き刺す空気が背筋を震わせる。

商店街の木々はすっかり緑色を脱ぎ去り、その代わりに電飾を纏わせ町並みを明るく賑わせていた。

おもちゃ屋やコンビニなどは赤・緑・白に彩られケーキ屋さんはお客さんで溢れかえっている。

そう今は冬真っ盛り。そしてクリスマスである。

恋人のいる人は甘く熱い一夜を過ごしたり、家族で美味しい料理を食べたりするだろう。

寂しい人たちで集まってカラオケや飲み会に赴いたりするかもしれない。

かくいうオレも、クリスマス特集の『自宅でクリスマスケーキ特集』に影響されて色んなケーキを作って御門と食べ比べをする予定だったのだが、

「なにこれ…ここどこよ」

連れてこられた場所は、彩南学校からそれなりに遠いお城のような別荘。

生クリームをかき混ぜている時、いきなり後ろから黒ずくめの集団が現れていとも容易く拉致られてしまった。

呆気を取られ袋に詰められる寸前、変な色の薬が入った瓶に頬擦りする御門が見えた。あいつ帰ったらお仕置きしてやる。

御門にする罰を考えながら、小さな体育館ほどある部屋を見渡してみると見慣れた面々、うちのクラスメート達が洒落た格好でグラスを持ち談笑していた。

「なんだこれ、盛大ないじめ？」

「あらいじめだなんて、折角VIP待遇でお迎えしたと言うのに残念ですわ」

ここ最近よく聞く様になった声に振り返ってみると、サンタクロースの衣装を身にまとった沙姫が仁王立ちになってこちらを見下ろしていた。

ミニスカート風の服なので地面に寝そべっているオレからはパンツが丸見えになってしまっている。が、こんな見せられたパンツに喜んで仕方がない。やはりパンチラは見るまでの過程を楽しまなくては。

「あの…ごめんなさい。沙姫様がどうしても雪ヶ岡君を呼びたいって言って…」

「だからって拉致は…それに皆おしゃれな格好なのにオレエプロン姿だし…。綾はトナカイか、それも中々可愛いね」

「えっ！…そんな私なんて地味で眼鏡だし可愛くなんて…」

「そんなこと無いよ、沙姫や凜に負けず劣らず綾だって可愛いよ。……だからこの袋取ってくれない？」

「あ、うん。ちょっと待っててね。」

我ながら汚い手だとは思ったが照れ照れしながら綾が袋の紐をほどこいてくれる。ずっと地面に寝転んでいたので背中やら肩やら痛くなってしまうていた。

「ふう：よし、ありがとう。んじゃオレ用もあるし帰らせて、

「一流のシェフたちに一流の食材を使って一流の焼きそばパンを用意させてますわ」

もらおうと思ったけど出口が解らないなあ。おっとこんなところに美味しそうな焼きそばパンが！出口を探しながら食べようっと」

会場の真ん中に置かれている大きなテーブルの上、山のように積まれている焼きそばパンに一目散に駆け寄り周りのクラスメート達を近づけさせない気迫を放ちながら次々に口に運ぶ。

「有里も来てたのか、ケーキ作るとか言っていなかったか？」

「うまうまもぐもぐ：なんか無理矢理拉致られた。でも皆で過ごすのもいいもんだな」

「お前さっきからずっと1人で焼きそばパン食ってるけどな」

「なんだ、やらんぞ」

「いらないよ・・・っていうかもう無いじゃねえか」

「追加頼もうかな・・・おっ！コロッケパンがある！おいリト！コロッケパンだぞ！」

「見えてるから。山のようにあるから」

会場に来ていたリトが話しかけてくれたが惣菜パンに夢中でな
んともおざなりな対応になってしまった。

しかしリトもオレの惣菜狂いを知っていたのでやれやれまたか。と
いった様子で肩をすくめていた。

リトがやいのやいのと騒いでいるララの所へ離れていくと入れ替わ
りに、里紗と未央がシャンパンの入ったグラスを片手にこちらに近
づいてきた。

「やっほーゆりっち。どうこの服？可愛い？」

「この服春菜に選んでもらったんだーいいでしょ」

里紗はパンツルックのすっきりとした服装で、未央の方はふわふわ
ひらひらした確かに西連寺がよく着ているような服装だった。

「2人とも可愛い可愛い」

「あったりまえでしょ！それに比べてゆりっちは随分所帯じみた格
好ね」

「でもこれはこれでカッコいいかも」

オレはケーキ作りの最中に連れてこられてしまったので黒い無地の
Tシャツに紺のGパン。それに水色のエプロンという料理好きな休
日のパパみtainな格好だ。

「服に関しては諦めたよ。もう腹いっぱい食って帰ってやるんだ」

「にしまったってよく同じものばっか食べられるわね……。」

2人と話しながらも手は休み無くクロッケパンを口に運んでく。山積みになっていたパン達は手品のように消え去っていった。

ひとしきり腹も膨れ、それじゃデザートでもと里沙・未央と一つ一つは小さいながらも50種類ほどはあるだろうケーキ達に舌鼓をうっていた。

会場は宴もたけなわで、料理もある程度食べ終わり和やかな空気が流れていた。

それを見計らって紗姫たち3人が壇上へあがる。

「さて！ではそろそろ本日のメインイベント！プレゼント交換を行いたいと思います！ただし！入場の際皆さまから預かったプレゼントはここにはありません！」

綾と同じトナカイの衣装を見にまとった凜が壇上で宣言する。

オレ以外の人たちは参加条件として何らかのプレゼントを持ってきたらしい。当然拉致られて財布すら持っていないオレはそんなものを用意しているわけも無い。

「あの：オレプレゼント持ってきてないけど：」

「名づけて！プレゼント争奪ゲーム！ルールは簡単！この屋敷のあちこちに隠されたプレゼントを探し出す事！見つけたプレゼントはその人のモノとなります。」

「いや、オレのプレゼ：。」

「さらに！その中には私からのプレゼントとして豪華リゾート三泊四日の旅をご用意してあります！高級ホテルで高級料理がタダで堪能できますわよ！」

「いやだから、オレ何も用意してねーけどいいの？」

「何をおっしゃいますの？有里からは普段つけている腕時計と寝顔の生写真がある方から提供されてますわ」

「はあ！？あの時計高かったんだぞ！！っていうか寝顔って誰か欲しいの？」

腕時計は夏休みの時、御門とぶらぶら買い物に言ったとき思わず衝動買いしてしまったものだ。

諭吉さんが3〜4人移動しただけあって洗練された秒針が刻む時の音がそれはそれは味わいのある良い時計なのだ。

土日くらいしか使わないので引き出しにしまってあったのにどうやって持ち出してきたのか・・・協力者がいなくては不可能だろう。

ましてオレの寝顔を撮れるようなやつはリトか御門ぐらいしか存在しない。あの野郎帰ったらいじめてやる。

「最終的に見つからなかったプレゼントは私の物になりますのであしからず。それでは最後にもう一つ…」

「フン！リゾートの旅はオレがいただく！」

説明の途中だと言うのに先手必勝よろしく出口へと走り出す男子が一人。

残念イケメン弄光センパイだ。うちのクラスメートばかり目立って

見えていたが紗姫のクラスメートもいたらしい。
颯爽ときらびやかに駆け出した弄光センパイは、

「へ？ ああああああああああああああ」

と情けない声を出しながら突如開いた床の穴へ消えていった。徐々に遠くなっていく叫び声にその場にいた全員が息を呑む。

「このように屋敷のあちこちにはトラップが仕掛けてあります。プレゼント探しは慎重に行く事をおすすめしますわ」

単純な屋敷探検のイベントが、一瞬で緊迫したものに早変わった。学校一の変わり者である紗姫がするイベントなんてまともなはずがないじゃないか。まともな思考をもつ生徒たちがそう考え始めた中で、

「リゾートにゆりっちの生写真か…」

「こりゃ行くっきゃないね！ 走ろ、春菜！」

「女の子のプレゼントを独り占めするチャンス！！」

里沙や未央、猿山などのお祭りイベント大好き種族が二の足を踏む者たちの前にでて落とし穴を避けつつ扉から出て行った。

それを皮切りにボクも私も他の人たちも次々に出て行ってやがて会場に残されたのはオレと紗姫達3人だけとなってしまった。

「あら、有里は行かないんですの？」

「リゾートに興味ないからなあ…もう時計は誰かにくれてやるって

ことでいいし、自分の写真貰ってもなあ…」

「ホテルには温泉もついてましてよ？」

「それを早く言えよ！こうしちゃいられねえ！」

高級リゾートの温泉と聞いたら遊んでなんていられない。ワーワーキャキャーと叫び声の聞こえる廊下へと飛び出していくのだった。

・・・。

・・・。

「意気揚々と出てきたはいいのもの…あぶねっ。この屋敷がどのくらい広いのかも解らんからな…」

始めは遅れを取り戻すために走っていたが、道中の廊下や部屋ではスライム状のものに絡められている女生徒や、縄で縛り上げられている男子生徒の姿がそこら中に転がっている。どうやら先にいった奴らで軒並みトラップにかかっているらしい。

おかげで殆どトラップも競争相手も無くのんびり歩きながら時折壁から飛んでくるとりもちや弓を避けつつ一人とぼとぼと歩いていた。

「この部屋行ってみるかな」

まだ開けられていなさそうな部屋を見つけ、ドアノブを障らないように足で蹴り開ける。

バガッ！と勢いよく扉が開くと同時に天井からタライが3つ4つと降ってくる。ドリフのような音を立て散らばるタライを見届けてから部屋に入る。

部屋は普通のゲストルームらしくベッドと机、化粧棚などホテルのような洋装だった。

見渡してみると机の上とベッドの上に綺麗にリボンで包装されたプレゼントを見つけた。

その二つのプレゼントに落ちていたタライを当てて床に落とす。すると天井から銃火器のようなものがヒョコヒョコでてきてあつという間にタライがモチだらけになってしまった。

ドダダダダ!と連射されたとりもちが収まるのを待ってプレゼントを回収し、そそくさと部屋を後にするのだった。

・・・・・・。

「キィー! どうしてララも有里もトラップに引っかかりませんの!」
「？」

「ララは力づくで、雪ヶ岡は巧みに近くにあるものを使ってトラップを無効化しています」

「プレゼントはほぼララさんと雪ヶ岡君に振り分けられています。
流石です」

「さすがは私の認めた男ということですね、2人はどこへ向かっているの？」

「はい、両者ともこちらへ向かってきています。5分程で到着するようです」

「そう、では例の武器をこちらへ。私自ら出向くしかないようね」

.....

「あっ、有里だ。」

「ん？ おお2人は罠に引っかけなかったのか、すごいな」

「引っかけなかったと言うか全部ぶっ潰してたというか…」

「こんなに集まったんだよー！」

まだまだ元気そうなララが、それこそサンタが持っていそうな白い袋を振り回して大漁を教えてくれる。

「おおーやるなあ。こっちの部屋はもう全部潰してきたからあとはこの部屋だけかな？」

「そうだね！ よーし行くよ！」

ダンッ！ とオレとララで扉を開くと、

「そこまですわー！！」

銃を持った紗姫達3人が待ち構えていた。その後ろにはリゾート券が額縁に入って飾られている。

さしずめここが最終ステージといった所だろう。

「これ以上の勝手は許しませんわ！ さあ、カラシ弾をおくらいなさい！」

紗姫の号令と共に綾と凜もこちらに銃口を向けてきて一斉に発射してきた。

「おおー！よっ！」

「意地でも取らせないってか、こりややる気出てきた！」

「撃って来た！？っておいちょっ……」

一斉掃射で飛んでくる弾をでっかい袋を抱えているというのに俊敏な身のこなしで回避するウラ。

それに負けじとオレも発射と同時に射線と垂直に駆け出す。

標的がばらけ隙ができたところを一気に突破しようとしたら、

「ぎゃあ—————目があああああ！！」

カラシ弾をもろに顔面に食らったらしいリトが半ば錯乱状態で綾がいるところへと走り出している。

「えっ!？」

まさか向かってくるなどと思っていなかった綾と、カラシが目に入り涙ダラダラのリトが押し倒すようにもんどり打って倒れこむ。

勢いよく倒れたせいで綾の服ははだけてしまっていた。しかもあのトナカイの衣装の下は下着だけだったらしく半分見えてしまっていた。

「いてて…おぼっ!!なんで—————有里が……」

「ごめんなんかムカついちゃって…」

ホント何故だか解らないけどリトにイラッとしてしまって蹴り飛ばしてしまった。結構いいところに入ったらしく吹き飛んだリトは何度かバウンドした後壁に当たって、やがてパタリ——とその身を地面に横たえた。

「やばいな、リトだいじょつ…ってあぶな!!」

明らかに大丈夫でなくなったリトを診てやろうと右足を一步出したところ明確な殺意を感じ体を引く。

その一瞬後に首があったところを真剣が空を切る。

何事かと振り返ってみればそこには血走った目でこちらを睨む凜の姿が。

「よくも綾に辱めを…そして紗姫様をたぶらかして…貴様はここで仕留めさせて貰う」

「は? どうしてそうな、っておい! それ模造刀じゃねえじゃんか!」

首、頭、心臓など一撃必殺の急所を的確に狙って凜が真剣を振るってくる。

トナカイ姿で刀を振るうそれはまさにシユールそのもの。というかオレもエプロン姿。はたから見ればコントだが斬られかける本人としては笑えない。

高校生としては素晴らしい剣の腕だが、そこはまだまだ女の子。性別であーだこうだと言うわけでは無いがこっちはもっと小さな女の子に命を狙われたことだってあるんだ。剣の1本や2本どうって

ことはない。

「ちょっと痛いかも」

「なっ!？」

凜が刀を振り上げ思い切り振り下ろそうとするその懐へ潜り込み、刀を持つ手首を掴み一本投げの要領で投げる。

地面に落ちる瞬間に掴んでいる腕を引っ張った。

「んっ!！」

それほどの痛みは無かっただろうが凜が痛そうな声をあげる。またぶんぶんと剣を振り回されても敵わないので刀を遠くへ転がし、馬乗りになって両手を封じた。

「くっ…離せっ」

「離れたらまたケンカ売って来るでしょう。オレ凜に怒られるようなことしてないと思うんだけどなあ…」

「名前で呼ぶなっ」

「そう呼べって言ったのは紗姫なんだけど…」

文化祭の一件以来ちよくちよく意味不明な理由で絡んでくる紗姫達。始めは貸したブレザーを返しに来た時に、

「ただ返すだけではつまらないですわ、次はそのネクタイを借りて行きましょう」

と訳のわからない論法に圧倒されるがままにネクタイを取られ、

「あら、一人でしかも徒歩で帰っているなんてさすが庶民の方ですね。いいですね、私がこの高級車で送ってあげましょう。」

あと5分程で家に着くというのに黒塗りのバカでかい車に有無を言わず乗せられて、自慢話を延々聞かされ横に座っている綾に謝られてその反対に座っている凛にぎろぎろと睨まれたり、しかも着いたのは紗姫のお屋敷で結局タクシーで帰ったり、

「あら、冷やかしのつもりで学食に来てみたらあなたではありませんか。そんなものが欲しいのなら私がたらふく買ってあげますわ」

と売店中のありとあらゆるパンを買占めオレの目の前に積み上げて平らげろとはやし立て、あまり好きではない菓子パンに四苦八苦ししながら完食し腹痛で保健室で寝込むことになったり、そのさいに御門に襲われかけたり、

なるほど、学園一の変わり者と言われるだけのことはある。思考回路が常人では理解できないがひとつだけ解ったことがあった。

「もしかして友達いない…のかな」

いつも綾と凛と一緒にいるが、逆に言えばいつも綾と凛しかいない。なんて言ってるオレも四六時中リトと一緒にいるわけだが他のクラスメート達と仲が悪いわけじゃない。むしろ友達が多い方だ・・・と思う。

同情や憐れみじゃないが、そう思ってしまったらあの我が侬や自分

勝手が、さみしがりの強がりに見えて、なんだかとっても愛らしい。きっと本人は自覚して無いだろうけど。

そんなこんなで振り回されるがまま仲良くなって、「有里、あなたこれから私達のことを名前で呼びなさい。」とついこの前言われたのだ。綾と凜に関しては前から呼んでたんだけどね。

「いい加減手を離せ」

「離れたとたんに殴られるのが目に見えてるから嫌です」

「そうじゃない…貴様が引っ張るから服が脱げてるんだ」

チラッと視線を下げてみると確かに前に着いているファスナーが開いてしまっていてそこから絹のような柔肌と白い下着が見えてしまっている。

「ごめんなさい…」

「……………」

さっきリトに当たっておいて自分の方がよっぽど最低だった。謝りつつ馬乗りの状態から立ち上がると視界の端で変なものを捕らえた。

「さあ！覚悟しなさい！」

おそらくアラが改造したであろうバズーカを持った紗姫がこちらを、
というかオレを狙っている。

「なん…で……………」

突然のことで思考が追いつかず疑問の言葉だけが悲しく零れただけだった。

「おくらいなさい！」

ドゴオッ！と耳を劈く（つんざ）轟音と共に打ち出された閃光の直撃に吹き飛ばされる。

いくつも壁を突き破り屋敷の外まで吹き飛び、雪の積もる地面を何度かバウンドした後、パタリ——とその身を地面に横たえた。

大木に積もっていた雪が降り注ぐのを成すがまま受け入れながら、これはきつとりトに当たった罰なんだと因果応報を悟った。

バズーカによって開けられた風穴のせいで屋敷はガラガラと崩れ一瞬で瓦礫の山と化した。

みんな非難できたらしいが崩壊した屋敷をみて紗姫が愕然としていたらしい。あつめたプレゼントはウラの手によって皆に配られ、オレの腕時計も無事戻ってきた。が生写真にいたっては行方は解らない。

ともあれ紗姫主催のクリスマスパーティーは大成功？とは呼べないまでも記憶に残る良い出来事として終わりを遂げた。

・・・・・。

・・・。

帰宅後

「てめえその薬で人の事売りやがったな！！」

「いやね、そんな証拠がどこにあるのかしら？」

「じゃあその並んでる真新しい薬はどこで手に入れたんだよ」

「ふふ、道に落ちてたのよ」

「自分でちょっと笑っちゃってんじゃねえか。つくならもっとまじな嘘つけよ！」

「……………」

「黙るなよ…ってなんだこのけむり……………」

いつの間にか部屋に充満していた煙に気付かなかった。おそらく御門は自分にはワクチンのものを打っていたのだろう。

重たくなるまぶたを必死で開けて最後に見たのは手を合わせ口の端から下を出し、テヘツと似合ってもいない笑顔を浮かべるマッドドクターの姿だった。

金色の闇

久しぶりに1人で商店街を歩いている。

お風呂の電球が切れてしまったのでその買出しだ。とは言ってもお目当ての電球はもう買ってあるので今は暇つぶしのお散歩中だ。

商店街を当てもなくぶらぶらと歩いているとソースの焦げる良い匂いがしてくる。釣られるように匂いの方向へと歩いていくと、小さなたこ焼き屋さんを見つけた。

ちょうど小腹も減っていたので1袋買い、つまみながらまたぶらぶらと歩く。

食べ終わった包みを丸めてポケットに突っ込みながら、自動販売機でお茶を買っていると、

キヤー！ワー！うわああああ！

と、遠くの方から悲鳴のようなものが聞こえてきた。

耳を済ませてみるとゴシャツとコンクリートを破壊するような音も聞こえてくる。

「さっきの悲鳴：リトの声に聞こえたけど、いやまさかそんな」

いくらあいつがトラブル体质だからってこんな休日まではしゃいでいるはずがない。

きっと有名人か何かが来てファンが奇声を上げてるだけとかそんな感じだろう。聞き間違いという線もある。

一応確認のため騒ぎのあった方へ行ってみると、ガードレールは切

り裂かれアスファルトは陥没し”何者か”が暴れた跡がある。
見回してみるとその跡は点々と移動していて駅のほうへ続いているらしい。

集まり始めた野次馬達を避けつつトラブルの根源の方へと向かうことにした。

・・・・・。

「見つけた：やっぱりリトか。」

路線沿いに走っていると歩道橋の上に立っているリトを見つけた。
リトの目の前には少女の姿も見えて取れる。やっぱりトラブルの原因はリトらしい。あいつの女難っぷりは神社でお祓いを受けるレベルだと思う。

歩道橋の上まではぐると周って行かなければいけないのでめんどくさい。

オレはおもむろに目の前にあったフェンスへよじ登り、大きくジャンプし歩道橋まに飛び移る。
ちょうどリトの前に降りると、

「うわっ！びっくりした：有里か。」

「また変なことに巻き込まれやがって・・・こっからはオレが相手・
だ・・・・。」

振り返りながら少女を指差す。指を指された少女は大きな瞳を見開いて驚いている。

何のことは無い、オレはその10倍以上驚いていた。

「ヤ……ミ？」

「あなたは…こんな星に隠れていたんですね。」

「おい…有里、知り合いなのか？」

すっかり2人の世界を作られてしまってリトはどうしていいか解らなそうにしている。オレだってどうしていいか解らない。

親友を追いかけていた奴が自分を狙う殺し屋だったなんてそんな展開予想している訳が無い。助けに来て何だけどリトに助けて欲しいぐらいだ。

「今日こそ」

「マジかよ…！」

両手の指を鍵爪のように変化させたヤミが見開いていた目をキッと睨ませて襲い掛かってくる。

その素早さはまさに電光石火といえる速さだったが師がそう簡単に子に負けるわけには行かない。

突き出された右手の手首の辺りを叩き落とし続けて繰り出される左手をバク転で避ける。

「リト、逃げるぞ！」

「良い知り合いじゃなさそうだな！」

距離を開けるとリトに声を掛け一緒に走り出す。当然逃がすはずもなくヤミも走ってこちらを追いかけてきた。

「おい！説明しろよ！あれ誰なんだ！？」

「話すと長い！簡単に言うとおれが育てたおれを狙う殺し屋だ！…伏せろ！」

走りながら2人で屈む。とおれ達の上半身があった場所を金色の大剣が横薙ぎに一閃する。

「なんかさっきまでより過激になってるんだけど！？」

「どう考えてもおれのせいだよな……二手に別れるぞ！おれ左！」

「よしっ神社で合流だ！」

ちょうどV字路を見つけたのでリトと二手に別れる。こうすれば最悪どちらかは助かるからだ。それに

「そりゃこっち側に追ってくるよな…」

ヤミなら絶対におれを追ってくると思ったからだ。星から星へ逃げたって追いかけてきたヤミだ、もうリトのことなんて見えてないかもしれない。

「くっそー…今月定期健診してないのに…」

まだまだ走れはするが若干の息切れを始めた。この調子で行けば30分持たないかもしれない。

「そこです」

オレのふらつきを見逃すはずも無くヤミの髪の毛が伸びて鉄球になり猛スピードで飛んでくる。コンクリートを陥没させたのはこれだろう。人間があたったらどうなるだろうか。オレ人間じゃないけど。

オレは飛んでくる鉄球を地面を蹴って大きくジャンプし回避する。目標を失った鉄球は民家の塀を貫通し粉々に砕いた。

このまま普通に逃げると被害を広げることになってしまう。とりあえず人の居ない方へと空中で体勢を変え民家の屋根に着地する。そこから忍者のように屋根から屋根を伝ってリトの行っていた神社を目指した。

・・・。

「なんだ、リトは……まだか。」

すっかり息も上がってしまい軽い貧血までしてきた。しかし止まればヤミに刺されてしまう。

必死で逃げてやっと神社に着いたがリトの姿は無い。

「鬼ごっこはお終いですか。」

境内に座って休んでいると自分の髪の毛を羽に変化させたヤミが空から舞い降りてくる。

彼女は”トランス能力”というものを持っている。体をあらゆるものに变化させることができるのだ。

腕を剣にしたり鉄球にしたり、髪を刃にすれば十重二十重の斬撃が目標を襲うことになる。羽にすれば縦横無尽に空を翔ることだってできる。

その能力ゆえに”全身兵器”とまで称されていた。そんな殺し屋が

なぜオレのことを狙っているか、

「あなたが私を捨てたあの日、忘れたこともありません。勝手に拾って勝手に育てて勝手に捨てたあなたのことを」

「いい訳はしない。お前を拾ったことも捨てたこともオレの気まぐれで我がままだ。恨んでくれていい、がオレだって死にたかないぞ。当然逃げる」

「ええ、恨んでいます。ですがあなたに一つだけ感謝しています。人は孤独でいるべきだと教えてくれました」

「これは有里が悪いな」

「そうだね、有里っちが悪いよ」

「リト、それにララ…いつの間に」

気付けばリトも神社に来ていたらしい。さらに話を聞きつけたのかララまで来ていた。

2人してヤミの話に頷きながらオレが悪いオレのせいだとはやし立てている。すっかり観客気分であるが殺されかけていたことを忘れているのだろうか。

「あなたを消すことで私はやっと1人になれる。覚悟してください」

明確な殺意を持ってヤミがこちらに駆け出してくる。

もうちょっと休憩したかったがそうはいかないようだ。息切れは治まったが走って逃げる体力はもう無い。

「電球も替えてないのに死ねるか！」

刃状になったヤミの右手が繰り出す剣撃を、避けられるものはギリギリで見切って避ける。避けきれないものは横から叩いて弾く。

「風撫での名は伊達じゃないですね、これなら」

左手も刃になり二刀流となって襲い掛かる。それでも体すれすれを通り過ぎるだけで当たらない。

次第に二刀が三刀に、四が五へと増え、終いには十本の刃が剣撃の檻を作り出していた。

しかしそれでもオレには傷一つついていない。研ぎ澄まされた集中力が時間を圧縮していく。まるで世界がスローになったようだった。

「くっ……！」

トランス能力に無理が来たのか攻めていたはずのヤミが後ろへ大きくジャンプして距離を開ける。

それと同時にオレも膝をついた。心臓が早鐘のように鳴り響き肩から煙が上がっている。今体温を測れば60度くらいあるかもしれない。

「有里!!」

リトが倒れそうになるオレに駆け寄ってくる。すると上空のUFOが現れ、

『なにやってるだもん金色の闇、お前の相手は結城リトだろ。』

「ラコスポ！」

間拔けな声と共に小さな宇宙人が降りてくる。

「ジャジャジャーン！ラコスポただいま参上だもーん！」

「誰だ…あれ…？」

「ララの婚約者候補の1人であの子を雇った張本人らしい。」

リトが教えてくれる。これでリトが狙われた理由にも納得がいった。

「さあララたん結婚するんだもん！」

「やだよ！ラコスポなんて！殺し屋さんにリトを狙わせるなんてサ
イテー！そんな人と結婚するわけないでしょ！」

「サツ、サイテー…金色の闇もなにやってるんだもん！そんな奴
を遊んでないで結城リトを消せと言ったんだもん！」

「ラコスポ、私もあなたに話があります。結城リトの情報が正確
ではありませんでしたね。標的に関する情報は嘘偽り無くと言った
筈、まして風撫でがいるなど誤算でした…まさか私をだました訳
ではありませんよね？」

「ぬう…うるさいんだもん！依頼主はボクなんだもん！こんな
ったら…出てこーい！ガマるたん！」

2人に攻められて顔を真っ赤にしたラコスポがUFOへ手をかざし
ブウウンという電子音と共にバカでかい蛙が出現させた。

実際は宇宙生物なので蛙のような何かだ。

「さあガマるたん！お前の恐ろしさ思い知らせてやるもん！」

ガマるたんと呼ばれる蛙のような何かの口から緑色の粘液がヤミに向けて発射される。

ヤミはそれを難なく避けるが地面にあたり飛び散ったものが袖に付着した。

「！？」

すると付着した袖がジュウウウと音をだして溶け始める。地面に着弾した粘液も同じように音と煙を立てて神社の地面を溶かしていた。

ヤミは驚きながらも袖を脱ぎ捨てる。

「ひやははは！ガマるたんの粘液は何でも溶かしてしまうんだもん！こうなったらララたん以外ボクが始末してあげるもん！」

蛙のような何かの口をもごもごとさせ次の粘液を溜め始める。

「まずは一番弱ってるお前からだもん！」

そういつてラコスボがオレを指差す。蛙のような何かはこちらを向くが足が動いてくれない。

「くらえい！」

蛙のようなものからさつきヤミに飛ばしたものの2倍はある粘液がこちらへ飛んでくる。

貧血でくらつく頭でもうダメかなと諦めかけていた時、

「うわっ！」

横からヤミに勢いよく抱きつかれ粘液を避けられた。

「ぐう……」

オレにもたれかかっているヤミが苦しそうな声をあげる。

「ヤミ？おいどうした！？」

足から上がる煙に気付きヤミが履いていたブーツを脱がせる。どうやら避けきれずに粘液がかかってしまったらしい。ヤミの白く肌理細やかな肌が赤く染まっていた。

「なにやってんだ！」

「あなたは…私が自分で、殴らないと…気がすみま…せんから……」
そう言って苦しそうに足を押さえるヤミ。

オレの中で、押さえていた何かが切れた。

「てめえ…オレのヤミになにしてんだ!!」

がんがんと内側から叩きつけられるように頭が痛む。体中で心臓の鼓動を感じ、熱が血管を駆け巡る。

「あ…あいつ何かおかしいもん！ガマるたん、やるもん！」

さっきまで死にそうだったオレの突然の変化にラコスポが怯えながら蛙みたいなものに命令し粘液を連射してくる。

それをヤミに当たりそうなものは蹴りでかき消しそうでないものは避ける。

マシンガンのように放たれる粘液を少し体を逸らして避けながら蛙のようなものへ近づいていく。

「来るな！来るなああああ！！」

蛙のようなものがズオオオと頬を目一杯に膨らませ、今までの10倍くらいの粘液を吐き出した。

おそらく最大の攻撃なのだろうが大きいだけあって遅すぎる。

軽くジャンプして簡単に回避する。蛙のようなものがまた粘液を吐こうとするがさっきのでどうやら打ち止めらしい。

「ひいひいひい！やめるもん！来るなもん！」

「消えうせろおお！！」

思いつき振りかぶりラコスポを蛙のようなもの諸共蹴り上げる。勢いよく吹き飛んだ二つの生き物はUFOに当たっても減速することは無く、そのまま空の星になって消えた。

それを見送ると同時に激しい頭痛と猛烈な虚脱感に襲われ、地面へ顔から倒れながら意識を失った。

.....

.....

【御門】

驚いた。彼が担ぎこまれたのもそうだけでもっと驚いたのは運んできたのが金色の闇だったから。

すぐに彼を治療室へ運び輸血をする。そういえば今月の検診を忘れてたかもしれないわ。

彼は”沸血人”。怒ったり感情が高ぶったりすると血液が沸騰するように熱くなるという宇宙でも稀な人種。

そうなると途端に身体能力が上がる代わり、普段からこの専用に作られた血液を輸血しなければならぬ。しないと貧血を起こして動けなくなってしまうらしい。それが彼が私という理由。私の理由はちよつと違うのだけど。

「まさかあなたが彼を運んでくるなんて思っても見なかったわ」

ヤミ、と彼が呼ぶ少女の足を手当てしながらそう声を掛ける。

「なぜあなたは彼と一緒にいるんですか？」

「彼の体調管理のため…は建前ね。本当はね、私もあなたと一緒にある研究所に誘拐されてしたくもない研究をさせられそうになった時に、彼が助け出してくれたの。きつと気まぐれね・・・でもね、彼に抱きかかえられて研究所を出た時に、惚れちゃったのよね。この人のために生きて行こう。ってそう思っちゃったの。ただそれだけよ」

構ってくれない腹いせに悪戯しちゃったりするけどね。でもそれは悪いのは彼であって私じゃないしコミュニケーションの一種ね。

「そうですか…」

「じゃあ逆に、どうしてあなたはこんなに彼に執着するの？」

「私は別に執着なんてしてません。勝手に私を助けて勝手に育てて、戦うことしかしない私に食べ物美味しさや世界の美しさ、人と会話すること人の温もり優しさや愛情を勝手に教えるだけ教えて捨てた…信じるだけ信じさせて私を捨てたんです。それが…それが許せん」

「…：本当は彼に口止めされてたんだけど。宇宙統一戦争があったのことは知ってるわね。その戦争に彼も深く関わっていたの。デビルーク王とは星を一つ壊しちゃうぐらい喧嘩をしたこともあったけど、本当は気があったのね。彼はデビルーク王と一緒に戦ったわ…。その時にデビルーク王も、彼も力の殆どを使い果たしてしまったの」

「知りませんでした…」

「宇宙はデビルーク王のもと統一されるようになったけど、彼はそれを快く思わない人たちから狙われるようになった。でも彼には精々自分の身とあと1人くらいしか守る力しか残ってなかった。そして私も犯罪組織から追われる身…：そう、私が一つしか無い席を奪った。あなたを1人にしたのは彼じゃない、私だったの」

「それじゃあ私は…」

「彼はすぐに迎えに行くつもりだったわ。でもあなたが賞金稼ぎになって追われるうちに言いづらくなっただんでしょね。彼があなたを忘れたことなんて1日だって無かったわ」

「私は…1人じゃなかった……」

彼女はふらふらと歩いていつて起きる気配無くベットに横になって
いる彼の手を握る。

その感触を懐かしむように何度も撫でると安心したのかそのまま寝
入ってしまった。私は毛布を彼女に掛けてあげる。隣のベットに寝
かせようとしたが手を離しそうには無かった。

少々の嫉妬を感じながらも安心しきった子供のような表情で眠る彼
女の顔を見てしまうと、邪魔するのも悪く思えてしまい静かに空い
た彼の部屋のベットへ潜り込むのだった。

バレンタイン

目を覚ましてみると見慣れた天井が視界に広がっている。

蛙のようなものを蹴り飛ばしてから記憶が無いがどうやら家まで誰かが運んでくれたらしい。

右腕には輸血パックから伸びた管が血管に刺さっている。パックが空になっているし貧血や頭痛も無くなっていた。一晩寝てしまったようだ。

この部屋は地下にあるので窓なんかあるわけないしあっても陽の光が射し込むはずも無い。

とりあえず朝のシャワーでもと立ち上がろうとすると、左手を掴まれていたことに気付いた。

「御門か?…ヤミ、だと……。」

てっきり御門かと思ってみれば手を掴んでいたのは今まで散々オレを殺そうとしてきた金色の闇。

もしかしたらここへ運んでくれたのもヤミかもしれない——でも何でだ?恩を売ってから殺そうってことなのか?

全く理解できない……:そういうばりト達はどうかだろう。本来ヤミはリトを狙って地球へ来た筈……

ぽつぽつと昨日のことを思い出し始めると、ヤミがオレを庇って足に怪我をしたことを思い出す。

左手を枕にして眠るヤミの脇に手を入れてベッドの上に引き上げ膝の上に乗せる。

ヤミに覆いかぶさるようにして手を伸ばしガーゼの貼ってある足を触る。

さすが御門、ヤミのことも治療してあったらしい。ヤミの治癒能力が高いせいもあるがガーゼを剥がしてみるとすでになんの傷もなくさわり心地の良く白い肌だった。

何となくそのまま足を撫で続けていると、

「…ん」

ヤミが目を覚ました。キョロキョロと猫のように辺りを見回した後ろにいるオレと目が合う。

「おはよう、昨日はありがとな。ここに運んでくれたのはヤミか？」

「え……なっ…触らないでください！」

「うぼっ！」

オレの目をじっと見ていたヤミが突然顔を真っ赤にして下にいたオレを殴り飛ばす。

壁に叩きつけられて地面に倒れる・・・間もなくいくつもの拳が体に襲い掛かってくる。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぼ」

「私はあなたを許したつもりはありません。気安く近づかないでくださいっ」

倒れることすら許されず拳の嵐に曝されてヤミが何か言っているが聞こえない。

「これで…っ。」

腰だめに構え放たれた痛恨の一撃がわき腹に刺さった時、オレはまた意識を失った。

・・・・・。

再度起きた時、ヤミの姿は無かった。御門に聞いてみると自分の宇宙船があるそうでそこに寝泊りしているようだ。

この無駄にだだ広い家に住まわせてあげればいいのと思ったが、それではオレの身が持たないかもしれない。

なんにせよ、オレの地球隠居生活がまた騒がしくなることは間違いなかった。

・・・・・。

・・・・・。

・・・。

「あゝ緊張するなあ…」

「何が？」

「何がってこっちの台詞だバカ、今日はバレンタインだぞ？食べきれないほど貰ったらどうしよう。」

今日は2月14日。全国のもてない男子達へ国を挙げての公開処刑。そしてカップル達の祭典だ。

もてない男子に出来ることは義理チョコという救済処置に全力を尽くし精神を守ることしか出来ない。俺の横で自分を抱きしめ妄想に浸っている猿山もその1人ということだ。

「日本ってそういうイベント好きだよな」

「そーいう自分だって紙袋なんて用意しやがって、いーよな！貰える奴はさ！」

右手に持つ紙袋を見て猿山が声を荒立てる。

この紙袋は、さっき学校へ行く時に「全部持って帰ってきなさい。私が検査するから。」と無理矢理御門に持たされたものだ。

こんなもの持たされるほど女子達に人気があるわけじゃないし精々里沙と未央に義理チョコを貰うぐらいだろう。

一昨日チョコならホワイトとビターどっちが好き？と言われてどっちも好きと答えたし…これで貰えなかったら堪えるぜ…なんちって。

なんてくだらないことを考えている間に学校に着いた。
ゲタ箱へ行こうとすると、

「あら、有里ではありませんか」

「ん、おはよう」

仁王立ちで腕を組んだ紗姫に話しかけられた。後ろにはいつものように綾と凜を従えている。少し違うのは綾は照れくさそうに、凜はムスツとしているところだろうか。

「けっ、見せ付けやがって。俺は先に行ってるからな」

「おお、そんなに睨むなよ」

「あなた、今日はチョコを貰ったかしら？」

「いや貰ってないけど」

「そう、貰っていないのね。光栄に思いなさい！あなたの最初のチョコレートはこの私が上げますわ！」

おほほほほと高笑いと共に綾と凜が運んできたのはウェディングケーキでも入っているようなバカでかい箱。

この中身全部チョコレートだとしたらとんでもない量だろう・・・食べきったらどこかしら具合悪くなりそうだ。

腰ほどの高さのあるそれを見ながらどうやって食べきろうか考えていると、

「あの…これ、私から・・・」

「これは私から。勘違いするな、義理だ」

綾と凜からもチョコを貰った。綾のはピンク色にハートが散らばった包装紙にリボンが可愛く添えられている。よく知らないけど、これぞバレンタインチョコって感じがした。

その点凜がくれたのはみんな大好きチョコレート。義理以外の何物でもない、これで何を勘違いしろというのか。

「ありがとう。貰ってみると結構気恥ずかしくて嬉しいものなんだなあ。お返しは任せてくれ」

「当然ですわ！忘れたりしたら承知しませんからね。綾、凜。行き

ますわよ!」

「あの…口に合わなかったら処分してくれても……失礼します。」

「全て残すなよ……」

立ち去る3人の後姿を見送りながら綾と凜のチョコを紙袋へしまう。

「これどうやって教室まで持ってこう…持ってつてもいいのか?」

紗姫のチョコレートはとりあえず保健室へ放課後まで置いておく事にした。あそこは御門の縄張りなので文句を言われることは無いだろう。

保健室に御門がいなかったのが少し気になったがどうせまたどこかでサボっているんだろう。朝はちゃんと起きて一緒に朝ごはんを食べたので出勤してるのは間違いないはず。保健室も開いてたし。

保健室を後にして教室へ向かう。

ガララツと聞きなれた扉の音を聞きつつ教室の中に入ると、そこには地獄絵図と桃源郷が同居していた。

「な、なにこれ……?」

「ああ……ん……体が熱い……」

「はあ…ひう…んっ……」

「はあはあ…オレ実はお前のこと……」

「俺も……もし男と付き合うならお前にとって……」

なんと、クラスメイト達が男子同士・女子同士で抱き合って、という絡み合って発情していたのだ。

幸い服を脱いでいる輩は見当たらず精々はだけている程度だった。とはいえ普段一緒に勉強しているクラスメイトの女子達の痴態は嫌でも興奮を誘う。そして親しい男子達の絡み合いに気分が悪くなる。これは精神衛生上非常によろしくない。

「おい、リト！なんだこれ？みんな発情期が来ちゃったのか？」

「あ…ああ有里か…地球人に発情期なんてねーよ。みんなララのチョコ食べた途端こうなっちゃって…」

確かにララは昨日から「みんなにチョコ配るから楽しみにしててね！」とクラスメイト達に公言していた。

朝来てみんなに配ったんだろう。包み紙みたいなものがそこら中に落ちている。

おそらく宇宙的な何かをチョコに混ぜたんじゃないだろうか・・・地球にも媚薬と呼ばれるものがあるらしいがここまでおかしくはならないだろう。

ん……？薬？……いやまさか……でもあのバカのことなら…。

「キャ——ッ！」

「西連寺！！」

叫び声の上がった方を見ると、西連寺が発情した男子達に囲まれていた。

すぐさまオレとリトは西連寺の元へ駆け出す。

「正氣に戻れ！生徒H！」

「うぼるあ！」

「こっち！」

「結城くん！雪ヶ岡君！」

今にもズボンを下ろそうとしている普段はとても優しくペットのインコの写真を逐一オレに見せてくれる生徒Hにとび蹴りをかます。飛ばされた生徒H君は周りの男子生徒達を巻き込んでみんなして倒れた。

その隙にリトが西連寺へ手を伸ばし教室の外へと連れ出す。

「西連寺はリトに任せればいいけど……先生が来るまでにこれを何とかしなきゃまずいな。」

教室の中は2月だというのにむせ返るような熱気に包まれている。クラスメイト達の貞操を守るため沈静せねば。

「ゆ、雪ヶ岡ってよく見るとか…可愛い顔してるよな……」

「はあ……はあはあ……確かにうまそうな尻だぜ……」

「ズズズボンが…邪魔だよな……」

「へへへ……こうなったら皆でむいちま」

「近寄るんじやねええええええええええ！」

さっきまで西連寺に迫っていた連中が今度はオレのところに向かってきやがった。

身の危険を感じたのと、気持ち悪かったのでそいつらを全員蹴り飛ばす。ついでに万が一の間違いが起きないように教室中の男子に首当てをして意識を刈り取った。

「これでよし、次はララか。おいララ大丈夫……夫というか見ても大丈夫?」

「有里っちー助けてーリサリサとミオミオがー……」

思わず目を背けてしまった。いや紳士としてはこれを凝視してはいけない。

なれならば、ララは里沙と未央に絡まれてYシャツだけに、そしてそのYシャツもボタンが全て開けられた状態になっていたからだ。里沙と未央も例によっておかしくなっていて熱い吐息を口から零しながらララに擦り寄っている。

「おい離れなさい、婚前の女子がこんなはしたない」

出来るだけ見ないようにしながらララの足にしがみ付く里沙と未央をひっぺがす。

「ララ、今のうちに行け!」

「ありがとーゆりっちーペケ!復元!」

よろよろと立ち上がったララがペケに一声掛けると一瞬にして彩南高校の制服が復元された。

「これでよし!あ、私リト探してこなきゃ!」

「は？・・・おい！どこ行くんだよ！」

軽快な走りで教室から出て行くララを追いかけてみたが足が動かない。それどころか後ろから誰かに抱きつかれ教室の床に倒れてしまう。

「なんだ!？」

「ゆりっちーやつときたあ……」

「おそいんだもーん…ゆりっちーゆりっちっ」

足を見てみると里沙と未央がララにしていたように絡み付いてきていた。ララにしていた時よりもねちっこく。

「おいやめろ！正氣に戻れ！……って何かズボン脱がそうとしてません!？」

2人は熱病に犯されたような目をしながらカチャカチャとオレのベルトを触り始める。さすがにこれはまずい。2人には悪いが氣を失ってもらわねばオレの貞操が!!

と手を振り上げようとするも今度は手が動かない。それもそのはず、

「雪ヶ岡君…雪ヶ岡君……」

「すごい……雪ヶ岡くん肌すべすべ……それに綺麗……」

いつの間にか1学期の時にシャーペンの芯を貰って以来時々話すようになった女子生徒Yと家がパン屋を経営しておりオレが惣菜パン

を買いにいくといつもおまけしてくれる看板娘の女子生徒Eが腕に乗っかっていたのだ。

無理矢理どかそうと腕を動かしてみたが女子生徒達の力と重さは思ったより強く振りほどけない。
というか腕を動かすたびに、

「や……動かしちゃだめ……」

「雪ヶ岡君のえっち……」

なんて潤んだ目で言われてしまったらオレにはもうどうすることも出来ない。

気付けばクラスの女子全員がオレの周りに囲いを作っている。もはや逃げ道も無くなった……。

ベルトが外されズボンに手が掛けられる。オレにはもう抵抗する術は残されていない。

女子達の興奮が明らかに高まっていく。向こうでのびている男子達からすればまさに天国なんだろう。オレにとっては地獄だよ……。

目を閉じ心の中で覚悟を決める。さらばぐっばいオレの貞操。しかし後悔などするものか……オレはクラスメイトの男子達の貞操を守る事ができたんだ。

きっと彼らが知ったらオレを■す勢いで殴りかかって来るんだろうけど……だがそれでも、オレは仲間達を守ったんだ。

猿山……オレは先に行くよ。一緒に上ろうぜといった大人の階段の約束、ごめんな……オレその階段もう上ったことあるんだ……お前の真面目な顔見たら言い出せなかったんだ。ごめんな。

そしてリト……西連寺とうまくやれよ——お前最近ララのことも
気になってるらしいけど、うまくやるんだぞ……。お前がどっちを選
んでも、オレは味方だぜ……。

というかまだズボン脱がされてないぞ……焦らしプレイか？

そこでやっとなさっきまでうるさいくらいに聞こえていた嬌声が聞こ
えなくなっていたことに気付いた。

恐る恐る目を開けてみると、飛び込んでくるのは首まで真っ赤にし
ている女子達の顔。

何十という瞳がオレを見つめたまま固まっている。もしかして…？

スウウウウと息を吸う音がする。これから起こることが解るが耳
を塞ごうにも手が動かない。そして、

『『きゃあああああああああああああああ……！』』

『』

クラスメイトの女子ほぼ全員の叫び声が教室中に、学校中に響き渡
った。

そして浴びせられるビンタの嵐。避けることも逃げることも叶わず
出来ることはただじっと耐えることだけだった。

……。

……。

その後帰ってきたリト達によって騒動の原因が話された。

案の定というべきカララが御門に貰った薬草をつかってチョコを作

ったのが原因だったらしい。

発情していた時のことを皆よく覚えていないらしく女子達全員に謝られてしまった。いわく恥ずかしさだけが残っていて、思わず殴ってしまったらしい。

お詫びと称してみんなからチョコを貰った。あっという間に紙袋が一杯になって溢れかえってしまったが、紙袋の中にさらにもう1枚折りたたんだ紙袋が入っていた。まるでこうなったことを予期していたかのような用意周到さにゾツとする。結果として助かったから何ともいえないけど・・・。

他の男子生徒達の舌打ちから逃げるように帰路に着く。

家についてポストを開けると美柑からのチョコが入っていた。メッセーじカード付きで包装もかなり凝った感じで非常に気合が入っている。

それを大事にしまいながら家へと入ると玄関に懐かしい黒のブーツが置いてあった。御門の靴はヒールばかりだしオレのはスニーカー。この家のものでこんなブーツを履くものは居ない。ならば何故懐かしいのか――答えは簡単、このブーツはオレが買ってあげたものだしこのブーツに何度も蹴られたことがあるからだ。

なるべく壁を背にし奇襲を警戒しながら自室へ入る。いつもはネクタイや制服を脱ぎながら顔からダイブするベットのの上に、予想通り金色の闇ことヤミが座って本を読んでいた。

「何してんの？」

「見て解りませんか。それなら言っても解らないでしょうね」

「そうか、じゃあ何でオレの部屋のベットの上でオレのまだ呼んでいないミステリー小説を読んでいらっしやるのですか？」

「読んではいませんが、今読み終わりました。犯人が友人の広田だったとは驚きです」

「何だと…料理長の横島が包丁を落としたのはひっかけだったのか…っていうか言うなよ。もう楽しめないよ。」

「そうですか、それではこれはお詫びです。」

そう言ってヤミが紙袋を渡してくれる。受け取ってみると袋はまだ暖かく香ばしい香りがしてきた。

「それでは私はこれで」

「え？——ああうん。それじゃまた」

目的は達したのかまだ読んでいないミステリー小説を持ったままヤミがスタスタと部屋から出て行ってしまった。これであの小説のトリックは迷宮入り決定だ。買いなおすのも何だかバカらしいし。

「鯛焼きか……この匂い、チョコ味か。」

貰った紙袋を開けてみると美味しそうな鯛焼きが3匹入っていた。香り立つそれはあんこの凄艶とした匂いでなくどこか苦味を帯びたカカオの匂いだった。

「あいつ、今日のこと知ってたのか」

地球に来てまだ1月も経っていないのにバレンタインのことなんて知ってるはずも無いか。さしずめあんこと間違えて買ってしまっ

食べられないからくれたって所だろう。

いつもの様にネクタイを緩めながら制服のボタンを外す。ベツトに寝転がりながら鯛焼きをひとつ取り出して食べてみた。

あんことは違う渋めの甘みを生地が上手に包み込んでいて美味しい。チョコがぎつしり詰まっているのも贅沢さがあって嬉しいポイントだ。さすが鯛焼き屋を探して歩き回っているだけあってなかなか選び抜かれた一品らしい。

しかしどうにも3つというのはいささかボリュームがありすぎる。甘いものは嫌いじゃないけどあくまで人並み。さすがにこれだけでは厳しいものがある。

御門が帰ってきたらお仕置きがてらコーヒーでも入れさせるか。なんて考えながら二つ目の鯛焼きをくわえ、山のように貰ってしまったチョコレートをいかようにして食べるか。そして

「1ヶ月後はホワイトデーか。日本って国はどうしてこう桃色のイベントが多いのかね」

3月14日にある3倍返しなんていう不条理な常識に。ビターチョコのようなほろ苦い気分になるのだった。

スケート ―滑ったのは氷の瞳―

布団の中というぬくもり空間に包まれながら惰眠をむさぼっている
と怒声のような電子音が乾燥した空気にピロピロと鳴り響いた。

けたたましく喚く携帯電話をひったくるように掴み適当にボタンを
押す。

購入時のまま何の変更もされていない”メール音2”が鳴り止んだ。
暦の上では春になっているとはいえまだまだ冬真っ盛り。亀のよう
に布団から出していた手を引っ込めぬくもり空間の中で携帯を開く。

液晶に表示されたデジタル時計を見るとまだ八時。平日ならすでに
学校へと歩いている時間だが休日の朝ならば二の句もつけず二度寝
する時間帯だ。

携帯の小さくて打ちづらいボタンに寝起きも相まって若干のイラッ
きを感じながらもメールを開いた。

差出人は美柑からで内容はなんともあっさり、

「今日スケート行くから1時にスケート場に集合ね」

とだけ書かれている。普通こういう遊びのお誘いは「起きてる？」

「今日暇？」「スケートに行くんだけど一緒に来ない？」「じゃあ
1時にスケート場に集合ね。」

という段階を踏むのが正解のはず。その工程を省きまくってさなが
ら業務連絡のような通知に恐れすら抱く。文句の付け入る隙が見当
たらない。

とはいえ今日は昼から久しぶりにのんびりと読書でもしようと思っ
ていたオレの休日計画もある。そして夜にはチョコレート作りだ。
その旨を遺憾の意で味付けしつつ返信しようと思ったところで送ら
れてきたメールの件名を見てみた。

件名…来ないとバラす

これは一体どういうことだろう。知らないうちに美柑に弱みを握られていたのか…：それとも行かないとバラバラにされてしまうのか。もしオレがやましい事など一切せず清廉潔白な人物だったらこんな脅し文句屁でもなかっただろう。――つまりオレには効果覲面ということな訳だ。

先ほどまで頭の中で組み立てていた不平不満の文章を消去し一言「了解」とだけ打って返信をする。小学生にしてこの人身掌握術、未恐ろしい…。

そしてまたぬくもり空間の中で猫のように丸くなって惰眠を再開しようとする。がどうにも目が冴えてしまっていて眠れない。

このまま布団の中でごろごろしているのもそれはそれで至福の一時だが、先ほどから微かに漂ってくる食パンの焼けた香ばしい匂いが食欲を掻き立ててくる。食欲が睡眠欲を上回ったので仕方なく起きることにした。

潔く布団を跳ね除ける。Tシャツ1枚では肌寒かったので近くに脱ぎ捨ててあったパーカーを着込む。洗面所にのそのそと歩いていつて冷水のまま顔を洗う。突き刺すような冷たさでやっと頭が覚めた。歯も磨いてちよっとカッコいい感じで立ってしまったている寝癖を適当に直す。普段髪をセットするときにはあんまり立ってくれないのに、寝癖のときばかり頑固に形状記憶しようとする髪の毛にうんざりしつつ、結果ただ髪の毛を濡らしただけで寝癖状態のままリビングへ行く。

扉を開いてまず目に入っただのはオレの席に座って朝食を取っているヤミの姿だった。

「なんでヤミがいるの？」

「私がここで朝食をとるのがおかしいですか？」

「いや、別におかしくは無いけど」

「あら早いね。おはよう」

「おはよう、オレのは？」

「キッチンにあるわ」

言われたとおりキッチンを見てみるとトレイにパンと目玉焼きにソーセージ、サラダにオレンジジュースと洋風の朝食。まるでホテルで朝出されるようなメニューだ。

この家の決まりで平日の食事当番は交代で、休日は先に起きた方がもしくは食べたい方が作るということになっている。

夕食なんかはお互い和洋中色々作るが、朝食に限ってはオレは和食・御門が洋食。となぜか決まっている。

本当に理由なんか無くてただ何となく。気付けばそれが習慣化していた。

「なんでヤミがオレの席に座ってんの？」

「私に床で這いつくばって食べろということですか。また猫扱いですか？」

「そんなこと言っていないけど」

ヤミが氷のような瞳でこちらを見ながら自分の朝食をのせたトレイを持って席から立つ。申し訳なさど居心地の悪さを感じながらも自分の席に座るとさも当然のようにヤミがオレの膝の上に座った。

「あの、ヤミさん？」

「なんですか、私に床で這い蹲って食べろというのですか」

「そんなこと思ってもいませんけど」

有無を言わせぬ勢いに飲まれヤミを膝に乗せたまま朝食をとる。これは経験した人しか解らないだろうが、膝に人に乗せたままの食事というのはすごく難しい。食べかすを落とさないようにしないとしお皿を取るにも四苦八苦だ。

「あの、どいてくれない？」

「静かにしてくださいテレビの音が聞こえません」

「そういう台詞はテレビをつけてから言えよ」

「有里、朝食の時は静かにしてっていつてるでしょう。テレビの音が聞こえないわ」

「そういう台詞はテレビを買ってから言えよ」

このリビングにはテレビは置いていない。御門の「食事の時は会話を楽しみましょう」という言葉に関心してしまったからだが実際の

ところ買うのがめんどくさいだけだろう。あと配線も。

「今日昼から美柑達とスケート行って来るから」

「そう。ちょうど私も他の星へ薬草を採りに行くつもりだったから」

「じゃあここ留守になるのか。鍵忘れないようにしなきゃな」

「—————そうね」

御門の含みのある返答に若干の不安を感じながらもその場は流した。朝食も終わり昼まで結構な時間があつたので自室のベットに寝転がりながら綾おすすめの恋愛小説を読む。

またどこぞであるような恋人が病気になってあーだーこーだとかそういうものかと思いきや日常的な情景で展開されるほろ苦い青春劇に読みふけてしまった。

2巻を読み終え3巻を手にとるといつの間にか横で座って1巻を読むヤミに気付いた。とはいえお互い小説に集中しきっていたので特に会話も無く、壁時計の針の音だけが静かな部屋に響いていた。

.....

.....

.....

「いやー面白かった。まさか恋愛小説で泣いてしまうとは」

全12巻を読み終わり疲れた目に指を当てながら目尻に浮かんだ涙を拭う。心地よい虚脱感が心臓の周りにうごめいている感覚がある。

最後のシーンを思い出すとまた目頭が熱くなってくるのが解った。やっぱり青春っていいなあ・・・若いってのはいいよなあ・・・オレも高校に通ってるんだからああいう出会いやイベントがしてみたいな。とさっきまで読んでいた小説の登場人物に自分を当てはめ妄想する。

「いかん、こんなことじゃまた御門に笑われる」

以前推理ものの小説にはまっていた時「オレの靴下が無くなった、犯人はこの中に居る」なんて影響されて言っていた時期があった。時代劇ものを読めば刀を欲しかったり、マフィアものを読めば葉巻を吸いたがったり、医療ものを読めば御門のメスを持ち出したり。

そんなオレをうざがった御門に「有里ってすぐ影響されるわよね」と鼻で笑われてその晩は枕を悔し恥ずかし涙で濡らしたのだ。

あの時の御門の嘲笑は今でも鮮明に思い出せる。

「にしてもすっかり読み込んだな…今何時だ？」

時間を携帯で確認しようと枕元を探してみるが見つからない。仕方なく部屋に掛けてある壁時計を見やる。

「は？さ…三時？」

見るからに古臭い、よく言えばアンティークのような壁時計の短針は数字の3を。そして長針は1と2の間を指し示していた。

デジタル時計で言えば15…06分といったところだろうか。

オレは跳ねるようにベットから飛び起き携帯を探す。記憶が確かなら待ち合わせの時間は一時。この壁時計の時間が狂っていなければ

もしくはオレの視力が活字の読みすぎで低下していなければ時刻は三時。

遅刻なんてものじゃない。これはもう無断欠勤だ。

「やばいやばいやばいやばい。携帯！携帯どこだ！？」

枕や布団を投げ飛ばしながら携帯を探すも出てこない。おそらく美柑やリト達から電話かメールが来ているはずだ。そしてオレはまだ壁時計の電池切れの可能性を捨てきったわけではない。

「あのうるさいやつですか。それなら折ってゴミ箱に入れておきました」

「ぎゃああああホントにへし折ってある！なんでだよ……」

ベットに座って7巻を読み始めていたヤミが言うとおりのゴミ箱を覗いてみるとそこには見事に液晶とボタン部分が分裂しているマイ携帯電話があった。電源ボタンを押してみるが当然付くはずもなく、真っ暗な液晶画面に映った自分の情けない面が物悲しかった。

「どうしよう……そうかつ腕時計！」

ヤミから小説を取り上げて小一時間説教してやろうかと思ったがそんな余裕はない。むしろオレも美柑の説教を待つ身なのでそんな権利もない。

なんとか時刻を確認せねばと思考を巡らせたところ、愛用の腕時計の存在を思い出した。

オレはすぐさまベットの横にある棚を開けてみるがいつもなら大事に置かれているはずの時計の姿が見当たらない。

あれ？確かに昨日ここに置いたはずなのになの他の引き出しもあけ

て調べていると、

「そこにあつた時計ならドクター御門がつけていましたよ」

と視線は小説の文字を追いながらヤミが言う。つまりオレの時計は今宇宙のどこかにあるということか・・・。

「なんなんだよ、お前らなんなんだよ……」

「ちなみに時刻は15時27分です」

「お前……ホントなんなんだよ……」

携帯は壊されるし時計は勝手に持つてかれるしあつさり現時刻を教えられるし案の定大遅刻っていうか無断欠席だし。

「へらへら他の人と遊ぼうとしているからです」

「ん？何か言ったか？」

「私はあなたを許していないと言いました」

いつもの無表情な面にほんの少し不機嫌を浮かべたままた小説を読み続けるヤミ。さっきからページが進んでいないようだがそれを言うともた怒られそうだ。機嫌の悪い理由もどうやらオレにあるらしいし。

「今から行っても間に合わないよなあ……ちようど明日はホワイトデーだしチョコ持って謝りに行くか」

連絡手段も無いし一晩経てば美柑様の怒りも収まるだろう。そして今日の夜からやろうと思っていたチョコ作りを今からやれば、より美柑様を喜ばせられるような対策もとい大作が出来上がるに違い無い。

そう自分に言い聞かせながら台所へと向かうのだった。

オレンジ色のホワイトデー

オレがバレンタインの時に貰ったチョコレートは全部で25個。

猿山に羽交い絞めにされて嫌々白状させられた挙句、お前なんかとは絶好だ！と言われたのがまだ記憶に新しい。次の日には一緒に昼ごはんを食べてたけど。

猿山やリトが言うには貰いすぎにあたる量らしい。とはいっても貰ったものの殆どが、日ごろの感謝のチョコだったり、あの時の騒動のお詫びのチョコだ。

というようなことを御門にも言ったら注射器が飛んできた。どうやらムカつかせてしまったらしい。曰く、

「お詫びのチョコレートが名前入りでハート型なわけじゃない」

とのこと。よく解らないけど、バレンタインに上げるチョコは普通ハート型じゃないのか？テレビで流れてるCMとかでも全部ハートの形だし。と思ったがまた注射器が飛んできそうだったので黙っていた。

その御門からはすこし不恰好なハートのホワイトチョコレートを貰った。料理は割りと上手にできるがお菓子作りはそうはいかなかったらしい。渡す時に照れくさそうにそっぽを向いていたのを、少し可愛いなんて思ってしまったのが悔しい。

案の定食べてみたら体が痺れるし動けなくなるし意識は遠のくし気付いたらベットで寝てたし。これだから女って怖い。悔しい。

……改めて、貰ったチョコは25個。つまりお返しも25個用意しなくてはならない。

全員同じものを用意してもいいが、今日のこともあるし美柑のものは気合を入れなくてはならないだろう。御門やヤミは昔馴染みだし手を抜いたら怒られそうだ。沙姫からはでっかいのを貰ったし綾のチョコはオレの名前も入っていてとても丁寧に作られて嬉しかった。となると凜だけ簡単に…というのも可哀想だ。里紗・未央はクラスで仲良くしてもらってるし日ごろの感謝も込めなくては…。

「とはいえこれはちょっと頑張りすぎちゃったかな……」

オレの目の前に並んでいるのは、どこかの洋菓子専門店で売られていてもおかしくないような立派なケーキ達と、山のように作られたハート型のクッキーだった。

時刻はもう夜の八時。大体四時間ぐらいかかっただろうか。大量に買い込んでおいた薄力粉や卵や砂糖が全部空になってしまった。特売だったからと余分に買いすぎてしまったがまさか使い切るようになるうとは……。

本当は全員分のケーキを作ろうと思ったが材料も時間も足りずクラスメイトの女子達にはクッキーを、ということにした。差を付けるみたいで少し抵抗があったがその分可愛いラッピングをほどこすつもりだし一言そえたメッセージカードも準備済みだ。

「いやそれにしても……我ながら素晴らしい出来だ」

再度、並べられたケーキ達を眺める。御門・ヤミ用のザッハトルテ。スポンジにチョコレートが被せてあり一見するとバカでかいチョコの塊のようだ。しかし中はしっとり系のスポンジとチョコチップが散りばめられている。そしてなにより名前が良い。ザッハ・トルテ。必殺技か都市の名前みたいだ。

紗姫・綾・凜のは普通の苺のケーキ。チョコじゃねーじゃんとも思

ったがホワイトデーなので白いケーキでも有りか。というか自分が食べたくて作ったただけだけど。

里沙と未央のはチーズケーキ。以前美柑と一緒にいったケーキ屋さんのチーズケーキが美味しかったことを思い出して自分でも作りたくなってしまった。味見したところお店のものには及ばないがそれなりに美味しいものができて満足。

そして美柑の蜜柑タルト。これもケーキ屋さんで食べて感動してしまい思わずレシピを聞いてあったものをこの機会に作ってみた。クリームチーズが入っているのがポイントでこれが蜜柑の酸味と抜群にあってたまらなく美味しい。

これならきつと喜んでもらえるはずだ。そして許してもらえるはずだ。

形が崩れないように注意しながら一つ一つを箱にしまっていく。それをさらに包装紙で包みハートのシールで止めて完成。

うちの冷蔵庫は宇宙製の特別製でどんなものでも一万年は保存できるという謳い文句から万年冷蔵庫と呼ばれている。これに入れておけば明日渡しても味に遜色はないはずだ。

同じようにクッキー達も小箱につめて冷蔵庫へ。そして残ったのは割れてしまったクッキー達。大量に作れば不恰好に出来てしまうものや脆いものが出てきてしまうのは仕方がない。細かく砕いてチーズケーキの下に引けばよかったと今になって思いついたがもう遅い。

「食べるしかないか……コーヒーいれよ」

「すごい甘い匂いですね」

クッキーを食べつくす覚悟を決め、コーヒーを入れていると、小説を片手に持ったヤミがやってきた。

どうやら今読み終わったらしい。疲れたのか目をコシコシと擦っている。

「ちょうど良かった。はいヤミ、あーん」

「ん、なんですむぐっ」

何か言おうとしていたヤミの口へクッキーを放り込む。一瞬むっとした顔をしたがもぐもぐするとすぐ笑顔に変わった。とは言っても傍から見れば普段通りのぶっちゃよう面だけど。

「はい、次……ほい、次……もいっちょ」

ヤミが飲み込むや否や次のクッキーを食べさせる。ヤミがもぐもぐと噛んでいる間にもう一人分のコーヒーを用意して自分もクッキーを食べる。

二人してもくもくと食べ進め、御門が帰ってきた頃には山積みになっていたクッキーはオレとヤミのお腹の中へ収まっていたのだった。

・・・。

・・・。

翌日。

日がまだ昇りきっておらず、肌にあたる風が少し冷たい。散歩しているコーギーを横目で眺めつつ春服のポケットに両手をつっ込んだ。道端に咲く梅が春の訪れを教えてくれている。

右のポケットに物を入れていたことに気付き取り出してみる。それはライターほどの小さな機械で赤いボタンがついている。これは小

型転送機といって万年冷蔵庫に入っているものを一瞬で手元に持ってくる事が出来るらしい。おかげで大量のケーキを保冷剤と共に背負って歩かずに済んでいる。こんな便利なものがあると知ったのはつい1時間前のことだった。

・・・。

「二人ともこれ、バレンタインのお返し」

いつもどおりの朝食の席。倉庫から引っ張り出してきた椅子に座って一緒に朝食をとるヤミはすっかりこの家の子。といった感じだった。

朝食が終わり片付けも済ませた後ののんびりとした一服の時間に、少々早いかもしれないが二人にケーキを手渡した。二人とも

「ケーキ一個なんて食べきれないわ」

「お返しは鯛焼きだと思ってました」

なんて言いながら抱えるように大事に受け取ってくれた。口に出しては言わなかったがその表情から嬉しさが伝わってきて、渡した本人としても非常に嬉しい。

二人ともすぐに箱を持ったままどこかへ行ってしまったがもしかしたら今から食べるのかもしれない。朝食をとったばかりだというのに、これが世に聞く甘いものは別腹というやつだろうか。女の子ですごくいい。

初めてのホワイトデーの出だしが好調で終ったことに満足し、鼻唄

まじりで食後のコーヒーをすすっていると袖を引っ張られていることに気付いた。

振り返ってみるとそこには罰の悪そうに俯くヤミの姿。

「なに、どうしたの」

「これを」

そういつてヤミが差し出したのは小さな機械。ライターに赤いボタンをくつつけたようなそれをオレが差し出した手の上に落とす。

「なにこれ？」

「転送機です。これがあればどこにいても冷蔵庫の者をすぐに手元に持つてくることができます」

「そいつは便利。どうしてこれをオレに？」

「ドクターから携帯電話の重要性を聞きました」

なるほど、どうやらこれは携帯を壊してしまったお詫びということらしい。ヤミなりに申し訳ないと思っていたということか。それにしてもこんなもの冷蔵庫のオプションについてたかな？御門が持ってたか……もしかすると自分で作ったか。

「それでは失礼します」

用件は済んだというように小さく頭を下げてヤミが走り去る。

一人残されたオレは試しに転送機のボタンを押してみる。するとポンツと空気の抜けた音がして昨日作ったケーキが手の上に手品のよ

うに出現した。

「想像したものがでてくるのか。こんな便利なものがあったとは知らなかった……いやそれにしても便利だ」

これがあればピクニックに大きなバスケットを持っていくことも、運動会に大きなお弁当箱を持っていくことも無くなるという事か。便利。

よし、善は急げだ。さっそくみんなに渡しにいこう。

・・・。

なんて意気込んで出てきたものの理沙・未央や紗姫達の家なんていったことが無いしドコにあるかも知らない。

携帯番号とメールアドレスは知っていたのだが肝心の携帯が無い。解るのは美柑のいる結城家だけ。

ということで今は結城家を目指して歩いている。休日の朝とあって人通りが少なく時折車がいくつか通るだけだ。

何度も通りなれた道を一人ほのぼの歩いていると少し先の方に黒塗りの車が止まっているのが見える。

近づいてみるとどうやらタイヤが路肩にはまってしまったらしい。この辺りの道は狭く慣れていない運転手だと壁に突撃したり、こうして路肩に落ちてしまうことがよくあるのだ。

一度見てしまったら知らぬ存ぜぬで通り過ぎるのも味気ない。車の

横に立ち困っている人に声を掛けてみると、

「タイヤがはまってしましまして……あら？有里ではありませんか」

「なんだ紗姫か。こんなところで会うなんてね」

そこに居たのは天条院紗姫その人だった。道理でこの辺りでは珍しい高級車だと思った。

「よし、ここはオレに任せろ。紗姫と運転手さんは下がっててください」

「な…なにをなさる気？」

腕まくりをするオレをいぶかしみながら紗姫と運転手さんは車から離れてくれる。

それを確認したオレは両腕とお腹に力を込めつつ車の横へとしゃがみ、

「おందりゃ！」

掛け声と共に車を持ち上げた。意外と軽かったことに驚く。高級車って軽くて丈夫な素材とかできているんだろうか。

どこへ降ろそうか聞こうと紗姫達を見ると運転手さんは口を開けてポカンとしているし紗姫はほんのり頬を染めてこちらをじっと見つめている。

「……ここ降ろしますね」

どうすればいいか解らなかったがとりあえず道路の真ん中へそつと車を降ろす。

そこでやっと我に返った運転手さんが車に乗り込みエンジンをかける。どうやら無事動くらしい。窓ガラスを開けて帽子の鍔を掴んでペコリと小さく会釈をしてくれた。寡黙な人なのかな。

「おおそうだと忘れるところだった。紗姫紗姫、これバレンタインの時のお返し。綾と凜の分もあるから悪いけど渡しておいて欲しいな。量はあれだったけど美味しかったよ、綾たちにもそう伝えておいて。それじゃオレ急ぐから、またな！」

周りにちらほらと野次馬が集まってきてしまいあまり目立ちたくなかったので、転送機からポポポンとケーキを取り出すとそれを今だ惚けている紗姫に渡した。一瞬チラと手渡された三つの箱を見た紗姫が再度オレの方を向いて熱い視線を送ってくる。その瞳が御門が絡んでくる時のそれを見たオレは挨拶もそこそこにその場を後にした。

・・・。

・・・。

「おはよーみかーん、リトー。いるかー？」

数分ほど歩いて結城家へ着くと、いつもなら連絡をしてあるので勝手に玄関から入るのが今日はそれが無い。当然玄関も鍵が閉めてありこうして外から声を掛けているのだが一向に反応が返ってこない。

どうしたものかと悩んでいると玄関の扉から鍵の開く音がする。そして小さく開いた扉からリトが顔を覗かせた。

「有里か？」

「リト！美柑に謝りたくて、あと渡したいものがあって来たんだけど」

「お前なんでスケート来なかったんだよ！昨日から美柑のやつすげー機嫌悪いんだぞ！オレに当たるわ飯はまづくなるわで……」

玄関から飛び出すように出てきたリトが凄まじい迫力でそう捲くし立てる。明日バレンタインのお返しを持って謝りに行けばいいや、なんていい訳のせいで美柑を悲しませ、リトにも迷惑をかけてしまったらしい。自分のダメっぷりに自己嫌悪する。

「ごめん、リトにも迷惑かけたな。美柑は部屋？」

「多分部屋、起きてると思うぞ。……それと、オレは……お前が女だったとしても友達だからな！」

「は……？何言ってたリト」

「え？だって美柑が、実は有里って女の子だったんだよって教えてくれたんだけど……」

「一緒に風呂入ったことのあるお前がそんなの信じてんじゃねーよ！」

メールで言っていた「バラす」というのはこの事だったのか。さしずめ女顔を気にしているオレに対する美柑の仕返しといった感じだろうか。それにしても裸の付き合いを何度もしているくせにリトの奴はこんな簡単に騙されて……親友として将来が心配になるよ。

小首を傾げて「そーいえばそうか」なんてあっけらかんと呟くりトを尻目に結城家へと入る。

いつもなら美柑がアイスを舐めつついらっしやいと出迎えてくれるのだが、今日はそれが無い。台所をチラと覗いてみれば昨日の夕食と今日の朝食の食器が積まれていた。まな板や包丁すら放り出されているのを見るとかなりイラついていたことが解る。

パンチやビンタの一つや二つは覚悟しながら静かに階段を昇り、みかんと書かれた可愛らしいプレートがぶらさがっている扉を二回ノックした。

「どうぞ」

小学生とは思えないような重みのある声が扉の向こう側から響く。冷たい汗が背筋を通るのを感じ唾を小さく飲み込みながらドアノブをひねる。

そこには少女が一人座っていた。

「座って」

「っは……ご尊顔を拝謁承れて恐悦至極にございます」

「その喋り方むかつく」

「ごめんなさい」

「……どうしてスケートに来なかったの」

「ごめんなさい」

「……どうして携帯の電源切ってたの」

「ごめんなさい」

「いい訳は？」

「ごめんなさい」

「むかつく」

「ごめんなさい」

ベットの^上、ぬいぐるみを抱え顔をうずめながら、覗く瞳がこちらを射抜く。オレンジ色のカーペットに額を擦りつけて謝りながらキーキの入った箱を差し出す。

「…なにこれ？」

「美柑のために作った蜜柑タルト。良かったら食べて」

「……今食べる」

「ん、ちょっと待ってて」

すぐさま一階へ降りケーキを切り分け小皿とフォークを片手にまた美柑の部屋へと戻る。

ベッドの上にいた美柑がいつの間にかテーブルの前に移動していた。それにならってオレもテーブルの横へ座りケーキを取り分け美柑に

渡そうとすると、

「食べさせて」

さつきよりかは朗らかになった顔で言われた。ちょっと席を離れた数分の間に何か良いことでもあったのだろうか。オレのような唐変木には知るすべはない。

「えっと……じゃあこれ、あーん」

「あー、んぐ……おいひい」

「それはよかった」

フォークに刺したタルトを美柑の小さな口へ放り込むと、これまた小さな顔をもくもく動かしてタルトを咀嚼する。

すっかり機嫌も良くなったようだし二口目、三口目を頬張る表情は笑顔そのものだ。

「改めてごめんな。代わりに今度どこでも連れてってあげるよ」

「……じゃあ有里さんの家行ってみよう」

「遊園地とかじゃなくて？ いいよ、今度ご招待してあげる」

「じゃあ許してあげる」

やっと許しをもらえたがいつ来られてもいいように部屋を綺麗にしておかなくてはいけなくなった。

普段ごろごろしている分にはそれほど汚くは無いが、なんせ来客と

いえばヤミぐらいしか来ない家なので細かい所に埃が溜まっていたりして汚れている。もうすぐ新学期だし心機一転大掃除するのもいいかもしれない。

その後、すっかり仲直りした美柑と二人でタルトを食べ紅茶を飲みまったりとした時間を過ごした。

携帯が壊れた話をするとうと美柑もちょうど最新のものに変えようとしていたらしく、二人で携帯ショップに行きお揃いの携帯電話を手に入れた。オレは色違いにしようと思っていたのだけど、美柑の強い希望で一緒のオレンジ色にすることになった。オレは黒色が良かったのに…。

次の日、学校に行ってケーキを配ると、

「ちょ、ゆりっちなにこれ気合入りすぎ。私への愛情のせいとか？」

「ダイエット中なのに……ゆりっちがくれた物だから食べるけど、今週はお菓子控えなきゃ」

と里沙と未央にも喜んでもらえた。クラス的女子達もクッキーを受け取ってくれたしバレンタインのお返しは大成功と言えそうだ。

・
・
・
・
・

「なあ、リトから聞いたんだけど……有里って……その……女なのか？」

「んなわけねーだろ、ぶつとばすぞエロ猿」

「言われてみれば中性的な顔だし……ゴクリ」

例えオレⅡ女説が男子の間で流行っていたとしても。大成功のはずだ。きっと。

闇の診療所

3月ともなると授業は自習とか消化試合のようなものばかりで、大多数の生徒達にとって授業は友達とお話しをするためのものとなっていた。その授業も午前中で終わってしまう、卒業生にとってはちょっとぴり寂しい期間。そして在校生にとっては小躍りしたくなるような期間。

その例に漏れずオレもリトと二人して廊下を歩きながら談笑に勤んでいた。

「図書室で何借りんの？」

「動物図鑑。親父が漫画でマントヒヒ描くからその資料用につて」

「親父さんの漫画は日に日にはっちゃんけてくなあ。それでも面白いんだからすごいよ」

リトの親父は何百万単位でコミックを売る人気漫画家で、クラスメイトの中にも熱狂的なファンが居る。

時々リトに頼まれてトーン貼りを手伝ったりするが一心不乱に筆を動かす親父さんの姿は、鬼気迫るものがありながらも漢といった感じだった。

当然資料研究にも余念が無く、自分が原稿で席を離れられないときはリトや美柑に頼んで図書館や本屋に参考資料をおつかいに行ってもらったりもしている。今日もその一環という訳だ。

「じゃ、図鑑借りて来るわ」

「ん、オレその辺適当にぶらぶらしてるよ」

図書室へ着くとリトが図鑑コーナーの方へ歩いていく。オレも折角だし何か借りるか、と小説コーナーへ足を進める。愛読本の続刊も出ていないし、こういう小さな機会に新しい本との出会いを模索するのも悪くない。図書室ならタダだし。

人気の無い小説コーナーを歩きながら惹かれる本は無いかと物色する。漫画とは違い表紙の絵とかで選べないので探すのが難しい。立ち読みをしようにもちよつと読んだだけでは解らないし長く読むには足腰が辛い。結局前評判や好きな作者に偏ってしまうのだが、こうやって題名だけで読む本を決めるのも醍醐味の一つだろう。面白いものに当たるのも自分に合わないものに当たるのも運と感性しだいだ。

読んだことのない自伝ものでもいつてみようかな、と本棚の前をうろうろしていると

「雪ヶ岡君？」

と後ろから声を掛けられた。てっきりオレとリトと図書委員さん以外は誰もいないと思ったがどうやらまだいたらしい。

振り返ってみるとそこには一冊の本を抱きかかえるようにして持っている綾が居た。

「なんだ綾もいたんだ。本借りにきたの？」

「うん、読みたい本があって……」

「ほほう。沙姫と凜は？一緒じゃないんだ」

「沙姫様は……体調が優れないということでお休みしていて凜はその付き添い……です。私は、その……凜が一人で大丈夫だから学校へ行っていると言ったので……」

どこへいくにも何をするにも三人一緒というイメージがあるので綾一人というのは結構珍しい。

「体調が優れないって、風邪？ お見舞いに行ったほうがいいかな」

「あ……病気ではないので……その……雪ヶ岡君が来ると……その……」

綾が何か言いにくそうに言葉を選んでいる。理由は解らないがオレに見舞いに来て欲しくないらしい。やっぱり風邪なのか？

「まあ凜がいるんだし、女の子の家に男が一人で上がるってのもあれだしね。お大事になって言っというて」

「はい……すみません……えっと、あの、本をお探しですか？」

話を切り替えようと、というよりは気分を害してしまったのでは、といった感じで綾が問いかけてくる。オレとしては無遠慮なこと言ってしまうってこちらこそ謝りたかったぐらいなんだけど。

「ちょっと衝動借りしてみようと思って。でもこれだけあるとどうにも……ね」

無駄に品揃えの良い我が彩南高校の図書室は、一部の読書家の生徒達に楽園と称されるほどレパートリーが豊富だ。

恋愛小説、というジャンルだけで本棚を三つを占領するほどの書物

があるし、各語辞典類や六法全書すら完備されている。当然目当ての本を探すだけでも一苦勞だし、適当に気に入った本でも借りようなんて気軽に考えているとどこから手をつけていいか解らない。

「あの…この本、前に読んで…とっても面白かったから…その、おすすめで…」

そう言って綾が抱きかかえていた本を差し出してくれる。どうやら悩んでいたオレを見かねておすすめを持ってきてくれたようだ。

彼女が以前教えてくれた恋愛小説は面白かったし、その選定眼は疑うべくも無い。綾が言うんだ、きっと名作なのだろう。

「ありがと、それじゃこれ借りて読んでみるよ」

「あ、いえ…お役に立てたなら…それでは失礼…します。…あ…あと、ケーキ美味しかったです」

本を受け取ると少し照れくさそうに綾が図書室から出て行ってしまった。どうやらケーキも食べてくれたみたいだ。お口にあったようで何より。

受け取った本はファンタジー物で少々古いものらしく表紙がよれよれになっていたが、ぱらぱらと読んでみるとなるほどこれは確かに面白そうだ。

早速家に帰って読みふけろうと受付へ持っていこうとすると血相を変えたりトがこちらへ走ってきた。…どうやらまたトラブルらしい。

「おい有里！あの、金色で真っ黒で女の子が本で倒れて熱くて殺されそうになって熱くて具合悪そうなんだ」

「と、とりあえず落ち着いて。んでヤミがどうしたって?…え? ヤミ学校来てんの?」

「そうそうそのヤミって子が…いいからこっち来い!」

説明するのがめんどくさくなったのかリトに引っ張られてるまま図書室の奥へ向うと、そこにはばら撒かれた本の真ん中で虚ろに座り込むヤミが居た。

「あなたも…居たのですか」

オレに気付いたヤミがどこを見ているかわからない瞳をこちらへ向けつつ、おぼつかない足取りで立ち上がろうとする。

が、力が入らないのか前のめりに倒れそうになった。すかさずオレが近づいて抱きとめるが、触れたヤミの体が燃えるように熱く震えるような呼吸も浅く、そして速い。

「風邪…って感じじゃなさそうだ。あのバカ、こんなときに学校さぼりやがって。リト! 医者のとこ行くぞ!」

「い…医者って病院か? それだと車とかが無いと…」

「知り合いに腕だけはいいい医者がいるんだ。リトも一緒に行くぞ。…ヤミ、おんぶと抱っこどっちがいい?」

「自分で…歩けます…あなたの力は、借りたくありません」

「そうかおんぶがいいか。…よし、リトは教室行ってオレの鞆も取ってきてくれ」

「お、おう、任せろ」

ヤミの小さな体を背中に背負い図書室を飛び出す。当然他の生徒達の注目を集めることになり、初めは体をよじらせ嫌がっていたヤミだが、靴箱へたどり着いた時には背中に顔をうずめ、呼吸も荒くなっていた。

「靴持ってきたぞ！」

「ゆりっちー！ヤミちゃんが大変なんだって！？」

おたおたしながら二つの靴を持ってこちらに向ってくるリトの後ろにはララの姿があった。話を聞いて着いてきたらしい。

「リト、悪いけどオレの靴だして。今からオレの家まで行くからな」

「有里の家？外観だけ見たことあるけど、そこに医者なんているのか？」

「話は後。行くぞっ」

「そうだよリト！早くしないとヤミちゃんが大変なことになっちゃうよ！」

「って待てよ！俺まだ靴履いて…おい！置いてくなよ！」

靴箱で慌てているリトを尻目にララは空を飛び、オレはヤミを抱えたまま、通いなれた家路を駆け出した。

.....

.....

「ここが、ゆりっちの家？なんかオバケやしきみたいだね」

「ヒィ、ハヒィ…お前ら…早すぎ…」

「急ぐって言っただろ。ほら入るぞ。道以外の所に入ると碌なことにならんからオレの後ろを歩くんのだぞ」

「どんな…家、だよ」

息も絶え絶えなりトの突っ込みもそこに門を抜け玄関へ行き、
ララにオレのポケットに入っていた鍵を取り出して開けて貰い中へ
入る。

「お——い！御門！急患だ、起きろっ！」

「へ？御門って……」

「ん……何よ、昨日は深夜までオペして学校は行かないって言った
でしょ」

ヤミを起こさないようにかつ大声で御門を呼ぶと、奥の扉から目を
擦りつつ下着に白衣というマニア向けなんだかよくわからん格好で
登場した。

「有里と御門先生が一緒に住んでたっていうか何てカッコしてんだ
先生——っ！！」

当然女性の下着姿なんか免疫のないリトがさっきまでの息切れが嘘のような大声を出す。

色々と説明したいことはあったが今はヤミのほうが大事なので、御門に服を着てくるよう言った後診療室へヤミを運び込んだ。

・・・。

・・・。

「先生、ヤミちゃん大丈夫？」

「ええ、風邪や病気ではないこのコ特有の症状よ。大丈夫、死人以外ならどんな患者だって治しちゃうわ」

診察台に寝かされたヤミの前で心配そうなララが呟いた。御門はヤミのことをよく知っているので簡単な診察で終わった。どうやら大変な症状ではないらしい。というと疲れからくる体調不良とかそんなところだろう、つまりトランス能力の過度な使用による身体機能の低下。地球に來た時に結構トランスしていたみたいだしそれに……。

「はい、じゃあ早速脱がすわよ。有里、手伝って」

「あいよ」

「つておい！ふふふ服を脱がすって！？」

「この子を直すのにはヒーリング・カプセルに入れるのが手っとり早いわ。それには衣服が邪魔なの」

「だからっておいちよつと有里!？」

「ララ、リトを連れてヤミにお見舞いでも買って来てくれる？」

「オッケー! ほらリト行こ！」

騒ぎまくるリトをララに連れて行ってもらう。純情ボーイなのはいいが診療所でやかましいのはいただけない。それに女の子が服を脱ごうってんなら男は席を外すのが常識だ。

「よし、パパッと脱がせるか」

「……何となく解ってたけど、恥ずかしがらないのね」

オレがヤミの服を脱がせていると後ろで見ていた御門が呆れたような声を出す。

「これがベッドでヤミが元気ならオレだって恥ずかしいけど、今は診察台でヤミは病人だ、恥ずかしがってちゃヤミに失礼だろ」

オレにだって人並みの恥ずかしさはある。でも御門の診察を手伝ったことも少なくないし言ったとおりここは診察所だ。恥ずかしがったり照れていたら手術が間に合わなくなることだってある。………
と言いついて聞かせて我慢しているだけです。本当は結構恥ずかしい。だってヤミのやつちょっと見ない間に結構育ってるし。まだまだ子供だけだ。

「それもそうね。それじゃカプセルへ運んで頂戴」

それで納得したのか御門はさっさとカプセルの調整へ行ってしまう

た。オレは出来るだけヤミの体を直視しないようにしながら、優しく抱きかかえるとカプセルの元へ慎重に運ぶのだった。

.....。

.....。

.....。

『ドクターミカド...?』

「ん...? ヤミ、起きたか。具合はどうよ」

『有里...って見ないでください! え、えっちいのは嫌いです』

「見てないけど...」

ヒーリング・カプセルの前で椅子に座りながら御門の淹れてくれた緑茶に舌鼓をうっているとヤミが目を覚ました。

一瞬反射的に視線を上げそうになったが、何とかこらえ手に持った湯飲みに視線を落としたが話しかける。

ヤミも見られなくなかったのか自分の髪と手で局部を隠す。

『ここは...?』

「御門の診察室だよ。お前が図書室で倒れたんで運んできたんだ」

『そうですか』

「御門が言うにはトランス能力の使用負荷による身体機能の低下、

らしい。最近トランス能力を使ったか？」

『……………』

「言い方を変えると、トランス能力を使って何かを作ったか？」

『……………はい』

思った通りだった。そう、ホワイトデーの時にヤミがくれた転送機だ。トランス能力は自分の体をあらゆるものに变化させることが出来る。だが当然大きなものを、精巧なものを作ろうとすれば負担も大きくなる。そしてトランス能力は変身能力であって物を作る能力ではない。無理をすればできなくもないがそのさいにかかる負担は凄まじいものだっただろう。

そして考えてみればそんなに便利なものを御門が使っていないはずが無い。それをいきなりこんなオプションがありますよって渡されたら誰だっておかしいと思うに決まってる。

「お前がくれた転送機は確かに便利なものだったけど、お前が倒れるようなことをしてまでオレがして欲しいことなんて何一つ無い。前にも言ったはずだぞ。その力は、お前のためだけに使えって。わかったな」

『……………はい』

「……………んじゃ、オレヤミの分のお茶でも淹れてくるよ。多分リトたちは鯛焼き買ってくると思うし。あとよろしく」

「いってらっしゃい」

反省したのかしょんぼりするヤミと、クックックとこらえ笑いをする御門に、何だか居心地が悪くなってオレは診察所を後にした。説教なんてらしくない、それに資格も無い。オレはヤミを捨てた屑なんだ。それをあんなに偉そうにバカみたいに……。

「はぁ……結局小説も借りてくるの忘れちゃったし……はぁ」

自己嫌悪に陥りつつ湯飲みに残ったお茶をちびりと飲む。すっかり冷めてしまったお茶は味気ない苦味を残して喉に流れていく。

その後、予想通り鯛焼きを買ってきてヤミの着替え中に診察所に入ってしまったリトがボコボコにされ、怒ったヤミが出て行くまで、ため息と自己嫌悪が終ることはなかった。

もういちどこから

「ん？あれ、リトどこいった？」

「もう先帰ったぞ。さっき廊下にいたし」

HRを机につっぱしてやり過ごし放課後の賑わいでやっと目を覚ます。口端に少し零れたよだれを袖で拭きつつ一緒に帰ろうとリトを探すがその姿はない。

ちょうど近くに帰り支度をしていた猿山が居たので声をかけてみると、どうやら先に帰ってしまったらしい。

起き抜けのぼーっとする頭を振りつつオレも帰り支度をすすめていると何やら廊下から視線を感じる。

「猿山？……はもう帰ったか……」

以前助けた不良に絡まれて困っていた少女が実は同じ学校でしかも一目惚れでラブレターを渡したいけど恥ずかしくて渡せなくて廊下から顔を覗いてるだけでも幸せきゅーかっこいい！

なんて猿山の妄想みたいなことが起こるはずもなく……きっと気のせいだろう。学校なんだから人の目なんていくつもあるしね。

にしても暇になっちゃったな。ちよっと小腹も減ったしリトとコンビニでも寄って買い食いしようと思ってたんだけど、一人で行ってもなんだか味気ない。

そうだ、この前なんやかんやで借りられなかったし、綾おすすめの小説でも借りに行くか。そうと決まればこうしてはおれん、早くいかないと。

元々教科書は全部学校におきっぱなしだし持ち帰る荷物といったら筆箱に携帯に体操服くらい。財布はポケットだし体育のない日なら鞆だっていらなくらいの荷物なので帰り支度はすぐ整った。

よしいざ図書室へ、と席を立つと同時に、

「有里様——！！！」

「おぼっ」

何者かが名前を呼びながらアメフト部もたじたじのタックルを腰にかましてきやがった。

もし授業中にテロリストが来て学校を占拠したら、なんて想像はするが、もし学校でタックルされそうになったらなんて場面はシュミレーションしたことがない。

回避・防御には定評のあるオレだがいとも容易く隣の男子生徒Y君の机もろとも吹き飛び、おそらく掃除を怠けたのであろう少し埃っぽい床に背中と後頭部をしこたまぶつけた。

「有里様っ！ちょっと聞いてくださいなっ！」

「いきなりなんだ！って沙姫か！？」

後頭部をさすりながら制服越しに感じる高校生にしては些か豊かな果実の感触と眼前に揺れる金髪の立て巻きカールを確認する。そしてこのいかにもといったお嬢様口調。そこに居たのは学校一の変人、天条院沙姫その人だった。

「わたくし、操を汚されてしまいましたわ！どうか慰めてくださいまし！」

「意味が解らないから。抱きつくな息を吹きかけるなそれを押し付けるなシャツを脱がそうとするな誰か助けてっ！」

「沙…沙姫様、あの…雪ヶ岡君がその、嫌がってます」

「貴様、沙姫様の寵愛を無下にしようというのか」

いきなり訪れた貞操の危機に助けを呼ぶも、廊下から現れたのはオロオロする綾とイライラMAXなご様子の凜。

さっきまでちらほら居たクラスメイト達は君子に危うきにうんたらよろしく居なくなったいた。さすがみなさんとらぶる慣れしていらっしやる。

「これ、どういうこと？」

「その…先週辺りからずっとそんな感じで…」

この場の唯一の良心、綾に訪ねるがよくわからん。先週？…先週っていったら、ホワイトデーの時道端で会った以外特に接点は無かったけど…。

「さあ有里様、挙式はどこにいたしましたしやう。スウェーデンでもデンマークでもノルウェーでもどこでも準備できますわよ」

「なんで北欧限定なんだよ。とりあえず退いてくれない？」

「それでさっき結城リトの弟というものに体をまさぐられたのです！どうか有里様の御手で清めを！」

会話ができぬ…リトの弟？…あいつには美柑しかいなかったしお袋

さんは海外にいて弟ができるってこともないはず。あの親父さんなら隠し子ってことはありえないし……また何かに巻き込まれているのか？

普段の高飛車な態度からは想像もつかない甘えっぷりで鎖骨に頬を擦り付ける沙姫と、困ったような何か思い悩むようにオロオロする綾、竹刀を強く握りすぎて爪が食い込みぎしぎしと音を立てている凜。

さっきまで授業が行われていたことが嘘のように、一瞬で教室に展開されるカオス空間。訳がわからないがしばらく好きにさせてあげようと、大の字になって沙姫の熱烈な抱擁に為すがままになっていると、

ゴオオオン！！とテニスコートの方から隕石でも落ちたような爆音が鳴り響いた。

「な、なんですよ！？」

突然の大音量に飛び退いて驚く沙姫。その隙に沙姫の下からスルリと抜け出し瞬時に衣服を整えながら立ち上がる。

「ああ……有里様、どこへ行ってしまうの？」

「あの音が気になる。ボクは君との学び舎を守るため行かなくてはならない。さらばっ！」

「有里様——っ！」

イメージ的には姫を守る騎士というより上京する男とそれを見送る女、といったイメージ。

意外とノリがいい沙姫達を尻目に教室を飛び出す。廊下の窓から見渡してみるとテニスコートに人だかりが出来ていた。その中心には呆然と立ちすくむ差清先生と直径2〜3mほどのクレーターが。

「何なんだあれ……つとりト？それに西連寺……」

うちの高校には分身したり跳ねない球を撃ったり恐竜を召還したり骨を折るようなフォアショットを放つ奴なんて居ない。というかあんなクレーターを作るようなビックサーバーなんて地球中探したっていやしないだろう。つまりはそういうことだ。

事態の重大さに気付きはじめたオレの視界の端に西連寺の手を引きながら階段を駆け上るリトの姿が映った。

案の定巻き込まれていたらしい、しかも西連寺まで。こうしちゃいられない、いつの間にか半分降りていたファスナーを閉めつつ二人の後を追いかけた。

……

……

「あれ……り……たの？」

二人の足音を頼りについてきて見るとどうやら屋上に行ったらしい。鉄製の少し錆びのついた扉の向こう側からはウラらしき声が聞こえてきていた。

それなら邪魔しない方がいいか、と掴んだドアノブの手を緩めようとした時この広い宇宙で一番聞きたくない名前が聞こえてた。

「オレがデビルーク王、ギド・ルシオン・デビルークだ」

デビルーク王。宇宙を力で支配した男。ララの親父でありオレランキング最もぶん殴りたい右頬10年連続BEST1位の偉業を持つ野郎。

ざわざわと騒ぎ出す感覚を唾を飲み込みこらえる。この向こうにはリトも西連寺もいる。西連寺に関してはオレが宇宙人と知らないはずだし隠したい訳じゃないけど知られたい訳でもない。

「ララ：オレが何のために地球へ来たか、ザスティンから聞いている？オレの後継者……つまりお前の結婚相手が正式に決まった。

相手はこいつ……結城リトだ」

な……なんだと。あの野朗黙って聞いてりや：リトはただの地球人の学生だ、そんなお前なんかの後継者になれるわけが無いとかさせない。リトにはリトの人生があるしあいつは西連寺のことが好きだ。ララのことをどう思ってるかは解らないけど。

いやいかんイライラするな。オレが出て行ったらややこしくなるぞ。このまま立ち去るんだオレ！さあいざ図書室もしくはコンビニへ！

「おい……まさかイヤだとか言うんじゃないだろうな。前に言ったよな？オレの期待を裏切ったら、地球ごとツブすってよ」

「ああ？やってみろよ？」

「ゆ……有里！？」

「雪ヶ岡君？」

「あ、ゆりっちだ」

………思わず飛び出してしまった。リトのためとか地球のためとかじゃない、ただ単純にこいつがむかつくんだ。

「てめえユリ！！いるとは聞いてたが、まさかしやしり出てくるとはな」

「ああ？いいから帰れクソちび野郎」

「はあ？誰に口聞いてんだ？バカ野郎」

「お…おい有里？何でいきなりでてきて喧嘩になってんだ」

「ギド王？い…いかなされ」

リトとザステインが何か言っている様だがこうなってしまったらもう聞こえやしない。すっかりチンピラの睨み合いのように血走った目で眼つけ合う。ただチンピラのそれと違うのは屋上のタイルがミシミシ音を立てて剥がれ始めているということだ。そういえば何だか大気もゴロゴロと鳴り響いてる気もする。

「おいリト、こんな奴の言うこと聞かなくていい。安心しろ、オレがいる」

「何勝手に決めてやがんだ、いいだろうこんな星潰してやるよ！」

「やってみろつつってんだろ？その空気の抜けた風船みたいな体だよ！」

「舐めてんだろ？おい舐めてんだろ？殴ってやるよ、こっち来いよ」

「はっ！てめえのハエが止まる様なパンチで誰を殴るって？笑えるぜ、おい笑えよ！」

「ぶっ潰してやるあ！！！」

「ぶっ飛ばしてやるあ！！！」

「「かかってこいやあああああ！！！」」

「おい、有里！どうしたんだよ、キャラ違うじゃんか！落ち着けて！」

「ギ…ギド王！どうかご自重ください！」

オレもギドも完全にキレてしまい今にも殴り合おうと拳を振り上げると、リトとザステインが飛びついてオレ達を引き剥がした。

羽交い絞めにされながらもまだ暴れようとするオレ達を見かねたのか、

「もうやめて！！！」

初めてみる真剣な表情をしたララが間に入りそう叫ぶ。その勢いにオレもギドも押し黙った。

「私……リトとは結婚しない！！！」

「な！…結婚しないってどーいう」

「パパは本当は王位を渡して遊びたいだけでしょ！」

ギドが凶星を指されギクツといった表情を浮かべる。

「リトの気持ちを無視してまで：一方的に結婚しても嬉しくないの！……私ね、何となく気付いてたんだ。私がいくら好きって言っても：リトの本当の気持ちは私に向いていないって事：それでもリトは優しいし地球の生活は楽しいからこのままでもいいやって思ってた……でもやっぱりダメだね、それじゃ……私……リトを振り向かせたい！振り向いてもらえるように努力したい。だからパパ、結婚の事はもう少し待って」

ララもちゃんと考えていたらしい。リトのこと、地球のこと、結婚のこと。お姫様の我が侘だと思ってたが違ったんだ、ララも一人の女の子としてリトとのことを想っていたんだ。

リトが好きなのは西連寺だしオレもそれを応援するつもりでいた。だがララの真剣な告白を聞いてしまった今では……。この子にだって幸せになってほしい。

よし決めた。二人とも応援しよう。リトがどちらを選んでもいいように、どちらを選んでも幸せになれるように。

「やっと、これを使う決心ができたから……」 ばいばいメモリーくん”これで地球のみんなから私の記憶を消す」

え、消しちゃうの？ 決心したそばから？ ひどくない？

「ごめん……リト、プリンセスとか婚約者候補とかそういうのナシでもう一度……ゼロからの私で頑張ってみたいの。私の最後の我が侘……聞いて」

もうこれそういう流れだ。オレもギドもザスティンもすっかり置いてかれてポカンと立ち尽くしている。

「春菜…友達になってくれてありがとう！楽しかったよ。また仲良くしてくれるとうれしいな……」

「ララさん！」

「ま…待てよララ！そんな事しなくても——…」

「オレ的にもやめて欲しいな…」

「さよなら……」

ああ無常、ばいばいメモリーくんのボタンが押され街を包み込むほどの光が溢れ出す。

目を開けていられないようなそれを体全体で受けながら、なるほどこれなら記憶くらい奪えそうだと胸中納得する。

そういえばあのバカ殴ってなかったとか、キレたところまたリトに見られてしまった…恥ずかしい、とかそんなことを考えながら薄れゆく意識を手放した。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

結果としてみんなの記憶は消されなかった。なんでもララの作った

ものでまともに機能するものはないらしい。ザステインなんかは効いていたらしいけど。

この日はリトにとっても、ララにとっても、西連寺にとっても、オレにとっても一つの分岐路として大切な一日となった。

史上最悪のクラス

季節はすっかり春。道端に咲くうつすら赤みを帯びた桜の花びらを、春一番が空へ舞い散らせ通いなれた通学路を彩らせている。

そんな春一色の道を欠伸をしつつ歩く。それにつられてかは知らないが塀の上で寝転がっていた黒猫も口を大きく開けて欠伸をしていた。暖かい心地に眠たくなるのは猫も一緒ということか。

「今日から新学期かあ……」

誰にともなく呟く。

そう、今日は春の一大イベント始業式なのだ。クラス発表が掲示板に張り出されるというのでリトや猿山と学校で待ち合わせてある。

うちの高校は元々クラス替えて大々的に生徒を変えることはせず、ましてや養護教諭のくせに職員会議で大きな発言力をもつあいつに頼んであるのでリト・ララ・西連寺・猿山・里紗・未央あたりはオレと同じクラスになるはずだ。

リトの恋を応援するならやっぱり同じクラスにいてもらったほうが良いに決まっている。勝手に裏から操作してしまったので若干の負い目もあるがこれも親友の恋路のため、あとオレの楽しい学園ライフのためだ。

いつもより少し早めの時間に学校に着くと、すでにゲタ箱前に設置された掲示板の前に沢山の人が出て来た。

遠巻きに眺めてみたがリトと猿山の姿は見えない。自分だけ先に見てしまうのもつまらないのでしばしここで待ってようと校門にもたれかかると、背後から甘ったるい人工的に作られたような香りがプンと匂ってくる。

何事かと振り返ってみるとその匂いの出所は、オレの姿を見つけ片

手を上げながら近づいてくる猿山だった。

「よっ、早いな有里」

「おはよっ。ってお前…もしかして香水付けてんのか？」

「やっぱり解っちゃう？ほらやっぱり今日初めて会う女の子に良い第一印象持ってもらおうと思ってさー。取って置きの香水かけて来ちゃった」

そう言って笑う猿山の首から手から、今も鼻を突き刺すほどの匂いが漂ってきている。なまじ地球人より嗅覚が優れている分そのダメージも凄まじいものだった。なんだか段々気分が悪くなってきた…。

「にしたってちょっと付けすぎだろ…オレがファ○リーズ持ってたら1本空にしてるレベルだぞ」

「そんなに付けたわけじゃないけどなあ…」

「そーいやリトのやつ遅いな」

「なんか遅れそうだから先に二人で見えておいてっさ。さっきメールが来たぜ、お前のところには来てねえの？」

言われてポケットの携帯を取り出し開いてみると、確かにリトからの着信メールが1件あった。学校へ行く時はいつもマナーモードにするのでバイブに気付かなかったらしい。

「んじゃ先見ておきますか」

「おう、にしてもすげえ人だな、あれじゃあクラス発表の紙見えねえぜ」

さっきまで10人程度だった人だかりがいつのまにやら2〜30人の大人数になっていた。あれでは後ろからは見えないし掻き分けて前に行くのもしんどそうだ。

こうしてる間にも次々と他の生徒がやってきてゲタ箱の前は軽い渋滞が出来上がっている。

「くそお、こんなことならもう少し早めに家出てれば良かったぜ……そうだ、有里ちよっとしゃがめ」

「肩車したいとか言うなよ」

「その通りだ！お前の名前も見えてやるからさ！」

渋々腰をかがめると、ひょいと足を持ち上げて猿山が肩に乗った。後頭部に当たるほのかに柔らかい感触が心を蝕んでいくのがわかる。あとすげえ香水くさい。こいつどこにも付けてんだよ。

「よし！立ち上がれ有里！」

「はあ、お前名前見たらとっと降りろよ」

よいしょと一声かけて腰を持ち上げると上に乗っていた猿山が、たけー！すげー！と朝だというのに大声を出す。当然周りの生徒達の注目を集めてしまい今すぐにでも猿山を地面に落としたい衝動に駆られるが、首に4の字固めでも極められかねないのでしばし耐えることにする。

「有里、前進だ！」

「あんまり大きな声だすなよ恥ずかしいんだから」

上で騒ぐ猿山にふらふらしながら掲示板のほうへ近づいていく。自分の名前を探していた他の生徒達がこちらに気付くときぎょとした顔をして距離をとってくれるので思いのほか掲示板近くまで来ることができた。

「んー…もうちょい右。――あつた！俺A組だ！おい有里も同じクラスだぜ！」

「そいつは良かった、また一年よろしくな」

「ひゃっほララちゃんも西連寺も同じだ！ついでにリトも！嬉しいけどあんまり新しい顔ぶれはねえなあ」

リトがついでって…オレも他の生徒の後頭部が作り出す壁の隙間を狙って覗いてみるが確かに半分くらい同じクラスメイトみたいだ。

「よし、確認もできたしこのまま教室までいくか」

「バカ言え、降ろすぞ」

さすがに首と肩が疲れてきてたので、猿山の足を掴んでいた手を思い切り持ち上げる。バランスを崩した猿山は地球の重力に引っ張られるまま背中から地面に落ちこちた。「ぐへえ」なんてやる気のない蛙みたいな声を上げている。

背中を押さえて痛がる猿山を無視してオレは校門へと視線を向ける。

登校してくる生徒はもうまばらになっていて、校門の外では走っている姿もちらほら覗える。リトのやつ、そろそろ来ないと遅刻になるなあ……メールがあつたから寝てるって訳でもないし第一そんなこと美柑が許さないはず。とするとララか？ いやいくらトラブル體質とトラブルメーカーといったってそんな毎日のようにイベント起こしたりはしないだろ……うん、多分。道が混んできるとかそんな理由だよな。

「有里、なに突っ立ってんだよ。教室行くんだろ」

「ん、そうだな。行くか」

すっかり回復してけろっとしている猿山と掲示板を眺める生徒達の後ろを通りながらゲタ箱へ向う。

2年生になったので新しい靴箱を使うことになるのだがオレも猿山も場所が解らない。二人でどこだどこだとキョロキョロしていると、

「キャアアアアアアアアア!!」

絹を裂くような女子生徒の悲鳴が校舎に響き渡った。

「な、なんだあ!?!」

「あっちか」

突然の大音量に飛び跳ねてびびる猿山を置いて音のした方へと駆けつけてみると、そこには走り去る西連寺の後姿と、なぜか全裸ではしゃぐララ、そしてなぜか全裸で頬に季節外れのもみじを咲かせているリトの姿があつた。と……冷静ぶってる場合じゃない。

「な、なにやってんだ！」

「有里い、聞いてくれよ…オレ春菜ちゃんに嫌われちゃったよ…」

「あ、ゆりっちだ！おはよー」

「おはよーラもリトもオレと同じクラスだったぞじゃねえよ！とりあえずラはペケで肌隠せ、リトは…とりあえずオレのブレザーと代えの体操着ズボンあるからそれ履け」

「おっけー、ペケ！学校の服お願いね」

「新学期だつてのにい…どうしよう有里」

「いいから服着ろつつつてんだバカ！」

何があったかは解らないが、春菜ちゃんがぁ春菜ちゃんがぁと言つて服を着ないリトにオレが無理矢理ズボンを履かせる。オレの学生服のスペアが保健室に置いてあるから今日はそれで何とかなるだろ。パンツの代えはさすがに無いから…いや御門なら持つてるかもしれない。

「つてうわ！服着ないと！！！」

「そう言ってるんだろ、ほら保健室にオレの学生服あるから取りに行くぞ。早くしないとH R始まっちゃう」

やっと現状を把握して顔を茹蛸のように真っ赤にするリトの手を取って立たせ、出来るだけ人目を避けながら保健室へと向った。

「…あれが彩南高校の風紀を乱す二人…結城リトとララ。あ…朝から全裸で登校なんて…そして彼が…」

……。

……。

「よ、リト。なに冴えない顔してんだよ。西連寺と同じクラスになれたんだぞ」

「有里か…制服サンキュな。洗って返すよ」

「いやいいよ、何かあった時用に保健室に置いてあるだけだし、下着も新品だったからあげるよ」

その後保健室へ行くとすでに制服と新品の下着が御門によって用意されていた。こいつ盗聴器でもしかけてんのか？と思うが今は問い詰めてる時間はない。

ぱぱっと着替えて教室へ急ぎなんとかHRには間に合った。それからすぐに体育館で始業式を終え、今は教室で担任教師の到着を待つ間の雑談タイムだ。

「ああ、ありがとう…」

そう言いながらリトは西連寺に視線を向けるが、向こうもこちらを見ていたらしく目が合うと顔を背けられてしまっていた。

なんでもララの作った”ぴよんぴよんワープ君・改”で学校まで来たら、着いた先が西連寺のスカートで、しかも自分は全裸。それに驚いた西連寺が叫び声を上げてテニス部のスナップの効いたビンタをお見舞いされたらしい。嫌われてしまった、と始業式の間もずっと

と落ち込んでいた。

「気にするなって。西連寺も恥ずかしかったのと、ちょっとびっくりしただけだろきっと。謝れば大丈夫だって」

「そ、そうだよな。わざとじゃないし真剣に謝ったら許してくれるよな」

オレの励ましが功を奏したのかちょっとだけリトが元気になった。その後いくら待っても先生が来ないので猿山を職員室へ送らせるとどうやら話し合いやら会議とかで遅れているらしい。待っている間に教室の掃除でもしておけと言われたので、みんなで掃除を開始する。

春休みの間あまり使われていなかった廊下でも結構隅っこのほうは埃がたまっている。それをオレはリトと雑談しつつ適当に箒で掃いていると、

「ちょっとあなたたち！話があるんだけど」

「？」

「どなた？」

綺麗な長い黒髪のちょっとツリ目な女の子が仁王立ちでこちらを睨んでいた。そういえばこの子、さっき教室にいた気がする。

「私は古手川唯：元1－Bのクラス委員よ。1年の時はA組のクラス委員の西連寺さんが甘いせいであなたたちも好き勝手やっていたようだけど、私が同じクラスになった以上そうはいかないわ」

「え？好き勝手って…何？」

「主にララのことだろ」

去年はアニマル喫茶をやったり教室の屋上半壊させたり何かあったら爆発させたりさせてたもんな。他のクラスからすれば確かに好き勝手やってたかも。

「それに私、見たんだから。いきなりゲタ箱でその…裸になったり…」

「げ…」

「見られてたのか…オレと西連寺しかいないと思ってたのに。ごめんフォローできないわ」

そういえば微かに視線を感じてたけど御門かと思ったらこの子だったのか…クラスメイトに全裸を見られるとかオレだったら登校拒否もののトラウマだけど、リトはオレの横であっけらかんとしてるのどうやら平気らしい。さすが鈍感BOY。

「関係ない顔をしてるけどあなただってそうよ！雪ヶ岡有里！」

「は？オレは別に…っていうかなんで名前知って」

「あなたがこの前教室で上級生と抱き合っているのを見たんだからね！校内であんな…ハレンチな！」

教室で上級生？……そうか、沙姫が抱きついてきた時の。思い出し

たあの時も廊下から視線を感じたけどあれもこの子だったんだな。ということは大分前からマークされてた？そんなに風紀を乱したり暴れたりしてないはずだけど…。

「お前：硬派な顔してそんなこと…」

「ちっげえよ、この前いきなり沙姫に押し倒されたんだよ」

「ああ天条院先輩な。最近やたらと言い寄られてるもんなお前」

「ちよつと！無視しないでよね。理由はどうあれ教室で抱き合っていたことは事実。今後このような風紀を乱す行為は控えてもらいます」

そんなこと言われても：男子トイレにまで入ってきて抱きついてくるような非常識な人にオレがどう対処しろっていうんだ。

その度に凜の怒りはエスカレートしてくし仲良かった綾が最近話しかけてくれなくなったし、むしろ困ってるくらいだってばさ。

「どうしたのー？」

教室の方まで聞こえていたのが箒を持ったウラが扉をあけて様子を見に来た。

「出たわね学校一の問題児ウラ・サタリンデビルーク！そのシッポ！学校にそんな玩具持ってきていいと思ってるの？」

「いやこれは玩具じゃなくて本物のシッポなんだ」

「そうだよーほら動くでしょ？だってわたし宇宙人だもん」

そんな簡単に宇宙人ってばらしちゃうんだ。まあララは元々隠してたわけじゃないけどね。

「宇宙人…だなんてそんな…非常識な！」

「まあとりあえず先生も来たし教室戻ろうぜ」

ピコピコと動くララのシッポを見ながら動揺している古手川唯の背中を押しつつ教室へ戻る。すでに掃除は終わっていてほとんどの生徒が自分の席に着いていた。オレ達も急いで席に座る。

「え〜今日は新学期なのでえこのクラスのクラス委員を決めたいと思いますふ。誰か立候補者はいまふか？」

教室が静まり返ったのを見て老年の担任教師が口を開く。

「はい！」

と古手川唯が凛々しい声と共に左手をピンと伸ばして上げる。どうやら立候補するつもりらしい。風紀がどうかうと言っていた彼女ならびったりかもしれない。他のクラスメイト達は自分じゃなきや誰でもいいやみたいな顔をしている。

立候補者一人ということでクラス委員が古手川に決まりそうな空気になりかけた時、何を思ったかララが立ち上がった。

「はい！私は春菜がいいと思います！」

「へ？」

まさか自分が推薦されると思ってもいなかった西連寺が驚いた声をあげる。どうということ？といった顔でララの方を見ているが当の推薦者は自信満々の素敵な笑顔を浮かべている。

「立候補者一人に推薦者一人ですか：それでは多数決で決めましょう、紙を配るのでみなさんクラス委員をして欲しいほうの名前を書いてください」

他に手を上げる人もいなさそうなので担任教師が教卓の引き出しから人数分の紙を取り出し全員に配る。

どうしようかな：あの唯って子はクラス委員やりたそうにしてたし：。いや待てよ、ここで西連寺をクラス委員にして男子のクラス委員をリトにすれば：完璧じゃないか。そうと決まれば西連寺に一票だ！

全員分の投票用紙が先生の下へ集められ統計がとられる。オレはワクワクしながら結果発表を待った。

「ええー古手川くん、13票。西連寺くん20票。というワケでクラス委員は西連寺くんをお願いしまふ」

おおーやっぱりA組のクラスメイトが多いだけに西連寺が勝ったか。古手川のやつかなり悔しそうにしてる：でも多数決だししょうがないよな。まだ風紀委員もあるわけだし。：ん？そういえばクラスメイトは全員で34人なのに票は33しかなかったぞ？無投票でもいたのかな？

「ええーそれでは次に男子のクラス委員を決めたいのですが、1票だけ何故か雪ヶ岡有里くんの票が入っていたので雪ヶ岡くんをお願いしまふ」

「「意義ないし」」

「はあ？え、なんで？」

二人のうちどちらかを、しかも女子のクラス委員を決めるっていつてんのになんでオレの名前が投票されるんだよ？あれか、オレが女顔で実は男装キャラだと思われてるからか？ちくしょう…こんなことするやつは猿山しかいねえ！

と思って猿山の方を見ってみるが、すでに興味を失ったのか机に突っ伏して寝ていやがる。もしあいつが犯人ならこっちを向いてニマニマを笑っているはずだ…とすれば誰だ？

「雪ヶ岡くんお願いできますね？」

「え…いや、あの…やらせていただきます」

今さらリトを推薦なんてできないし、したとしてもクラスでのリトの心象を悪くしてしまう。しかもこの空気…断る選択肢が与えられていない。オレに出来るのはクラスメイト達がパチパチ鳴らす拍手の中で力なく肩を落とすことだけだった。

幸先悪い新学期だよ。

クラス委員で暮らす日々

「きりーつ、れい」

オレの気の抜けた号令で我がA組は休み時間を迎える。

初めのうちは声が裏返ったり小さかったりしてまともな号令などできなかったが、4月も後半になった今はそれなりに様になってきたと自分では思う。

それにオレの号令で大勢の人が動くのは何か得も知れない優越感がある。まあ誰がやっても変わらないんだろうけどさ。

「よっ委員長。毎日大変だな」

「ほんとだよこの野朗。何度も聞くけどオレに票入れたのお前じゃないんだな？」

椅子に座って一息ついていると猿山が背中をポンと叩きつつ話しかけてきた。

「何度も言うけど俺じゃねーって。ちゃんと西連寺に入れたさ」

この質問をしたのは何回目だろう。まだオレがクラス委員なんて慣れない大役に四苦八苦しているとき、猿山の奴休み時間の度に笑いにきやがった。だからてっきりこいつの悪戯と思っていたがどうも違うらしい。ふざけたりバカ言ったりするがいつまでも嘘をつけるほど賢くも意地悪くもないし。

「じゃあ一体誰なんだよ：リトもララも西連寺に入れたっていうし」

「もしかするとアレじゃね？あの古手川って子がお前と一緒にクラス委員したくて入れたとか」

「はぁ？お前妄想は自分のことだけにしろよな」

あの子がオレと？2年生になって初めて会った子が一目惚れして一緒にクラス委員をしたがるってか？

ないないない、あり得ない。だってあんなにクラス委員をやりたがっていた子が自分に入れないはずがない。それに、

「ちょっと雪ヶ岡君？授業が終わった後の黒板を消すのはクラス委員の仕事よ」

「雪ヶ岡君、号令はもつと大きな声で」

「クラス委員が学校でお菓子を食べない！」

なんて隙あらば小姑のようにしかってくるような子がオレのことをどうこう思っているはずが無い。しいていうなら棚からぼた餅的な感じでクラス委員になつたい加減なオレにむかっているぐらいだろう。

そのおかげでちょっとはクラス委員らしくなれたわけだけど……っていうかここのポジションはリトがいるべきだろ。一緒にクラス委員をして会議に出たり放課後までプリントの整理をしたりして気付けば教室には二人きり。近づく体、触れ合う手、惹かれあう瞳、真っ赤な夕日の差し込む光に照らされて学び舎の中二つの想いと二つの体が溶け合うように一つに……。

「雪ヶ岡君！ぶつぶつ言っていないでクラス委員は次の授業の準備のために先生の所へ行かなきゃでしょ！」

「こゝ古手川……。ごめんなさい忘れてました、すぐ行って来ます」

気付けば妄想の世界に浸ってしまっていた頭を振るって正氣に戻す。これじゃあ猿山のことを笑えないな……。なんて言ってる間もなく、腕を組んでこちらを睨む古手川から逃げるように教室を飛び出した。

。。。。。

これじゃあリトに告白させるなんて、遠い道のりだなあ。元々恋愛に関して奥手だし、タイプの違う二人の美少女のどちらかを選べだなんてなあ……。

ん？　そういえばラはリトのことが好きって言ってるけど西連寺ってリトのことどう思ってるんだろ。というか付き合ってる人っているのかいないのか、それさえも知らないぞ。里紗・未央とはよく話すけど西連寺とは挨拶交わすぐらいだし。見た感じ彼氏がいるってようには見えないけど……。よし、ここはいっちょ本人に聞いてみますか。

とはいえまずは自分の仕事をしなくては。次の地理の授業は黒板から下げるバカでかい地図が必要だったりする授業なので、使うかどうかを職員室まで行って先生に聞かなくてはならない。

少し緊張しながら職員室の扉を開ける。学校の中でも特に異質な空気を放つこの場所はやっぱりどうしても好きにはなれない。この場所だけ社会の匂いがするせいか、それとも屋上を壊した時に教師3人がかりで説教されたからか。オレには解らない。多分後者だろうけど……校舎だけに。

「雪ヶ岡君？」

「お：おおう、西連寺か」

そんなくだらないことを考えていたオレの意表をつくように西連寺が話しかけてくる。どうやら先に先生の所に行っていたようだ。さすがオレなんかよりも仕事が早い。

「今日は小テストをするから地図はいらないって」

「そっか。小テストか：じゃあ教室戻りますか」

一夜漬けが効かない抜き打ちの小テストに滅法弱い自分としてはさっさと教室に戻って悪あがきをしなくてはならない。あとここにいると屋上の修理代などをぐちぐち言われたりするので尚更早く出なければならぬ。全く、オレだけが悪いわけじゃないのにな。

職員室の方へ頭を下げつつ退室する。意図せず西連寺と二人きりになってしまったが、これは先ほどの疑問を聞くチャンス。

ちようどひと気も無くなって来たのでと話しかけようとしたが、：……どうやって話しかけよう。

「友達から頼まれたんだけど、西連寺って好きな人いる？」

とか？いやダメだ。友達が少ないことに定評のあるオレがこんな聞き方したらリトか猿山どっちなかしいない。

「知り合いからたの」

いや言い方変えたただけか。何かいい聞き方は無いものか：。と西連寺と二人きりなんていうリトが羨ましがるシチュエーションで歩いていると、前方から体操服をきた沙姫・綾・凜の3人がこち

らに歩いてくるのが見えた。

「あらっ有里様ではありませんか！」

「こんにちは。今から体育？」

「今日はバレーですわ。そんなことより有里様、私の体操着姿どうかしら？」

「あー…可愛いよ。普段の制服姿もいいけど体操着ってのも健康的でいいね」

「んふふ…ふふ、そうですか。では失礼しますわ！」

オレの言葉で上機嫌になった沙姫がニヤニヤ顔で立ち去る。最近こうやって何かにつけて褒めて貰いたがるのだ。やらないと沙姫の奴目に見えてがっかりするし凜に竹刀で叩かれる。この前なんか「いつもと違うところ、有里様なら勿論わかりますわよね」なんて言うてきたけど正直全くわからなかった。凜にしこたま殴られたし沙姫は口を聞いてくれなくなるし綾はおろおろするしでつらかったなあ…。リップ変えたのなんて誰がわかるんだよ。

「今のって、天条院先輩？」

「そ、何か気に入られたらしくてね」

「その、付き合ってるの？」

……オレは驚愕したそしてびっくりした。真面目で清楚な西連寺はそんなことを聞いてくることも、自分が聞こうとしていたことを逆

に質問されたことにもだ。

「ど…どど、どうしてそんなこと聞くの？」

「私の友達がね、知りたいてって言ってたから」

良かった。知らないうちに高感度でも上げたのかと思った。西連寺の友達っていうと…いや待てこれはセカンドチャンス。

「付き合ってはいないよ。仲良くはしてもらってるけどね。…付き合ってる人も今はいないな。好きな人は…：広い意味では沢山いるよ」

リトに蜜柑に御門にヤミ、里紗に未央に沙姫・綾・凜。ララや西連寺や猿山だってみんな好きだ。でもそれはきつとライクであってラブじゃない。その境目がオレにはまだよく解らないのだ。そりゃ、抱きつかれれば心地いいし手をつなげば嬉しくなる。でもその先となると、

…：…やっぱりオレには解らない。これじゃリトをヘタレだなんだって言えないな。

「そういう西連寺はどうなの？付き合ってる人とか好きな人っていないの？」

「わわっ私はそんな！…付き合ってる人なんて…。す…好きな人は…いい、いるけど」

やっぱり付き合ってる人はいないらしい。放課後といえど部活の Teens に打ち込んでいるし、部活が無い日は直帰。時々里紗や未央と

遊んで帰ったりするらしいけど…付き合っていないのは予想通り。でも好きな人がいるとは…。ここで「好きな人って誰？」って聞くのは簡単だけど、それがリトじゃなかった時のダメージがでか過ぎる。付き合いは長いらしいし嫌ってる素振りはないから、リトが好きって可能性は高い。どうする、聞くか？

「好きな」

「ちよつと雪ヶ岡君！チョークの補充はクラス委員の仕事でしょ！」

せっかく思い切って聞いてみようと思ったのに、教室の前で待ち構えていた古手川に遮られてしまった。さすがにチョークは先生の仕事だと思うんだけど、ここで逆らって機嫌を損なうとクラス委員とはなんぞやという有り難い説教を頂くことになってしまう。

「あー、うんそうだ。忘れてた。今からやるよ、教えてくれてありがとね」

「わ、解ってくればいいのよ。」

「それじゃ、私行くね」

邪魔しちゃ悪いとでも思ったのか西連寺が行ってしまった。今さら追いかけて問いただすのもおかしいしすっかりタイミングを見失ってしまった。まあ付き合ってる人がいないと解っただけでも収獲収獲。

「チョークチョークつと…白いのが短くなってるだけか」

黒板の下に付いているチョーク入れを開けてみると最も消費される白いチョークが小指の先ほどの大きさになっていた。不精な先生な

らこれでも普通に授業をするだろうが、なるほど確かに書き難そう
だ。教卓の中にある予備チョークから白色を出してチョーク入れに
補充する。こういう細やかなところに気付くあたりさすがは元クラ
ス委員ということか。口うるさいだけってわけでもないんだな。

クラス委員の仕事も終わり時計を見れば休み時間は後2分。用を足
す用事もないし教科書でも開いて小テストの悪あがきでもするか、
と朝買っておいたペットボトルのお茶を口に含みつつ椅子に座る。

「あの古手川の態度：オレの説がより濃厚になってきたな……」

「それだけはねえから」

何でも恋愛ごとにしたがる猿山の妄言をあしらいながら地図帳の上
で踊る複雑怪奇な国名地名を頭の中に詰め込むのだった。

・・・。

・・・。

放課後。

「よっ、リト！一緒に帰ろうぜ」

「そうだな、どっか寄ってく？」

「んー、小腹減ったしコンビニでも寄ってくか」

学年が変わってもいつも通りリトと二人して下校する。最近ララと
3人で帰ることも増えてきたし時々西連寺や猿山、里紗・未央と大
所帯で帰ったりすることもあるが基本的には二人きりだ。

すっかり見飽きた結城家への帰り道を二人肩を並べて歩く。

「そういえば今日西連寺と話したよ」

「へー、どんなこと？」

「付き合ってる人はいないってさ」

「ま、まままマジで!!??」

のんびりと歩いていたリトが食いついてくる。

「それと、今好きな人がいるらしいぞ」

「好きな人!? そ…そうか好きな人か…誰なんだろう」

西連寺の好きな人、というのが自分だという発想など全くないらしく告白もしていないのに振られた様な落ち込みようを見せるリト。ここはそれでもオレに振り向かせてやる! くらいの男気を見せて欲しいところだけど、そんなものがあるならこうやって悩んでいないだろうな。

「その好きな人ってリトのことだったりしてな」

「え!?! いやいやいやそんな…: 春菜ちゃんがオレのこと…: いやいや、でも…」

オレの言葉でさっきまでの落ち込みようが嘘のようにもじもじだすリト。きつと頭の中では西連寺とカップルになっていちゃいちゃ

する妄想でもしているんだろう。デレーっとだれきった顔がそれを物語っている。

高校生男子っていうのは妄想する力が高いのかな？オレの周りだけかもしれないけど。

「そういえばコンビニ行くんだったな、あそこ寄ってくか」

「あ、ああそうだったな」

どんな妄想に発展したか解らないがリトが頭を抱えてぶんぶん振り回し始めたのでさすがにやばいと思い、ちょうど見つけたコンビニで話を変えさせた。

自動ドアをくぐると真っ先に惣菜パンのコーナーへ。そのさいに肉まんのどれがいくつあるかもチェックしておく。

焼きそばパンを二つ手に取ってから他に何を買おうか選ぶ。今日はコロッケパンかツナパンの二択だな……。

「なあリト、どっちがいいと思う？」

「焼きそばパンとの三択じゃないんだな…最近あまり食べてなさそうなツナパンでいいんじゃないか」

最近こってり系のパンに嵌まっていたからなあ……ツナパンは久しぶりかもしれない。よし今日は焼きそば2ツナ1肉まん1だ！

「それでよく太らないよな」

「その分消費してるしな」

ほくほく顔で店員さんからパンを受け取っているオレを苦々しい表

情で見つめるリト。

これを食べてなお夕食もばっちりとることをしているリトからすればそりゃ太らないのが不思議だろう。ただ御門が言うには、沸血族というのは食べても食べても太りにくいという世のぽっちゃり系女子垂涎のような体質をもっているらしい。むしろ食べないとどんどん痩せていってしまうのだ。なので、焼きそばパンというカロリーの化け物みたいな食べ物で体が自然と欲するというわけである。別にこんな体質じゃなくても食べてたと思うけどね。

「よし、今日はリトん家寄ってこうかな」

「今日も、だろ」

「ちょっと雪ヶ岡君!!」

結城家のふかふかソファで美柑のいれてくれた緑茶をすすりつつ焼きそばパンを頬張れる幸せを夢想しながらコンビニの感度の悪い自動ドアを出てみると、まばゆい黒髪をたなびかせこちらを睨む古手川唯がいた。

「なんでここに？」

「なんでじゃないわ、クラス委員ともあろう人が下校中に買い食いなんて良いと思ってるの!」

「えーっと、長くなりそうだから俺先に行くな。また明日!有里、頑張れよ」

「おいリト見捨てるのかよ助けてくれよ」

「自分で立候補していないとはいっても票を淹れてくれた人がいたんだからその人のために努力するのが筋ってものじゃないの。雪ヶ岡君はまず自覚が足りていないわ、クラス委員というのはそのクラス代表になるわけでその人がこうやってだらしないことをしているとクラスメイト全員がだらしないんじゃないかって思われてしまうの。そんなクラス委員が教室で上級生と抱き合っているなんて：私の目が黒いうちは二度とそんなことさせないんだから。ちよっと聞いているの？」

コンビニの前で正座をさせられ延々と矢のように飛んでくる古手川の言葉に耳を傾けながら、店員さんとコンビニに入っていくお客さんと心配になって様子を見に返ってきたリトの視線に晒されて、もしかしたらオレって幸薄いのかなとかお祓いでもしてもらったほうがいいのかな？と諦めの境地の中でそう思うのだった。

旧校舎の幽霊騒ぎ

クラス替えがあったとはいえ学校生活も2年目ともなればゴールデンウィークを過ぎた教室に若干の冷めた空気が流れてしまうのは仕方無いことだと思う。

日常が習慣化され退屈な授業と狭い運動場を教師の決めたノルマの通りに走り回るだけの日々。ある生徒はまあ現実ってこんなもんだよな、と達観したつもりになってそれを受け入れる。ある生徒はそんな平坦な日常の中に刺激を求めて積極的に行動を起こす。

「ねーねー！旧校舎で幽霊がでるんだって！見に行こうよ！」

そういつて教室の隅っこで騒ぐ里紗と未央はどうやら後者の部類に入るらしい。

「幽霊ってオバケのこと？」

「まー似たようなもんね。最近噂になってるのよ！」

自分の机に腰掛け、買い換えたばかりの携帯を開き液晶画面の端っこに表示される興味の無いトップニュースを眺めながら、里紗達の会話に耳を傾ける。幽霊がどうのこうのという話はオレも猿山から聞いた覚えがある。その話を出した時点で好きなアイドルの話に変えてやったが……。そのせいで具体的な話は聞いていないのだ。

里紗・未央の話にララが興味を持ったらしく、3人でガヤガヤと盛り上がっている。女の子というのは総じて噂話が好きな生き物だが、おの面子はあまりよくない気がする。

「はっ、幽霊なんてただの噂だろ？ありえねーよ」

その話をリトも聞いていたのか若干焚き付けるように会話に参加する。実は初めから会話に参加していた西連寺が怯えていたから、だろうが正直その言葉は迂闊だと思う。

「じゃあさ！ホントかどうかみんなで確かめに行こうよ！」

当然行動力の塊であるウラがこんな提案をするに決まってるし、若さに溢れる里紗・未央は当然それに乗る。幽霊の類が苦手そうな西連寺もその3人に押されては断りようがないだろう。そもそもってウラと西連寺が行くならリトも行くことになる。そうなれば自然と、

「ゆりっちも放課後旧校舎前集合ね」

「いやオレ行くとも行っていないんだけど…」

「ゆりっち来なきゃ楽しくないじゃーん。いいから来るの」

オレの参加も義務付けられる訳だ。幽霊なんて居るわけないし怖くもないし何とも思っていないが、正直行きたくない。別に怖くないけど。

かといってこんなに目をキラキラさせている女の子2人のお誘いを断れるほどオレは弁も立たなければイケメン力もない。

「放課後に旧校舎の前ね……行かせて頂きます」

残された選択肢を選ぶことしかできなかった。

・・・。

・・・。

彩南高校には敷地の隅のほうに追いやられるように一つの建物がある。そう、旧校舎だ。

柱や床の老朽化や耐震性の問題により数十年ほど前に新校舎が建てられることになり今では危険とうことで立ち入り禁止になっている。今は倉庫的な役割として細々と活躍していたらしいが、今回は幽霊騒ぎの舞台に指名されたというわけだ。

「やっぱりやめない？」

「ここまで来ておいてそんなつまらないこと言いつこなしなし！ほら行くよ！」

言われたとおり旧校舎にオレ・リト・ララ・西連寺・里紗・未央の6人が揃った。おかげ様で今日一日憂鬱な気分で過ごしたオレが最後の悪あがきに撤退を提案してみるがあっさりと却下されてしまう。校舎はやはり老朽化がひどく所々窓ガラスは割れ外壁は剥がれ落ちサッシは赤錆でボロボロになっている。幽霊うんぬんよりまず危なくて入りたくない。

よしここはクラス委員としてみんなをなんとしてでも説得するぞと意気込んでみるがすでにオレ以外の全員が旧校舎へと入っていた。まだ夕方だというのに、木々に囲まれた旧校舎付近はひどく薄暗い。こんな場所に一人置いていかれるのはごめんなので、オレはこちらを向いて手招きをしている里紗達の所へ小走りで駆け寄るのだった。

先頭にララ。その後ろに里紗・西連寺・未央。そしてなぜかフライパンを持っているリトに最後尾のオレ。といった布陣でギシギシと

音を立てる旧校舎の床板を歩いていく。

人の出入りの無くなった建物独特の凜とした空気に、

「おい、幽霊さんいますかー？」

とララの間の抜けた声だけが響いている。

「ララさん…別に呼ばなくても……」

入ってまだ10分も経っていないのにすでに涙目の西連寺。その震える手はずっと里紗の袖を掴んでいる。…その役目はリトだろ、なにやってんだ。と思うがオレもリトの裾をずっと掴んでいるので人の事言えない。別に怖くは無いけどほら、暗いし足場も悪いしリトが転ぶとみんな転ぶことになるからね。

「キャーーーーッ!!」

「ギャーーーーッ!!」

すると突然西連寺が叫び声をあげる。どうやら足元をねずみを通ったのに驚いたらしい。

「ど、どーした西連寺!」

「落ち着いて春菜」「ネズミが走っただけだよ、もー」

「大丈夫春菜?」

「う……うん」

「ねえ今春菜以外にも誰か大声出さなかった？」

「そんなことより、あんまりした事起きないな。幽霊なんてやっぱり噂なのかな」

一度は雰囲気飲まれた一行だったが、出会ったものがただのねずみ一匹ということですから緊張感が溶け始めていたとき、

ゴトツ

と何か重たいものが落ちる、鈍い音が聞こえてきた。すっかり気を緩めていたオレ達に再度緊張が走る。

「聞こえた？」

「うん…この中から聞こえたような…」

12の視線が注がれるのは一つの教室の扉。静寂が辺りを支配する。微かに聞こえてくるのは誰かが息を飲む音と、

ミシッ…ミシッ…ミシッ…という不気味な足音だけ。

「ちょっと…誰か扉に近づいてきてるよ」

「やだ…まさか本当に!？」

動揺は動揺を誘い容易く人をパニックに陥れる。こんな時できる男は常に冷静沈着でいることを要求される。

(ももももしかしたら潜伏してる殺人鬼なんて事もありうるぞ…！)

どうする有里!?)

(いやオレほらちょっと風邪気味っていうかそんな感じだから)

(さっき腹から叫び声だしてたやつが風邪な訳ねーだろ!!)

生憎オレもリトもできる男からほど遠いらしい。男らしさが一番問われる場面だというのに扉からもっとも離れた位置で、パニくり揉める野朗2人の滑稽さといったら筆舌にしがたいものがある。

そのまま碌な打開策も考え付く暇も無く、立て付けの悪い扉がガラツと開けられる。

「何事ですか？」

「ヤミちゃん!こんなところで何してるの？」

そこから出てきたのはいつも通りの黒い服を見にまとったヤミだった。

「プリンセス：それに有里。私はただここに古い本がたくさんあるので読んでいただけです」

ヤミが出てきた扉の上を見てみると確かに図書室の表札があった。御門に聞いたことがある、現図書室で読まれなくなったたり古くなったりした本は旧校舎の図書室へ保管されていると。書物の面白さは古くても新しくても変わらないし、人が滅多に來ないことも考えるとヤミにとってピタシな場所といえるのかもしれない。

「ねーねーララちい」

「そのコ…たまに校内で見かけるけど…友達？」

「そ！ヤミちゃんってゆーの！カワイイでしょ！」

「へー」「ホントかわいいー」

さっきまで幽霊を怖がっていたのはどこへやら。里紗も未央もヤミに抱きついてほお擦りをしたり髪を撫でたりいじくっている。どうしたら良いのか解らないヤミは少し戸惑い気味にそれを受け入れていた。

「ん？音がした」

「ええ…何かいます」

そんな姦しい光景をぼんやり眺めていた時、向こうの廊下の曲がり角で小さな音が聞こえた。ヤミも気付いたらしく里紗と未央を振りほどき1歩前に出た。オレもその横に並ぶように立つ。二人して身構えながら意識を前方に集中させた時、曲がり角から勢いよく飛び出してきたのは

「あなた達！！」

鬼の風紀委員古手川唯その人だった。

「そろいもそろってどこへ消えたかと思ったらこんな所へ入り込むなんて！ここは校則で立ち入り禁止のはずでしょ！」

「なーんだ、ユイかー」

「なんだとは何よ！ 気安く呼ばないで！」

再び緊張を強いられたオレ達は見知った顔を見てまた息を漏らす。どうやら教室での話しをこっそり聞いていたらしい。正義感の強い古手川のことだからきつと放って置けなくなったのだろう。こんな所まで女子一人で来れるなんてすごいと思う。いやホント。

「西連寺さんも雪ヶ丘君もどういうつもり！ クラス委員ともありながら一緒にあってこんなところへ！！」

「ご…ごめんなさい…」

「申し訳ないです」

早速お叱りを受けるオレと西連寺。あんなになりたがっていたクラス委員がこんな所で遊んでいるとあっては古手川の怒りも当然だろう。これからみんなで長い長い説教を受けるのか…まあここから出られるならなんでもいいや、と安堵した時、

『出て行け…』

機械のような、何の感情も何の生气も籠っていない、地の底から湧き出てくるような声が辺りに響き渡った。

『出て行け…』 『出て行け…』 『出て行け…』

その声はオレ達を囲むようにして、壁から屋根から窓から床から、いたるところから聞こえてきた。

すっかり和み談笑していた里紗達も、主にオレを説教していた古手川も、押し黙り辺りを見渡し困惑している。

「ちょっ…気味の悪い声出すのやめてよララさんっ!!」

「わ…私じゃないよー」

ララをいたづら者の非常識と認識している古手川が、ララのいたづらではないかと当たりをつけるが、どうやら違うらしい。
オレとしてもララの悪ふざけオチを期待したが、現実はそんなに甘くは無いようだ。

「囲まれてるな…それもすごい数…」

「そうですね、しかしこの気配…地球人のものとは…どうして私の手を掴むのですか?…あと手汗がすごいですよ?」

「いや、ヤミが怖くないようにと思って」

「幽霊嫌いはまだ治ってないようですね」

別に幽霊なんて怖くない。自分の才能の方がよっぽど怖い。それに自分よりか弱い人間がいたら手を差し伸べてあげる。それが紳士であり男つてもんだろうが。あと手汗だけじゃなく、脇とか背中もすごい冷や汗かいてるからね。手だけじゃないから。

そんな負け惜しみを胸中吐いていたとき、突然

ゴバァッ!!!

と爆音をかき鳴らしオレ達を支えていた床板が抜け落ちた。

・・・。

「うーいたた…」『ララ様大丈夫ですか？』

「うーん…」「ん…西連寺ちゃん！？大丈夫か！」

「い…一体何なのよ！」

「まさか床が抜けるとは…ヤミと…里紗未央は上に残ったらしいね」
どうやら下に落ちたのはオレとリト、ララ・西連寺に古手川の5人。
落ちる時咄嗟に手を離したのでヤミは落ちずにすんだようだ。里紗
達は良い位置にいたのかな。

それにしても凄い埃だ。ただでさえ地面に積もっていたのが2階の
それと巻き上げられた1階のものが合わさって軽い霧みたいになっ
ている。これじゃ気管支をやられてしまうかもしれない。

「ねえ、早くみんなと合流して出ようよお…ここおかしいよ、さっ
きの声…出て行けて…きっと幽霊が」

「いや、ないないない。幽霊なんていないから。……いないから。
うん」

「そうよ！幽霊なんて非科学的だわ！絶対信じないんだから……な
んで雪ヶ丘君は私の腕を掴んでるの？あとすごい手汗…」

「いやいや、クラス委員たるもの他の生徒が怖くないようにそして
歩きやすいようにですね、そんなことよりここから出るのは賛成！
早く行こうぜ」

気を取り直して話を誤魔化してオレ達は先へ進むことにする。すっかり恐怖に打ちのめされた西連寺はウラの腕にしがみつき、オレは古手川の手を握り一見手を引っ張ってもらっているようにも見える形で一緒に歩いている。余ったリトは一人先頭を歩く形になっている。

「?…った!」

「ん?…うわっ!」

するといきなり古手川が特に障害物も見当たらないところでスカートを翻しながら転んだ。当然手を掴んでいたオレも一緒になって転ぶ。

「ちょっと雪ヶ丘君! 足ひっつけたでしょ!」

「ひっかけてねーよ! もしひっつけたなら一緒に転ぶはずないだろ、やめろよ驚かせるの!」

「他に誰がいるってゆーの!」

「おいやめろ、オレ達以外に誰かいるわけ無いじゃないか、やめろ!」

「キャアアアアア! ! !」

オレと古手川が口論になりかけそうになると、西連寺がまたもや空気を震わせるような叫び声を上げてリトの腕にしがみつく。

さっきの声も怖かったけど女の子の叫び声ってのもまた違った怖さがある。正直結構びびってしまった。いや違う、別に怖くなんか無い。ないぞ。

「今…ピ、ピアノの音が…」

「ピアノの音…？」

それもそのはず、オレ達の前にあるのは音楽室だからだ。当然ピアノが置いてあるはずだしなんら問題はない。

ポロン…ポロン…

とオレにもはっきり聞こえた。確かにあれはピアノの音で、音楽室の中から鳴っている。

「幽霊なんて…いないんだよな、古手川」

「あ、あたりまえでしょ！」

「じゃあ、確かめて来たら？」

「なんで私が——！こういうのは男子の仕事でしょ！」

「おいおい君たち音楽室からピアノの音がして何がおかしいっていうんだい？それこそ当たり前前のことだろう、さっさと先にすすもうじゃ」

「誰ですか——？」

（ちゅうちょなく開けた——っ！？）

ララにはそういった所謂お約束。といったものが解らないらしく、

興味の赴くまま音楽室の扉を開ける。するとこれもお約束というべきか、当然そこにピアノはあるが演奏している人などいない。

「あれ―？誰もいないよ？」

ララ以外の全員の頭の中で（これは間違いなく幽霊の仕業！いるっ！確実にっ！！）という確信が得られる。

いやしかしこのピアノが全自動演奏機能つきグランドピアノだったという可能性も捨てきれない。確認なんかしないけど。こんな部屋死んでも入りたくないしね。衛生面的にね。

「と…とにかく、そんなにおびえる必要なんもねないわ。幽霊なんて空想の産物、怖いと思うから変な音や変な物が見えるのよ」

「じゃあ唯も怖いと思ってたってこと？」

「そ、そんなわけないじゃない！」

と気丈に振舞ってはいるが、さっきから古手川の手は小刻みに震えていることをオレは知っている。だがそれ以上にオレの手が震えているので古手川自身そのことに気付いていないのだろう。

「ねえあつちに何かいるよ―？」

すぐに他に興味が移るララが廊下の向こう側を指さす。本当はさっきからガチャ…ガチャ…という奇妙な音が聞こえていて、それであえて無視していたのだけど…。悪い予感によく当たるというが、これはもはや確信だ。10対0で振り返れば碌なことにならない。そう解っていてもオレは振り返らなくてはならない。男の子だからじゃない、クラス委員だからじゃない。得体の知れないものに後ろか

ら襲われたら恐らく心臓が止まってしまうからだ。

覚悟を決めオレはゆっくりと後ろを振り返ってみると、

やはりそこには人体模型と骨格標本がぼんやりと闇の中で立ち尽くしていた。

「で、出た——っ!!」

「あ…ありえない…幽霊なんて空想の…」

「………」

「さ、西連寺!？」

まず西連寺があまりのショックに耐え切れなかったのか気を失ってしまう。

『出て行け…』『出て行け…』『出て行け…』

先ほどと同じ声を呟きながら人体模型と骨格標本がゆっくりとこちらへ近づいてくる。

リトは倒れそうな西連寺を支えているし、古手川は腰が抜けてしまったのか地面にへたり込んで呆然としている。オレだってできるものなら気を失いたい。

そんな中、

「これから声だしてるんだろー?」

と相変わらず緊張感の欠片もない声を出しながらララが骨格標本の頭をひよいと取り上げて後ろや口の中を覗き込んでいる。

「なななにしてんだ――！」

「幽霊に失礼でしょ！はやく返しなさいっ」

「?…リトがそういうなら…よっと、わたたっ」

何で?といった顔をしながら骨の頭の首に取り付けようとしたララだったが、落ちていた消火器に躓いてしまい模型と標本ともども一緒に倒れこんでしまう。

「ララっ大丈夫か!!」

すかさずリトが駆け寄る。オレも行こうかと思ったが古手川がまだ腰が抜けているようなのでここから動けない。バラバラになった人体模型と骨格標本の不気味さに足が動かないでいるような腰抜けではないのだオレは。

「ん?」

「な、なんだこいつら!?!」

バラバラになった模型と標本から野球ボールほどの丸っこい毛の生えたふさふさの生き物がいくつも顔を出した。

『やべっばれた!逃げろ!!!』

その生き物達はリトと目が合うや否や素早い動きで建物の隙間に逃

げ込んでいく。あの生き物……。

この幽霊騒ぎの原因が解り掛けてきたオレはさっきの小さな生き物が逃げ込んだ隙間へ近づこうとしたとき、

ゴバァッ！！！とまたも轟音を響かせ1階の天井が抜け落ちてくる。旧校舎は相当老朽化していたらしい。立ち入り禁止にするのも頷ける。

『ぐはははは！思い知らせてやる！！』

飛び散る天井の板と舞い散る埃と共に落ちてきたのは、一つ目のタコのような化け物だった。触手の一つにはヤミが、もう一つには里紗と未央が捕まっている。

これで確信した。こいつら宇宙生物だ。あのちっこい生き物もこいつもどこかで見たことがある。なるほど、ここはこいつらの住処ってわけか。幽霊騒ぎは生徒を近寄らせないためってことか。正体が解ればこっちのもん。

「化け物だ——っ！！」

「成敗！！」

『むっ！なんだこいつっ！はや！？うぼろっ！！』

「もうやられた——っ！！」

すぐさまタコ型宇宙人に走り寄る。何本か触手を飛ばしてくるがヤミの髪の毛の応酬に比べたら止まって見えるレベルだ。容易く回避し、その頭に踵落としを決めると一撃で仕留めた。

『へへへ、俺達の縄張りにはいったこと後悔させてやるぜ』

「なんか向こうからいっぱい来た——っ!!」

『ちよっ!なんだこいつ!?』『おいそっちいったぞ!ぐはあ!』

『ちっどこいきやがった!上か?おぼあ!』

「みんなやられた——っ!!」

待ち伏せでもしていたのかオレ達の来た道から宇宙人の集団が湧いてきたが、オレの照れ隠し兼八つ当たりの前に一瞬で全員地面に倒れ伏すことになった。宇宙人恐るるに足らず。

・
・
・
・
・

・
・
・

「さっきまで怯えていた人と同じ人とは思えないわ…」

「さすが衰えてはいませんね有里」

「すっごーいゆりっち幽霊みんな倒しちゃった!」

「なんかやりすぎ感すごいあるんだけど…まあいいか」

倒れたタコの触手から3人を救出しやっと一息をつけた。異形の生き物達が積み重ねられて倒れている光景は圧巻だが、まあ怖がらされた仕返しぐらいはしなきゃということ。別にオレは怖くは無かったけど。

「オバケ沢山いたんだね」

「いえ、彼らはオバケではありません」

「その説明は私がしましょう」

そういつて絶妙のタイミングで出てきたのはまさかの御門養護教諭その人だった。白衣を着ると説明したくなるのは職業病の一種なのかな。

『ミ…ミカド？』『あの有名なドクターミカド？』

その名前を聞いた宇宙生物達に動揺が走る。こんな辺境の星まで診察に訪れるものがあるぐらい御門の名前は宇宙では有名だし、

『デビルークの姫と…殺し屋”金色の闇”！？』

『ひい…っ殺さないでっ！』

御門がウラとヤミのことを紹介すると宇宙生物達は全員抱き合ってガタガタと震えだす。ギドの娘といえはそれだけで有名だし、賞金稼ぎをやっていたヤミも同じ程度には有名なのだろう。オレの名前は御門に目配せをして出さないで貰った。オレはこの星では地球人のしがない高校生雪ヶ丘有里でいたい。

「それでなんでこの人達はここに住んでたの？」

「彼らはそれぞれ自分の星を追い出されたり家出したりした…：…そうね、野良宇宙人とでも言うのかしら。そんな彼らがこの星へたど

り着いて宿の無いもの同士集まってここへ隠れ住むようになったというわけ」

「なるほど――」

「でもここでずっと住んでいるのはまずいわね…仕方ない」私が「あなた達に仕事紹介してあげよっか！」

『え！？』

「”知り合い”に遊園地の経営者をやってる宇宙人がいるの。あなた達オバケ屋敷とかピツタリじゃない？」

御門のいう”私”というのはオレのことであり”知り合い”というのもオレのことだ。そしてオレは遊園地を経営もしてなければそんな知り合いもない。…そう、彼女は「さっきあなたの事を隠してあげたのだから、彼らのこと何とかしてあげてね」と言っているのだ。オレだけに。

そりゃオレだって同じ宇宙人として不憫に思うけど…ん？　そういえば天条院の家で遊園地を経営していたような…なるほど、そこまで折込済みってことか。またしても手のひらで踊れってことか。とはいえ、

「結局お化けの仕業じゃなかったんだね」

「ホント、ホント。何度もビビって損しちゃった！あの人達も宇宙人って解るとそんなに怖くないもんねー」

これにて一件落着。幽霊騒ぎはもう無くなるだろうし、幽霊がやっぱりこの世にいないってことが証明されたといって言い。うん、言

って言い。

「それにしてもゆりっちって幽霊とか苦手だったんだね、意外かも！」

「別に苦手じゃないし怖がってもいなかったわ。ただちょっと体調が優れなかっただけだし」

「ずっと私の手を握ってたのも、手汗が凄かったのも体調が悪いからってことなのかしら？」

「ほっほう、古手川さんの手をねえ…どう思いますか未央さん」

「これはこれはなにやら匂いますなあ里紗さん」

『このような暗い場所ですし多少怖がってしまうのは仕方の無いことだと思いますよ』

「だろー？なんていうか雰囲気とかってあるじゃん。そういうのに影響されやすいってただだから…」

「の割には一番初めに叫び声上げてたけどな」

「おいリトそれは裏切り行為だぞ！」

『フフ…あの声には私もびっくりしてしまいました』

「あの春菜がねずみで驚いた時のね」

「あれゆりっちだったんだーはずかしーっ」

「あれは西連寺の声に驚いただけで別に幽霊とかそんなんじゃない……
っていうかさつきから誰の声……」

『…？あ、申し送れました。私400年前この地で死んだお静と申
します』

「ギャ~~~~~ホントに出た~~~~!!!!」

「キヤアアアアアアアア!!」

「20歳までに幽霊見たら一生見るとかいじゃんオレ宇宙的には
20歳じゃねえけど地球的には高校生なわけであってかうわああああ
ああああああ!!!!」

幽霊なんていないさ。寝ぼけた人が見間違えたのさ。でも白装束を
着て薄ぼんやりと透けて足の無い浮遊体に対して、理屈付けが出来
るほどオレは生憎賢くは無い。ヤミに抱きつき大声を上げ、後ろで
御門の含み笑いを聞きつつ、ほんの少しだけ泣いた。

ファッションデザイナーリトママ

幽霊騒ぎも一段落し、A組にまた平穏な日々が戻った。
あの宇宙生物達の処遇だが、天条院に電話をしてみると

「あら、有里様の頼みなら何でもお引き受けいたしますわ」

と簡単に承諾され、すぐに天条院ランドのお化け屋敷へと迎え入れられることになった。

まるで本物のような迫力ということでお客さん達に好評らしく連日大行列ができるほどらしい。

宇宙生物達からすぐにお礼のはがきが届いた。お礼に今度皆さんで遊びに来てくださいと言うが正直行きたくない。怖いとかじゃなくて。ほら生憎忙しいし。

「なんか最近暇だな」

「って言われてもなあ…特に予定もイベントもないし。かといってまた幽霊騒ぎみたいなの起されても嫌だ」

うららかな陽気に重たくなる瞼を擦りながら、オレの前の席を借りてだらーっと机に突っ伏すリトが零す。6月というカレンダーに赤色が少ない月は、それに伴い自然とイベントごとも少なくなってくる。さらに頻繁に降る雨は自ずと心にまで染み込んで、より鬱々とした空気を濃くしていた。

その例に漏れず、リトもだらけ気味らしい。旧校舎探検のときにはほんの少し西連寺と接近していたが、それ以来これといった接触は無い。

時々ララとオレと4人で昼食を取ったりするが、喋っているのはオレとララだけで2人は押し黙るか片言と喋るだけだ。これでは良くない。

ララは一緒に住んでいるというハンデがある分なんだか最近リトとの距離が近くなっている気がする。いや元から近かったんだけど、なんかこう…心理的に？

なんにせよ良くない。ハンデは良くない。

そうだ…一度西連寺もリトの家に行って見ればいいんだ。これはかなりのステッパアップだぞ。少なくとも友達以上な関係になるはずだ、ナイス名案。

となればどうその話へ持っていくか…。そういえばララって自分専用のラボってのを作ってそこで暮らしてるんだよね…。
うん、よし。

「なあなあ、ララ」

「ん？なにーゆりっち」

オレはちょうど西連寺と話していたララに、とことこつと近寄って
いって話しかける。

「リトん家でララの部屋を見かけたことがないんだけど、どこに住んでんの？」

「えーつとね、リトのクローゼットを空間湾曲でお部屋にしているの！」

これも美柑から聞いて知っている。中はかなり広いらしく見たことのない機械で埋まっているらしい。デビルークの科学力、それもラの発明の凄さは宇宙中でも抜きん出ているほどの才能なのでこのくらいのことは造作もないことだろう。

オレは今一そういうの詳しくないからなあ…。つと今はそんなことより、

「へーそうなんだ。じゃあさ今日見に行ってもいい？」

「いいよ！見て欲しい機械とかいっぱいあるんだ！」

ここまでは順調。

「やった…でもオレ一人だけじゃなんか味気ないな。他にも誰か誘えるといいんだけど…」

「んー、あつ！じゃあ春菜も来なよ！春菜にも私の部屋見て欲しいし」

「え？…うん、じゃあお邪魔してもいいかな？」

「もっちろんだよー！」

ナイスララ。こちらの思惑どおり、横にいた西連寺を誘ってくれた。これで自然に西連寺を結城家に入れることが出来る。しかも一度はリトの部屋へ入るわけだ。これはかなりの進展になるはず。いうかさせてやる。

「じゃあ放課後にね」

ララが西連寺に自分の作った機械の説明をしだしたのを見て、オレは2人から離れ自分の席に戻る。

ガラッと音を立ててマイ座布団の敷いてある椅子を引き、それに座るや否やリトが食らいつく勢いでこちらに乗り出してきた。

「おい、何だ今の!？」

「聞いてだろ、今日西連寺がお前ん家行くってさ」

リトからすれば中学からの夢の一つがこんなにもあっさり叶おうとしているのだ、興奮するなというのが無理な話だろう。さっきの感じをみるに普通に誘っても遊びに来てくれると思うんだけどなあ西連寺は。もしかしたら結構リトのこと良く思っているのかもしれない。

「お前!…そんないきなり…」

「オレだけのほうが良かった?」

「…いや、グッジョブ親友」

「気にするなよ、オレ焼きそばパンとか大好きだからさ」

「…………4個で勘弁してください」

「あの商店街のパン屋さんにあるDX焼きそばパンがいいな、2個でいいからさ」

「DX焼きそばパンって1個400円もするじゃねえか!…んー1個だけな」

「グッジョブ親友」

友情は見返りを求めない。でもお礼と感謝の気持ちを奢るという行動にして返すのはまた別の話。またそれを遠まわしに催促するのもまた別の話。あのでっかくてソースのたっぷりついた、あいつがオレを狂わせるのさ。

こうして突発的に訪れた西連寺結城家訪問イベントによって、リトは放課後までの授業をずっとそわそわしながら過ごすことになった。

・・・。

・・・。

「私のラボに行ったら一緒にゲームしよーよ！」

「私ゲームとかあんまりやったことないけど…」

オレ達の少し前を歩きながらキャイキャイと会話をするララと西連寺。女子高生2人が和気藹々と談笑する姿は目にも心にも優しい。それが2人ともタイプは違えども美少女ともなればその愛らしさはひとおしだ。それに比べて、

「どうしよう部屋ちゃん綺麗だったかななんかパンツとか出てないかな匂いとか大丈夫かなお茶菓子とかあったかなどうしよう有里！」

うろたえる男の惨めさといったら形容し難いものがある。そりゃ筋金入りの純情ピュアピュアボーイであるリトに冷静な対応を求めろ

というのは少し酷な話。かといってこのままおろしたままではただ家の場所を案内しただけで終りそうだ。それではこのイベントを仕組んだオレとしては納得がいかない。いきなり告白しろとか付き合えとか言うわけじゃなくて、なんかこう切っ掛けというか何か起きれば…。

「とりあえず落ち着いたら？西連寺の目的はウラの部屋に遊びに行くことなんだからさ。もつと気楽にね」

「そ、そそそうだな。うん、気楽に気楽にな」

一応の落ち着きは取り戻せたようだが、まだ髪の毛を触ったり無意味にポケットに手をつっ込んだり小さな石に躓きそうになったりと忙しい。もうちょつとしっかりしてもらわないと…。

ともあれ、遠くは無い結城家への道のりはあつという間に終わり、今4人の目の前には見慣れた家屋の姿と屋根より高く雄雄しくそびえたつセリーヌの姿がある。セリーヌとはウラがリトの誕生日に上げたお花のことで命名したのは美柑。10mはあろうかという体長と発達した鳶に何故かある口が特徴的で、その鳶をつかい自分で水を撒いたり他の植物にも撒いてあげる。見た目は結構怖そうにも見えるが中々に優しい植物なのだ。

「えっと…あの木は…」

「大丈夫！セリーヌって言ってすごいい子なんだよ！」

「セリーヌ？…そうなんだ」

「まあまあこんな所で立ち話もなんだし中へ入ろうよ」

「お前ん家じゃないだろ……」

自分の家まで来たせいか随分落ち着きを取り戻したリトを押すようにして玄関の扉を開けさせる。

「たっだいまー！」

「お…お邪魔します…」

「ただいまー」

「だからお前の家じゃないって…ん？」

4人だと些か手狭な、でも掃除の行き届いている見慣れた玄関に入ってみると見知らぬ靴が置いてあるのにリトが気付いた。

白のハイヒール？サンダルって言うのかな。踵が高くてなんかこうよく女の子が履いてるやつ。御門もこれと似た黒い色の靴を持っていったっけ。というか強請られて買ったんだっけ。たかが靴とバカにしていたらその値段に驚かされた、まさか諭吉が3人も出て行ってしまうことになるなんて。それでいて滅多に履かずに時々一緒に出かける時だけ履くなんてどうかと思うよね。口には出さないけどさ。

ってどうでもいいこと考えてしまっていたけど、つまり女物の知らない靴が置いてあった。

お客様でも来てるのかな？つと中を覗き込んでみると、

「ちょ、ちょっとリト!!」

「美柑!？」

珍しく慌てた様子的美柑が血相を変えて部屋から飛び出してきた。

「あ、有里さんも来てたんだ。こんにちは」

「1週間ぶり、こんちは」

「家に招待してくれるとか言いながら全然してくれないじゃん、嘘つき。っていまはそうじゃなくて、大変だよリト!早く来て!!」

「は? 何だなんだよ!？」

ポカンとしているリトの手を引き美柑が部屋へと連れて行く。それに釣られるようにオレ達3人も顔を見合わせて玄関に上がる。美柑の後ろから部屋を覗き込んでみると、居間に置いてあるソファの上に一人の女性が座っていた。

「か、母さん!？いつ帰ってきたの!？」

「あらリトおかえりー。ついさっきよ! ちょっと日本で仕事があったねー、あまりゆっくりしてられないけど」

母さん? そういえばあの人が写った写真をリトの親父さんの仕事場で見たことがある。その時は好きな芸能人かモデルさんかと思ったが、なるほど奥さんの写真を飾ってたのか。よく見てみれば目元とカリトや美柑にそっくりだ、2人は母親似らしい。

「それよりリト、何だか素敵な宇宙人の女の子が居候してるんですよ?」

「リトママ初めまして！ララです」

「まあ！その子！？…むっ！！」

呼ばれたララがリトの後ろから元気に登場する。それをみたリトママがパアっと花の咲いたような笑顔になるも一瞬でプロの顔に変わり、ムニムニとララの体をまさぐりはじめた。

「B89W57H87ってとこね…胸の大きさ、お尻の引き締まり具合といい絶妙のバランスね。すごいっ！身近にこんなすばらしいボディがあったなんて！！」

人が変わったかのようにララの胸やお尻を一心不乱に触り続ける。さすがのララもくすぐったそうに体を振っていた。もしかしたらリトママはあっち系の人なのかもしれない？なんて下卑た妄想をしてしまう自分が情けない。

「あららごめんなさい！私ったら仕事モードになっちゃってて…」

「仕事モード？」

「母さんはファッションデザイナーなんだけど、モデルさんのプロデュースもやってるんだよ」

と美柑が説明してくれる。大分前に美柑から、母親は海外を飛び回っていると聞いていたがファッションデザイナーだったとは。

美柑がファッション雑誌をやたら沢山持っていたのはおしゃれに興味のある年頃ってだけじゃなく、母親のデザインしている服が乗っているからだったのか。

父親が売れっ子漫画家て母親が売れっ子ファッションデザイナーなんてなんかちょっとかっこいいな。

「へへすごいんだねリトママ」

「な、すごいんだな」

「いえいえそんな大したことないのよオホホホ。…あら？そっちの男の子は？」

「あ、ご紹介に遅れまして。リトと同じクラスの雪ヶ丘有里と申します。リトや美柑とは仲良くしてもらって…」

「あら！あなたが有里ちゃん？美柑から色々聞いているわよ。…ふむ、君もなかなか良い体つきを…」

「いやいやそんな褒められるような…ちょっとこ触って！やめ、いやっ脱がしてません？だれかー！美柑ー！助けて！」

ファッションデザイナーの洗練された手練手管によっていとも容易くブレザーを脱がされ、ボタンを外され、Yシャツをはだけさせられ、ベルトにまで手が及びあわや貞操の危機となった時、

「あの、私お邪魔みたいだったのでこれで…」

先ほどまで話に置いてかれて所在無さげに立っていた西連寺が帰ろうとしたのを見て、慌ててララとリトが止めにかかる。

そうだ本来の目的は西連寺を案内することだった。オレも初めて見るリト達の母親にすっかり忘れていた。

リトママもそこでやっと西連寺の存在に気付いたらしく、オレの衣服を掴んだまま玄関へと向う西連寺を見つめていたが、一瞬その瞳がきらりと光り、

「待ってあなた！」

「な、なんですか…？」

オレへの興味など失ったのか瞬時に西連寺の所まで駆け寄り肩を掴みじろじろとその体を吟味している。

「…小ぶりながらバランスのとれたボディライン…スリムな体系を望む子達が注目するいい体型だわ。これは…ちよつとよく見せて！」

「キャッ！」

何かぶつぶつと小声で呟いていたかと思うとオレにしたように勢いよく西連寺の服を脱がしにかかる。当然驚いた西連寺は可愛らしい叫び声をあげた。

それと同時にオレは顔を背けてその柔肌から目を逸らす。気恥ずかしかつたとか気を使ったとかじゃなくて、オレの後ろにいる美柑から肌を突き刺すような殺気が飛ばされてきたからだ。その殺気からはデレデレするな、という意味がひしひしと伝わってきている。

「いいかげんにしろよ母さん！」

「え？あ、やだ私ったらごめんなさい！かわいかったものだから夢中になっちゃって…えっとあなたは…」

「あ…西連寺春菜です。結城君とはその…同じクラスで…」

はだけた服を直しながらそう答える西連寺。その頬は恥ずかしかったのかほのかに赤く染まっている。

が、恐ろしいのは女の勘。その表情から何か気付いたらしいリトママが西連寺にこそそそと耳打ちをすると、

「私きゅ、急用を思い出したので帰ります！」

「さ、西連寺!？」

「ごめんなさい！」

急に踵を返し有無を言わず玄関の扉を開き出て行ってしまった。

「ああ…せっかく来てくれたのに…」

「そんな遠慮しなくてもいいのにね」

無常にも悲しげな音を立てて閉まる扉へ涙目になりながらため息を漏らすリトと残念そうなウラ。

そしてオレの後ろには

「なんだか面白そうなことになってるじゃない」

「でしょ？」

ニヤニヤと笑うリトママと美柑。さっきの何気ないやり取りで2人とも何か解ったのだろうか…女の人ってすごいな。

「そういう美柑だって何だか大変そうじゃない？」

「え？別になに…ちっ、違うから。そんなんじゃないから」

今度はリトママがオレのほうを見てニヤニヤしだし、美柑が何だかちよつと怒り気味でリトママの腕をポコポコと叩いていた。

よく解らないけど微笑ましい家族のやり取りに見えて、ちよつぴり羨ましかった。

ある日みかんがいる日

カラッとした晴れ間模様の空の下、それでもなお明け方のように薄暗い洋館の一室でオレは不慣れな掃除に勤しんでいた。

「掃除機って一見吸えているようで全然吸えて無いんだよなあ…結局コロコロの出番なのか」

「それはコロコロではなくて粘着クリーナーでは？」

「商標登録はコロコロだからコロコロでいいの」

いつも通りオレのベットのの上に座りながら本を読むヤミと話しながら、粘着クリーナーもといコロコロでカーペットの髪の毛や埃を取っていく。

普段生活している分にはそれほど汚れているようには見えないが、しゃがんでみると予想以上に抜け毛や食べかすがそこら中に落ちている。

始めは掃除機でブイブイ吸っていたがどうにもモコモコしたカーペットに髪の毛がしがみ付いて離れず結局部屋中コロコロを転がすことになっていた。

しばらくしてカーペットも綺麗になり、立ち上がって部屋を見渡してみる。それなりに綺麗だと思う、多分。

いつもそこら辺に放り出してあった制服はちゃんとハンガーに掛けたし、漫画や小説たちも順番に本棚に納まっている。布団も枕もシーツを洗って日干ししてふかふかだ。うむ、よし完璧。

ふと時計を見やれば13時22分。約束の時間は30分だから結構ギリギリだったかもしれない。

何故こんな慣れない掃除を朝っぱらからやっているかと聞かれれば……そう、今日は美柑が遊びに来るのだ。

前々から約束はしていたけどお互いの都合が合わなかったが、昨日メールしている時にその話になって急遽来ることになった。本当は朝からということだったが、こっちにも準備があると押し切ってお昼からの予定にもらった。男の部屋には異性に見られたくないものが一杯あるのだ。何かは言わないけど。

「誰か来るのですか？」

「そ、もうすぐ美柑……リトの妹なんだけど、前から遊びに来たいって言ってたからね」

「そうですか……では私は自分の部屋に戻っています」

「気を遣わせちゃったみたいで悪いね」

そういうと読んでいた小説をパタンと閉じヤミが出て行ってしまった。……部屋？家じゃなくて？言い間違えたんだろうか……。そういえばヤミの奴どこに住んでるんだろう、宇宙船かな。

と、そうこうしている内に時刻は24分。30分に近くのコンビニで待ち合わせなのでそろそろ出ないとまずい。さっきハンガーに掛けたばかりのジャケットを羽織り部屋を出る。その時、もう一度振り返って部屋を見渡してみる。一流ホテルの一室としてテレビや雑誌で紹介されてもなんら遜色の無い部屋がそこにはあった。うむ、完璧だ。

ひとしきり眺め満足感を得たところで、なるべく埃が立たないよう

静かに扉を閉めた。

・・・。

・・・。

右手に付けた腕時計を1分に一度見つつ小走りでコンビニに着いたときには時刻は33分。学校生活で5分前行動を習慣づけられてる学生としてはだらしなさが目立つ。もしこれが軍隊なら腕立て100回の罰が待っているだろう。

「ごめん！遅れた」

「アイス」

「ん？聞いたことのない挨拶だなあ美柑さん。さあオレの家はこっちだよ」

「アイス」

「そうだね、1個300円のバナラね。すぐ買ってきます」

コンビニの前に仁王立ちで立つ女教官はとても優しく、財布の中の硬貨3枚で許してくれた。1分100円計算だろう…30分とか遅れてたら何買わされていただろうか。

ともあれコンビニ限定発売のバナラアイスの効果は絶大で、コンビニから我が家までの短い道のりですっかり機嫌も良くなったようだ。硬貨をはたいただけの効果はあった、なんちゃって。

「何にやにやしてるの？」

「いや、なんでもない。ほんとなんでもない」

「ふーん、で、これが有里さん家？何ていうか……変わってるね」

門の前に立って我が家の外観を眺める美柑は若干引き気味。それもそうだ、初夏だっていうのに薄暗くてカラスがぎゃわぎゃわ屋根の上で騒いでいるような家なんてお化け屋敷以外の何ものでも無い。しかもそれがオレを怖がらせるだけなんていう幼稚な理由だから始末が悪い。居候の身なので強くは言えないけど…。

「まあ見た目はあれだけど中は豪華だからさ。入って入って」

「んー、おじゃまします」

御門がどこからか拾ってきた変な銅像や変な宇宙製のトーマスポールをおっかなびつくりに見つめる美柑を引率しながらすっかり見慣れた趣味の悪い玄関の扉を開いた。

「へー、中は結構いい感じかも」

「でしょ。中の改装はオレの案が入ってるからね」

外見をお化け屋敷にされてしまったオレは内装を全てオレが決めることで抵抗を示した。ちょうどその時テレビでやっていた外国の洋館に影響されて内装は中世のヨーロッパみたいな感じになっている。これが意外と住んでみると不便なことが多い。無駄に広いので掃除は大変だし、御門のせいで窓が少なくて結局薄暗くて長い廊下が逆に怖くなってしまったり、かっこよくなるかなと思って敷いてみた

赤絨毯は頻繁に干さないとすぐカビ臭くなっちゃうし。

ホテルみたいに時々住むなら最高かもしれないけど、自宅として住むには少々息苦しい。やっぱり和風な感じにすればよかったな。

「お茶淹れてくるわ。オレの部屋は2階上がつてすぐ右手の部屋だから。入って待ってて」

「2階の右手ね、わかった」

キョロキョロと家の中を見渡し歳相応の可愛らしさを醸し出しながら階段を昇る美柑を尻目にオレは台所へ行き紅茶を準備する。

適したお湯の温度とか、葉の開くまでの時間とか紅茶にも入れ方ってものがあるって、飲み物なんて体が潤えばなんだっていいんだ！なんて言っていたオレも御門や美柑の厳しい指導があればお嬢様に仕える執事のように淹れられるようにだってなる。

適当な淹れ方をした所でどうせ味の違いなんて解らないんじゃないの？と心の中でほんのりと魔がさすが、実際やってみたってどうせすぐにバレて怒られて正座させられるだけだ。

自分の小ささに辟易しつつ、結局丁寧に淹れてしまった紅茶をトレイに乗せて階段を昇る。

落ちそうになるトレイを何とか支えつつ自室の扉を開けた。

「お待たせ：ってなにしてんの？」

「えっ：いや、別になんでもないけど」

部屋の中では美柑がベッドの下に片手を突っ込んでいる。オレと目が合うと一瞬ギクツとした顔をしたが、何事もなかったように立ち上がり目の前を横切ったと思うと、ソファの上にちょこんと座った。

「今ベットの下…」

「この部屋が有里さんの部屋なんだね。掃除したの？」

「え、あ…ああうん。それなりに汚れてたから朝から掃除機かけた
りね。結構綺麗でしょ」

言いながらソファの前の机にトレイを置き紅茶を注ぐ。ホワッと独特の香りが立った。

「掃除機を掛けたのは解るけど、窓を開けてないから空中に舞った埃が落ちてきて結局汚れてるし、本棚の埃を払って無いし、部屋の四隅もクズとかが溜まってるよ。頑張ったみたいだけどまだまだだよね」

紅茶を一口飲み、滑りのよくなった美柑の口から飛び出てきたのは紅茶への評価ではなく掃除へのダメ出しだった。完璧に掃除したつもりだったのに、小学校低学年の頃から家事を手伝っていた美柑からすれば鼻で笑ってしまうレベルだったらしい。空気中の埃にも気を配らないとなのか…よく考えたら常識だよな。

「精進します」

「うむ。それはそれとして、なかなかいいお部屋だよね。小金持ち
って感じ」

ベットと机と本棚とテレビとクローゼットしか無い部屋だけだね。
その分それらは少々値の張るものを使ってるけど。何年も使うもの
にお金を出し渋っちゃいけないもんね。

「何にもない殺風景な部屋だけだね。ゲームはちょっとだけあるけど…」

「何があるの？」

「えっとね…リトから貰ったスー○ーファミコンと猿山から貰ったワ○ダースワンがある」

「もうそれ化石じゃん」

「失敬な！失敬だぞ！面白いゲームに新しいも古いも無いんだ」

映像や音楽に凝るのもいけないわけじゃないと思うけど、ゲームであって映画では無いんだからやっぱりユーザーとしてはゲーム性を重視して欲しいよね、って猿山の受け売りだけど。ゲームなんてあんまりしないし、暇な時はほとんど本を読んでもからね。

「じゃあ対戦しようよ」

「その挑戦受けて立つ！何にする？爆弾？レース？パズルもあるけど」

「じゃあ爆弾で」

ククク、愚かなり美柑。この爆弾男というゲーム……オレの最も得意なゲームの一つなのさ。数多い敵を爆発し灰燼と化してきたオレの手腕でギャフンと言わせてやるぜ。レトロゲームの洗礼を受けるのだ。

テキパキとゲーム機を用意しカセットに2度息を吹きかけてからセットする。電源を入れると古さの中に味わい深さを含んだ電子音が似つかわしくない最新TVから流れてきた。

「タイムマンじゃあれだしCPUも入れようか」

「そこら辺は有里さんに任せるよ」

最大5人で対戦が可能なこのゲーム。CPUの行動パターンを全て見切っているオレからすればもはや美柑は4対1の状況に追い込んだといっても過言ではない。ふはは、さあゲーム開始だ！

「ひゃっほー！ハンドゲットだぜ！ふはは！爆弾魔のお通りだ！…げ、自爆した」

「まず一勝だね」

………。

「ちよっ！美柑、もうキック持ってるんだから取らなくて良いじゃん！おい、CPUこっちくんな道連れになるだろ…うげっ」

「はい8勝目」

………。

「畜生、なんの希望もねえ…火力1個でどう勝てっていうんだ…お、爆弾だラッキー…罠だとおおお！？」

「15勝目ー」

・・・・・。

「あの…協力プレイしません？」

「23連勝目だね。いいよ、じゃあこのレースゲームやろっか」

「そ、そそそれなら負けないぜ！バナナの錬金術師と呼ばれたオレのドライビングテクを魅せてやる！」

・・・・・。

・・・。

「う…うう…そ、それじゃこのパズルゲームで勝負だ！！」

「んー、それじゃハンデとして5連鎖までにしてあげる」

・・・・・。

・・・。

「う…うう…うぐう…調子にのってすみません」

「っていうかこれリトから貰った奴でしょ？それに私リトよりゲーム強いしね」

3時間のまったりゲーム遊びでオレのプライドはずたずたに傷つけられた。…そんな…御門相手には楽勝の常勝だったのに、こんなことになるなんて…まさか一勝もできないなんて。……もしかして御

門の奴わざと負けていた？罰ゲームを設けたときだけやたら強かったし：畜生、手のひらの上で踊ってたって言うのか。

「いやーでも楽しかったよ。有里さんのうろたえ方とかね」

「ほんとごめんなさい、でかい口叩いてごめんなさい」

「たくさん笑ったなあ：あ、もう5時か。夕飯作らなきゃだし帰らないと」

「もうそんな時間か。結構遊んでたんだな：家まで送るよ」

「……………有里さんのそういう切り替えて卑怯だよね」

「なんじゃそりゃ」

オレをゲームでぼこぼこにして上機嫌だった美柑が今度は照れくさそうに頬を少し膨らませた。一緒に夕飯でもと思ったが、それだと結城家のディナーがお湯を注ぐだけの質素な食事になってしまうだろう。今日はオレの当番だしちょっと凝ったものをもっと考えていたけど仕方ない。

すっかり飲み干した紅茶を乗せたトレイを片手で持ち、美柑と一緒に部屋を出て階段を下りる。

すると階段の一番下の段にヤミが座って小説を読んでいた。

「あの人…だれ？」

当然進行方向にいるヤミに美柑が気付かないわけが無く、オレにそう聞いてくる。

「えっと…オレの知り合いで金色の闇っていうんだ。ヤミって呼んであげて」

「へー…初めまして、ヤミさん」

「初めまして…有里、こちらの方は」

「リトの妹で結城美柑。今日遊びに来てたんだ」

「そうですか…」

何だかちよつと空気が重たくなった気がするが気のせいだよ。2人とも同じくらいの年齢（見た目）なんだから仲良くなれそうだと思うんだけど。

「それでは私は自室に戻りますので」

いやだから自室ってどこだよ、と突っ込む間もなくヤミは階段を昇って2階へ消えてしまった。

「それじゃ、帰るか」

「そうだね」

そんなこんなで初めての美柑来訪はこうして幕を閉じた。これで我が家の場所を覚えた美柑は学校帰りや祝日・日曜日など月1で遊びに来ることになる。その度にオレは心を折られることになる訳だがそれはまた別の話。

・・・。

・・・。

その日の夜。

「あらそう、結城君の妹がね…」

「そ、紹介したことなかったっけ？」

「話ではね。起してくれたらよかったのに」

「昨日は夜遅くまで手術だったんだろ。それに起したって起きないくせに」

「有里、醤油を取ってください」

いつもの様に3人での夕食。今日は魚中心のメニューで赤だしの味噌汁に初挑戦してみた。なんだか朝食っぽいメニューになってしまったけど、小鉢に豚の角煮があるからまあいいか。きゅうりの浅漬は失敗だった。浸かりが浅すぎてただのきゅうりになってしまっている。だからって堂々と目の前で醤油をかけられるとそれはそれでつらいものがあるよ。

「ところで、ヤミは自室とかって言ってたけど…どこに住んでるの？」

「この家ですが」

「…やっぱりか…どーいうことだ」

「あら、2ヶ月前から住んでるわよ？」

「どーいうことだ!？」

「正式には宇宙船の一室と部屋の入り口とを繋げてあります」

「知らなかった…どこの部屋よ」

「有里の隣の部屋です」

「知らなかった!」

隣の部屋は使ってなかったし特に物音もしなかったし。頻繁に屋敷内で見かけるのに玄関から入ってくるのは一度も見たことないなあとは思ったけど。

「まあ…家主の御門が認めたんならいいのか」

「…………この家の正式な家主は……あなたよ」

「は？」

「あなたの宇宙金庫の貯金を地球のお金に換金してそのお金で買ったお屋敷よ。だからあなたが家主ってわけ」

「え?…は?じゃあ何か?居候は…」

「私と」

「わたしということです」

驚いた、本当に驚いた。いやどういうことだ？そりゃ賞金稼ぎがいのことをして貯金もしてた。御門のことは信頼してるし勝手に換金したこともこの屋敷を買ったことも別にかまわないだけど…。なんだこの釈然としない感じは。んー……。

「まあいっか。別に何が変わるわけでも無いし」

「あなたのそういうところが好きよ」

「醤油を取ってください」

解らないことを考えたって仕方ない。少し辛かった赤だしの味噌汁を啜りながら思考停止する頭で、そう思った。

ヤミ色のアジサイ

「どこ行くんだったけ？オレトイレットペーパー買って帰りたいんだけど」

「聞いて無いのに付いてきたのかよ。鞆岡達がなんか服を見たいんだと」

「なるほど、それに西連寺が連れてこられてて、リトも付いていきたいけど恥ずかしいからオレを無理矢理誘ったと」

「う…だって男一人だけで混ざるのってなんかおかしいじゃん？」

「言えば普通に付いて来たのに」

今日はみんなで学校帰りに駅前へ。前を歩く鞆岡・沢田・ララ・西連寺の後ろをリトとオレで付いて歩く。大抵みんなで一緒のときはこの隊列になってしまう。もっとリトが前に行けば良いのに…。

「あれ、ヤミっちじゃない？」

「ホントだ！ヤミちゃん！」

駅の近くまでやってくるとララが手を振りながら駆け出す。その前方を見てみると、駅のベンチに座り人目を集めているヤミの姿があった。

横に3〜4冊の雑誌のような本を置きつつ手に持った本に視線を落としていた。身内最良に見ても可愛い外国っぽい美少女が本を読む姿はやはり注目を集めるらしい。特に男性の。

にしてもこんな所で読書とは：最近は一緒の家に住んでることをカミングアウトしたせいかな、我が物顔で家中を歩き回り、勝手にオレの部屋に入ってきてはベットの上が散々ゴロゴロしたり寝転んでテレビを見るオレの背中に乗ってきたりと自由気ままだ。よく考えたら前からそんな感じだったけどね。

「ユリ：それにプリンセス。学校帰りですか？」

読んでいた本を畳みつつオレ達の制服姿をみたヤミが言う。

「そ、ちょっとみんなで買い物ってね。ヤミは……ファッション誌？」

「地球の衣服は多彩なものが多いので」

確かに。機能性重視な風潮が強い宇宙文化圏の人々にとって、地球人の衣服の種類の多さは驚愕に値する。学生の服ってだけで学ランだのセーラー服だのブレザーだの：スカートの色だって多種多様だし。

「へー…あ、これ母さんがデザインした服だ」

「おっ！リトママさんの？見たい見たい」

「ほらこの表紙の服。海外じゃ割りと有名らしいからね」

そう言ってリトが渡してくれた雑誌の表紙には外国の美人なお姉さんがパリコレで出てきそうな衣装を着こなして決め顔をしている。元から整った顔立ちをしているんだろうし、プロの人が化粧をしているんだろうけど、この人のために作られた！と言えるほど似合っ

ている衣装がよりこの外国人さんを美しく仕上げていた。
これなら有名になるのも頷ける。

「でもヤミっちいつもその格好だよねー」

「ねーもっと色んな格好すればいいのにね」

そんなことをヤミに抱きついている里沙と未央が言う。抱き付かれているヤミはどうすればいいか解らない困ったような顔をしていた。2人の押しの強さはすごいからなあ…。

「じゃあさ！ヤミちゃんの服をみんなで選んであげようよ！」

話を聞いていたララがいつものように名案を思いついた！といった顔で手を上げる。そりゃ元々の目的も服を買いに行くことだったらしいし丁度いいんだろうけど。

「ララっちそれナイス！」

「よーし！それじゃ早速行こっ！」

「あの…人には人の似合っている服があるし、お気に入りとか思い入れとかもあるんだろうから自分の好きな服をきて」

「ゆりっちうるさい！ほら行くよ！」

「……はい」

糸岡とララがヤミを、沢田がオレの背中を押し、苦笑いのリトと西連寺を連れてオレ達は歩き始める。

ヤミが着ている服は黒い皮のような服で膝上20cmのスカートが目眩しい。袖は肩が出ていて長袖になっているが通気性と保温性

を兼ね備えているので夏涼しく冬暖かい。背中部分がマントのよう
に長くなっており地面に擦れてボロボロになっている。そして胸
元に開いた十字の穴が可愛い。

……なぜこんなにもヤミの服に詳しいか。

さして面白い理由なんて無い。オレが作った服だからだ。

研究所から連れ出したとき、ヤミは病院で渡されるような薄っぺら
い服しか着ていなかった。それを見かねた御門が自分の持っている
服を渡そうとしていたが当時のヤミはまったく人を寄せ付けようと
しなかった。

そこでオレは何とかなしようと服を作ってみたというわけだ。

とは言っても地球の方法みたいに、布を切って縫って色を染めてな
んて難しいことがオレに出来るわけもなく。

宇宙の科学技術によってデザイン画をスキャンするだけで完成品が
出てくるという簡単な方法だった。その変わりデザインにはかなり
の自信があるし、ヤミが足に巻いているベルトは余った布で作った
オレの手作りだ。意外にも上手にできてしまったのが嬉しくていく
つも作ってしまった。

ヤミも気に入ってくれたらしく、無言で受け取った割には複製をい
くつも作ってしままだに着ているという物持ちの良さ。

当然製作者であるオレも気に入っている服である。それをちよつと
の思いつきで違う服も着てみようなんて言われたら二の足を踏んで
しまうのもやむを得ないといえよう。

「とはいえこの場の流れに逆らってまで主張しようなんて思うほど
オレは男らしくも空気が読めなくもないのだ」

「なにゆりっち一人でごによごによ言ってるの？」

「いやなんでもないよ。ここが里紗とか未央のよく来る店なんだ」

「そっ！春菜とかもここで買ったたりしてるし、結構他の女の子もよく見るよ」

「下着とかも売ってんだね」

やってきたのは女性服専門店。

店の前の看板には変な筆記体のアルファベットが並んでいてよく読み取れない。きっと小じゃれた単語が書かれているんだろう。

店内は白とピンクを基調とした装飾がなされており、ただそれだけで男性を強烈に拒む空気を醸し出している。10〜20代の女性店員と女性のお客さんによってもはや鉄壁の守りだ。たとえばカップルでも男性は非常に入りづらいだろう。

当然奥手なりトは店の前まで来た時点で顔を真っ赤にし、店に入った時点で茹で上がったタコのように頭から湯気を上げて挙動不審になっている。

そりゃだって、今オレ達のいるのはなんと下着のコーナー。正直オレだって何となく恥ずかしい。

「この下着は可愛いが多いのよ。私も未央も愛用してるからね」

「へー、あんまり詳しくないからあれだけど、確かに可愛いデザインが多いね」

そう隣にいた里紗に返す。置いてある下着達は多彩な色もさることながら小さなリボンが着いていたりレースが着いていたり可愛い絵

が描いてあったりと目に楽しい。普段人に見せない場所なんだから何だっというんじゃないの？というのはきつと男の感覚なんだろう。

「でしょー？今も私が着けてるのこのお店のだしね。……さあ、一体どれでしょう？」

「んー…意外と、この…ピンクの奴とか？」

「え、あ…えーっと…あっ！未央！これなんかヤミっちに似合いそうじゃない！？」

「おい、凶星か？当たったんだな？このピンクの意外に可愛らしいのを履いてるんだな？」

流行のものを常にチェックし、ファッション雑誌に乗っているような小物を見に付け一部の男子から”遊んでいる”と言われてしまっている里紗も下着は可愛らしいものを着けているらしい。

なんて言い当てられて動揺している里紗に不覚にもときめいてしまったが、今はヤミの服を見に来ているんだ。若干だだをこねてもみだが、オレの作った服よりもヤミに似合う服があるならそちらの方がいいに決まっている。

ならば元・製作者としてこの店舗に置いてある全ての服に目を通し、最も似合うものを選別することこそが今すべきことなんじゃないのか。

「にしても肝心のヤミはどこにいるの？」

「なんかもういくつか服を見繕って試着室で着替えてるらしいぞ」

「ああそうなんだ……リトはもう慣れた？」

「いや正直早くこの店を出たいんだけど、ララも…西連寺ちゃんも楽しそうだから」

「女の子ってそういうもんなぁ……おっ？」

試着室の前でキャツキャと騒ぐ女子達から少し離れたところでリトと話していると、シャーツとカーテンが開けられて

「……どうですか？」

「おおー！可愛い！」

「ヤミっちいいねー！」

「本当だ、似合ってる」

賛美の声の中、ボーイッシュな服に着替えたヤミが所在無さげに現れた。

タンクトップに黒いズボン。それに合わせた黒い少し大きめの帽子を被っており、健康的な可憐さに仕上がっている。

スケボーとかダンスとか踊っているような子が着ている様な服装といった感じだった。元が良いだけに似合っているように見えるが…
…オレはなんか違う気がした。可愛いのは可愛いんだけど。

「やっぱりヤミの綺麗な肌を活かすためにはスカートのほうが良いと思うんだ！」

「だよね！私もそう思う」

「えー、ズボンも似合うと思うのになー」

「じゃあこれなんていいんじゃないかな？」

……。

・・・。

「……………」

「うひょゝ似合う！」

「やっぱりヤミには黒色だよな！」

「でももっとフツーのもいいんじゃない？」

「髪の毛とかいじったらいいんじゃないかな！」

「このスカートなんて…どうかな」

1時間後…

「これでいいんですか？」

「かわいいー！」

「すごい似合ってるよ！」

「ヤミっちかわいいー！かわいいよ！」

「うん、すごくいいと思う」

すっかりコーディネートが楽しくなっちゃってしまい、気付けば1時間が過ぎてしまっていた。

結果としてヤミの格好は、下がすごく短い淡い色のひらひらしたスカートで上が白いタンクトップ？ノースリーブ？になった。

オレ一押し of 白いワンピースはどうも女子達の賛同を得られなかった。採用はされなかった。避暑地に遊びに来た大富豪の一人娘的な感じで可愛らしかったんだけど、どうも違ったらしい。

「……………」

見るからに軽薄そうな格好をしている3人の男。見た目で判断するわけじゃないが言動からも頭の悪さが滲み出ている。

「うち、何よこの時代遅れのナンパヤローは」

「うっとおしいなあ」

「こ…こわい」

「変なカッコーの人たち」

好戦的な里紗未央は別としてすっかり怯えてしまっている西連寺、そして不良3人を遊園地のマスコットか何かだと思っているようなララ。

そして女子達、特に西連寺とララの前に庇うようにして立つリト。こういうことをサラッとできる所がリトのいいところだと思う。

とはいえ何の鍛えもしていない只の男子高校生。ヤニに蝕まれて体力の無さそうなチンピラでも3人に囲まれてしまえばボコボコにされてしまうだろう。

「おい、お前らやめろ。っていうかどっか行け」

となればやはりオレが行かざるを得ない。強いからとか格好付けたいからとかじゃなくて、リトが女子達が殴られるのを見たくなかったから。そして嫌な予感がしていたから。

「あア！？んだてめえケンカ売ってんのカ？」

「そーいうのいいから、ゲーセンでもパチンコでも行って来いよ。場所わからねーならついて行ってやるからさ」

「バカにしやがって！ぶっ飛ばしてやルあ！？」

とりあえずの挑発はすぐに完了した。現実には失望し日々鬱憤を溜め込んでいる若者は笑っちゃうほどに怒りの沸点が低い。

すぐに顔を真っ赤にし鼻息を荒くしながらこちらの首根っこを掴もうとしてくる。

それを右手ではじきつつ、みんなから離れるためにじりじりと移動し始める……が、

（や、やばい！？）

オレの瞳に飛び込んだきたのは、後ろの不良がポケットからナイフを取り出している光景だった。

しかもその不良、こちらにそのナイフを投げつけてきたのだ。

眼前には回転しながら迫るナイフ。が、ただ一直線にこちらに飛んでくるだけの物なんて避けるのは容易い。

しかしオレの後ろには沢田と粂岡が立っている。かわしたナイフが2人に当たってしまうかもしれない。

ならばどうすればいいか。簡単だ、ナイフを取ってしまえばいい。その程度のこと目をつぶったってできる。言われれば歯で啞えてキヤッチすることもできるかもしれない。

でもそれもダメだ。

パキィィン！！と目の前でナイフが音を立てて砕け散るのを見て自らの失策を確信した。

オレのすべきことはナイフが投げられる前に不良たちを全員ノしてしまうことだったのだ。

オレの前へ颯爽と躍り出たヤミを見てそう思った。粉々になったナイフだったものが空中でキラキラと光りなんとも幻想的な光景になっている。

が、その向こう側では3人の不良達が金色の拳の嵐に曝されておよそ人が出すとは思えないような声を出している。

あ……空中に浮かされた。すげえ……あいつらずっと空中にいる。

ナイフを投げた奴が重点的に狙われているらしく、すでに意識は刈り取られ人形のように拳の上で跳ねていた。むしろ気絶もできないでいる後の2人のほうが地獄だろう。

自業自得と呼ぶには凄惨なソレは、不良のしている高価そうな腕時計の秒針が3周するまで終ることはなかった。

・・・・・・。

結局その後は不良たちが全員気絶してしまい、人も段々集まってきたので救急車を呼んでその場は解散することになった。

リトは西連寺とララを連れて、里紗と未央はそれと逆方向に。オレは不良たちにトドメを刺そうとしているヤミを抱きかかえ駆け足でその場を離れた。

その夜。

「つてなことがあってさあ」

「それがトイレットペーパーを買い忘れた理由というわけね」

今日は御門と2人で夕食。ここ最近はやミも混ぜて3人での食卓に慣れていてしまったので、横の空席がどことなく寂しい。

「予備が余ってたんだから良かったじゃん。それにしてもやミの奴降りてこないな……」

「……さっき少し話してきたけど」

「オレが行くと鍵閉めるのに……でどうだった？」

「買ってもらったスカートが少し破れていたそうよ」

「あーあの暴れた時にか……なるほどそれがショックで降りてこれないんだな。よし、オレが同じのをまた買ってやろう」

「バカね……ほんとバカね」

「え、いやだってさあ」

「いいからあなたは持つてるオリジナルの型紙でもう一度あのヤミちゃんの服を作って渡せばいいのよ」

「はあ？ だってあいつあの服いっぱい持つてるじゃんか」

「だから……あなたからまた貰うのが嬉しいんですよ」

「なるほど、わからん。まあでも言うとおりにしてみる。お礼じゃないけど御門にも服買ってくるよ」

「……期待せずに待ってるわ」

そう言ってクールにたまごスープをすする御門は嬉しさを隠しきれなかったのか口元が小さく動いていた。夏物の服が欲しいと言ったし里沙・未央達に聞いていい感じのものを見繕ってこよう。

とはいえまずはヤミのほうだ。食事が終わりしだいに保管してあつ

た型紙を取り出し機械へ通して待つこと6分。見慣れた黒色の服が出来上がった。出来立てホコホコのそれを抱えて自室隣の部屋に行って見ると、そこにヤミの姿は無かった。

一緒に帰ってきたしそれから出かけた様子は無いので屋敷のどこかにいるはずだ。とすると風呂かトイレだろうか、あるいは書斎という名の倉庫にいるのかもしれない。

探しに行くか、と足を1歩進めるがいよいよ待て服を持ったまま歩き回るのはどうだろう。何かの拍子に汚れたり切れたり解れたりするかもしれない。そうだ、とりあえず自室に置いておこう。

とすっかりオレの手の形に塗装が禿げてしまっている扉の取っ手をガチャリと開き部屋に入る。電気も付けず真っ暗な中机の方へ歩いていき服を置いた。そしてポケットに携帯電話を入れっぱなしだったことに気付き、それをベットの方へ投げると、コツンと小さな音がして携帯が跳ね返り足元へと転がった。

おや? と思いベットを凝視してみると、そこには猫のように小さく丸くなっているヤミの姿があった。

「び、びっくりした……なんだヤミか。どうしたんだよ、電気も点けないで」

「……………」

ヤミからの返事は返ってこない。こちらにつむじを向けたままだじっと座っているだけだ。

いつも着ている黒い服ではなく、今日買った洋服に身を包んでいる。よく見ればスカートの横の部分が破れて糸が解れてしまっている。

御門が言っていたことはどうやら本当らしい。

どう切り出しているか解らずとりあえずヤミの横に座る。怒られるとでも思ったのか、肩がビクツと動いたのがわかった。

「それ、やっぱり破けちゃったんだ」

「……………」

相変わらず返事はない。自分の部屋ではなくオレの部屋にいたということは、謝るために来たんだと思うけど…。

そもそも服を破ったことに関して全然怒ってはいないし、個人的にはやっぱり普段の黒い服のほうが似合ってると思うからね。

「これ新しくまた作ったんだ。予備はいっぱい持ってるだろうけど、やっぱりヤミにはこっちの方が似合ってると思うからさ」

そう言って持っていた服をヤミに手渡した。しかし未だに返事はない。

しばらく反応が返ってくるのを待っていたら、突然ヤミが立ち上がり部屋から出て行った。競歩とも呼べるような歩みの速さに声を掛ける間すらなかった。

一呼吸置いて部屋から飛び出してみると、隣の扉からガチャッと鍵を閉める音がしてくる。あの部屋に鍵なんてついてただろうか…。この日は朝になるまでヤミは部屋から出てこなかった。最終的なフオローは御門のやつがしてくれたらしい。

次の日。

「やっぱりヤミはその服だよなあ」

「そうね、ヤミちゃんといったらこれよね」

「そうですか」

朝の食卓。いつものように3人で座り机を囲む。

ヤミからは昨日の落ち込んでいた様子は感じられず、すっかり持ち直したらしい。御門とどんな話をしたんだろうか……まあいいか。

「よし、今日は休みだしどっか遊び行くか」

「そうね、ちょうど薬も切れてたし惑星ホコタテなんてどうかしら？」

「なんで惑星間レベルで日帰りの話になってるんだよ。普通に考えてそこら辺ブラブラに決まってるんだろ」

「だって最近この星から出ることに少ないじゃない」

「ここに来た意味考えろよ。元は隠居と療養だろ。それを遊び倒してたら本末転倒じゃなか。まあ今度ね、その時はヤミも一緒に行こうな」

「……そうですか」

そう言って黙々と箸を動かすヤミの顔はいつも通りの無表情だったが、オレにはそれが初夏の朝露に濡れるアジサイのような笑顔に見えた。

うん、見えた。

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花

私は教室の椅子に座り、いつもどおり静かに授業を受けている。意識の半分を教師の言葉に向けて、もう半分を違う方向に向けながら。

意識を向けている方向には一人の女子生徒がいる。その生徒は窓際の席に座って頬杖をつき、憂いを帯びた瞳を青々とした空へ向け物思いに耽っている。彼女は……いやお嬢様はここ最近、2、3ヶ月ほど前からか。こうしてボーッと考え事をするのが多くなった。以前の、思い立ったらすぐ行動。というのが嘘のように。

理由は解っている。それは同時に私の懸念でもあったからだ。

……。

……。

「ふふふ……いいか、オレはチョコキを出す」

「し、心理戦だと！？くっ……いくぞ！」

「「最初はグー！じゃんけんっ！」」

「っしゅー勝ったー！」

「くっそお！グーじゃねえか……きったねえ」

「勝ち勝ちだろ。じゃあ今日は……焼きそばパンとコロツケパン

に飲み物コーヒーで。はい350円、お釣りはやるよ」

「釣りなんて10円しかでねーじゃねーかくっそお……んじゃ行つて来るわ」

「お早めにー」

いつものように猿山とお昼ジャンケン。

基本的に猿山は最初にグーかチョキ、あいこになると自分が出したものに勝つものを出す癖がある。

つまり始めに適当に揺さぶりをかけた後、グーを出しておけば確率は50%以上。それであいこなら再びグーでお終いだ。

しかしこの方法ばかりしているとさすがの猿山もおかしいと気付いてしまう。なので時々は負けておいて互いの勝率を6対4くらいに調節しておく必要がある。

友達相手にひどいと思われるかもしれないが、まあ学生のちょっとしたお昼のお遊びだし、猿山が気付くまでは楽しませてもらうという。

ともあれこの遊びには大きな難点がある。

猿山のやつパンを買ってくるのがとてつもなく遅いのだ。自分の分を選ぶのにも時間が掛かるし、そのくせ食べながら帰ってくるので下手をすると昼休みが終る頃になるまで来ないときもある。

買ってきて貰っているわけだからそう文句ばかり言えないけどね。

猿山が廊下に出て行くのを見送った後、鞆から焼きそばパンを一つ取り出し頬張る。

これは非常用焼きそばパンで小腹が減った時や帰り道、道の端っこでダンボールに入り小刻みに震えている猫に千切って与えるためのものだ。

基本的に鮑の中に2本常備されていて、大概1本はこうして昼に消費される。そうしないと夕方あたりにお腹が減って動けなくなってしまうからだ。

一人で食べていても味気無い。リトのところにも行こうかな、と教室を見渡してみたが見当たらない。

そうめんの中に時々混ざっている赤い麺のように目立つララのピンク髪も見えない。きっと屋上かどこかで美柑特製弁当でも食べているんだろう。

そうこうしている内に焼きそばパンを食べ終わってしまった。やっぱり1本だけでは腹の足しにもならない。

それに何だか今日はいつもよりもお腹が減っている気がする。今月の点滴をまだしてもらっていないせいだろうか……ここのところ夜中の急患が多いせいで御門が疲れきってすぐに寝てしまい検診が遅れてしまっているのだ。

あんまり遅れてしまうとまた貧血を起したり、下手すると倒れてしまいかもしれない。今週末辺りにでもしてくれると嬉しいんだけど。

「雪ヶ丘君、一人でいるなんて珍しいわね」

食べ終わった焼きそばパンの袋を小さく折りたたんで遊んでいると、後ろから声を掛けられた。

振り返ってみるとそこには両手でお弁当を持つ我がクラスの委員長、古手川唯がそこには立っていた。

「こんな日もあるんだよ。古手川だって一人じゃんか」

「私は……ちょっと職員室に用事があったから。ってことは、お昼ごはんまだなの？」

「猿山が買ってきてくれるはずだけど、この分だと後10分は帰っ

てこないんじゃないかな。お腹減ってるっていうのに……」

「そ、そう。それじゃあ……私のお弁当、半分食べる？」

「いいの！？いや、悪いよ。こう見えてオレ結構食べるし、古手川の分が無くなっちゃうよ」

「半分って言うてるでしょ。なんで全部食べようとしてるのよ」

そう言いながら古手川はオレの前の席をこちらに向けて座り机に弁当を広げた。

お弁当の中身は、玉子焼きにアスパラのベーコン巻き。タコさん型に切られたウィンナーにブロッコリーやトマトといったいかにもお弁当といった内容だった。栄養バランスとか詳しいことは解らないけど、見た目はとても美味しそうだ。

「へー、これ古手川が作ったの？」

「そんな訳無いでしょ、お母さんよ。言っておくけど、上げるのは半分だからね」

「わーかってるって。それじゃ玉子焼きからいただきますーっす」と

「ちょ、ちょっと！手で取らないでよ、汚いでしょ！」

「おっおう、ごめん。でもオレ箸なんて持ってないよ？どうやって取れば……」

「え……」

2人の視線が古手川の持っている水色の箸に注がれる。昼休みの賑やかな喧騒の中でこの机の上だけが時間が止まったかのように動かなくなる。

古手川の箸を借りて食べた場合、必然的にその後古手川も使うことになる。これは地球文化的に言うところの間接キスというやつだ。一昨日読んだ恋愛小説でも高校生カップルがそんなことで喜んでいた気がする。が、何故だよくわからんが恥ずかしいぞ。

じゃあ古手川に食べさせてもらうか？これは地球文化的に言うところの”アーン”というやつだ。よく御門にやらされて、それを真似したがるヤミにも何度かしてあげたことがある。が、してもらったことはない。よくわからんが恥ずかしいぞ。

時間にして何分経っただろうか、もしかしたら数秒のことかもしれないし、数日経っていたかもしれない。

そのぐらい長い時間にオレは感じた。古手川も同じことを考えていたらしく、頬を真っ赤にしながら固まっている。

この沈黙はまずい。何かしらのアクションを起してこの空気を払拭しなくてはいけないが、一度止まってしまった話の流れを再建するような話術は生憎持ち合わせていない。

どうする……大きな声をだして誤魔化してみようか。でも頭おかしいと思われちゃうな、適当なことと言って逃げちゃおうか。それも心象を悪くするし……畜生猿山のやつまだ帰ってこないのか。

額にうつすらと汗を掻き、パニックに陥った頭で必死に思考をめぐらせていると、

「ん？」

不意に廊下側から妙な感覚がした。

嫌な予感当たる。というのは宇宙でも地球でも同じ。横目でチラ

リと確認してみると廊下の窓の向こう側にある木の上にキラリと光るものが見えた。

狙撃銃のスコップか投げナイフの類か……いやいやここは平和の星の平和の国日本。そんな野蛮人がおいそれと学校まで入ってくるわけが無い。

思い直し何となく座りの悪くなった椅子を少し自分の方へ引こうとすると、

チュインッ

と机の端で何かが弾けた。無駄に鋭い動体視力がそれを機敏に捉えていた。あれは地球製の銃の弾丸だった。

「え？今の音なに？」

突然の不信音にさっきまで呆けていた古手川もキョロキョロ辺りを見渡している。

まずい、さっきの銃は恐らくオレを狙った物の筈だ。それも……宇宙賞金稼ぎの可能性が高い。

真に遺憾ながらオレの首にはそれなりの賞金が掛けられてしまっている。これはギドの野郎との銀河統一戦の時に掛けられてしまったものだがこの話はまた今度。

ともあれまずはここから離れなくては。このままではクラスメイトや古手川に被害が及んでしまう。

「えっと……親方！空から女の子が！」

「は？ちょ、ちょっと雪ヶ岡君！？」

言い訳が思いつかなかったので適当に喚き散らした後窓から教室の

窓から飛び降りる。うちのクラスは3階にあったが、これくらいの高さなら特に支障はない。腰のバネを使って軽く着地、すぐに校舎の物陰に隠れた。教室の方からは古手川の声が聞こえている気がするが叫び声とかでは無いところを見るとやっぱり狙いはオレで間違いないらしい。

どこかで隠れてやり過ごすか、それとも迎え撃つか。着ていた制服の袖を捲り上げた時、お腹がくーと鳴った。

隠れてやり過ごすで決定だな。なんせ焼きそばパン1個しか食べてないし。

この時間帯に人が居ないところは……体育館はバスケットかしている奴がいるし運動場もサッカーとかしてるしなあ……屋上は多分リト達がいるしいざという時逃げ場が無い。とすれば……そうか柔道場だ。この時間は練習もしていないし裏口も窓もあるので逃げるのも最適だ。

そうと決まれば即移動。物陰をかきかさとカメレオンのように走りながら柔道場へとたどり着く。

慎重に中を確認してから開きっ放しにしてある扉から転がり込んだ。思ったとおり生徒の姿は無く、放課後は柔道部たちの野太い声が響く道場は静まり返りながら荘厳な空気さえただよわせていた。

とりあえず放課後くらいまでここで寝ているか、と携帯を取り出し御門に「なんか狙われてるから一応手当てと検診の準備しておいてね」とメールを打っておく。

送信完了の画面を確認した後携帯をポケットにしまった。

と、その時後ろで誰かが着地する音が聞こえてくる。

どうやらうまく逃げ切れなかったらしい。避けられない接敵に多少のため息を胸中漏らしながらも振り返ってみれば、そこには意外な人物が立っていた。

「り……凜？」

そう、九条凜その人だ。

右手に木刀、左肩にはライフル銃のようなものを担いでいる。先ほどの狙撃はあれでやったらしい。

「あなたがここに來たことも、それを予想できてしまったことも私は氣に入らない」

普段からチクチクとこちらに敵意を向けていた彼女だったが、今日の様子は何だかおかしい。敵意というよりは殺意だし目なんか血走っている氣がする。なんかもう持ってる木刀から天下取ったる！みたいな感じかもしれない。

なんだ知り合いか……と一瞬緩んだ氣をすぐにまた引き締める。

宇宙賞金稼ぎの中には擬態タイプや寄生タイプといった対象物やその周りの人物に成りすまして暗殺を試みる者達がいる。知り合いだからって氣を許していると首筋をスパーツというわけだ。

そして何より恐ろしいのが、対象の周りの者に成りすます場合その者を真っ先に殺すのだ。寄生タイプの場合も宿主は息絶えることになる。

つまり……今日の前にいる凜が成り代わりだった場合……。

「おい、り……凜だよ、な？」

恐る恐る発したオレの問いかけの答えは鋭く踏み込んで放たれた木刀だった。

すぐさま体をずらし避ける。が、それも覚悟の上だったのか返す刀でこちらの眼球を狙う突きが飛んでくる。

以前のクリスマス、そしてそれで降ちよくちよくと襲われた時よりも踏み込みは深く刀の振りも素早くなっていた。

が、やはり地球人の少女レベル。かわすのは容易い。

刀の横振りからの二連蹴り、そこからさらに刀での追撃。凜の得意とするコンボ技だ。普通の暴漢なんかだったら四発貫って悶絶しているだろうが、オレからすれば……ってちよっと偉そうな言い方になっちゃった。まあでも凜は攻撃する時にまず当てようとするところを見る癖があるのでどこに打つか、何をするかは丸解りなのだ。やっぱりこれは凜本人か？ いやいや待て待て。まだ寄生されている可能性が残っている。確認する方法は……。

「貴様さえっ貴様さえ居なければ！！沙姫様は、綾は、私は！！」

「よく解らないけど、ごめんっ」

喉仏目指して一直線に出された突きを避け、伸び切った腕を掴み一本背負いの要領で凜を投げる。

負けじと凜も空中で体を捻り見事両足で着地するが、すかさずその足を払ってあげると簡単に地面へと倒れた。

そのまま凜の上になりさながら押し倒したかのような体勢になる。

「くっ！」

当然身をよじって抵抗する凜の瞳を覗き込む。寄生された生き物は太抵首から上に変化が生じる。最もそれが出やすいのが目だ。色が変わったり黒目が増えたりとすぐにその症状が出る。後は耳とか鼻とか口の中とか。

どうやら凜にその症状は見られない。寄生されてもいないらしい、これでホッと一安心。

している場合ではない。今の状況、客観的に見てひと気の無い道場で女子生徒を押し倒す変態男子の図に他ならない。

そしてオレに馬乗りにされているいつも常にクールな表情を決めている凜が何だか涙目だ。きつく食いしばった唇がその屈辱を如実に表している。

これはまずい。退いた途端にぶん殴られそうだ。凜が襲い掛かってくる理由はよく解らないが、原因はオレにあるらしい。それは間違いないだろう、が覚えが無い。そりゃ下着をチラッと見てしまったこともあったけど、その前から凜はオレのことを睨んでいたし……。とりあえずこの体勢だけでも何とかしなくては。こんなところを人に見られたら社会的な死がオレを出迎えてくれることになってしまう。療養しにきて警察の厄介になるなんて笑い話にもなりやしない。押し倒してしまったことは事実だ。1発殴られるくらいむしろ当たり前じゃないか。覚悟を決めろオレ、手当ての準備はすでに出来てるじゃないか。

と、何気なく顔を上げてみると、

「有里く……、凜……」

柔道場の扉の前には丸眼鏡が特徴的な女の子。

そう、綾が立っていた。

比喻ではなく、全身の血が凍りついた。血液全てがカキ氷にでもなったのかと錯覚したほどだった。

まずいまずいまずい。が、ちょっと待て。これはもしかしたらチャンスではないのか。

オレと同じように凜も

「綾……こ、これは…ちがっ」

と明らかに動揺している。綾の性格から言ってこの気まずい空気に耐え切れずどこぞへ走り去るに違いない。

それをオレが追いかける。動揺してる凜からはお仕置きをされることもなくかつこの場から離れることができ、綾の誤解を解いた後はある程度怒りが収まった凜から説明をしてもらいこれまた誤解？を解けば事件解決じゃないか！

窮地をチャンスに変える男雪ヶ丘有里っ、その才能まさにナイヤガラ！

さあ綾！今すぐにでもこの場から走り去るのだ！

だから道場の中へ歩いてくるんじゃないかって外へ出るんだ綾！なんでこっちに来るんだ！最悪のパターンだよ！

オレの完璧な作戦とは裏腹に、ゆっくりとこちらへ歩みを進めてくる綾。俯き、眼鏡が光と反射していて表情は読み取れない。

オレ達のそばまで来た綾は、静かに横へと座る。

道場に横になる凜とそこに馬乗りになるオレ、そしてその横に座る綾。尋常じゃないシニールさがそこにはあるが当事者達にそれは解らない。

時間にしておよそ10秒のほどの静寂の後、綾が口を開く。

「私ね、知ってたよ。凜が有里君をどう思ってるのかも……………凜が本当は有里君をどう思ってるのかも」

なんで2回言ったんだ？

「ち、ちがう…………綾、私は…………沙姫様の気持ちも、綾の気持ちも解るからっ！それで…………そんなことになるなら、こんな男なんて！」

「やめて、いくら凜でも……有里君は悪くない、何もして無いよ。幸せになるのは沙姫様、それでいいじゃない」

「綾はずっと前から想っていたんじゃないのか？それをそんな簡単に諦められるのか？」

「仕方が無いんだよ、私は……地味だし暗いし眼鏡だし、沙姫様なら有里君も沙姫様も凜も幸せになれるよ」

「それじゃあ綾が幸せになれていない。それに、こんな男沙姫様にはふさわしくない！」

「私知ってるんだよ、凜がいつも見ていたこと。教室を出て行くときに嬉しそうだったこと。凜の本当の気持ち」

「ち、違う！私は……沙姫様の付き人で、綾の友達だ！自分の私情など……ない」

「え、あの……オレ席外しましょ」

「話は聞かせてもらいましたわっ……！！」

すっかり置いてけぼりにされてもはや柔道場の置物みたいな扱いになり、居づらさから席を外そうとしたとき天井から突如沙姫が飛び降りてきて、

オレの顔へ思い切りキックをかましてきた。

馬乗りの体勢から飛ばされてゴロゴロと少しかび臭い畳の上を転がる。

どうやって昇ったとかいつからいたとか言いたいことは山ほど頭の

中で浮かんで来るが、若干外れてしまったアゴが言葉を吐き出すことを拒んでいた。齒は抜けていないようだけどほんのり血の味がする。っていうかオレを蹴る必要はあったのか！？……ああ凜の上に乗ってたから怒ったのか。

「凜！綾！」

「は、はい！」「はっ！」

「確かに私は天条院家の娘、そして凜は付き人、綾は大事な友達。でもそれと誰かを想う気持ちは関係ないのではなくて？むしろ恋争いに手を抜かれたとあつては天条院沙姫の名が泣きますわっ！」

「沙姫さま！」「沙姫様……」

「これから私達は恋敵、手加減無用！この想い誰が成就させるか競争ですわ！」

「いえ私は別にこんな男など……」

「凜はどうでもいい人のことをあんなに毎日付きまったりできるの？尾行するのに写真を取ったり勝負しにいくのに身だしなみを整えるの？」

「み、見てたのか！？っじゃなくて、人として当然のことだろう」

「おしゃべりはもうお終い。凜・綾、昼食を取りに行きますわよ」

痛む頬をさすりながら3人の話をおぼろげに聞く。すぐに話がまとまるどころ、沙姫にはカリスマ性があるのかもしれない。ただのわがままお嬢様に見えるがちゃんと良いところもあるし、2人もそれをちゃんと知っている。素敵な友好関係だなあ……。

そんなことを、わいわいと道場を後にする3人の背中を見ながら考えたりしていた。オレ置いてけぼりかよ。結構その話の重要な地点にオレ居なかった？気のせいかな？

もう今日は学校さぼろう。そして明日猿山泣かす。だから今日はオレが泣くんのだ。
オレを愛してくれるのはクロネコちゃんしかいない！

集まれ夏祭り！

日は沈んでそれなりに時間がたっているというのにまだ空気は生暖かい。このモワッツとした独特の空気を夏と呼ぶのだろうか。

日本という国は湿度が高くただ歩いているだけでもじんわりと汗をかいてしまう。

ぐんぐん上がる不快指数に普段のオレなら即回れ右してエアコンを入れた部屋で優雅な読書としゃれ込む所だろうが今日は違う。

そう！夏祭りなんだ！

祭りという文化はどんな星にもあり、星を挙げて大陸を挙げて国を挙げて町を挙げてと様々な規模と方法がある。

健康を祈ったり豊作を祝ったり神に感謝したり何かを奉ったり、違いはあれども共通しているものはある。

祭りは楽しい！

美味しい食べ物や飲み物にその場所ごとの変わった風習や踊りに音楽、様々な文化との交流をすることができる。

地球みたいに国があちこちに点在しているタイプの星だと、その種類が多いので調べているだけでも楽しい。ドラマや漫画、小説の中だけでしか知らなかった。

「へっへっへーいいか美柑。お祭りには屋台って出店があるんだぜー」

「知ってるから」

「しかもそこには林檎飴やフランクフルト、からあげやお好み焼き

そして焼きそばが！売ってるんだぞー」

「知ってるから」

「何だその態度は！誰がその浴衣を着付けてあげたと思ってるんだ！」

「自分で着付けたし。有里さんずっと踊ってただけじゃん」

「あれは嬉しさを表現しただけだよ」

「嬉しいのは解るけど俺の甚平奪ってまで着ることないだろ」

「普段着とで悩んでたじゃん、その選択肢を簡単にしてあげたんだよ」

「わったしも浴衣だよー！ねえねえリト似合ってる？」

夏祭り会場への道をリトと美柑とララと歩く。御門とヤミを先に誘って見たのだが二人でどこかの星へ出かけるらしく断られてしまった。そこへちょうど美柑から電話が来て喜び勇んで一緒に行くことになったのだ。

昼頃から行く気満々で結城家へと赴いたのだがどうやら祭りというのは日が落ちてから開催するらしい。なので夕方までの数時間を美柑とのレトロゲーリベンジマッチに費やし、少々早めとも言われたが人が混む前にと二人を説得し会場へと出発した。

お祭りの会場である神社までは結城家から徒歩でもそう遠く無い場所にある。しばらく歩くと立派なケヤキの木の向こうにこれまた立派な神社の屋根が見えてきた。

逸る気持ちを抑えて鳥居のほうへと周る。早めに出てきたつもりだったがすでにちらほらと人が居る。一番乗りというわけにはいかなかった……が、

夏祭りの始まりだ!!

「まず焼きそばだ! んでもってたこ焼き軽く経由しつつカキ氷で温度調節して林檎飴で小休止わたがしから調子を上げてお好み焼きそば焼きそばからあげ焼きそばだ!」

「ちょっと有里さんそんな大声出さないでよ」

「お前お金大丈夫なのか?」

「これが地球のお祭りかー!」

「っしやー! ララ! 行きますか!」

「がってんゆりっち!」

鳥居を抜けるとそこは楽園でした。

ソースの焦げる匂いにチョコバナナやりんご飴の甘ったるい香り。どことなく不気味に見えるずらっと並んだお面たち。薄暗くなり始めた神社の中で提灯が道を明るく照らしてくれている。宇宙人なのにわくわくしてしまい何故か懐かしく感じてしまうのは、オレが地球人に染まってきているからだろうか。

そんなことはどうでもいい! この場は楽しまなくては!

オレと同じくお祭り初体験のララを連れてまず一番近い焼きそばの屋台へ突撃する。人がまばらだったこともありすぐに人数分の焼き

そばを購入することが出来た。

「買ってきたー」

「きたよー!」

「お前ら二人して行動が早すぎるんだよ……さんきゅ、お金払うよ」

「私の分も?」

「財布開かせる時間も惜しい! ララ、次はたこ焼き行くぞー!」

「おー! あ、でもあのわたがしも食べてみたい!」

「っしやー! 今日は全部奢ってやるわ! 美柑も行くぞ!」

のんびりしている結城家をララとオレで無理矢理引っ張り屋台へと連れ出す。

気の良さそうなおばちゃんのたこ焼き屋でみんなで並びたこ焼きを買いその横のわたがしをララ・美柑の分を買う。歩き回ってほんのり暑くなってきたのでカキ氷をと思ったが、屋台の前には若干列が出来上がっていた。

まあこういうのも風物詩か、と並びながら焼きそばを頬張っていた時、軍師美柑から提案が

「……沢山買いたいなら二手に別れて買えば?」

なるほど。これでオレ・美柑とリト・ララで別ればリトとララを近づけることが出来るし少し遠くに店を出しているから揚げの屋台をスムーズに処理することができる。まさに一石二鳥! さすが美柑

だ。

「じゃあオレと美柑で向こう行って来るよ」

「そうだな、じゃあオレとララであっちに行って神社の境内で合流
ってことで」

ララと美柑もそれで賛成だったらしくすぐに二手に別れた。

さっき買ったかき氷のブルーハワイ味を食べながら美柑と一緒に歩く。唯一想像できなかったこのブルーハワイ味。何味？と聞かれたらブルーハワイ味としか言いようが無い。なんだ青いハワイって、カクテルかよ。

ちなみに美柑はメロン味。一口食べさせてもらったけど、メロン味というよりはメロン飴味といった感じ。でも氷がさらさらしていて冷たく美味しかった。

続いて狙ったのはチョコバナナ。これは美柑が

「ねえ私チョコバナナ」

と言ったからだ。

これは美柑がチョコバナナが食べたい、と実は私チョコバナナ星人だったのというカミングアウトの二つの線があったが恐らく前者で正解だろう。

チョコバナナ屋さんは女子人気が強く買いに行く人も多いがそれに合わせて屋台も多いらしくすぐに買うことが出来た。

「うん、美味しい」

「チョコとバナナの組み合わせを考え付いた人は偉大だなあ」

バナナの甘さをチョコのほろ苦さがうまく包み込んでいて美味しい。
夏祭り効果ってのもあるんだらうけど……。

「次に行く？」

「なんか有里さん落ち着いたね」

「カキ氷食べたなら冷めたし覚めた。美柑他に何か欲しいものある？」

「ん……別に」

そう言って美柑がチラッと、ある屋台を見たのをオレは見逃さなかった。普段から結城家の家事を一身に担う美柑はどこか大人びた嗜好もとい思考を持つとうとしている。そのせいかこういった時得慮しがちになってしまふのだ。

しかし子どもは子どもらしくというのがオレの持論であり、美柑にはもっとと素直な性格になって欲しい。

しからばっ

「じゃあオレあの店見たいんだけど付き合ってよ」

「ん、いいよ。しょうがないなあ」

女の子達で賑わっている屋台へと近付く。机の上に敷かれた紫のシートには、ブレスレットやネックレスなどのアクセサリーが値札とともに陳列されていた。なるほど、アクセサリー屋さんというわけか。夏祭りの屋台にはそんなものも出るなんて驚き。食べ物粋娯楽粋みたいな感じなのかな。

「へー色んなのあるな」

「そうだね」

一見素っ気無さそうな返事だが、美柑の目は他のお客さん達と同様にキラキラと輝いている。女の子ってどうしてこう光り物が好きなのか。そしてなぜハート型とピンク色が好きなのか。この真理へは幾千の星を旅しても辿りつけない。

そんな女の子の壁に押されつつも美柑と一緒にアクセサリーを眺める。

沢山ある中である物が目に入った。銀色のリングに小さなオレンジ色の宝石が付いている可愛い指輪だ。オレにはそれが小さな蜜柑に見えて、なるほど美柑にぴったしだと思った。値札を見てもと……2500円か。指輪の相場とか夏祭りの屋台の相場が解らないけど、この指輪にならそのぐらい出してもいいと思う。

「すみません、これひとつください」

接客する気なんてさらさら無い、というように椅子に座りタバコを吹かしている店主に声を掛けお金を渡す。チラッと一度こちらを覗いただけで手を出しお金を受け取った。なんか無愛想だなあと思ったが、オレンジの指輪を袋に入れて渡す時にその横に置いてあった水色の宝石が付いている指輪も一緒に入れてくれた。これはおまけということだろうか。

無愛想かと思ったら案外気立てのいい人だったのかもしれない。

「有里さん何買ったの？」

商品を受け取ってすぐ美柑が聞いてくる。さっきから横目でチラチラ見ていたし気になっていたんだろう。

店の前は次々にお客さんがやって来て込み合っていたので、屋台と屋台の間にある樹齢数百年の大木のところまで移動した。

「これ、美柑にプレゼント」

「さっき買ったの……指輪だったんだ。なんでいきなり？」

「似合うと思ったから。付けて上げる」

袋から取り出した指輪を美柑の左手薬指に付けてあげた。こういうときは右手に付けて上げるべきだっけ？薬指は合ってるよね……。そういう細かい文化はまだよく解らないんだよね。でも歳相応な笑顔を見せて喜ぶ美柑を見ると正解だったと思える。

「ありがと、有里さん。……ねえそっちの指輪は？」

「なんかお店の人がおまけでくれたんだよね」

「そうなんだ……じゃあ私が付けて上げる」

そう言って美柑がオレの手から指輪を取り上げ、オレがしたときと同じように左手の薬指にはめてくれた。

朝露のような小さな宝石が指の上で朗らかに光っている。これがおまけだなんて素敵なお店だ。

「えへへ、お揃いだね」

「そ……そうだね、お揃いだ」

美柑の掲げた手と手を合わせる。互いの薬指に光る宝石を見てどち

らともなく笑いあった。

・・・。

・・・。

それから美柑と二人で焼きそばやら法兰克福トやらお好み焼きやらたこ焼きやらを買い込んでから神社でリト達と合流した。

向こうが買ったものと一緒にみんなで食べ、オレが買ってきたジュースで一息入れる。

もう随分人も混み合って来ている。そんな中を歩いていたのでリトは疲れたみたいだ。サッカーやめてから体力落ちてるもんなあ。

とはいえオレもちょっと食べすぎてしまった。まだ射的や金魚すくいをやっていないがララ達と騒ぐのはちょっと厳しいかもしれない。

「お祭りって楽しいなー！」

「そうだね、ララさんには新鮮かもね」

「うひー、もうヘトヘトだぜ……」

「オヤジくさいよリト」

「オレもちょっとゆっくりしたいかも」

「じゃあリト達はここで休んでてよ！私もう少し遊んでくるから！行こっ美柑」

「私射的やりたかったんだ。景品いっぱい取っちゃおうよ」

まだまだ元気が有り余っているララと指輪を貰ってからやたら上機嫌な美柑が屋台の方へ走っていく。

「あいつら元気だな……」

「これが女子力ってやつかな？オレもちょっと腹ごなしに散歩してくるよ」

リトと一緒に座っていたベンチから立ち上がり背中越しにリトに言う。このまま座って休憩していても良かったがさっきからオレにだけ蚊が寄ってきている気がして止まっているのは避けたかった。

とはいえ人ごみの中を目的もなくうろろするのは疲れてしまう。

なので屋台達から離れた散歩道をブラブラしていると、

「雪ヶ丘君？」

と声を掛けられた。この鈴を鳴らしたような声は聞き覚えがある。そう、それも毎日。

「古手川か、こんばんは」

「ええ、こんばんは」

古手川はいつもの制服姿ではなく浴衣に身を包み普段は流している長い黒髪を上げて頭の上で止めていた。

学校とは違う古手川の姿にほんのりときめいてしまった。

「祭りに来てたんだ……一人で」

「ひ！一人で悪かったわね！雪ヶ岡君だって一人じゃない！私は学校の生徒が不埒なことをしないように見張りに来たのよ！」

一人で、言ったのが癪に障ったらしく頬を赤くして古手川が怒っている。当たりの強い性格のせいで敵が多いからなあ……良い子なんだけど。

「じゃ、じゃあさ、良かったらオレと一緒にまわる？リト達と一緒に来てるんだけど今ちよつと別行動中なんだ」

「わ、わたしと？」

「ほら、オレも一応学級委員だし、その見張りつての手伝う必要があるでしょ？」

「そそそうね、うん、そう。そうよ！雪ヶ岡君は学級委員だから手伝わないとよ！」

「よし、じゃあ屋台の方に行くか」

古手川と一緒にまた屋台群の中へと戻り人ごみを歩く。ちよつと離れて歩くだけですぐ逸れてしまうのでどうしたって肩が触れ合う距離で歩くことになってしまう。

こんな時

「あはは肩当たっちゃってるね、ごめん」

とかそんな感じで軽く流せば良いのに

「……」

「……」

お互い完全に意識しちゃって無言状態。気まずい事この上ない。
何とか空気を変えなくては……。

「あ、古手川、金魚すくいあるよ。ちょっとやってかない？」

「そ、そうね、金魚すくいね。いいわよ！」

5分振りくらいで発した古手川の声は若干上ずっていた。オレ以上に緊張していたらしい。誘っておいてこれはいけない。
ここは金魚すくいでもカッコいいところでも見せて株をあげなくては。

「おじさん、これ1回ね」

「あいよ、彼女にいいところ見せてやんな」

「あはは。それ笑えない」

店主のめんどくさいノリをかわしつつ受け取った網に全神経を集中させる。金魚すくい専用の水槽には赤色の金魚に当たり目の出目金達が優雅に泳いでいる。

狙うのはずばり赤い金魚。出目金はなんか強そうだし重たそうだ。

そして金魚の中でも泳ぎの鈍いものを探す。

しめた！ちょうど壁際に帰宅途中のサラリーマンみたいに気だるげに泳ぐ奴がいる！これは掬って救ってあげなくては！

右手に持った網を頭上高く構える。入射角は水面に対し45度！魚の尻尾の部分から着水し水面と平行移動しながら下へ滑り込みその勢いのまま掬いあげフィニッシュ！完璧だ！

シュミレーションは完璧、あとは実行に移すのみ。見てろ古手川オ

レの勇姿！

いざ！と勢いよく振り下ろされた右腕は

水槽のふちへとぶちあたった。

当然網は勢いよく水の中へと着水し、いとも容易く破れてしまう。

「……」

「……」

「……」

穴があったら入りたいってのはこういう時に使う言葉だったんだな。オレも古手川も、店主ですら固まっている。

どうする？ さっきよりも気まずいこの状況。やることなすこと裏目に出てしまっている今、もう正直何やってもダメな気がする。

そんな凍った空気を払拭してくれる救世主がオレにはいた。

「あれー？ ゆりっち？」

「それに古手川さんじゃーん！」

まさかの登場リサ・ミオコンビだ。二人とも可愛らしい浴衣を着ている。西連寺はいないらしいけど一緒に来なかったのか？ 何にせよこれは勝機。

「いやーおじさんありがとうございます。里紗たちもお祭り来たんだ」

「春菜と三人でねー。でも逸れちゃって今探してたんだ」

「ゆりっちは古手川さんと？」

「さっきそこで会ってね。あとリト達も一緒なんだけど今は別行動なんだ」

「どうやら西連寺も来ているらしい。もしかしたらリトのところにいるかもしれないな。そろそろ花火も始まるらしいし合流しないと。」

「へー、あやしいなあ」

「実は二人でデートしてたんじゃないのー？」

「ちちちち違うから！私は不埒な生徒がいなかどうか見張りに来ただけで……っ」

「そんなにおめかししてー？」

「ゆりっちと一緒にー？」

「「あやしいなあ……」」

「まあまあ、話はその辺にしてリト達と春菜のところに行きますか」

「そうだね！」

「りんご飴でも食べながらね！」

「はいはい奢りますよ。でもそれだけな、今日もうすっからかんだわ」

「さっすがゆりっち！」

「話がわかるう！」

パパッとりんご飴の屋台まで行き3本購入し里紗達に渡す。これで財布の中身はアルミ製の硬貨のみになった。

でも美味しそうにりんご飴を頬張る三人を見たらそんなことどうだってよくなる。

それからオレ達四人はリト達を探しながらぶらぶらと歩く。途中未央が買ったたこ焼きを1個だけ貰った。

「いないなぁリト達」

「春菜は勝手に帰ったりしないからどこかで迷ってるかも」

「携帯も繋がらないわ……」

「古手川って西連寺の電話番号知ってるんだ」

「い、いけない？私だってメールしたりするわよ！」

「そんな怒らなくても……じゃあオレとも番号交換してよ」

「え？……そうね、どうしても言うならいいわよ！？」

「だからなんでちょっと怒ってるの……これオレの電話番号ね」

生憎赤外線通信なんてハイカラな機能オレには使いこなせない。ポケットに入っていたレシートにさらさらっと番号とアドレスを書いて古手川に渡す。

「え、あ、あの」

「ねーねーゆりっち」

「何だか花火上がるみたいよ」

「え、本当か？あ、あれリト達じゃ」

視線の先にリトラしき人物と、その前に立つ西連寺を見つけた時、

ドーン！！

と1発目の花火が空高く打ちあがった。それを皮切りに小さいものが次々に上がっていく。

「あ、いたいた春菜ー！探したよー！そこで古手川さんとゆりっちと一緒にになってさー」

「わ、私は……別に」

「あれ？結城もいるよ」

「ホントだ。もしかして春菜、結城に告ろうとしてたとかア？」

な、なんだって！？

「な、何言ってるのよ！そんなワケな、ないじゃない！！」

おお……そりゃそうか。夏祭りパワーでひよっとしたらとか思ったんだけど。

「みてみてー沢山景品もらったよー！」

西連寺に強く否定されへこんでいるリトを尻目に声のした方へ振り返ってみると、ララが運動会で使う大玉転がしの玉みたいになった景品の塊を担いでこちらに走ってきている。

「そんなに貰ってどうすんだよ!？」

「えへへーすごいでしょー？」

「ゆりっち私カキ氷食べたい」

「あ、私も私もーレモン味で」

「あの、これ私の電話番号とアドレス……」

「結城君さっき何て言ったんだろう」

「このぬいぐるみ有里さんと似てるんだよ」

「いいからお前ら花火見ろよ」

みんな集まって何だか騒がしくなったが、その後はちゃんと座って空に咲く花火を堪能した。

もちろんカキ氷は奢らなかったよ。奢れなかったんだよ。

そんなこんなで、人生初めての夏祭りは素敵な思い出として、水色の指輪とともに引き出しに大事にしまわれている。

また来年もみんなで来れたらいいな。

サボって貧血

世界中の絵の具を集めても、恐らく再現のしようがない。

そんな晴天の空に最も近い場所、屋上のさらに上、貯水タンクに座って口から漏れるのは欠伸が一つ。

夏の陽気というのはどうしてこう青空の下に行きたくさせるのか。恐らく教室の蒸し暑さとも大きく関係しているんだろう。今が授業中だということは無関係だ。

人はこれをサボリというだろうし、古手川に見つかれば1時間ほどの説教は免れられない。

それでもオレがこうして空を仰ぐのは、きっと自由を愛しているからだ。

決して数学が嫌いだからじゃない。

昼休みのうち買っておいたコーヒーを一口飲み持ってきておいた小説を開く。3章まで読んだから教室に行くかな。と目次をつらつらと読んでいる時、

ガチャ

つと屋上の扉が開いた。

オレ以外にもサボるような生徒が他にいたなんて……なんとなく興味湧いて給水タンクから顔を出して覗き込む。

「はぁ……」

その生徒、ズボンを履いていたからおそらく男子、がフェンスに手を置いてため息を一つつく。

開かれたままになっている扉が邪魔で顔を見ることは出来ない。

「全く……僕は何のためにこの星に来たんだ……」

その生徒は誰にとも無くそう呟く。星……？

「ララちゃんは相変わらず自由奔放だし結城リトに夢中だし……そもそもなんであんな男がいいのか」

「リトにはリトの良さがあってレンにはレンの良さがある。んでラはリトの良さが気に入ったってだけ。そんな人を悪く言うようなよな……」

「！？驚いた……まさか人が居たなんて。じゃなくて、僕より結城リトの方が優れているってことか！？」

聞き覚えのある声と親友の名前が出たこともあり、思わず貯水タンクから飛び降りて声を掛けてしまった。

フェンスで黄昏ていた生徒はそう、宇宙人転校生ことレンだった。

2年生になった時にクラスが変わってしまったため交流が無くなってしまっていた。以前はそれでも結構話しかけたり無視されたり一緒に帰ろうとして振られたりしてお互い宇宙人ということもあって、オレの中ではそれなりに親しい友人だと思っていた。

「いやだからそういうことじゃなくて、こう十人十色というか」

「それより君は誰だ!？」

思っていた。が、どうもレンにとってはそうではなかったらしい。

「いやオレは雪ヶ丘有里って言って1年生の時クラスメイトだったけど2年になってクラスがかわってって今そんなことどうでもいいだろ! いやどうでもよくはねーよ! 結構話したことあるだろ?」

「僕はララちゃん関係のこと意外は覚える気がないからね」

薄々感ずいていた部分はあったが、どうやらレンは少々頭が可愛らしい、らしい。視野が狭いというか思考が一直線になってしまう。というか昔ギドの所でも会った事あったのになあ……まだレンが小さかったころの話だから覚えてないのも仕方ないだろうけど。にしたってこれはかなり心に来る。

「まあいいや。それより、今授業中だぞ? 何で屋上なんかに乗ってきたのさ」

「決まっているだろう! ララちゃんのことさ! いつもいつも結城リトの話ばかりして……ずっと一緒にいたのは僕だというのに!」

急に捲くし立てるように話し始めるレンに押されながら考える。確かに、ギドから聞いた話では色んな所へ二人で遊びに行ったりして大人を困らせたりしていたらしい。いつも一緒だったというのは間違いないだろうけど。

が、レンがララに相手にされない最大の理由がある。

しかしそれを本人に言ってしまうのはさすがに気が引ける……。それにオレはリト達の恋愛を応援していくと決めてしまったし。どうしたものかと腕を組むと、砂っぽい屋上に爽やかな風が一つ吹

き込んでくる。

と同時に

「へっくしょいっ」

ボウン！！

くしゃみと小さな爆発のような音が聞こえてきた。

「お？」

「もうっ、レンったら最近愚痴ばっかなんだから」

その小さな爆発は砂煙をもくもくと巻き上げ一瞬レンの姿を隠したかと思うとそこから女の子が現れた。

髪の色はそのままだが肩より下まで伸びているし胸も膨らんでいる。

「ヘーメタモル星人の変身目の前で見たの初めてだよ」

「わっ！人がいた」

「ごめん、驚かせて。確か記憶は共有なんだよ…ね？でも一応自己紹介、雪ヶ丘有里です」

「知ってる知ってる。リト君といつも一緒にいる人でしょー？」

「そ。えーっと名前は……」

「ルンって言うの。勿論女の子だよ。そっちも宇宙人なんだよね？」

「そうだよ。とは言っても少数星人系だけだね」

「へーそうなんだあ……ん？名前ゆり君だったけ？」

「有る里と書いて有里だよ」

「もしかして……宇宙名がさ、フリティ・ラリアとかだった……する？」

「あ……えーっと、うん」

「ええええええええええ！？」

「そんないきなり大声出さなくても」

「だ、だってだってフリティ・ラリアって言ったら伝説の賞金稼ぎだもん！ララのお父さんと戦って唯一生き残っている人だし銀河統一戦争の時の大立ち回りなんてお話になってるんだよ！？宇宙ファンクラブだってあるし私だって実は会員だもん！」

「オレの知らないオレのことを今知った。なにそのお話聞いてみた
い」

「あああああの、サインください！！！」

そう言ってルンが取り出したのは1枚のサイン色紙。オレが本当に宇宙的に有名なそして伝説的な人物であったのなら、ポケットからマジックを取り出しさらさらっとサインをこしらえるのだろうか、

「あの、ボールペンでいい？……ああインク乾いちゃってるわ。そ

うだ、もう1本持ってたんだ……雪ヶ丘、ゆーりっと。これでいいの、かな？」

「横にフリティ・ラリア様とルンへってのも書いて欲しいな」

「様で……はいこれでいい？」

自分としてはしがない宇宙賞金稼ぎのチンピラだと思っているので、有名人的な実感とか相応の振る舞いなんてできないしわからない。サインなんてテスト用紙に書くみたいな感じにカタカナで書きちゃったからね。地球に慣れすぎだ。

「やったー！まさかこんな辺境の星でフリティ様に会えるなんて」

「その様ってのやめてくれないかなー。オレは地球に隠居しているだけのただのしがない宇宙人な訳だし」

「でもフリティ様はフリティ様だし」

「そんな”だし”とか言いきられたらもう返答のしようがないし」

「このサイン大事に取っておこ！」

すっかり上機嫌になったルンは色紙を丁寧に抱きしめながらオレの横をすり抜け屋上から出て行ってしまった。

なるほどあれがメタモル星人なんだな。くしゃみで入れ替わるなんてなんか冗談みたいだ、っとこれは悪口だ失敬。

レンは結構真面目な感じだけど、ルンは何か軽めというか親しみやすい性格をしている気がする。

何にせよ自己紹介も互いに済ませたのでこれでお友達同士という訳

だ。

再び貯水タンクへよじ登り小説の栞を開く。聞こえてくるのは授業終了を告げるチャイムの音。

それから少しして校舎の中がざわつき始める、きつと掃除が始まったんだろう。

しかし心が強いオレは決して貯水タンクから降りることは無い。それは自らの罪悪感との戦争だ。

そしてそれこそが「サボリ」という背徳的行為を休息という精錬された行為へと昇華させるための儀式に他ならない。

自然とページをめくる指に力が入る。それは何故か、

そう、こちらに近付いてくる階段を昇る音が聞こえてきたからだ。

屋上を掃除する分担はこの学校に存在しない。ゆえに放課後の掃除時に屋上へ来る生徒などいるはずが無いのだ。

心臓の音が大きく響く。緊張した血管に火照った血液が流れていくのが解った。

ガチャ……

と重苦しくそして錆びくさい音を立て扉が開かれた。

生唾を一つ飲み込む。小説のページなどさつきから少しも進んでいない。まだ諦めるな。何となく青春を感じたかった男子生徒が夏の陽気に釣られて何となくきただけかもしれないじゃないか。

だから諦めるな、例え相手が貯水タンクへと昇ってきていても、決して最後まで希望を捨てるな。

最早ホラーゲームの主人公の心持で貯水タンクに繋がる鉄はしこの方をゆっくりと振り向いた。

真っ黒な長い黒髪に包まれた、真っ黒な瞳が二つこちらを覗いていた。

血が、呼吸が、学校が、国が、空気が、世界が凍った。

はしごを上りきった少女が口を開く。

「ちょっと雪ヶ丘君！こんなところでサボって！掃除始まってんだよ、降りなさい！」

さあ、ロックンロールの始まりだ！

・・・。

・・・。

教室掃除は大まかに4つの工程に分けられる。

まずは机運び。

クラスメイトたちが日々ノートや教科書を広げ勉強に勤しんでいる机を教室の端っこへ全て寄せる。一気に1列全ての机を押したい衝動に駆られるが机の中身がバラけてしまったときのリスクを考えると、実行に移すのは難しい。

この工程は主に6〜8人によって行われる。

そして掃き掃除。箒によって大きな埃たちを一箇所へ集めちりとりで取っていく。この工程は後の作業をよりやり易くするためのものである。が、だからといって手を抜いていい訳ではない。

次は吹き掃除。

濡れ雑巾と乾拭きとのフォーメーションに寄って目に見えない埃達を一網打尽に捕らえていく。茶色く汚れていく濡れ雑巾だけがやりがい。

最後はまた机を元の場所に戻す。一番簡単な工程にも思えるが、机の置き場所には難しい基準がある。

それは例えば、窓側の生徒は丁度窓が開く場所を望んでいるし、教室の扉付近の人は出来るだけ扉から離れたいという心理がある。運悪く隣同士になってしまった上辺だけ仲がいいが決してお互い話しかけたりしないなんだか剣呑な空気を醸し出す二人組みなんかは、それとなく机を離さなくてはならない。

そういった細やかな機微がこの工程には必要になってくる。

これらの他に、花瓶の水を替えたり黒板のチョーク充填黒板消しの掃除など細かい部分をしたりもするがそれは担当の生徒達に好みによる。

「ちょっと雪ヶ岡君、サッシの所もちゃんと掃除しなさい」

「労働過多だ」

そんな6〜8人が30分かけてする掃除を、オレはたった一人でやっていた。

怖い監視者、古手川の元。

しかもその監視者の好みは教室の細部に溜まっている埃を見逃そうとしない。

そしてちよつとでもサボろうとするとお叱りの言葉が飛んでくるのだ。

先ほどやつと机を運び戻し今は窓を掃除させられている。

掃除はすでに1時間もかかってしまっていた。

他の生徒達はとっくに掃除を終えており、みんな帰宅したり部活に汗を流したりしている。

「なんで雪ヶ岡君はすぐサボろうとするの？」

「空が呼んでいるのさ……」

「そういうことを聞いているんじゃないくて、どうして遅刻したりサボったりするの？」

「こう……習慣化しか日常にちょっとした刺激という名のアクセントをと思ひまして……ごめんなさい」

御門が点滴してくれなくて朝体調が悪く仕方なく遅刻することもあるが、8割は寝坊やめんどくさくてのサボりだ。

その怠惰の出所は自分でもよく解らない。地球での隠居生活が合っ
て無いのか？主観的にも客観的にもバリバリ馴染んでると思うんだ
けど。

最近ちゃんと運動して無いから何か溜まってるのかなあ。

「ふいー、よしこれで終わり」

「まだ掃除してない場所はあるけど……一応は終わりにしてあげる
わ」

「なんかお腹減っちゃったな」

「そ、そそそれじゃあ……私と歸りにどこか」

ドゴオオオオオオ!!!

「な、なんだ!？」

「きゃあああ!!」

古手川が何かを言いかけたとき、玄関のほうから物凄い爆音とそれに続いて校舎の崩れる音が聞こえてきた。

嫌な予感がピリピリとしてくる。先ほど叫び声を上げた古手川がオレの袖を掴んでいた事に気付いた。

平和大国日本においてこんな爆音が響き渡ることなど有り得ない。とすれば、原因が宇宙的なものである可能性が高い。

宇宙的なものということは……大概ララが原因だろう。オレや御門、ヤミの線もあるがあの転婆娘のトラブル率を考えると……。

「悪い、古手川。ちょっとオレ見てくるよ」

「え? っちょ!! また窓からなの!？」

いつものように湧いてくる悪い予感の出所を確認するために、そつと優しく古手川の手を払い、先ほど綺麗にした窓枠に飛び乗り一息に外へと飛び出した。

恐らく10mはあるだろう地面へと腰と膝のバネで見事に着地し、玄関のほうへと走る。

見慣れた靴箱のところまで来ると、そこは今日の朝みた玄関とは違っていた。

入り口横の壁が見事に崩れていたのだ。

そしてなんと、その崩れた壁のすぐ横にリトが倒れていた。

「リト！リト！大丈夫か！？」

悪い予感が現実味を帯びていく。すぐさま駆け寄り抱きかかえらとどうやら目を回して気絶しているだけらしい。

ほっと胸を撫で下ろすと同時に仄かな怒りの炎が心に沸き起こる。一体誰が、何のために。

屋上の方から聞こえてくる殴打の音も気に掛かるが、まずオレにはすることがある。

花壇に隠れてこちらを見ているルン・沙姫に話を聞くことだ。

「なんでリトは倒れてるの？っていうか何事？っていうかお前ら原因だろ、なにした」

「フ、フリティ様！」

「ああああら有里様ではありませんか」

オレが声を掛けると、二人は明らかな動揺を持って応えてくれた。とりあえず犯人は二人ということで間違いないらしい。それさえ解れば今はいい。後で綾にでも何をしたかを聞いておけば事態のあらましはわかるだろう。

「とりあえず二人の話は後で聞くから。解ったな！」

そうとだけ言い残し近くにあった木へと飛び移る。そしてすぐ校舎のほうへと跳び、出っ張りたたまたま開いていた窓を乗り継いで屋上へと昇った。

小さな破片の転がる屋上の床へと両足を着地させたオレの見たもの

は、CGがふんだんに使われた映画のアクションシーンのように戦うララとヤミだった。

ララの強靱なパワーをヤミが防ぎ捌いている。さしずめ力のララ・技のヤミといったところか。

なんて解説者気取りで考えている間にも屋上のタイルは、二人の拳の衝撃で剥がれ砕けている。

ついこの前直したばかりなのに！！壊したのはオレだけど……いや7・2でギドが悪いけど。

「あの、お二人さん。何があったかは知らないけど、ケンカするなら他所でやってくれませんか？」

「ゆりっち？そっかゆりっちも参戦か！負けないぞー！」

「そうですね、この辺りで一つ借りを返しておくのもいいかもしれませんね」

仲裁をと思いい声を掛けてみると、二つの矛先がこちらへ向いた。

戦闘で頭に血が上ってしまっている二人にまともな説得が通じるわけが無い。

ならば、残る手段は肉体言語。目には目を、歯には歯を。むしろやられる前にやってやる！

まず初めにしかけてきたのはララだった。

デビルーク星人、それも王族となるとまず身体能力がずば抜けている。避けた拳の拳圧だけで骨が折られることだってあり、パワーだけで言えば宇宙の中でもトップクラスだ。

そして地球にある漫画みたいに尻尾から訳のわからないビームを出したりも出来る。

オレとの距離、8 mほどの距離をおよそ2歩で駆けてきたララはその勢いを全て乗せた拳を振りかぶってくる。並大抵の奴ならその速さにかわし切れず顔面にくらい意識を刈り取られただろうがそうはいかない。

接近に合わせ1歩下がりが拳に右手を合わせ軌道を逸らせる。隙だらけになった足を払い完全に中に体が浮くと、合わせていた右手を掴み引っ張るようにして体を投げた。

クルッと一回転したララはそのまま地面へと落ちる。まさかやられるとは思っていなかったのかララはキョトンとしている。

と同時にほぼ勘だけで首を動かす。一瞬あとにオレの後頭部のあったところを金色の拳が通った。

背筋に寒いものが走る。背中にヤミのトランスをする時に発する音を聞きながらオレは前へと跳んだ。

前転を繰り返しながら跳ぶ。その時コンクリートの破片を二つ手に拾っておく。

屋上の端まで来て両足で着地すると、闇の追撃、金色の槍が向ってくるがそれもかろうじて避ける。ヤミのやつ本気でかかってきているか？

その槍は屋上の柵にぐるぐると結びついた。

伸び切ったそれを引き戻しその勢いに乗ってヤミが接近してくる。そうして繰り出された拳。多分回避は難しいだろう。右手にぐっと力を込め、その拳を受け止める。バチィィィン！！という音とともに手首や腕に衝撃が走った。

ヤミが得意なのは近・中距離戦だ。そしてオレが得意なのは超接近戦。

超接近戦とは伸び切った腕の内側で行われる戦闘のことである。オレ命名である。

それを知っているであろうヤミは自分で接近しておいてもオレを懐へは入れさせてくれない。

ちようどいい距離感を保ちながら髪を刃物や拳や鈍器へトランスさせこちらの動きを封じてくる。

対戦経験だけで言えばヤミはしょっちゅうケンカしていたギドよりも多い。まだヤミと出会ったばかりの頃、そしてトランス能力の特訓、賞金稼ぎのノウハウ鍛錬。100や200ではすまないかもしれない。つまりお互いの手札を知り尽くしているということだ。

だからこそ出来ることもある。

ヤミの剣を屈んで避けたときに持っていたコンクリートを靴の上に置く。

すかさずアゴを狙って跳んでくる拳を回避した後右足を蹴り上げる。当然半歩下がりがヤミはそれを避けようとする。

が、乗っけておいた破片はヤミの顔面へと跳ぶ。一瞬大きく目を開き驚いたヤミだったが首を動かし見事に避けた。

しかしそれも狙い通り。もう一つ隠し持っていた破片を同じように投げつける。

タイミングはばっちしだったが、そこもさすが金色の闇。咄嗟に左手を出し破片を掴む。

そう、ヤミは回避よりも防御を重視する傾向がある。しかし、この場面ではそれは失策だ。

顔の前に左手を出したことにより視界が遮られたヤミへ、一瞬で接近する。そう、超接近戦だ。

完全に懷へ入ったヤミのお腹に手を沿える。
まず力を入れるのは足。地面との反発力をそのまま膝へ腰へと流し
力を大きくしながらその全てを右手に集め、

「鉄拳制裁！」

「んっ」

「うー、いたた……キャッ!!」

思い切り吹き飛ばす。そしてやっと起き上がろうとしていたララに
ぶつかった。

何故こんなに起きるだけで時間がかかっていたのか。それは、オレ
が足を払った時に足首の力が抜けるように蹴っておいたからだ。
これは御門に教わった技で、上手い所に当てれば一時的に間接を麻
痺させることができるらしい。当然後遺症やあざが残ったりはしな
い。

そんな足が不安定な状態のララにぶっ飛んで来たヤミが当たれば、
屋上の柵を越えて飛んでいってしまうのは必然といえた。

・
・
・
・
・

「それで、二人は何をしたの？」

学校のベンチに腰掛け、オレの目の前にしょんぼりと座っている沙
姫とルンに問いかける。

屋上から飛んでいったララとヤミはあらかじめ呼んであった御門にキャッチしてもらい、手当てもしてもらっている。

オレの攻撃をもろにくらってしまったヤミはまだ起きないらしくオレの膝を枕にして眠っている。

ララは先ほどむくりと起きて迎えに来たリトと一緒に結城家へと帰っていった。

「……」

「えーっとそれは……」

「綾、何があったの？」

「あの、レンさんと沙姫様でヤミさんに依頼を出したんです。その、ララさんと戦うように。そうしたらヤミさんも乗り気で……」

「それで暴れまわったと。んー、校舎の修理はララの機械で何とかなるかなあ、ヤミには後でオレから言っておくよ。二人は自宅にて反省。終わり！」

そう捲くし立てたところで急激な眠気に襲われた。抗うことすら許されないそれは貧血と言ってもいいかもしれない。というか多分貧血だ。

意識を完全に失う寸前に聞いたのは御門のついた小さなため息だった。

最初の日は普通の日（前書き）

書き直しました

最初の日は普通の日

オレ達は海にいた。

「「海だ——っ!!」「」」

頬に当たる潮風、昨日見たタヒチ特集のような透き通った海。キレイな海はむしろ緑色に見えるらしい。これは珊瑚礁のせいなのか？

まあそんなことどうだっていい。

オレ達は海にいた。

・
・
・
・
・

・
・
・

事の発端は猿山の言葉だった。

「海に行きたい」

9月の残暑で頭がおかしくなった。きっとそうだ、そうでなければお盆を過ぎたクラゲだらけの海で泳ごう何て誰が言い出す。まったく……

「オレも行きたい」

オレも暑さで頭がおかしくなってなければ叱っていたところだぞ。思い立ったらすぐ行動。

まず移動手段、これは最近通販に嵌まってしまい金欠に陥っている
のでかなり難しい問題だった。

海に行くためには電車に乗らなくては、電車に乗るためにはバスに乗らなくては、バス・電車に乗るなら駅弁・飲み物は必需品。

そうやって交通費がどんどん膨らんでいくのを黙って入られない。思考をお金に変えるんだ。

知り合いの車に乗せてもらうか？いや、そんな知り合いはいないし御門とオレの宇宙船ならどこへだって行けるけど、そのために宇宙人だってばらすのはいやだし。

歩いていくか？……どこへ？徒歩圏内で行ける海水浴場なんてない。よくてプールが精一杯だ。プールなんていつだって行けるだろう。

そりや海だつていつでもいけるけど、泳げるのは今だけだ。今でギ

リギリだ。

ん——…：…：そういえばあの玄関ってラウが直してくれたんだよねあ。小さな傷とかまで無駄に再現されて完璧に直してあったつけ。

ん？ララなら惑星間跳躍機くらい持つてるんじゃないのか？なくても作ってくれるんじゃないだろうか。そうか、それなら地球のあらゆるリゾート地が海水浴の候補になるじゃないか。無人島なんていいな……誰もいない場所でのんびりと。でも海の家も捨てがたい……、いやもう無いか。無人島で決定。

この考えをまず猿山に相談してみたところ

「いーんじやね？」

と鼻をほじりながら返事をくれた。すでに彼の興味は呼んでいるフ

アクション雑誌に移っている。一瞬の狭間に生きるもの猿山。とりあえず1発殴っておいた。こっちは焼きそばパンの供給量が減っていてほんのりイライラしてるんだ、まったく。

まあでも賛同を得たのであればとは許可だけだ。すぐさまララのところへと向う。

ララは自分の席のところで西連寺と立ち話をしていた。ちょうどいい、西連寺も誘おうと思っていた所だった。

「ねえララ、今ちょっといい？」

「いーよ、なにになに？」

「えーっとさ、オレと猿山で海行きたいなーって話してたんだけど、ララも良かったら一緒に行かない？」

「海！いいねー、行きたい！」

「おおー、それでさ、一つ頼みごとがあるんだけど、ララってワイプ装置とかって持ってる？」

「携帯用があるけど……大きくもできるよ？」

「さっすがララさん。交通費とか結構お財布に痛いからさ、そのワイプ装置でどこかの無人島へって考えてるんだけど……お願いしても、いい？」

「まっかせて！明日には作っちゃうから！」

「いや行くのは……（決めてなかったな）……土曜日だから。西連寺も良かったら一緒にどう？」

「えっ？わ、私は……」

リトは当然メンバーに入っている。何か用事があったとしても無理矢理連れて行くつもりだ。そしてララも来るなら西連寺にはどうしても来て欲しい。そして何らかのイベントでも起して欲しい。

でも反応を見る限りあまり乗り気でない様子。やっぱりちょっと時期が外れているからか？それとも水着が嫌だとか……。

しかし西連寺にはなんとしてでも来て貰わなくてはいけない。そして魅力的な水着を着て貰わなくてはいけない。

「ララも来てくれるって言ってるし勿論リトも来るからさ」

いやこの言い方は失敗だったか？どちらかと言えば奥手な西連寺に男が沢山いることをアピールすることになってしまう。

「あ……じゃあ、えーつと行かせて貰っても、いい？」

あれ？……まあいいか。これでメンバーはオレ・リト・猿山・ララ・西連寺の最強布陣の完成だ。

ん——……未央達にも行けるか聞いてみよう。こういうのは大勢のほうが楽しいし。

西連寺に聞いてみると、二人は飲み物を買いに購買へ行ったとのこと。ちょうど喉も渴いていたしオレも何か買……水道水でいいか。でも一応、念のため、随分軽い財布を鞆から取りポケットにねじ込んで廊下へ出る。

と同時に二人の生徒に進路を阻まれた。

「古手川と、レン？」

「さっきの話」

「聞かせてもらったわ！」

めんどくさいのに絡まれた。

「何か用？」

「僕達も」

「海に連れて行ってもらおうわ！」

「とりあえずその話し方やめてほしい」

「土曜日に」

「結城君の家に集合で」

ヘックシュン「いいんだよね！フリティ様！」

「もう訳がわからん。あとフリティ様ってのやめて」

いや別に二人が来るのには大賛成なんだけどね。なんかこう……怖
い。

まあそんなこんなで日にちも通行手段もメンバーも決まった。

後は当日までこのウキウキを保つだけだ。

そういえば、里紗・未央達は予定があるといって一緒に行くことはできなかった。行けないことを悔しがってくれただけで、誘った甲斐がある。そう思えた。

・・・。

・・・。

「ここがララさんの部屋……」

「すっげー！ ホントにクローゼットの中かよ！？」

「こんな……信じない、信じないわ」

「さっすがララちゃん、最新の機材ばかりだね！」

「なありト、美柑は？」

「なんか今日用事あるらしくて断られちゃった」

結城家に集合したオレ達は早速リトの部屋のクローゼットの中に入った。

オレはもう何度か入ったことがあるので新鮮さや驚きは無い。それよりも結城家に美柑が居なかった事のほうが気にかかった。まあ当日にいきなり誘われても大変だろうし、用事なら仕方が無いか。

「んじゃ、早速いこー！この装置にみんな入ってね」

しばし部屋中をキョロキョロしたりララによるへんてこ機械の説明会が開かれてから、ララの指差したこれまたへんてこ機械のところへ集まる。

ララが用意したワープ装置、通称ワープくんは子供用ビニールプールほどの大きさに輪っか型だ。うさぎみたいな形のパネルが付いて

いて、そこに座標を設定してワープするらしい。

そんな説明をされたがみんなキョトンとしているので、割愛してもらいララがスイッチを入れる。

場所は沖縄の無人島。リト達とも話し合ったが、いくら無人島とはいえいきなり海外はちよつと怖いという意見を採用し国内限定ということにした。

幾何学的な、ブンツという音とともに景色が一瞬ゆがむ。

光のような、モザイクのような、およそ形容のしようがないものに視界が遮られ、目を開けたときには、

「「海だ——っ!!」」

オレ達は海にいた。

・
・
・
・
・

・
・
・

みんなよりも一足先に着替えたオレは真っ先に海へと入る。着替えたというか下に着込んでいたので上を脱ぐだけだった。

海は思っていたより冷たいこともなく、見渡した感じクラゲのような生き物も見当たらなない。

これなら諦めかけていた遠泳もできるかもしれない。レン辺りを誘って競争でもしてみよう。

寄せては返す小波にしばし足を預け瞳を閉じる。地球人では無いのにこれを懐かしいと思ってしまうのは、何か哲学的な、生物学的な理由だろうか。

「しょっぱいなあ……」

「何が？」

帰ってくるとは思わなかった返答に振り返ってみると、そこには水着に着替えたリトと猿山がいた。

リトはオレと同じトランクスタイプのもので、猿山はV字がまぶしいブルーメランパンツだ。あいつなりのファッション何だろうが、何かこう……言葉に出来ない違和感があるのに不思議と似合ってた。

「女子達は？」

「まだ着替えてるんじゃないの、女ってのは着替えに時間をかけるからな……覗くか？」

「一人で帰りたいならそうしろよ」

「なんだよー冗談だろー」

「ふんっ、例え覗こうとしても僕がさせないけど」

「レン居たのか」

「覚えのない荷物が多くて着替えが手間取ったけどね」

ちなみにレンもトランクス型の水着を履いていた。この年頃でブルーメランパンツを履きこなす勇氣は中々出てこない。

「レン、後でオレと遠泳勝負しようぜ」

「風撫でからの挑戦か……ララちゃんと遊びたいというものもあるけど、これを断る手は無いね、勝負だ!」

「おっ! 泳ぎの勝負ならオレもやるぜ、この夏編み出したモンキースイムを魅せてやるよ!」

「すでにバカ丸出しだけだな。リトもやろうぜ? リト?」

「……………」

ここにもバカ丸出しが一人。むしろむつつりスケベだろうか。真っ赤な顔で鼻の下を伸ばしこちらに向ってくる水着姿のララと西連寺を見ている親友にオレはその言葉を送ろう。でも見とれてしまうのも解る。

ララの母親譲りであるまさにボンッキュッボンッなスタイルの良さと、西連寺のスレンダーながらも消して細すぎない女性らしい柔らかさを保っている良さ。どちらかを選べと言われればこれはまさに究極の選択といってもいいかもしれない。それほどの美しさを、彼女達は保有していたってオレなに言ってたんだ。

「ララちゃん! 水着も似合っているよ!」

「うっひょーこれだけで海に来た甲斐があるぜ!」

「……あう」

「鼻血押さえてないでリトも何かないのかよ」

純情ピュアピュアボーイ継続中のリトにこの刺激はちょっと強すぎる。そろそろ慣れて欲しいところではあるんだけど。

「それじゃみんな! あっそぼー!」

「「お——っ！」」

海を前にして議論は不要。サンダルを脱ぎ捨てろ、パーカーなんて羽織っているな、向かい風に向かって走れ。

オレの夏はこれからだ！

・・・。

・・・。

「あははは」

「そっちいったぞー」

「え？キャッ」

「はるっ……西連寺ちゃん大丈夫？」

「今だ！結城リト、覚悟！」

浅瀬から聞こえてくるのはみんなの楽しそうな声。それをオレはシート横にさしたパラソルの下、聞いていた。

あの後すぐ男子全員参加で行った遠泳大会にて、少々羽目を外しすぎ貧血を起してしまったのだ。そういえば昨日準備をしていて御門の検診を受けていなかった。一日くらい何とかなるかと思ったけど……。

「高校生の癖にはしやぎすぎなのよ、一応クラス委員なんだからみんなを監督する立場として……」

そんなオレの横で説教をするのは鬼の風紀委員古手川その人。パンパンに膨らませた浮き輪を片手にオレの横で座っている。

てつきり具合の悪いオレの様子を心配してくれてるのかとほっこりしたが、何だがそれだけではないっぽい。

そうだ、古手川は多分、海に来てからまだ一度も泳いでいないんだ。遠泳大会が行われているときにちよっぴり浅瀬に足だけ入れたらしいけど。

何故泳がないのか。

海に来て泳がないのなら、もうそれは海に来る必要がない。だがそれでも古手川は、盗み聞きをしてまで参加した。しかし、今はこうしてシートの上に座っている。

んー……、

「ねえ」

「なに？もう良くなったの？」

「ああうん、もう大丈夫、ありがと。それでさ、ちよっと質問なんだけど」

「？」

「もしてかして古手川って……泳げないの？」

「……………」

「……………」

「泳げるわよ」

「嘘だろ」

「……………うん」

やっぱり。持ってる浮き輪は通常企画よりも一回り大きな気がする。臨海学校のときとかどうしたんだろう。まあ泳がなかった生徒達も沢山いたしその中に居たのかな。

それじゃあ……なんで今日海に来たんだ？ビーチバレーがしたかったから？違う、だったら今すぐにでもリト達のところへ参加するはず。じゃあやっぱりオレを心配して……え？、嘘マジで？えへへ……照れるなあ。

まあそんなわけが無いんだけど。

つまり古手川は泳いで見たいんだ。この澄み渡る海を。でも踏ん切りが付かない。誰かに背中を押して欲しい、何なら泳ぎを教えて欲しい。

その名誉の役選ばれたのがオレということか。隣に座っていたのは催促だったんだ。

そうと解れば話は早い。

「じゃあさ、オレと一緒に泳がない？」

「えっ？」

「まだもって泳ぎたいんだけど、一人じゃつまないからさ。古手川と一緒に遊んでくれるなら嬉しいんだけど」

「そ、そういうことなら仕方ないわね！風紀委員として私が面倒みてあげるんだから！」

解りやすいというか何というか、可愛らしい。オレは立ち上がり古手川の手を取る。一緒に立ち上がりシートから足を踏み出した。背中を押すようにして吹く潮風にふと振り返ってみる。

そこには、少し意地っ張りな少女の、太陽にも負けない笑顔があった。

・・・。

・・・。

「いやー遊んだなー」

「ねー」

「そろそろ帰るかー」

「えー！フリティ様！もっと遊びましょうよ！」

「もう砂のお城も作ったしスイカ割りもしたじゃん。あと様々のやめて、っていつ変身したのルン？」

もうすっかり時刻は夕方。日はまだそれなりに高いけど、みんなの体は良い感じの倦怠感に包まれていた。

海水で髪も肌もべたべただし、ベットに入って目を瞑りたい衝動に駆られるがまずお風呂にも入らなくては。

海から上がり猿山とタオルで体を拭いていた。ルンがまだ遊ぶうもつと遊ぶうと誘ってくるがもう正直へとへと。ルンとは砂遊びしかできなかったから心残りはあるけど、貧血で倒れてしまったのがま

だ尾を引いているらしく頭には未だ鈍痛があった。

そんな時だった。

「え？　どういうことだよララ」

「えーっと……」

聞こえてくるのは珍しい、リトとララが揉める声。

漂ってくる不穏な空気。奥歯にしみるような緊張感が背筋をサーツと走っていった。

「んー？　どうしたんだよりト、ララちゃん？」

そんな緊張など露ぞ知らず、あっけらかんと話に参加する猿山。オレはある一つの推測に行き着いた。周りを見渡してみる。求めた物体は視界の中には認められない。予感確信へと変わる。そうだ、きっとオレ達は、

「いやあ……実は、ワープくんは据え置き型だから……」

「は？　……っ、つまり？」

「帰れ……ない」

この無人島に孤立した。

思い返してみれば、バカらしくて、笑い話にしかない。そんなオレ達のサバイバル生活は、こんな簡単な幕開けと一緒に始まった。

ジュラシックなパニックとスプリング

「帰れないって……じゃあどうするのよ!？」

その声を張り上げたのは古手川。それはそうだ。オレ達は日帰りのつもりだったし当然準備もそういった風になっている。

テントや寝袋なんて持ってきてきて無いし、当然食料も無い。ペットボトルを数本持ってきていたがすでに飲み干してしまっている。

「えっと……あはは」

ララの申し訳無さそうな苦笑いなんて初めて見た。一応責任を感じているんだろう。頼んだのはこちらなんだしむしろ謝罪される立場でもいいのに。

いくら国内とは言え、ここは無人島。当然携帯は圏外だし船着場も無いからきつと船も来ない。水平線を眺めても島らしきものは見えないから、少なくともこちら側の海岸から泳いだとしても島に辿り着く可能性は低い。

みんなもそう思ったのか不穏な空気に包まれる。

しかし、そんな中、オレはそこまでの危機感を感じては居なかった。

「ま、こうして突っ立っててもしょうがないし、とりあえず着替えるか」

こういった見知らぬ場所に取り残されてしまうことは結構、というかなんか経験している。ジャングルの中で敵対勢力から逃げながらのサバイバルなんてのもしょっちゅうだ。

それと比べれば、無人島といえども国内での遭難なんて余裕。みんなも居るんだから楽勝だ。

「ララとリトは、今日のこと美柑とかザステインに言っているんでしょ？」

「ああうん」

「言っておいたよー、あつそうか！」

「今日すぐにつてことは無理かもしれないけど、明日になっても帰つてこなければ心配になつて調べるはず」

「そうしたら迎えに来てくれるつてこと？」

「そういうこと」

ザステインの過保護さを考えれば夜にでも迎えに来てくれる可能性は充分にある。案外早く帰れてしまうんじゃないかな。

みんなの不安も少しは解消されたらしく着替えや荷物を置いてある場所へと移動し始めた。

「あれ？」

荷物を纏めて置いておいた気の前まで来た時、先頭にいた猿山が首をかしげる。

何事か？とその後ろから覗き込んでみてその疑問の意味が解った。

「荷物が無い」

そう、オレ達の荷物が無くなっていた。風で飛ばされないように重石を乗せて置いたので飛んでった、ということは有り得ない。その重石の石はここに落ちているので場所を間違えたわけではないだろう。

じゃあ誰かが盗んだ？この無人島、かもしれない島で？一体誰が……。

その犯人はすぐに見つかった。

「あ、あそこ！」

そう言って西連寺の指差した方向に、奴らは居た。

キキツ？

「猿だ！！」

そう、猿だ。いかにも悪戯好き、といった顔の猿がオレ達の荷物を口に咥えたり抱えたりしながら、木から見下ろしていた。荷物を盗んだのは奴らだったんだ。

「ま、待て！」

「荷物を返せ！」

リトと猿山がそう声を荒げると同時に猿達は森の中へと逃げ出す。あの中には着替えやらタオルやら大事なものが入っている。あれを無くしたらオレ達は本当に水着一丁で迎えを待たなくてはならない。これはさすがに厳しい。

我先にと駆け出したリトと猿山を追うようにしてオレ達も走り出す。

森の中へと入ってから解ったことだがオレ達は今サンダル履きだった。踏み折った小枝が突き刺さり痛い。が、先頭の二人はともかくオレの後ろは女子ばかりなので走りやすいよう危ないものはどかしておかなくては。

走れば走るほど、森の奥へ行くほど鬱蒼と茂った木々達が行方を阻む。それに比べ猿達は、勝手知ったると言わんばかりに木を伝いじりじりを差を広げていった。このままでは荷物を取り返すどころか見逃してしまう。それにこれ以上森の中へ入るのは……。

「ララ！空飛んで先に行ってくれ！」

「まっかせて！ペケ！」

『了解ですララ様！』

反重力ウィング！とペケが叫ぶとともに見慣れたララの羽が背中から出現する。タンツと小気味良い音と共に地面を蹴ると猿達へ一直線に飛んでいった。

「荷物は一旦ララに任せよう」

「はぁ…はぁ…そうね」

「くっそ、足の速い奴らだ…猿め」

「それよりもここ……本当に地球なのか？」

足を止めて周りを見渡してみると、まるで熱帯雨林のような、およそ人が立ち入ることなど許されない、そんなジャングルが広がっている。

生えている草や、その周りを舞う虫たちは、オレの無知さ加減を考慮しても見たことが無い。それどころか地球の生態系とは離れている気がする。

もしやっ？と空を見上げてみる。枝と葉っぱに隠されながらチラリと覗けた空には、衛星が二つ浮かんでいた。間違いない……。

「ねえ、雪ヶ岡君？」

古手川もそんな異変に気付いたのか、不安を露にしながらオレの傍に寄り添ってくる。二の腕に触れた指が震えているのが解った。遠くで鳥が鳴く。

「走ったからお腹が減っちゃったなー、ういーどっこいしょあ」

おっさんみたいな仕草で猿山が丸太に腰掛ける。オレは考えていた。きつと、多分、恐らく。この星は地球じゃない、違う星だ。それも文明の発達していない原始惑星……。それをみんなに言うべきか？しかしオレは地球人、別の惑星を知っているなんてのはおかしい。それにわざわざみんなを不安にさせる必要は……。待っていれば迎えが来るのは間違いない。

ザステインもそうだし、御門もオレが出かけたことは知っている。あいつは秘密にしているようだが、オレに勝手に仕掛けた探知機によってこちらの位置を特定し迎えに来てくれるはず……。薬草探しが終わった後に。

でも不安がっている古手川のことを思うと……。ゴゴゴ……。ルンなんかは猫被ってるだけで意外とタフだし、西連寺はリトが付いてるし、猿山は猿山だし。やっぱり問題は古手川か。ゴゴゴゴ……。しっかりしているように見えて乙女らしい所があるし、意外と怖がりだ。いざという時、が来ないに越したことはないんだけど、もし来たらゴ

ゴゴゴゴゴゴゴ、って何ださっきからうるさいな。

考え事をしているというのに聞こえてくる耳障りな音の、出てくる場所を見てみると、丸太に腰掛けた猿山がいた。お腹の音？にしては大きすぎる。一体なんな……ん……。

「……………」

「ん？どうした有里、こっち見て。なんだ俺の美肌がそんなに見たいのか？」

「おい、猿。ゆっくりと腰を上げて、ゆっくりとこっちへ来い」

「はぁ？……おい言っておくけど俺にその気はねーぞ？」

バカがっ！

間抜け面を晒す猿山意外の4人はオレの言っている意味が解っているので、みんな猿山から離れていく。

「おいおい何だよみんなしてお化けでも見たような顔をして……」

ヘラヘラと笑う猿山もさすがに異変に気付いたらしく、ゆっくり…首の壊れた人形のように、オレ達の視線が集まる背後へと視線を向ける……そして、”それ”とぼっち目があった。

「くっ、こっかっかこ……何かだ——っ！！！！」

猿山に代わって言おう、恐竜だ！それもジュラシックパークで車ごと扉ごと人を食べちゃうタイプの。

ギャオオオオオオオオオオ！！！！

猿山の叫びに被せるように恐竜も森を揺らすほどの咆哮を叫ぶ。
その泣き声を皮切りに、

「逃げるぞ！」

オレ達は再び駆け出した。

先ほどの猿を追いかけていた時とは違い、全速力で。

「なになに、一体何なの！？」

「おい、あれって恐竜だよな！？なんで、恐竜が？」

「とにかく逃げなくちゃ！」

「いやーん有里君こわーい！」（もしかしてここ違う惑星！？ララのやつ間違えたなー……）

慌てるみんなを前にして猿山と二人後ろを走る。幸い木々が生い茂っているため恐竜の巨体ではそう素早く走ることが出来ない。が、こちらもサンダルに慣れない森の中なので逃げ切られるという訳にもいきそうにない。体力的なことも考えるとこちらが不利だ。

「あっ！あそこに木があるわ！あそこに登ればきつと恐竜も来ないはず！」

「よし！あそこまで行くぞ！」

先頭を走る古手川が大きな木を見つけ指差した。樹齢数百年、数千年とも言えそうな大木で蔓が伸びているので登るのは何とかかなりそうだ。が、問題は時間。

「猿山！先に行け！」

「おう！」

隣を走っていた猿山を先に行かせ、オレはその場に立ち止まる。手近にあった木の蔓を持ち軽く引っ張ってその丈夫さを確認すると、それを木と木の間に頑丈に結び付けておく。

それを三本ほど仕掛けてからみんなの後を追いかけた。

みんなはもう木に登り始めていてまず初めに身軽な猿山、そして古手川・西連寺・レン・リトの順に登っている。

順調に登っているようだが、それでもやはり慣れない木登りは随分悠長だ。

女の子の力では仕方が無いし足に履いているのがサンダルでは踏ん張りも効かない。でも猿山が引き上げて・リトが下で控えての阿吽の呼吸はさすがだと思う。

その時、後ろでドゴォォ！と轟音が響く。振り向いて見ると恐竜がさつきしかけた蔓に足を引っ掛けて盛大に転んでいた。

あの巨体では一度倒れてしまうとそう簡単には起き上がれないはずだ。

今のうちに登っておけば恐竜もオレ達を見失うはず。飽きて帰っていったら降りればいい。その頃にはウラも戻ってくるはずだ。

オレも木の所まで辿り着く。猿山・古手川・西連寺はもう上まで登りきりもたついているルンに手を伸ばしている。

一応これで何とかなるか……と油断したその時。

「へ？…きゃっ！！」

「な！？」

「ん？おこっ」

ルンの声に上を見上げてみるとそこにあっただのは、お尻だった。避けるわけにもいかず押しつぶされる。

水着しか隔てるものがないそれは、やはり柔らかかった。しかし今は堪能している場合じゃない。

「何が起きた？」

「ルンさんの手を取ろうとしただんだけど、バランスを崩しちゃってー！」

リトも油断していて受け止めることが出来ず落ちてしまったということか。オレが下に居てよかった……。

「ルン？ おい、ルン。んー……ショックでちよっと気を失ってるか」

木から地面までの高さは目算で……4、5メートルってところだろうか。それなりの高さには違いない。

ぱっと見た感じ怪我とかはしていないので大丈夫。

「とはいかないか……」

肉食系の動物は単体、または少数で生活する場合が多い。その固体の体が大きければ大きいほどそれは顕著に表れる。

恐竜なんてのはその最たるもので、オレ達を追ってきたあいつも単体で行動しているとばかり思っていた。が、

（まさか夫婦とは……）

そう、大木を挟んだ反対側からもう1体の恐竜が向ってきたのだ。

色や体つきが同じなのできつと同種族の子、多分お母さんだ。そしてオレ達は、さしずめたまご泥棒といった所。きつとこの辺りに巣があるんだろう。襲ってきた時のあれはオレ達を食べようというよりは追い払おうって感じだったから。

「ルン、ルン……起きてくれないとやばいんだけど」
「……んん？」

後ろのお父さん恐竜ものっそりと起き上がろうとしている。さすがに2対を相手にするのはめんどくさい。
ルンの肩を揺すると目を覚ましてくれた。

「きゃー！有里様わたし怖かったー！」
「違う、全然違う。今そんなのしてる場合じゃないから」

へ？と間の抜けた声をしながら恐竜の方を見てルンも現状を察知する。

「あーわたしはここで死ぬのね！でも有里様とだったら何も怖くない！」

「もうほんと簡便して……リト！猿山！受け取れ！！」

このまま問答していても仕方ない。リトが登りきったのを見計らって、ルンの体を思い切り上に投げる。

ひゃー！と緊張感の無い悲鳴を上げるルンの両手をリトと猿山がうまく掴んでくれた。これでみんなは大丈夫。

「雪ヶ丘君もはやく！！」

（と言われても、もう登る時間も無い……んなことしてたら後ろか

らがぶりだ)

かといってオレはあくまでただの高校生。出来ればみんなには宇宙人ということは知られたくない。隠すとかじゃなくて、みんなを巻き込みたくないから……。

何か使えるものは無いかと周りを探してみても、簡単に折れそうな小枝とかしかない。

打開策も見つからないまま、お母さん恐竜がこちらに向ってくる！死ぬよりはましだ、適当に殴って追っ払うしかない。

そう思った瞬間、

「とら——！！！」

母さん恐竜の頭に猿探しから帰ってきたララの拳がぶち当たった。

(チャンス！)

当然みんなの視線はララへと注がれる。その隙に一瞬でお父さん恐竜のところまで移動し、その顎へ思い切り蹴りを入れておいた。

どんなに巨体だろうがどんなに強固だろうが、顎は生物の弱点。脳が揺れれば立っていらなくなる。

恐竜でも例外はなく再びグラアとバランスを崩す。そしてオレはみんなが気付く前に再び元居た場所へと戻った。

背後でさっきも聞いた、ドシンツという音がしていた。

.....。

.....。

何とか恐竜達から逃げ延びたオレ達は再び海岸へと戻ってきていた。どうやらララは荷物を取り返せなかったらしい。地の利が無いしこんな日もすっかり傾いたジャングルでは仕方が無い。

その後オレ達は現状を認識した。ペケがスキャンしてくれてわかった。

ここは原始惑星オキワナ。二つある衛星が特徴で、自然環境も大気も地球と酷似している。地球からは400万光年も離れていて、宇宙文科系レベルの宇宙船でないとまず迎えになんて来れない。

それを知った古手川が軽いパニックに陥ったりもしたが、そこはうまく宥めて落ち着いてもらった。迎えを待たなくてはいけないといった意味では沖縄だろうがオキワナだろうが関係ない……はず。ララの宇宙船なら数時間で来られるだろうし。

そうと解れば、とすぐに頭を切り替えたオレ達はまず洞窟を探した。このまま砂浜に居てもどうしようもないし、安心して眠るには屋根が必要だ。それに恐竜達のこともある。他の生物がどれだけいるか、何がいるか解らない。そんな恐怖と不安と同居しながら草むらで寝るなんてそんなこと女の子達にやらせられない。

幸いなことに手ごろな洞窟がすぐに見つかった。近くに小川も流れしており、ペケのスキャンで飲料にも使えることが解った。これで水分補給の問題もクリアできた。後は食糧問題。これも西連寺が果物を見つけてくれた。栄養価も高く沢山実っていたので明日の分くらいまでなら大丈夫だ。

これでサバイバルに必要な要素の全てをクリアしたオレ達は今何をしているかというと、

「ふいあー……極楽極楽」

「なーちよつと熱いけど」

「そのぐらいのほうが気持ちいいもんだよ、な？有里」

「おうともよ」

温泉に入っているのだ。

食べ物も寝る所もななんとかなったオレ達。女子達が葉っぱでベツトを作る！というので、オレ達は火を焚くことにした。猿山とリトが木と木を擦り合わせて必死に煙を起している傍で、ララから借りた万能ツールの一つ、ライターで立派な焚き火を作り上げておいた。俺達の努力は何だったんだ！とリト達に怒られたのは言うまでもなく、機嫌を取るためにと暇を潰すためにと警備のために洞窟の近くを探検しようと提案した。

男ってのはどうしたって冒険が好き。すぐに乗ってきた二人と一緒に洞窟の中やその周りをぶらぶらと歩いた。

すると、猿山が

「んー？なんかあれ煙あがってないか？」

と洞窟の向こう側を指差した。確かに見てみれば白いものがもくもくと空に上がっている。しかし、あれは煙というより湯気に見えた。もしや！？と思ったオレは駆け出した。

そしてそこで温泉を見つけた、ということである。

すぐさま女子達の下へと戻りそのことを話す。海水でべたべたしていたり汗をかいた事もあった女子達も入りたがった。

湯気や硫黄の誘惑がありながらも、レディファーストの精神を重んじる我々は先に入るよう促した。

キヤッキヤと温泉へ移動する女子達の背中を見送った後、再び探検

を決行した。

その探検中、覗きを企む猿山を二人がかりで止めている時、

「ん？温泉の匂い？」

「は？ララ達が入りに行った温泉じゃないの？」

「違う……なんかもっと近くに」

匂いのする方、ララ達が入りに行った温泉の少し上の方へと行ってみると、

「おお——！こっちにも温泉あるじゃん！」

もうひとつ温泉を見つけることが出来た。

先に見つけたものよりも幾分小さいが男三人入るには充分過ぎる広さ。

すぐさま着ていた水着を脱ぎ温泉に飛び込み、あの会話へと戻る。

「いやー、俺達帰れんのかね」

「帰れるさ」

「有里はなんだかやけに冷静、というか落ちついてんな」

「帰れるって解ってるからな、慌てたっしょうがないし」

「確かにそうだな。むしろ楽しまなきゃな」

「なー」

「な」

温泉のおかげでまったりとした時間が流れる。これでペンションがあったらリゾート地としては満点なんじゃないだろうか。

御門が喜びそうな草も色々あったし今度時間が有ったらまた来て見るのもいいかもしれない。

「体も暖まったしそろそろ出るかー」

「もうちょっと入ってたいけど……みんな疲れてるし早く寝なきゃだしな」

「そうだなー……ん？ ああ！！」

「どうした猿山」

「奴らだ！ あの猿達が居た！！ この野朗ー待ちやがれ！」

タオルで体を拭こうと立ち上がると、猿山が声を張り上げた。同じ方向を見てみると、なるほど確かにあの猿達だった。ご丁寧にオレ達の荷物を抱えてこちらを挑発している。

それを見てカチンときた猿山が猿達を追いかけようとしてリトを押しのけた。

「おいやめとつ、うわ！」

「リト！ 危ない！」

フラッとよろけたリト。後ろにあった石に躓いて転びそうになる。このままじゃ頭を打つ！ と思ったオレは咄嗟に手を取り振り回すようにしてリトとの位置を入れ替えた。が、不運。濡れた手が滑りオレが代わりに石に躓いて転んでしまった。

頭を打ってはまずい！ と何とか体勢を立て直すも、斜面になっていてコロコロ転がってしまう。一度加速が付いてしまったらもう止まらない。

いずれオレの体は崖から放り出され宙を舞う。チラリと見えた着地

地点はまさかの温泉。これはラッキー、岩や地面だったら怪我をする所だった。

グンツと無理矢理空中で体を回し足を下へ持ってくる。足と腰の柔らかさを利用し、オレは見事着地に成功した。

「え？」

「え？」

そんな審査員が全員10・0を点けてくれるような空中1回転捻りを見ていた観客達が居た。

オレの目の前に

全裸で

「きゃあああああああ！！！」

ああそうだ、そうじゃないか。オレ達の入った温泉はララ達のいる温泉よりも上流。当然そこから転がり落ちればここへ落ちてくるのは必然。そして温泉に入っているのだから水着を脱ぐのも当たり前。

いい訳のしようはない。謝ることも間に合わない。タオルで前を隠しながら大きく振りかぶる古手川の右手。

せめて鼓膜だけはやぶかないでおくれ、そう願いながらオレは静かに瞳を閉じた。

ビニールプールくらいの大きさで

遭難二日目。

「冬眠でもすんのか？」

オレの顔を見た猿山が、開口一番言った言葉だ。

昨日の温泉事件の際、まず手始めに古手川さんからキレの良いビンタを一発頂いた。

「湯気で見えなかった。すぐに目を瞑ったので何も見ていない。悪気は無かった反省はしている」

という言い訳じみた釈明を一蹴され着替えてからすぐに説教が始まった。

そもそもクラス委員というものは。という話から始まり、女性とは、男性とは、紳士とは、常識とは、と睨が重くなる話に展開していき。予定調和のようにウトウトしたところへビンタのおかわりが。

結果として真っ暗な空が白み始めることまで説教は続き、オレを寝不足へと容易く追い込んだ。

5発以上のビンタを頂いた右頬にはキレイな紅葉が咲いている。寝不足な目の下にはこれまたキレイに刻まれたクマが。

猿山の「冬眠でもすんのか？」というのは、これらを踏まえたうえでのイヤミ、だったということだ。オレだけ覗きをしたことが恨めしいらしい。だから覗きはしてないのに。

猿山のくせにうまいことを言う、と思う反面やっぱりむかつくので、後で膝カクンでもしてやろう。

.....

「はー……二日目かあ」

「なに、どうしたのリト。疲れ気味？」

「まあね……あと不安もあるっちゃあるから」

「迎えは来るって。それに女の子たちはもっと不安で疲れてんだよ？」

「そりゃそうか。うん、やっぱりこういう時は男子が頑張らないとな」

1日くらいなら新鮮味もあって楽しいかもしれないけど、それが2〜3日続くと疲れもストレスも溜まってきていづれ限界が来る。

今日辺りザステインが来るはずだけど、少し自信が無くなって来た。親衛隊長のくせに抜けてるところあるからなあ。

「おーい！リト、有里、何かみんなで話があるみたいだぜ」

昨日と変わらず元気な猿山。呼ばれて二人で行ってみると、猿山とララ・西連寺が輪になっていた。

「なに、どうしたの？」

「食料が無くなっちゃったみたいでさ。どうしようかって今話してたんだよ」

「え？昨日フルーツを余分に沢山取っておいたんじゃん、あれどうしたの？」

「それがね……」

「お猿さん達が取ったみたいなの！」

あの猿共……そこまでオレ達をバカにするのか。

「でもその代わりに荷物は返してくれたみたい」

あの猿共……良いところもあるじゃねえか。

時間的には多分9〜11時頃。朝ごはんを食べなかったのだからちよつとお腹が減っている。我慢できるレベルだけどお昼過ぎには限界が来そう。

お腹が減れば減るほど動くのが億劫になりダメ螺旋に陥ってしまう。そうなるまでに何か食べたい。探しに行かなくては。

……うん、ただ探すだけじゃつまらないな。

(おい猿)

(なんだよ)

(ちよつとくじ的なものを作って欲しいんだけど)

(?……なるほど、イカサマは任せるぜ！)

そう視線で会話しただけでこちらの意図を汲み取ってくれる猿山。すぐにそこら辺の枝をいくつか拾ってきて手早く準備してくれる。

「よっし！じゃあみんなで手分けして食べ物探してくるか！」

「そこで俺がこんなものを用意してみました！」

ジャジャン！と取り出しましたるわ只の枝切れ6本。

「短いのが2本、長いのが2本、中くらいのが2本入ってるからそれでチーム分けってことで」

しかし猿山から受け取った枝は全部同じ長さである。オレはそれを隠すように手で持ちながら、

「じゃまずリトから」

そのまま西連寺・ルン・猿山・ララの順番で引いてもらった。

「よしこれで決まりだな！」

チーム分けはリト・西連寺・のチーム。ララ・ルンのチーム。そしてオレと猿山のチームに決まった。

この分配には運なんて要素は含まれて居ない。全てイカサマによるものだ。

実はこの枝、全部同じ長さだったのだ。それをリトと西連寺が枝を引こうとした時にオレが隠しながら指で折る。同じようにララとルンの分も。そして長いままの枝をオレと猿山が引くことになる。

このチーム分けにしたのは色々理由があった。

まずリトと西連寺。これは言わずもがな、二人にサバイバルという特殊環境かつジャングルという他人の入ってこない場所でちゅっちゅらぶらぶなイベントを起してもらうため。

そしてルンとララのチーム。本当はリト・西連寺・ララの三角関係チームにしようと思ったが、それだとルンが余ってしまう。しかし

二人にするには相方に頼れる人を置かなくてはならない。それには戦鬪面で問題なく、また幼馴染でもあるララが適任だった。

別にオレでもいいんじゃないの？と思われるかもしれないが、オレと猿山は留守番組。と言う名のサボリ組だからだ。

一応火の番や荷物番、寝転がったり昼寝したりとやることは多い。

「それじゃ大体お昼頃になったらまた集合ってことで」

「よーっし！ルンちゃんいくよー！」

「えっ？つちよ！……私何だか体調が悪く……きゃっ！ララひっぱらな！有里様ー！たすけてー！」

「それじゃ結城君、私たちも行きましょう？」

「そっそそそうだね」

「いってらっしゃーい」

「お気をつけてー」

こうして二手に分かれてそれぞれが森の中へと入っていく。その背中が見えなくなるまで見送ってから、

「んじゃ俺ひとッ風呂浴びてくるかな」

「それいいな……、んじゃオレ古手川の様子見てくるよ」

オレ達も別れた。古手川は朝方まで説教をしていたこともあり起きるまでは寝かせてあげようということで今も洞窟で眠っているはず。オレが起きた時に使っていた乾いたタオルを掛けて上げると、幸せそうな顔をして包まっていた。数時間前まで烈火のごとく怒っていたのが嘘みたいだった。

「古手川ー……起きてる？」

洞窟を覗き込み、恐らく古手川が横になっているであろう奥から2番目の木の葉のベットを見るが、そこに古手川の姿は無い。起きて顔でも洗いに行ったのかな？と川の方へ行ってみようと洞窟を出ると。

「……………」

「っわ！…何だ古手川居たのか。びっくりさせんなよ」

いつの間に立っていたのか後ろにいた古手川に驚く。同じようにあまり眠れなかったのか目の下には若干クマができていた。

「みんなは？」

「ああ、昨日取って置いた果物が無くなっちゃったんでみんなで手分けして探してるところだよ。猿山は火の番をしてくれて、オレは古手川が起きたか見に来ただけど」

「そう、じゃあ私たちも探しに行きましょう」

「へ？いやいやオレは……」

「あっちの方角で見た気がしたわ。行きましょう」

有無を言わせない古手川の気迫に押されてしまう。何だか様子がおかしい。オレとしては寝不足だし昼寝がしたかったんだけど。そんなことは知る由も無く、ずんずんと歩き始めてしまった古手川を、

一人にさせる訳にはいかない。

木の枝を折って「森にいく」と書置きを残しておいてから、渋々と古手川の後を追いかけた。

森の中を歩く。

「……」

「……」

聞こえてくるのは枝や草を踏む音だけ。お互い会話は無い。寝起きでボーッとしてるのかと思えばどうもそんな感じでもない。どちらかと言えば剣呑な空気がそこにはあった。

果物を探しているという風でもない。まるで静かな場所を目指しているかのように、森の奥へ奥へと入っていく。

30分ほど歩いただろうか。突然前を歩いていた古手川が立ち止まる。つられてオレもその場で立ち止まった。

ゆっくりと振り返る古手川。その表情にはある種の覚悟のようなものが見て取れた。そして彼女の発した言葉が、オレの時間を止める。

「雪ヶ丘君って……宇宙人？」

「……」

な、なんだ！？今古手川は何て言った！？宇宙人！？誰が？オレがか？なんでどうしていつバレた。

「昨日恐竜を倒してたでしょ？それに地球じゃない星に来ても動揺しないし……」

見られていた。てっきりみんなウラの方を見ていると思ったし恐竜の方へ行ったのも一瞬だけだったのに。

どうする……その時にウラが一撃で恐竜を倒しているから、超パワー宇宙人という印象が強くなってしまっている。それに見られてしまっている以上オレが恐竜を倒せたことを誤魔化しきれない。

本当は恐竜ってすごい弱い生き物だってことにするか？……ダメだ、説得力に欠ける。

他の星では恐竜って生態系の下位にいるんだよ？ってことにすれば！？……なんで他の星の事知ってるんだよ。

くそ、ダメだ！何も思いつかない。しかもこれ以上沈黙を続ければ肯定しているのと変わらない。どうするっ！？

「何か見間違えたんじゃないの？オレがあんな恐竜を倒せる訳が無いし、まして宇宙人なはずがないじゃんか」

「……」

無言で睨む古手川の視線に心が痛い。

こうなったら大きな声で有耶無耶作戦しかないのか。しかしこれは伝家の宝刀、諸刃の刃。この体で耐え切れるのかっ！！？？

ダメダメダメだ落ち着け。……ん？

「古手川、伏せろ」

「は？ ちょっとカッコいい声出したからって騙されないわよ！」

「違うそうじゃない。誰か、いる」

「ちょっと近寄らもごっ」

即座に古手川に駆け寄り口を塞ぐ。

確かに後方でガサツと音がした。恐らくこちらに気付いて足を止めたんだろう。そしてすぐに気配をした。リト達だとしたら、こちらに気付いて足を止めるまでは解る。が、気配の消し方が上手過ぎる。あれは戦いの中に身を置く人の消し方だ。

となれば狙いはオレ……もしくはラウ。ルンの場合も密猟者の線もある。

何にしても放置はできない。対処しなくては。

息を殺しながら気配を探る。聞こえてくるのは風に揺れる葉の音と古手川の呼吸だけ。

チリチリとした緊張感が肌に刺さる。極限まで張り詰められた糸が限界を迎えたその時、

「……そこかっ！」

瞬時に察知し古手川へ飛んできた針をキャッチする。よくみればそれは注射針だった。麻酔か劇薬の類か。こちらの動きを止めるつもりらしい。密猟者か！

「居場所解った、そっちだな！」

注射器が飛んできた場所へ向う”フリ”をする。気配を消すのが上手いとはいえ、針を投げる時の殺気が無い、無さ過ぎる。つまり機械が何かで射出したんだ。

何のために？オレと古手川を分離させて片方ずつ潰すつもりだ。そうはいかない。

こちらを狙えるのは生い茂った木々の関係でさっき古手川に飛ばした一箇所とオレの前、二箇所しかない。つまり古手川の方が囷ならこちらから追撃が飛んでくる。

と考えるうちはまだまだ二流。

敵の狙いはその裏をかいいた真上からの強襲！

「読んでたぜ！」

ガササツという音と共に密猟者が木の上からまっ逆さまに落ちてくる。その手にはナイフと注射器。きつとナイフには薬液がべったり塗られているんだろう。

迎え撃たれたことに動揺した密猟者はすぐに持っていた注射器を矢のように投げるが、古手川と共に容易く避ける。

「キャッ！」

危なくないように古手川とちょっと押して離れた。先ほど掴まえた注射器を逆手に持つ。密猟者もナイフを構えた。

勝負は一瞬。さあ来い！インファイトならいくらナイフ相手だろうとオレに敵う奴なんていないんだぜ！こんな森の中に白衣なんて着てきちゃってる奴に負けるはずが……

ん？

白衣？それも見覚えが。そういえばこの注射器も。

もしかして？と過ぎった予感の確認できるほどに近付いた密猟者の顔を見て確信に変わった。

「御門！？」

「有里？」

・・・。

・・・。

「いやーまさかこの星に来てるなんてなあ」

「びっくりしたのは私の方よ。沖縄に行くんじゃないの？……密猟者かと思っちゃったわ」

「そりゃお互い様だろ。ララのテレポトマシンが思ったより凄くて、沖縄とオキワナを間違えちゃったってワケ」

「さすがデビルーク星のお姫様ね」

「おーい荷物まとめ終わったぜー」

「洞窟も来たときと同じくらいには戻しておいたけど」

「勝手に環境を変えちゃいけないもんな」

「恐竜さんにも謝ってきたよー」

「早く帰ろ帰ろ！」

「……」

「じゃ、みんな宇宙船に乗って。地球へは4時間ほどで着くと思うから」

御門の登場によってオレ達は無事に帰れることになった。こんな広い宇宙の中で鉢合わせてしまうなんて、これも運命というのだろうか。多分腐れ縁だろう。うん、きつとそうだ。

古手川とのことはとりあえず有耶無耶になった。それでも宇宙船の中ではすごい睨んできたので諦めたわけではないらしい。キチンと話せる時がくれればいいんだけど。

大気圏を抜けながら、オレ達は窓からオキワナ星を眺める。青と緑色で塗りつぶされたその星は、夏の星という感じがして。ただどうしようもなく美しく見えた。

・
・
・
・
・

後日。

「つてなことがあってさー」

「それで帰りが遅かったんだね。結構心配したんだけど……」

「それに関してはごめんなさい」

「ま、無事だったんならいいよ。私の役目はお留守番なんだからさ」

ここは結城家のリビング。ソファに寝転がってテレビを見ていたオレの上に美柑が座ってアイス舐めている。

海はどうだったの？と聞かれたので話していたところだ。

聞いてきたから話したのに、途中から口数が減ってきて相槌だけになり、終いにはすっかり不機嫌になってしまった。

一体何故だどうしてだ、考えろ雪ヶ丘有里。

初めは美味しそうにアイスを食べていた。そりゃ美柑がアイス大好きだし、ご機嫌ゲージがあつたらきつと100で振り切っていただろう。なんだご機嫌ゲージって、バカかオレは。違う今はそんなのどうでもいい。

そういえば古手川に泳ぎを教えたところでちょっと不機嫌になった気がしたなあ……。

ははぁん、読めたぞ。さては美柑泳げないな？

「さては美柑泳げないな？」

「クラスで一番泳げるんだけど」

違った。後余計に不機嫌になった。

何だ！？一体美柑は何を求めているんだ！？考えろ、今までの言動の中にヒントが隠されているはずなんだ。

……………そうか。

「もしかして、美柑も行きたかったの？」

「……………なんで？」

聞き返された。これ図星だ間違いない。でもしょうがないじゃん、美柑用事があるって言ってたじゃん。

ああでも最近美柑と全然遊んで無いからなあ……………よしっ、

「じゃあ今から泳ぐか」

「は？」

「ビニールプールで」

「えっ？何言ってるの有里さん」

「ああ水風呂の方が良かった？」

「お風呂よりは……………プールの方が良いけど……………」

「じゃあビニールプールで。その方がセリヌとも遊べるしね。確か倉庫に結構大きいのがあったよなあ？早速膨らませよう」

「有里さんってさあ、バカだよな」

「自覚してるからいいの。ほれ美柑は早く水着に着替えてきな。そのまま入るってんなら止めないけど」

「バツ、バツじゃないの」

ビニールプールで美柑と二人して寝転がったり水を掛け合ったり。セリーヌがスライダーになってくれて、思ったより怖くて楽しかった。

すっかり美柑もご機嫌になってくれた。水着を褒めたらすごい照れてたし……隠そうとしたけど。

ビニールプール大のレポートマシンで行った海水浴。ビニールプールでだって同じくらいに楽しい。

どこへいくかよりも、誰と遊ぶかの方がきっと大事なんだ。

ホースで空中に作った虹を眺めながら、割と真剣にそう思った。

ビニールプールくらいの大きさで（後書き）

御門さんもそれなりに強いはず。

はず

雨色の夜（前書き）

シリ阿斯風

雨色の夜

シトシトと雨が降る。

お日様は地球の裏側に隠れ、星空は雲に遮られている。

そんな真っ暗な闇の中、少年と少女は一つのベットと一緒に入っている。

少女は抱きしめられていた。孤独から守られるように、温もりを与えられるように。

少女は、その感情の名前を知らない。

・・・。

・・・。

いつも通り学校へ行き、授業を受けたり受けなかったりお昼ご飯を久しぶりに沙姫達と食べたりして、真っ直ぐ我が家へと帰ってきてシャワーを浴びたらご飯の支度。御門とヤミと一緒に食べたらまたお風呂。出たら御門と一緒にテレビを見て、頃合をみてベットで眠る。

何かが無い限り、それがオレの”日常”。

ご飯を作るのが御門だったり、テレビを見るのがヤミだったり、風呂上りのヤミの髪を乾かしてあげたり。多少の変更はあったりするが、基本的にはそんな感じ。

今日も風呂にゆっくり浸かった後、御門と一緒にテレビを見ながらお茶を飲んで。御門が書類仕事があると言って部屋へ戻ってしまっ

たので、少々早い気もするが部屋に戻って寝るとする。

歯を磨いてから部屋に行くと、扉を開いてびっくり、ベッドの上には本を片手に持ったヤミが居た。

そういえば夕食後に姿を見なかったな？なんて思ったが、別段珍しいことでも無い。制服に入れっぱなしになっている携帯を取り出して着信が無いか見る。迷惑メールが数件来ているだけで他のメールや着信は無かった。

そのことに若干の空しさを覚えながらも、マナーモードを解いて充電器に刺して置く。さして寝ようという気は無かったがベッドに入ってみると不思議なことに瞼が重たくなってきた。横になったら寝られそうだ。

「ん……あれ？」

しかし困ったことにいつもはベッドの上にある”クロネコちゃん”が見当たらない。洗った覚えもないし今朝起きた時はここにあったはずだ。

「なあヤミ、クロネコちゃん知らない？」

「……………」

だんまり。読んでいる本に夢中という風ではないから聞こえている。そして犯人はヤミだ、多分だけど。

しかしクロネコちゃんを探しだすのも億劫なくらい眠たくなってきた。電気を消さなきゃ眠れない質なのでヤミが読書できなくなってしまう。

「ヤミ、ほれ寝るよ」

返事は無いが読んでいた本に栞を挟んでいるところを見ると了解してくれたらしい。

ベッドの横に置いたりリモコンで部屋の電気を消す。オレが布団に潜り込むのと同時にヤミも入ってきた。一緒に寝るつもりか。いいけど、ちよつと暑そうだ。少々贅沢な気もするが、エアコンの電源を入れる。時間は2時間だけ。あまり機械に慣れてしまうのは良くないし。

今一度体を布団に包む。もぞもぞ動く二つの瞳と目が合った。小さく”おやすみ”と呟く。解ってはいたが、返事は無かった。

・・・。

・・・。

「……」

「んー……」

目覚ましよりも早く起きてしまうことがある。それもほんの数分前に。こういったことが月に二、三度あるのだが、この現象が起きた時は大抵良い一日になる、というのが自説だ。

寝ぼけ眼を擦りながら携帯のアラームを切って置く。放っておけば2分後にはけたたましい音を鳴らしただろう。そして自説が正しければ今日は良い一日になるはずだ。少しわくわくしてくる。

携帯の液晶を見れば、時刻はまだ7時ちよつと前。まだ頭がふわふわするが、とりあえず体を起して顔でも洗ってこようとベッドから降りようとするが、

「あー……ん？ ああヤミかあ」

そういえば昨日はヤミと一緒に寝たんだった。袖を掴まれているので起き上がることが出来ない。まあ目覚ましは掛けたが、特に早く起きてしなればいけないことは無いので、もうちょつとこうしていてもいいんだけど。

今だ起きる気配の無い少女の髪を何気なく撫でる。

金色の闇。ある研究所に作られた少女。オレが捨てた、オレを憎んでいるはずの少女。しかし今はこうして一緒に家に住んで一緒にベツトに横になっている。

オレの驕りを含んでも、きっとヤミは好意を持ってくれているんだろう。出なければこうして一緒にいるはずがない。

でも、ヤミはオレが捨てたことをどう思っているんだろう。きっと許せないはずだ。あの広い宇宙の中でたった一人残されてしまう孤独の恐怖。それをオレはこんな小さな少女に押し付けた。

そりゃあヤミは強い。一人で生きていくくらいの知識と力は教えたつもりだ。でもその強さは、孤独に耐えるには足りない。そんな強さは誰だって持ってない。きっと人間は弱いから。

そのことをオレは、ずっとヤミに聞けないでいる。知ることが怖くて逃げていた。

「……ん」

「起きた？ おはよ」

髪を梳くように撫でているとヤミが起きた。のそりと重たく体を起し、猫のように目を擦っている。

「ヤミ、何か食べたいものある？」

「……なんですか？」

「朝ごはんに作ってあげる」

「それでは、甘い玉子焼きを」

「ふわふわのやつね。よし、じゃあまず歯を磨かなきゃな。今日はヤミの歯も磨いてあげよう」

「は？」

起きぬけでまだボーツとしているヤミの手を取りお姫様抱っこをする。子猫のように軽いヤミの体を持ち上げるのは容易かった。

腕の中でこちらを見上げるヤミの動揺を無視して、あっという間に洗面所へと移動する。

「一体これはどういうっ」

洗面台の前にヤミを立たせて、何かを言う前にコップに水を入れうがいさせる。

「何を考えっ」

うがいが終わるとすかさず歯ブラシをヤミの口へと放り込んだ。昔まだヤミが何も知らなかった頃は、こうしてオレが歯を磨いてあげたり顔を洗ってあげたり着替えをさせてあげたりしたものだ。慣れた手つきでヤミの歯を磨く。

「うう……あー……」

何か言おうとしているが、歯ブラシを突っ込まれて左右前後上下に動かされているのでまともな言葉にならない。

すっかり抵抗する気も失せたのか、ヤミはこちらのなすがままになっている。

ヤミは歯並びがキレイなので磨くのも簡単だし早いし楽しい。ついでに顔も洗ってあげてから今度は手を繋いでリビングへ。

「あら、今日は随分仲良しのね」

「ドクターミカド。これは一体なんですか？」

「じゃあオレ朝食作ってくるから。ヤミと御門は座ってていいよ」

「……ふふつ、なるほどね。とりあえずああ言ってるのだからヤミちゃんも座りましょ」

何らかを察したらしい御門は放っておいてオレは玉子焼き作りへと入る。全国の奥様方が毎朝お弁当のためにせっせと作っている玉子焼き。一見簡単そうに思えるがそれは勘違い。

たまご料理とは、料理の初歩にして、秘奥なのだ。

熱加減、フライパンの傾き具合、菜ばし捌き。その全てが高いレベルで熟達してないと、たまご本来の美味しさを殺してしまうことになる。

ちよっと鼻の奥がむずむずするなっ!? なんて思っているうちに炭の塊になってしまうことなんてしょっちゅうである。そうでなくて

も、たまごに火が通り過ぎ硬くなってしまふ。

つまり、たまご料理とは、速さとの戦いなのだ。

それは同時に火加減との睨み合いを意味している。火を完璧に操れらなくて美味しい料理などではしない。火を、自然の理を解し、掌握してこそ初めて人は料理人としての一步を踏み出せるのではないだろうか。

これでたまご料理という行為の難しさと奥深さがわかって頂けただろう。では早速調理開始だ。

まず冷蔵庫からたまごを取り出す。この料理の始まる瞬間が一番油断している時なので気をつけて欲しい。たまごをツルツと落として割ってしまった経験が誰でもあろう。これは鳥さん達が頑張って生んでくれている大切なたまごなのだ。そんなことで無碍にはしたくない。

細心の注意と敬意を払いながらたまごを一つずつ取り出し片手で割ってボールへと開けていく。片手で割るのは、そうしたほうがカッコいいと思うからだ。特に意味は無い。殻が入ってしまったときは”カルシウムになる”と自分を誤魔化すのがポイントだろう。

たまごを無事ボールに開けられたら、砂糖を大さじで適当に放り込む。

「調味料は一粒で味が変わるっ」なんて言う料理評論家もいるが、正直ちょっと鼻で笑ってしまう。

そんなことは別として、さあフライパンに火を入れよう。こっからは速いぞ。

フライパン温まる。

たまご入れる。
箸でかき混ぜる。
固まる。
寄せる。
焼きあがる。
適当に切り分ける。
盛り付ける。
完成。

この工程を1分以内でやらなければならない。しかしそれを成し遂げた時、まさしく金色と称するに値する玉子焼きが君の前にはあるだろう。たった一度の挫折であきらめないで欲しい。料理は技術、食事は愛情。その言葉を忘れなければきっと成功が待っているはずだ。

「よし出来た。あとサラダとハムとかでいいよね」

「玉子焼き作りすぎじゃない？」

「私がかまいませんが」

テーブルにはサラダとハムが盛られたお皿が3枚。たまご8個が使われた玉子焼きが大皿に乗って真ん中に陣取っている。

オレはご飯にしようと言ったが玉子焼きを作りすぎたことを責められると、主食にパンを選ばざるを得なかった。

「「いただきます」」

3人で手を合わせて。トースターで焼かれたパンを齧りながら、箸で玉子焼きを掴んで口に運ぶ。

多少ふざけた割りにはよく出来上がっており、サクサクとしたパンとよく合っていた。

厚切りにして火を通しただけのハムも、塩気が朝にちょうどいい。御門が入れてくれた紅茶を挟みつつ、山と積まれた玉子焼きは瞬間にお腹の中へと消えていった。

.....

「ふいー食べた食べた」

「ご馳走様」

「美味しかったです」

紅茶に少々のお砂糖とレモンを絞って食後の一服。朝から食べ過ぎてしまった胃を休めるためにソファに寝転がる。

ヤミも玉子焼きに満足してくれたらしい。一緒にソファで横になっていた。

片付けは御門がやってくれるらしく、カチャカチャと食器の鳴る音を聞きながら心地よい虚脱感に体を預けていた。

「あー今から何しようかなあ」

「.....」

時間はまだ10時前。二度寝するのはちょっとあれだし、かといって雨だからどこかへ出掛けるのも億劫だ。

ここは余暇の定番読書でも……という気分でもない。読みかけの本はあるが寝る前にちょこっとずつ読む用の本だし。

そうだ、本でも買ってくれば。だから雨だって。お金も無いし。そうだ通販で買えば外に出なくて良い！でもお金も無いし。届くの

時間がかかるし。

「ヤミ何かやりたいことある？」

「特には」

まだ寝転がっていたいのかな。どうしたものか……。

「あら、二人とも暇そうね」

そこへ片付けが終わった御門が手を拭きながらリビングに来る。

「雨だからねえ」

「それなら、ちょっと早いけど定期健診でもする？」

「いいね！それ」

検診の予定は来週だったけど、持て余した暇を消化するには丁度良い。検診を受けたあとは体も軽いしすっきりするしね。

「ヤミちゃんもトランス能力のこと見てあげる。行きましょ」

ソファから重たい体を持ち上げて御門の診療室へと移動する。いつも通りに診察台に横になり右袖を巻くって腕を出す。

御門は慣れた手つきで赤い液体の入って点滴を取り出すと、これまた慣れた手つきでオレの右腕に突き刺した。

チクツとした痛みはあるものの、もう何百回とされていることなので痛がりはない。

すぐにジワーツと暖かいような温いような感覚が右腕から流れてい

く。それがゆつくりと流れ心臓へと達した時、ドクンと大きく動いた。

「う……あ」

ドクドクと心臓から大量の血が流れる。脈が打つたびに体が跳ねた。

「ん……ふう」

数十分ほどで点滴の半分を飲み干す。そんなオレの体にはある異変が起きていた。

先ほど寝た診察台が幾分狭い。服がきつくなっているし目線がさつきと違う。

そう、体が少し大きくなっているのだ。

歳を取った、といった表現のほうが適当なのかもしれない。歳が戻った？ いやまあどっちだっていい。

つまりは元の体型に戻ったのだ。

オレの体は銀河統一戦の時の激戦で縮んでしまっている。身長なんか多分167cmくらいになってしまって、あとちよつと若返っている。そして何より身体能力がガクッと落ちてしまっているのだ。

その療養のために地球に来ていて、こうして点滴をうって貰うとほんの少しの間だけ体型や体調が元に戻る。これが続いていると徐々に戻っている時間が長くなり、最終的には万全の状態に治るらしい。

「くあー……この1本のために生きてんなあ」

点滴が全部終るにはまだ少々時間がかかる為もうちよつと診察台で

横になる。

この体が元に戻っている時がたまらなく気持ち良いのだが、やりすぎると調子がおかしくなるらしいので月に1〜2回のみとなっている。

「それじゃヤミちゃんはこっちね」

「はい」

その内に今度はヤミの診察をする為、二人が奥の部屋に入っていく。奥の部屋は手術部屋になっていて、治療カプセルなども置いてある。ヤミの検診はかなり特殊なので、そのカプセルを用いてしか出来ない。

点滴が無くなる頃検診も終るだろう。お昼まではまだ時間があるし、診察台の上では出来ることは少ない。

オレはゆっくりと瞼を閉じた。

・・・。

・・・。

起きた時、時刻はもう二十二時を過ぎていた。昼飯と夕飯両方を食べそびれたらしい。お腹と背中がくっ付きそうな空腹感があった。人がいる気配がしないから御門とヤミはもう検診も終って自分の部屋にでもいるんだろう。そりゃそうだ、もう10時間くらい経っている。

「ふう」

ため息をひとつついてから診察台を降りる。とっくに体が縮んでい

て、床まで足が届くのに遠く感じる。立ち上がってみると少々立ちくらみがした。体が戻るにはかなり体力を使うことになる。検診の後はいつもこうして長い時間寝てしまおうし、起きた後は虚脱感を伴う。まだまだ元通りになるには時間が掛かりそうだ。

まだ重たい頭を振りながら、風呂へ行きシャワーを浴びる。すつきりするとリビングへ行く。何か食べ物と思い探すとバナナがあったのでそれを頬張った。

微かにカレーの匂いがするし、台所に大鍋があるので、御門たちの夕飯はカレーだったらしい。温めて食べようかとも思ったが、この時間につり食べるのはちょっと宜しくない。

うん、我慢しよう。

ちよつと寝て起ければ朝。そこで朝食を沢山食べればいいじゃないか。そうしよう。

風呂上りの茹った体が冷えてきてちようど眠気も出てきた。髪を拭きながら階段を昇り自分の部屋へ入る。

雨が降ったせいか部屋が幾分寒く感じる。もう夏も終わりか。そろそろ衣替えもしくちゃいけない。秋服・冬服も買いに行こうかな。ヤミの服も買ってあげよう。御門にも日ごろのお礼に何か上げようかな……。

来週の土日が楽しみだ。でもそのためには平日の学校を頑張らなくては。

「ん?」

さて寝ようかと心なしかこんもりしている布団を持ち上げると、朝のようにヤミがそこにいた。やっぱクロネコちゃんの姿は見当たらない。そういえば忘れてい

た。探すのはまた今度でいいか。それに、今日もまたヤミがいる。

「よいしょ」

「……」

いつものようにバトルドレスのまま寝ているヤミの横に入る。目が合ったのでまだ起きていたらしい。もしかするとオレが来るのを待っていたのかもしれない。自意識過剰かもだけど。

「おやすみ」

向かい合ったヤミにそう呟く。別に返ってくる言葉を期待したわけじゃない。一緒に寝るのだからおやすみを言うのは当たり前だ。挨拶は教えたが、ヤミはおやすみを言おうとしない。きっと、予測でしかないが、ヤミは夜が怖いんだと思う。本人に聞いたことがないので解らないが。

だからこうして人と一緒に眠ろうとしたがるんだ。そして、そうさせたのはオレだ。つまりこれは義務。でも、それだけって訳でもない。オレだって、誰だって、一人の夜は怖いんだ。

「……………おやすみなさい」

だから、返ってきた言葉がこんなにも嬉しいんだって、オレはそう思うんだ。

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

少女は本を読む。 ”嫉妬” という感情を言葉で知るが、意味までは解らなかった。

少女は本を読む。 ”愛情” とはとても貴いものらしい。しかし人は時として ”愛情” が元で殺しあう。

少女は本を読む。 ”信じる” ことは ”裏切らない” ことなのか。

”許す” ことは ”愛する” ことなのか ”愛される” ことは ”許せる” ことなのか。

少女は、その感情の答えを知らない。

ひょういつ！

「あなたのことが、好きです」

告白をされた。違う、されている。

ありえない、どこで間違えた。訳がわからない。

「あなたのことが、好きです！！」

こんなことあっていい筈がないんだ。

オレが西連寺に告白されるなんて……。

・・・。

ことの始まり、そして違和感を感じたのは朝からだった。

いつも通りちよつと遅めに登校し、校門のところで会ったリトとララと一緒に教室へと向う。顔見知り達に挨拶をしながら教室前の廊下へ着くと、

「あ！おはよー春菜！」

「はい！おはよーございます！」

前方から西連寺が来た。ララが気付いて手を振りながら挨拶をする。遅れてリトとオレも挨拶をした。

が、何か様子がおかしい。リトも小首をかしげていた。

西連寺ってこんな明るかった？どちらかと言えば引っ込み思案でおとなしめの子だと思ってたけど……何だか、ソフトボール部キャプテン勉強はちよっぱり苦手だけど体育は得意みたいナ、ちよっと古い少女漫画の主人公って感じ。まあ女の子だしそんな日もあるのかな。

「お三方もお元気そうでなによりです！」

「あはは、春菜もなんか元気だねー」

（なあ、リト）

（ああ……なーんか春菜ちゃんいつもと感じ違うよなあ）

「ゆーりっち！おはよう！」

「相変わらずイケメンですなあ！」

「おうふ……里紗と未央か。おはようございます。乗っかるのやめて」

そこへ、登校してきた里紗と未央がやってきた。未央が背中に乗っかり、里紗はオレの腕に抱きつく。彼女達なりの挨拶の仕方だ。初めは恥ずかしかったりびっくりしたりしていたが、今では朝の恒例行事となっている。

「ふんふん、あれれ？有里っちシャンプー替えた？」

「替えたよ、桃の香りシャンプーってのが売ってて何となく買って

みたんだ。っていうか髪を嗅がないで」

「ゆりっちは興味が出たものすぐ買っちゃうんだねえ。どう？私も買わない？」

「そういうのやめなさいって、後なんか色々当たってるから。ここ廊下だし」

「ううむ……脈無しって感じでもないけどなあ。あ、春菜だ！おはよーっす、何だか機嫌いいみたいじゃーん」

西連寺を見つけた二人はオレから離れていく。そして挨拶がてらに西連寺に抱きついた。体にはない、胸に。何というかもう、揉んでいる。多分。

腕と背中から消えた温もりをどことなく空しく感じながらそのいやいやを見ていた。リトは直視できるはずも無く真っ赤な顔をしながら窓の方を見ている。オレでさえこの三人のいやいや振りをしているのは恥ずかしいものがある。人目を憚らないので視線が集まってしまうせいもあるが。ホント姦しいとはこのことだ。

恥ずかしいのは当事者の西連寺も同じらしく、いつも体を触られるのを嫌がっていた。本気でというわけではないので、里紗と未央はより面白がることになるんだけど……。

今日はやっぱり様子が違った。

「きゃはは！く、くすぐったいですよお！よーし、それならこっちも！」

「え！？おわわっ！」

抱きつかれていた西連寺が里紗を振りほどいて今度は未央に抱きついていたのだ。まさかそんなことをしてくるとは思ってもいなかった未央は、驚きの声を上げている。

「ちょっとちよつとどーしたの！？春菜がこんなことするなんて」「うひゃはは、くすぐったいよ春菜ー！よーしやられたらやり返す！」

「なになに、私も混ぜてよー」

しかしびっくりしたのは一瞬。すかさず抱きつき返すと里紗も混じってくんずほぐれずになっている。制服が捲れてしまつて白い肌と何か下着的なものがチラ見していた。凝視するわけにはいかずさすがにオレも視線を逸らす。幸い廊下には男子生徒の姿は無く、ちらほら他の生徒は居るものの、これだけ騒いでいるのに見てくる人はそんなになかった。

しかし見ている生徒がいないわけではない。ましてや彼女がこんな騒ぎを見逃すはずが無い。

「ちよつとあなた達！こんな朝からみつともない真似やめなさい！」

正義の使者、古手川唯だ。

あの無人島での一件以来何だか疎遠になつてしまっている。今も一瞬目が合ったがすぐに逸らされてしまった。隠し事というのが正義を愛する古手川にとって許せないことなのだろう。

しかしどう聞いていいか解らず間合いを計っているといった感じ。こちらとしてもどう話したらいいか解らないし、できれば話さずにしておきたい。だからオレも避けているせいで、無人島から帰ってきてからまだ一度も会話をしていなかった。

放課後の日誌書きや教室の整理などを一緒にやっていた日々が懐か

しい。ああ、戻れないあの日々。」

そんな古手川が、廊下で行われる不埒な行為を無視するはずもなく、わざわざ教室から出てきて乳繰り合っている3人を指差し注意する。腰に手をあて威風堂々と胸を張るその姿はまさに風紀委員そのもの。だがそのポーズがやっぱり様子のおかしい西連寺の目に止まってしまう。

「それじゃあご一緒にどーですかー？」

「は？ キヤ——！！！」

まるで里紗達にするように古手川の体に抱きつき豪快に胸を揉みしだく。まさかそんなことを、それも西連寺がするとは思っていなかった古手川は、身を振りながら悲鳴を上げる。さっきの三人のいやいやより、真剣に身を振って嫌がっている分扇情的。

「何をするの！ ちょっと、やめなさい！」

「ふえー大きいですねー。それにとっても柔らかいです！」

「絶対おかしいよなあ」

「うぐ……鼻血が」

ぐにぐにと形を変える古手川の胸をどうしても見てしまう。リトなんかはもうガンガンに鼻血を流していた。これはもうどう考えてもおかしい。何か精神的なものかと思ったが、にしては変わり過ぎている。

以前ララがかかった”コロット病”かもしれないが、あれは宇宙人

しかかからない。オレには判断はつかないなあ、もうちょっと様子を見ておこう。

鼻血を出すリトにティッシュを渡しながら、ため息をついた。

・・・・・

・・・。

そして放課後。

昼休みに御門に何か解らないか聞いてみようと思保健室へ行ったが居なかった。朝一緒に食べたが、出るのはオレの方が早かった。多分二度寝でもしているんだろう。

何の対抗策もなかったので、そのまま時間は過ぎ放課後になってしまったわけだ。

「はー、何だかなあ」

一人屋上で愚痴る。西連寺がおかしいので、リトも何だかそわそわしている。里紗と未央、そしてララも、授業中にキヨロキヨロしたりとんちんかんなことばかり言う西連寺に戸惑っていた。

休み時間の度に一つの席に集まって毎日わいわい喋っていたのに今日はそれがない。オレ達の輪の中で西連寺の存在が大きかったことがわかる。けして自分から何かを提案したりするような子ではなかったが、オレ達には無くてはならない存在なんだ。

「もういつそ本人に聞いてみるか」

そんなのが明日まで、それ以降も続いたら嬉しくない。明るい西連寺も悪くは無いけど、そんな急激な変化にオレ達がついていけない。それに躁鬱とかならケアも必要になる。

ま、今日のところは帰るか、と踵を返した時。屋上の扉が重々しく開かれ、渦中の少女が現れた。

西連寺春菜。

オレと同じクラス委員にして、我が親友結城リトの想い人。才色兼備にして大和撫子。スレンダーながらも女性としての魅力を抱える彼女は隠れたファンも多い。毎日のように教室の花に水をあげるその姿はさしずめヘレン・ケラーのような慈愛に満ちていた。

そんな彼女が、屋上へ来て、オレの目の前に立っている。

いつもは憂いを帯びたり控えめに微笑むだけの彼女が、今は満面の笑みを浮かべている。まるで貰ったプレゼントの箱を開けている少女のような顔だ。

無言で目の前までやってきた少女を、無言のまま待つ。

妙な緊張感と嫌な感覚を伴って、その言葉が放たれた。

「あなたのことが、好きです」

驚愕。

はあ！？　ななななな、なんで！？　誰が？　誰を？　オレを！？

おかしいおかしいおかしいよ。そんなのおかしいよ。だってそんな素振りなかったじゃん。ちょっと一緒にクラス委員やった程度じゃん。

そりゃ放課後一緒に残ったりなんかしたら芽生える恋もあるかもしれないけど。でもオレと西連寺はないよ！だって放課後残ってた時だって雑談内容はリトとかララとか里紗・未央の話だったじゃん！オレは話題に上がらなかったもん。

「あなたのことが、好きです！！」

うるさいよ、聞こえてるよ！考えてるんだから静かにしてよ！

やっぱりおかしい。普段の様子を見ていたオレからすれば、西連寺はリトに好意が少なからずあった筈。それも友達として、を何歩か超えた感じのやつ。オレも猿山仲良くしてもらっているが、あくまで友達としてだ。

どうする！？とりあえず断るしかない。もし受け入れたらそれはリトへの裏切りだ。せつかくできた親友をそんな形で失いたくない。でもどうやって？

「オレには好きな人がいるんだ……」

何の主人公だよ！小説の読みすぎってまた笑われちゃうよ。しかも特定の好きな人なんて居ないしなあ。不特定ならいるって？そんなことはどうでもいい話。今は西連寺の話。

「西連寺の気持ちは嬉しいけど、今オレそういうこと真剣に考えらんねーから。でもホント、そうやって告白してくれたってことスゲー嬉しいって思うし……そういう気持ち大事にしたいと思うし……」

何かちょっとリアル！あとすごい思春期入ってる！この先ぎくしやくすること受けあい。より多くの友人を失うことになります。

「なーんちゃって！」

……は？

「一度告白ってのしてみたかったです。いやーどきどきしちゃいましたー！」

なにこれ。

「どういう、こと？」

「えへへ、実は私幽霊のお静なんです」

幽霊のお静なんです……。幽霊の……お静……なんです……。幽霊……静……。

やばいやばいやばい。混乱しすぎで心がバラバラになる。やばい。いないいないいない。幽霊なんているはずない。こわいこわいこわい。

どういうことだ。憑依したってこと？誰が。お静が？お静って何さ。幽霊？いないいない。そんなのいるはず無いって。おかしいよ、こんなのおかしいよ。

「以前みなさんが旧校舎に来た時にワイワイしていたのが羨ましくて、ついに今日旧校舎を飛び出してしまったんです」

「……」

「ところが出てすぐにワンちゃんに追いかけて、逃げている内にこの春菜さんにぶつかり憑依してしまった次第で……。はじめは私も戸惑っていたのですが、久しぶりの肉体に外の世界で興奮してしまっ

「待って、ホントちょっと待って」

携帯を取り出して電話をかける。

「んー……もしもし？」

「御門、助けて」

「あら、どうしたの？」

「何でもします、助けてください」

「よく解らないけど……とりあえずすぐ行くわ。5分後に保健室で」

困った時の御門さん。すぐに察してくれたらしく彼女の城である保健室で合流となった。心が壊れないうちに、憑依？されたらしい西連寺を連れて保健室へと向う。その道中でリト達にも電話をしておいた。もうリトに丸投げしてしまおう。

幽霊だなんだったのはオレの守備範囲じゃない。怖いとかじゃなくて、どちらかといえばそういうのが得意なリトに任せるのが筋ってもんじゃないか。

その旨を震える指でメールに綴り、保健室へと到着すると、すでに御門がスタンバイしていた。

彼女は家と保健室を転移装置にて繋いでおり、出勤時間0、2秒という非常識を可能としている。その分だけ寝られるから快適、と言うが実際は昼まで寝ていたりとサボってばかりだ。普通の学校なら即クビにされるのだろうが、あの変態校長がいるこの学校ではその心配もないらしい。

「メールは読んだわ。ちょっと専門外だけど、いちおう調べてみるわね」

「頼むね」

「それじゃ、西連寺さん……に憑依している幽霊さん、入って」

「しつれいしまーす」

事情をメールで説明しておいた御門が早速お静ちゃんを保健室へと招き入れる。幽霊、精神的なものに関しての研究はまだ宇宙科学でもそんなに進んでいないので、詳しいことは解らないかも知れない。

「有里！」

「ゆりっち！」

そこへメールを見たリトとララ、里紗未央達が合流する。みんなが集まったので詳細を説明。

「はあ？」

「幽霊？」

「旧校舎で会ったの、本当の幽霊さんだったんだ」

「それが春菜に入っちゃってるんだー、幽霊ってすごいねー」

オレがすでに半信半疑というか信じていないことを説明したので、リト達も信じきれない様子。でも今日の西連寺の奇行を鑑みれば何かしらの理由があるのは間違いないわけで、それが幽霊のせい、と言われればある程度の説得力もあるらしい。

「入っていいわよ」

ちょうど御門の診察も終わったのでみんなで保健室へ入る。

「簡単に言って、やっぱりよく解らないわ」

「そっかー」

「精神的というか魂のことはまだまだ、ね」

「そういえばさ、そのお静ちゃんは どうして西連寺ちゃんに乗り移ったんだ？」

「ええその、犬に驚いてしまってそれでたまたまいらっしゃった春菜さんに……」

「犬が苦手なんだねえ」

「乗り移ったのは解ったけど、出ることは出来ないの？」

「……」

「どうも出来ないらしいわ」

「あらま。それってまずいんじゃないの？」

「そうね、唯一解ったことなのだけど、この波長パターンが特殊ということね。そして、西連寺さんの意識が薄弱になってきているわ」

「機械を見せられてもオレには解らないけど、つまりこのまま行けば」

「西連寺さんの意識が消えてしまう可能性が高いわ……」

「や、やばいじゃねーかー!!」

「そーだよ! なんとかしなきゃ!」

「まずはお静ちゃんに……あれ？」

「お静ちゃんは？」

事態の重大さを確認したオレ達。保健室から西連寺 with お静がいなくなっていることに気付いた。

話を聞いていて迷惑を掛けていたことを理解してしまったのだろう、怖くなって逃げてしまったらしい。

このままでは西連寺消えてしまう。それにこの時代のことには詳しくないお静ちゃんがか事故に巻き込まれないとも限らない。解決策は何にも無いがとりあえずここに居てもらわないと。

「俺探してくる!」

「私も行くよ!」

すぐさま保健室を飛び出るリトとラウ。

「オレも校内を探してきて見るよ。里紗と未央はここで連絡係ね」

「了解っ」

「パパッと見つけて来てね！春菜のためにも、お静ちゃんのためにも」

あいよと手を振りつつ廊下に出る。リト達は外へ探しに行った様だ。とりあえず教室の中を覗きながら1階の廊下を走る。ちらほら残っている生徒がいるけど、どれも西連寺ではなかった。このまま2階、3階と探していても埒があかない。というかめんどくさい。

そうだ推理すればいいんだ。

昨日読んだ推理小説みたいにやればいいだけのことだ。よし、考える。まずお静ちゃんは御門の話で自分が迷惑を掛けていると思い、怖くなって飛び出した。当然オレ達が追いかけてくると考えるだろうから、どこかへ隠れるはずだ。

となるとどこへ？

学校の外？これは考えにくい。人が新しい知らないものに出会った時には少なからず恐怖を覚えるものだ。ならばお静ちゃんの時代と比べガラリと風変わりしてしまったこの町へ隠れるということはないだろう。それに今日一日学校に居たのだから、ある程度構造は解った筈だ。

うん、お静ちゃんは校内にいるな。

なら校内のどこだ。

誰かに追われているという精神状況ならば、自ずと人の居ない方へと進みたがる。しかしここは放課後の学校。運動場やテニス場には部活動に勤しむ生徒が沢山いるし、教室にだって生徒は残っている。開き教室には必ず鍵が掛けられているため入ることはできないだろう。

つまり、放課後に他の生徒がいなくて、かつ鍵が開いており、お静ちゃんでも見覚えのあるような部屋と言えば……。

「見切った！」

全ての糸が繋がった。目標を決めたオレはすぐさま逆方向へと走り出す。そこは1階の南側校舎、隅っこのほうに位置している教室。

「フハハハハ！ここだあ！」

確信と共に扉を開く。

そこは知識の泉、物語の寝室、数多の文学少女の安らぎの場、図書室だ！

本ならお静ちゃんの時代にもあったはずだし、図書室は落ち着いた内装、つまり古風な感じになっている。いくつもある本棚は隠れるにはうってつけだし、活字離れの激しい昨今では放課後の利用者は少ない。

完璧な推理だ。

「あれ？おかしいな」

でもお静ちゃんは居なかった。

てっきり閑古鳥が群れを成して鳴いているはずの図書室には他の生徒が三人居たからだ。そしてそれは、およそこの部屋には似つかわしくない少女。

「あ、あら。有里様ではありませんか」

「沙姫か。珍しいねこんなところにいるなんて」

「フンッ、沙姫様がどこにしようと貴様に関係無いだろう」

「雪ヶ岡君、こんにちは」

天条院沙姫、そしてお供の凜。心の癒し、綾の三人だ。

綾は時々図書室でも見かけるが、他の二人は見たことが無い。多分そんなに本を読まないのだろう、もしくは図書室で借りるより買ってしまうのかもしれない。偏見だけど。

「三人は何してるの？」

「いえ、別に。偶にはこういう場所で優雅に過ごしたい時もありますわ」

「そういうことだ。解ったら貴様はとっと立ち去るが良い」

「だから凜、そういうのやめようって言ったでしょ」

「いいよ綾、気にして無いから。そうだ、うちのクラス委員長の西連寺見なかった？探してるんだけど」

「西連寺さん？図書室には来てないよ」

「そっかー、はずれたなあ……ところで、何で沙姫はオレの方を頑なに見ないの？」

図書室に入ってきてから、凜は一度こちらを睨み、綾は大きなレンズの眼鏡を向けてくれているが、沙姫とはまだ目が合ってすらいなかった。これは今日に限ったことではなく、ヤミとララを戦わせたあの一件以来廊下などで会ってもオレの顔を見ようとしなかったのだ。多分罪の意識とか何だろうけど……。

「こそ、そんなことはありませんわ」

「じゃあこっち見なよ」

「わたくし、こうして首を曲げているのが好きですよ」

そのくせ変に意地っ張りだから始末におえない。もう解決したことだしヤミもララも、勿論オレもなんとも思っていない。それをこんなに引っ張られると……。ダメだ、こういう宙ぶらりんな感じ嫌い。

「沙姫、オレを見る」

何故かムツときたオレは沙姫の前まで行き、その頭を両手でガシツと掴む。そして半ば無理矢理にこちらを向かせた。

そんなこと親にもされたことがないであろう沙姫は、ただでさえ大きい瞳をさらに広げて、驚いた表情でこちらを見る。

「オレもララもヤミも、もうあの件に関しては怒っていない。が、そういう態度を取られると、ホントに怒っちゃうぞ。そしてオレは

沙姫がどう思おうが、挨拶をしたり一緒に話すのをやめたりしないからな。ただでさえ友達が少ないんだ」

「は、はい」

「うん、よし。やっぱり沙姫は自分勝手に尊大な方が可愛いし似合ってるよ」

「はい……」

「雪ヶ丘有里！黙ってみていれば沙姫様になんて狼藉を！」

「なんだなんだ、凜もして欲しいのか、よし。凜は抱きしめてしんぜよう」

「何を言って……くっ！抱きつくな！」

「いいなあ」

「よしよし、仲間はずれは良くないな、綾も抱っこだ！」

「ひあ。言っておいてなんだけど結構恥ずかしい……」

「うん、オレも勢いならイケるかなと思ったけど、結構恥ずかしい。ごめんなさうばあ」

「そこにいろ雪ヶ丘有里。今樂にしてやる」

「木刀はいいけど……鳩尾は勘弁してくれ、ないかな。呼吸がおかしくなるだろ、ごほっ」

「気にするな、次からは全てその顔に打ち込んでくれる」

「ごめんなさい、調子にのりましたごめんなさい。反省しています」

「貴様の顔を見てみると、イライラするんだ！」

振り下ろされる木刀をかううじで避ける。さっきのパニックがあった精神状態が良くなかったとはいえオレが悪い。さすがに抱きついたのはやりすぎた。でもシュツとスマートで引き締まって見える凛の体が、思ったよりも女性らしい柔らかさがあったのが驚きだった。ってオレはエロ親父か。

「それじゃ！また明日！」

本棚すら倒しそうな勢いで木刀を振り回す凛から逃げるようにして図書室を後にする。二人にはきつと綾のほうからフォローがあるはずだ。さすが癒しの天使綾さん。

で、オレは図書室に何しに行ったんだっけ？……そうだ西連寺を探しに来たんだった。まあ真似ごとの推理も外れちゃったし、結構時間が経ってるからリト達のほうで見つけたかもしれない。もしかしたら解決してるかも。

一旦保健室へ戻る。一応見回りをしながら、自動販売機でコーヒーを買う。ちょうどプルタブを開けた時にメールが届き、その液晶画面にてお静ちゃんが西連寺から離れられたことを知った。

.....。

・・・。

「へー、同じように犬に驚いたら出られたんだ」

「そうなんですよー、私生前から犬だけは苦手で……」

「そうなんだー、オレも幽霊だけは苦手でねえ」

「あはははは」

「あはははは」

「何故お静ちゃんが家にいる」

「だっていつまでも旧校舎に一人ぼっちじゃかわいそうでしょ？」

「そりゃそうだけど……やっぱり、何ていうかその……苦手なんだよなあ」

「そんなこと言わないでくださいよー！」

「わかったごめんなさいごめんなさい！だからあんまり近寄らないで！もうちょっと慣れる時間をください！」

「ごめんねお静ちゃん、この人臆病者だから」

「いえ、私こそ迷惑をかけたのにこんなによくしてもらって……これからよろしくお願いしますね有里さん！」

こうして、奇妙な同居人が我が家に増えたのだった。

熱風と枕

今日は久しぶりにリト家にお泊り。別に何か用事があるとかじゃなくて、ただ何となく。しいて上げるなら美柑の料理が食べたくなっただかだろうか。

「じゃあ今日泊まりに行くから」

「おう」

とリトも二つ返事で了承。下手すると了承も得ずに泊まることもある。もはや準同居人と言ってもいいかもしれない。結城家から学校に通うこともあるし、それが3日続くななんてのもザラだ。最近はどうでもなくなったけど。

放課後になり、そのままリトとララと一緒に下校する。御門には「今日リト家泊まり」とメールしておいた。すぐに返信が返ってきて、本文には一言「ホモ」とだけ書かれている。これもまた日常茶飯事なので特に気にしない。うん、気にしない。

一度「美柑のご飯を食べに行くんだからホモとかじゃねえよ!」と反論してみたところ、返信が「ロリコン」と、四文字になっただけだった。結構心にダメージ。

「あ、コンビニ寄っていい?」

「いいけど金無いんだろ?」

「まーね、でも美柑にお土産買うくらいは持ってるよ」

「そういうところマメだよな。時々だけど」

夕飯をご馳走になるのだから当然。というのもあるし、そうすると「ふーん、別にいらなかったけど」なんて言いながら喜ぶ美柑の顔を見ることが出来るからだ。そうすることで夕飯のメニューにお新香が一品足されたりサラダのドレッシングが既製品でなく美柑特製ブレンドになったりする。

「ねーねーゆりっち、これ新製品だって！」

「へー、プリン？なにこれすごい美味そう」

ララが持ってきた新製品のプリンは、生クリーム・プリン・カラメル
の三層になっているとてもシンプルなプリン。パッケージにも、
牛乳屋さんのプリンと書かれていて他の余計なものは一切書かれて
いない。なんとも遊びの無い職人気質なプリンだ。大抵こういうも
のの方が美味しいんだ。

「よし、これにしよう」

ちよっぴり普通のプリンより割高なそれを人数分買ってから、立ち
読みしているリトに声を掛けてコンビニを出る。人数分買ったのは、
美柑が一人だけプリンを食べることを気にしなためだ。あまりに
美味しそうで自分も食べたくなったというのもある。

そのおかげで財布の中身はからっからになってしまった。御門にお
小遣い前借りしなくちゃ来週の焼きそばパン買えないよ。

そのお小遣いと言うのはオレが賞金稼ぎで稼いだお金を地球のお金
に換金したものだ。管理を一括して御門がしているのでオレは手が
出せない。月に5千円を貰い、その都度必要な時だけ申請すると追
加で貰うことが出来る。

高校生らしいと言えば高校生らしいが、自分が稼いだ金のなのにと疑問に思うことが無いことは無い。が、実際オレが管理することになると……多分1ヶ月で無くなる。最高級手作り焼きそばパンとか作ってしまうに決まってる。すごいバカみたいに高い野菜とか肉とかパンとか集めて。だってほら、考えただけで食べたくなってきたもん。

「焼きそばパン食いたくなってきた!」

「だから金ねーんだろ」

「そうだったーお金が無かったんだった」

「そういえば最近ゆりっちが焼きそばパン食べてるところあんまり見ないね」

「金欠って恐ろしいからね」

そんなことを話している内に結城家へと到着した。相変わらず三階建ての建物並みの植物、セリーヌが聳え立っていてよく目立つ。ラの機械によって特定の人間にしか見ることは出来ないから騒ぎになったりはしない。これが一般人の目にも入ったら、一体何人の取材の人や野次馬が駆けつけることだろうか。考えただけでも恐ろしい。

「ただいまー」

「ただいまー!」

「たらいまー」

「おかえり。有里さんはいらっしやい」

「なんだよー、もう同居人みたいなものだろー」

「ここで毎日寝泊りするなら、ただいまって言ってあげる」

「辛辣な物言いですなあ」

「はいはい面白い。今日は泊まりなの？」

「うん、久しぶりだしね。今日の夕飯は何？」

「まだ決めてないから後で買い物でも行こうと思ってたんだけど…
…思ってたんだけど」

「そんな暇まなくても一緒に行くよ」

「じゃあ今日は沢山買いこんじゃおっかな」

「ひゅー！さすが美柑さん！すぐ行くならちやっちゃと着替えてくるよ」

リトの部屋に行き制服を脱いでハンガーに掛ける。同じようにズボンも掛けておいてからクローゼットとタンスを開いて考える。今日はちよっと寒いからなあ、2枚くらい着るか。色はどうしよう、美柑の服が白とピンクがメインだったから…あのチェリーブロッサム色に合うのといったら、グレーかな？逆にこっちも赤系で攻めるのもアリかもしれない。

「なあ、リト。どっちがいいかなあ？」

「たかが買い物行くだけだろー？どっちでもいいじゃん。っていうかその持つてるTシャツ俺の！？」

「そりゃオレだって適当な服でいいと思うけど、そういうの着ると美柑が睨むんだよ」

「あー美柑は母さんに影響されて服のセンスあるもんなあ」

「んー、もうわかんないからとりあえずグレーでいくよ」

「俺も付いていこっか？」

「いいよ、ララの相手でもしてなさいな」

「ララの相手、ねえ」

「じゃ、ちょっと行って来るよ」

「気をつけてな、ってその服も俺の！」

結局灰色の長袖1枚に藍色のズボンにした。どちらもリトのものがサイズはピタシ合っている。似合っているかどうかは別として一度鏡を見てみたが、多分変ではないと思う。制服のポケットから一応すっからかんの財布を抜き取ってポケットにねじ込むと部屋を出て一階へと降りる。

すでに玄関には買い物バックを持って準備万端な美柑が。

「ごめん、時間掛かった」

「……68点」

「辛くないか」

「季節的に半そでにして何か一枚羽織ったほうが良かったと思うよ」

「やっぱり最初の案で正解だったか……」

「そんなことより、早くしないとタイムセール間に合わないから行くよ」

「了解です」

こうしてオレ達が向うのはいつものスーパー。普通のこじんまりとしたスーパーだが、17時くらいから行われるタイムセールが半額とか80%OFFとかするお店なので、主婦達の強い味方なのだ。当然結城家の家計を一身に担う美柑がそれを見逃す手は無い。

距離的にそんなに離れていないので、スーパーにはすぐに着いた。すでに駐車場はかなりの車で埋まっている。続々と主婦達が集まっているみたいだ。

「今日は何が安いのか？」

「んー、お魚とたまごかな」

たまご！これがあれば色んな料理ができるじゃないか。魚は何魚か解らないけど、朝食・昼食には欠かせない。

食費は貰っていて、ララや時々ザステインの分まで作るので、全員分にはかなりの量を買わなくてはならない。タイムセールという戦場では、沢山買うにはかなりのスキルが要求されるだろう。

「とりあえず入ろ」

「うん」

ウィーンと自動ドアが開き少し冷房が効きすぎている店内へと入ると同時に美柑の足が速くなった。いつの間にか取った買い物カゴを片手にお店の奥へと急ぐ。歩いている途中で密かに特売シールが張られていた砂糖をカゴに入れるとそれごとオレに手渡した。受け取っている間にも美柑はズンズン進んでいる。

そして到着した魚売り場はやはり激戦区となっていた。主婦達が壁となり山となり商品棚へと殺到している。天井からぶら下げられた看板には鰹の開き一枚49円と書かれている。これが今日の目玉商品らしい。

叫び声や怒声が響き渡るその光景にオレが怯んでいると、

「有里さんはここで待ってて」

と美柑が一声。と同時に歩き出した。

一步、そしてまた一步。さして急ぐ風でもないその歩みは獅子の如き余裕と貫禄を醸し出していた。

静かに人の山へと近付き、接触する！と思った瞬間、美柑の姿が消えた。

屈んだ！？と気付いたのはそのあとすぐだった。小柄を活かしたステップで歴戦の主婦達をかわしあっという間にその姿を視界に捉えることは出来なくなっていた。

オレにできる事はただここで待つことと、後ろの棚に置いてある50円引き吹雪饅頭を砂糖の下に隠してしておく事だけ。

応援も声援も必要ない。美柑は無事に帰還してくれる。それは必然

だ。経験と信頼においてそれを知っているオレはやはりただ粛々と待っていた。

.....。

「お待たせ、次行こ」

ほどなくして衣服も呼吸も一切乱していない美柑が戻ってきた。その手には袋に入った鰯の開きが、ざっと見ただけでも七枚はあるだろうか。しょんぼり肩を落として去っていく主婦もいる中、この戦績は素晴らしい。

「たまごはいいの？」

「うん、店長さんに取って置いて貰ってあるから」

「……それってズルじゃないの」

「やりくり上手と言って欲しいね」

たまご売り場へ行くと、さっきと同じような人ばかり。そんなに乱暴にしてたまご割れちゃわないのか？と心配になるほどの勢いがそこにはあった。

しかし、美柑はその人だかりを迂回して、たまご売り場の担当をしていた店長らしき人のところへ行く。

何やら一言二言会話をしたかと思うと、苦笑する店長から難なくたまご2パックを手に入れていた。

「すごい」

「この前若いののに苦労してるねーって話になってから、色々よくしてくれてるの」

「仲いいんだ。それで、今日のメニューどうする？鰯でいくの？」

「んー、一応買ったけどこれはお昼用かな。たまごが沢山買えたからたまご料理にしたいところだけど」

「じゃあオムライスなんてどう」

「オムライスかぁ、鶏肉……と人参玉ねぎはまだあるし、ケチャップだけ買えばできるかも」

「じゃあオレかけるシチュー作る」

「それじゃルーとキノコ買わなきゃね」

「ブナピー！ブナピーがいい！」

「ブナピーって言いたいでしょ。まあいいけど」

ビーフシチューのルー・ケチャップにブナピー。後適当にジュース類やお菓子にパンなどをカゴに入れると混みはじめたレジに並ぶ。一瞬で全てのレジに並んでいる人のカゴを精査した美柑は一番右の列の最後尾に着いた。

「あ、そうだ」

「何か買い忘れ？」

「うんうん、これ返してきて」

そういつてオレに手渡されたのは吹雪饅頭。そんなひどい、せつかく砂糖の下に隠してあったのに。たかが50円なのに。

「ねえ、一個くらい……」

「ダメ」

「……はい」

吹雪饅頭はあんこがたっぷりで薄皮の触感も最高なのに……。見つかっては仕方が無いので和菓子コーナーに返しに行く。

戻った時には

すでに支払いを済ませていて、買ったものをエコバックへと移しているところだった。それを一緒に手伝い、荷物を全てオレが持つと
いまだ賑やかなスーパーから出た。

「今日はそんなに買わなかったね」

「まあ鰯とたまごは安く買えたけど、他のは普通の値段だったからね。特に急いで買わなきゃいけないものも無かったし、当分はあるもので何とかするよ」

「さすがだなあ」

「今月はちょっと厳しいからね。節約してかなきゃ」

「……」

「私のこと？」

「なんでもない、なんでもないよ。お、着いた着いた」

思わず美柑の事と言ってしまった。一体何を？とこちらを見る美柑を適当に誤魔化しつつ結城家へと戻る。エコバックを台所へ置いてたまごなどを冷蔵庫へと入れる。

「ねえ有里さんさっきの……」

「はっはっは、オレはいつだって美柑のことを考えているよ。あっはっは」

「誤魔化し方が雑……なんか怪しいなあ」

「そんなことより夕飯の準備しなきゃ。ほら美柑はオムライス担当でしょ」

「そうだった、有里さんシチューに玉ねぎ入れるでしょ？ついでに人参とかも切っちゃってね」

「合点」

洗面所で念入りに手を洗ってから台所に立つ。パパッと人参と玉ねぎの皮を剥いて人参はみじん切りに。玉ねぎ一個は同じくみじん切りに、もう一個は適当な大きさに切る。

「美柑、ピーマンは？」

「下の段のちょっと奥のそこ」

手を洗って可愛い蜜柑の刺繍がついたエプロンをした美柑。このエプロンは去年の誕生日にオレが贈ったものだ。

「蜜柑の刺繍ってのが安易だね」

なんて言いながらすごく嬉しそうにしていたのが記憶に新しい。一年経った今でもこうして使ってくれていて、プレゼントした方としても嬉しい。

刻んだ野菜たちをボールに空けておいて、オレはブナピーを洗う。ああ愛しのブナピー。それをさっきの玉ねぎと一緒にフライパンにぶち込みちよっと炒める。いい色になったら水を入れてルー投入。後は焦げないように気をつけるだけで完成だ。

本格的にビーフシチューを作るなら肉をワインで煮込んだり小麦粉からルーを作ったりするだろう。でも今回はオムライスにかけるだけの物だ。そんなものに時間をかける必要はない。なんちゃって。

美柑の方もすでに人参達を炒めてご飯と混ぜチキンライスを作っている。これが出来ればあとはたまごで包むだけなのですぐだ。

「じゃあリト達呼んで来るよ」

「ん、お願い」

簡単に手を洗ってタオルで拭いてからリトの部屋へ。

「うーいリト、飯できたぞ。ララもー」

「今行くよ」

「わーい、すごい美味しそうな匂い！」

「ザステインは？」

「今日は親父のところでアシスタントしてそのまま泊まるってさ」

ザステインはリトの親父こと結城才培の元で漫画のお手伝い、アシスタントをしている。仕事も丁寧で早く、中々素質があるらしい。だからこうして締め切りが近くなると泊り込みで漫画を書きに行っている。元はララの護衛なのに、本職を忘れてやいないのだろうか。

「あー！オムライスだ！しかもシチューのやつ！」

「美味そうだな」

「美味そうじゃない美味いの」

「ほら、突っ立ってないでみんな早く座って」

食卓にはもうすでにオムライスが完成された姿で並べられていた。呼びに行っている間に美柑が仕上げたらしい。4人分をこれほど素早く……さすがだ。

「」「「いただきます」「」」

「美味い！」

「おいしー！」

「このたまごのふわふわ感っ！……何かそれだけじゃない、そうかつクリーミー！果てしなく、途方も無く、それが隠されている！生クリームの存在っ！塩加減も絶妙っ。まさにっ！オムライス！」

「有里さんうるさい」

「ごめんなさい。これならもうちょっとシチューのほう濃くしてもよかったかもね」

「これでいいんじゃない？私は美味しいと思うよ」

「美柑に言って貰えると自信つくよ」

オレと美柑の合作であるオムライスはあっという間に平らげられた。片付けはお礼にリトとララがしてくれると言う。ララに任せると変な機械でも作って家中の食器を割るオチになるのでは？と思ったが、どうやら真面目に洗っているらしい。リトも付いているし大丈夫か。仕事を取られてしまったオレと美柑と言えば、

「ふー食べた食べた」

「ちよっと多かったかもね」

特にすることもないので、いつものように二人で一つのソファに寝転がり満腹感に酔いしれていた。

「げっ！忘れてた！」

「何が？」

「美柑にプリン買ってきたんだっけ」

「へー、あそこのコンビニで？」

「……何故解った？」

「それも人数分買っちゃって。お金ないんでしょ」

「何故解るんだ！」

「有里さんのことなら何でも解るんだよ。私に気を使ってお土産を
買うのも、それを帰り道で思いついてコンビニに寄る事も、新製品
のプリンに目が行くのも、人数分買っちゃうのも」

「くそお……なぜか恥ずかしい。よしっ今オレが何を考えているか
当てて見せろ！」

「何も考えないように考えてる」

「ぐっは、的中された」

「有里さん単純だからね」

「まあいいや、食べよ？」

「……持ってきて」

「甘えん坊め」

そう言いながらちゃんと二人分持って行ってあげる。美柑は時々こ
うして変な甘え方をする。素直になれない性格なので、甘えたい！

と正直に言えないからだろう。やはり家事を担っている性か……。

「おいひー」

「何これバカうま！」

新製品のプリンは、生クリームの甘さ、プリンの滑らかさ、カラメルほろ苦さ。それらが高いレベルで洗練されていることにより、絶品と評するに価する味を表現していた。コンビニのデザートという括りでは計り知れないほどのポテンシャルを持っている。お菓子専門店が脅かされる日はもう来ているのかもしれない。

「こんなに美味しいならもう一個買ってくれば良かった」

「こういうのは一個だけ食べるから美味しいんだよ」

「そっか、そうかも。ああまた暇になっちゃったな」

ペロリとプリンを平らげてしまい再びやるのが無くなってしまった。リト達の洗い物はまだかかりそうだしかといって手伝うにはあの台所は少々狭い。

「美柑何かやりたいことある？」

「んー、今日は体育が会ったから早めにお風呂に入りたいな」

「……………」

「……………」

「一緒に、入る？」

「やだ」

「どうしろって言うんだよー今のは完璧お誘いの感じだったじゃんかよー」

「温泉とかならいいけど、家のお風呂じゃ狭いでしょ」

「そういう問題か」

ってつきり恥ずかしいからとかもう6年生だからとかそういう話だと思っただのに。いやそういう話か。つまり恥ずかしいってことだな。美柑は変に照れ隠しをするからなあ。その捻くれたところが可愛いといえど可愛いんだけど、やっぱりこちらとしては年相応でいて欲しい。

「じゃ入ってくるよ」

「いってらっしゃい」

美柑がいなくなってしまう、一人取り残されてしまったオレ。やることも無いので机に置かれていた新聞紙を開く。これといって関心の沸かない経済や政治のニュースにボーッと目を通す。ふと瞼が重たくなった気がして、ああ食べてすぐ寝たらまた美柑に怒られるな、なんて思ったけど、なるほど美柑がお風呂から出れば起して貰えると考え直す。

そう思いついてしまえば、自然と閉じる瞼に抵抗する術は無かった。

.....

・・・。

夢を見る一歩手前で頭の中をフワフワしていると、お腹に重みを感じた。一気に覚醒へと意識を引っ張られて、まだ鈍い頭を少し起してみると、目の前に美柑の顔があった。

髪が濡れているのでお風呂から出てきたばかりらしい。水滴が一つオレの頬に落ちた。

「寝てたの？」

「ん……ごめん、ちょっとうとしちゃって」

「謝られても。それだけ居心地のいい家だってことでしょ？ま、謝罪するんだったら……」

そう言って取り出したのはドライヤーと櫛。言いたい事はすぐにわかった。もそり、と体を起してドライヤーと櫛を受け取り、美柑を膝の上に乗せる。

「じゃ乾かすよ」

「うん」

髪を傷めないように気をつけながら熱風を当てていく。それなりに長さがあるので、毛の先まで乾かすのは中々難しい。しかし何度もやったことがあるので我ながら手馴れていると思う。

「んっ、はあぁ……んー」

気持ち良さそうな声を出す美柑からそれがわかる。櫛を髪に通すと小さく肩を震わせて体をよじらせる。猫が体を撫でられているみたいだ。オレは髪を自分で乾かすのでこの気持ち良さはわからない。でも御門もヤミも、同じようにこれを好むので、きっと女性にとっては得も知れぬ至福なのだろう。

「こんなもんなかな」

「ありがと、有里さん」

そして髪を乾かしてあげた美柑は大層ご機嫌になる。

「有里さんはお風呂入ってこないの？泊まりでしょ、今日」

ソファに座ってドライヤーのコードを片付けているオレの腰に抱きついて美柑が言う。これがご機嫌な証拠。そしてこんなにあからさまな甘え方は、リトやララがいるときには絶対にしない。

「お風呂は後でいいや。それより、何かして遊ぶ？」

「えー、私今日疲れてるから早く寝たいんだけど」

「まだ9時だよ？」

「偶には早く寝るのもいいでしょ。明日は休みだし、早く起きて遊べばいいじゃん。どこか行くのもいいかも」

「なるほど。じゃあとりあえず風呂入ってくるよ」

美柑の言葉が「さっさと風呂に行ってこい」という風に聞こえたの

で、逆らうこともせずお風呂へと向う。一度リトの部屋に寄って適当なTシャツと短パンを見繕う。リトと一緒に入ろうと思ったが、部屋には居なかった。クローゼットから話し声が聞こえてくるので、多分ララの部屋にいるんだろう。……何をしているのやら。いやいやここは紳士、推して知るべし。

お風呂場へ移動したら服を脱ぎ洗濯籠へ入れておく。美柑用籠に着ていた服が入っていた。恐らくその下には……別になにもしないけどね。紳士だしね。

何故か恥ずかしさを覚えたので、ササっとお風呂に入ってパパッと洗ってチャチャッと拭いた。頭をタオルでかきながら台所へ行き、コップで水を一杯飲む。居間の電気を消してリトの部屋に行こうとしたところで、ふと思ひ至る。

もし、リトとララがベット何かそれ的なことをしていたら？ いやまず無い。絶対と言い切るのに些かの躊躇も持たないほどに言い切れる。

が、果たしてその可能性は”0”と言えるのだろうか。

先ほどリトはララの部屋に居た。そこで何らかのハプニングが起ころいか良い感じな流れになって、そういうことになっているかもしれない！

もしそういうことになっているときにオレが入ってきたらどうなる！？ 想像するのも恐ろしい。

よし、美柑の部屋で寝させてもらおう。よく考えればオレはリトの恋路をサポートする係りじゃないか。他の部屋に退避するのは当たり前のことだ。

うん、よし。

「美柑泊めてー」

「はぁ？……何、追い出されたの？」

「察したの」

「ああ、最近よくリト達いちゃいちゃしてるもんね」

「そうなの。気を使うよね」

「ね。私そろそろ寝るけど」

「じゃオレも寝ようかな」

「有里さんまだ髪乾かしてないじゃん。しょうがないな、私がやってあげる」

そう言ってベットから降り、部屋を出て行くとすぐドライヤーと櫛を持って帰って来た。

「はい、そこ座って」

「え、いいよ。枕は自分のがあるし、タオルでも巻いて置けばすぐ乾くでしょ」

「それじゃ髪も枕も痛んじゃないでしょ。いいからここ座る」

「まあ、うん。じゃあお願い」

「いくよー」

掛け声ともに髪に熱風が当たる。自分の意思ではない熱風というのは結構怖い。美柑たちはそうではないのだろうか。

「どう？」

「ちょっと怖い」

「始めのうちはね」

経験者は語る。確かに熱風を当てられながら櫛を入れてもらうと、自然と気持ちが落ち着いていく。ただ頭を預けているだけなのに、全身を委ねているかのような錯覚がそこにはあった。むしろ心すらそうかもしれない。

なるほど確かにこれはリラックスできるし、癖になる。

「ふう。こんなもんかな」

「乾いた。ありがとね、美柑」

「いいよ、いつもしてもらってるし。どうだった？」

「結構気持ち良いもんだね」

「でしょ、私もいつも……寝よっか」

「そうだね」

頭がほこほこしているが、それがちょうど暖かくていい感じに眠気を誘う。気付けば時刻はもう23時。健康な少年少女は寝る時間だ。

「ふう」

「ちょっと有里さんもうちょっとそっち行つてよ」

「それじゃオレが落ちちゃうだろ」

「じゃあ……もっとくっつく？」

「よーし任せろー」

「うそうそ冗談！ひあ！抱きつかないでよ、バカ変態有里さん！」

「もうダメだ、寝るスイッチ入った。このまま寝……おやすみ」

「へ？ちょっと！こんなので……寝れる訳ないじゃん。ちょっと有里さん？」

持ってきた愛用枕にまだ暖かい頭を埋め、ゆっくりと深呼吸する。鼻腔一杯に甘い香りが広がった。それは美柑香りだったのか、はたまた別の何かなのか。まどろみの中に落ちていく思考では、答えに行き着くことなどありえない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3531p/>

TOLOVEりんぐ

2011年11月18日11時28分発行